

し。是を村の名とせり。福島領地の節までハ常石一ヶ村なりけるか、勝成の御代、内外二ヶ村と分られたるなり。

上山南村

神社八ヶ所

生土 信廣八幡 社三間 拜殿五間

天神 社五尺 四面

右一所に有之。

弘角大明神 社八尺 拜殿三間

良大明神 社五尺 拜殿二間

王子 荒神三社 なかふ 寺尾 黒瀬

地藏堂壹ヶ所

丸山古城壹ヶ所 桑田氏居之。

大友豊前守左近將監藤原能直十五代之孫備前守親治

義長

修理大夫

將

治

丹波國桑田郡ヲ領 桑田三郎

將

長

式部少輔

神主	平	九	郎
禰宜	治	右	衛門
神主	市	兵	衛
神主	源	兵	衛
神主	三	右	衛門
禰宜	四	郎	五郎

信房 式部大輔 從四位下

後号備前守

屬毛利元就、領筑前國三笠郡之内長州赤田及備後國沼隅(隈)郡之内、山南村丸山ニ築城而居城ス、天正十八年庚寅十月九日卒、法名洞月常滿

景房 平左衛門

破_レ卻於丸山城、營_レ家宅、秀吉公朝鮮征伐之時、文祿二年三月從_レ于毛利秀元、赴_レ朝鮮、有_レ軍功、秀元賜_レ感狀、慶長十九年屬_レ

秀頼公、籠_レ大阪、元和元年夏、與_レ後藤又兵衛相共力戰、敗、敵_レ數輩、落城以後、隱_レ居山南村、寛永十六年七月廿九日卒、法名香月淨薫

元房 彌兵衛

秀元賜_レ一字、共_レ父籠_レ大阪、落城以後、隱_レ居山南村、寛文十二年十二月廿九日卒、法名迎譽淨蓮

地藏堂 藥師堂 阿彌陀堂

寺壹ヶ所 淨土宗 南光山 悟真寺 開基 勝蓮社清譽上人

門横額 南光山 幡隨少迎竹馬齋筆

本堂 七間四面 觀音堂 二間半四面 寶曆四年二下る

鐘、無銘 撞樓、棟札有。

扶桑國、備之後州、沼隈郡、山南村、南光山下、於_レ佛閣梵壇之側、創_レ建宇樓堂、工匠運_レ斧速成、其功_レ云々、因_レ茲新_レ以鎔_レ鑄花

鯨、掛_レ着金索、簾_レ簾寶樓_レ矣、祝日。

蒲牢一聲、上徹_レ天空、下震_レ地府、則天安羅々、地平哩々、國邑安寧、千秋万歲。

寛文七(原本二字缺)稔仲秋吉旦

願主 中興品蓮社慶譽九岸叟 當代 中興二世 心譽傳知叟

頌曰 新排_レ巖洞、創_レ高閣。擡_レ舉巨鋪、簾_レ梵宮。明月昔花閑穩、地。圓音無礙傳_レ宗風。

鎮守 稻荷

中山南村

淨土真宗 金明山 光照寺

緣起

備後州、沼隈郡、山南郷、金明山、光照寺者、人王八十五代後堀川御宇、安貞元丁亥歲、相州鎌倉最寶寺住持、明光上人所_レ見_レ開

家老衆添書

一書令啓達候。然者 准如様之御時如被 仰出候中國に在之最寶寺下之儀、今度從當 御門跡様本行寺様へ被 仰付候間、惣末寺衆、御與力衆、御門徒衆中へ被仰觸、向後本行寺様并貴寺へ各馳走被申候様相心得可申遣旨 御意候間、此等之旨能々可被仰渡候、爲其、被顯 御印候、猶御用候者可承候、疎意有間敷候。恐惶謹言
寛永八、二月十三日

備後山南 光照寺殿

八木隼人 在判
八木長門 在判
横田内膳 在判

本行寺よりの御狀

態令申候。仍 准如様之御時、被 仰出旨を以、中國に在之最寶寺下之儀、當 御門跡様を我等へ被 仰付、満足此事候、其方馳走之段も令祝着候。

一、其方惣末寺衆、與力衆、惣門徒衆中、何事も如在來、相違有間敷候間、被得其意、向後此方へも並其方へも、別而馳走被申候様、急度可被申渡候。

一、先年直參被召上候下坊主、門徒之儀、可成程ハ連々を以て御理可申上候。

一、向後門徒中へ用事候者何事も先、光照寺迄可申越候間、自其方可申渡候。將又末寺衆申物、其外何にても望之儀於在之者、其方此方へ可申越候、則 御門跡様へ可申上候、爲其如此候。恐々謹言。
寛永八、二月十三日

光照寺殿

本行寺准 悟判

正保二年家老衆之狀

態令申候。光照寺殿下坊主衆、光照寺殿へ無届申物其外出世被申候共、後日に上坊主を被申上次第御穿鑿之上にて急度可 被仰付

候、其上申物申かすめ一日御裏被遊候共、光照寺殿理於有之者重而御裏被遊替可被下旨被

仰出候也。

八月廿日

光照寺下 御一家衆中 坊主衆中

山本主殿助判
横田内藏助判
八木藏人判
下間大進判
下間少進判
下間民部卿判

元祿十一年家老衆之狀

一筆令啓候。然者從古來各御本寺へ不限法物官位等、惣而願之儀有之砌、光照寺殿迄被相達、添狀持參之事候。先年及兩度、右之趣被仰出候處、近年猥數候段不届之至候、向後面々願之儀於有之者、如前々光照寺殿へ被相届、書狀可有持參候、其節光照寺殿へ本行寺殿まで可被相達候。若自今以後異反之(原本之の下に儀の字を書き、其上を抹消してある)有之候者、於御本寺御取上無之、越度に可被 仰付候條、可被得其意候。恐惶謹言。

六月九日

備後 光照寺下

内陣衆中
余間衆中
飛緣衆中
惣坊主衆中
與力衆中

池永主税判
平井主水判

從(從字窓か)最寶寺之狀

一、當邊者佛法僧俗ともに由斷之様不足の心中なから及見候、自信教人信の尺意に任せ、自行化他之處相續可爲肝要候。
 一、聖人様御掟のごとく次第相承之筋目無相違様に僧俗へ勸進之儀尤に候、本寺遠國の事に候得者、佛法世間之儀たりといへとも、自身の分別におよハす候、畢竟光照寺へまかせ置候間、佛世二法ともに御分別あり、法儀興隆繁榮之處肝要に候。万一直參之僧俗を始とし、違背に付而者御堂へ來入堅被停、一座一會之一列有へからす候、若法儀に背く門徒衆、依用之僧衆有之者、同罪たるへく候。此旨を於違背之僧俗者、急度 上様へ被逐披露可有仕置事肝要に候。
 一、始中終之肝要者、法儀無油斷、御催促尤候。恐々謹言。
 十月廿五日

光照寺 明 順判
 最寶寺

元祿十一年家老衆之狀

一筆致啓達候。然者自古來各 御本山へ不限法物官位等、惣而之儀願有之砌、光照寺殿迄被相達、添狀持參之事候。且又先年及數度、右之趣被仰出候處。近年猥敷候段、不届之至候、向後面々、願之儀於有之者、前々のごとく光照寺殿へ被相届、書狀可有持參候、其節光照寺殿より本行寺殿へ可被相達候。若自今以後異變之族有之者、御本山におゐて御取上無之、越度に可被仰付候條、可被得其意候。恐々謹言。

午七月六日(原本日附文字不明)

村井帶刀判
 鳴田主膳判
 池永外記判
 下間少進判

同文言にて數度到來故不記之。

正徳六年從本行寺之狀

態一筆取向候。先以兩 御門跡様、益御機嫌能御堂御繁昌之事ニ候間難有可被存候。然者先年々諸事就願、各上京之刻、備後光照寺書狀持參之上取上、本山江茂 上聞、又者出入等之儀、下にて相濟せ候儀者當寺にて濟事候。然處近年各上京之刻、添狀をも持

參無之人候、仍之度々令吟味候處、或者失念又者船中相煩候故、直に上京申候など、の斷に及び候故、遠國之儀亦々差下候儀もいか、數候存候付、近年了簡をもつて、こゝもとにて一札認させ歸國之刻、光照寺へ通達候様にと申付置候所、及聞候へ者歸國之後も、光照寺へ有無之沙汰無之由、言語同斷と存候。一者當寺より申渡候事を掠るにひとしき儀と存候、加様之儀各無法儀故と存候、向後上京之刻、先例之通、光照寺添狀持參尤候。千一失念之儀有之候者、無遠慮差下候間左様に相心得可被申候、右之上にも違乱有之候者、早速召登せ急度其沙汰に可及候。猶又近年者各々光照寺へ不馳走之由き、および候、往古より勤被來通ニ相勤可被申候。且亦申迄者無之候得共、法儀無油斷相續肝要に候。穴賢々々。

三月朔日

本 行 寺

光照寺下、備後國、備中國、藝州、石州、長州

内陣衆中
 余間衆中
 飛緣衆中
 惣坊主衆中
 與力衆中

辻丹治
 善潤寺

外ニ添狀有之不及寫。
 寺号之下ニ印判可被成候。

享保七年寅九月從 御門跡様被 仰出候御條目

掟

一、宗門は子孫相續の風儀故、其寺血脉のもの不學無才といへとも一寺の住職として數多の檀徒を領す。然に身のほどをしらす、猥に高ふり禮儀にたかひ、上を犯し下をなごる働をなすへからす。若不如法の族有之におゐては、住職叶へからさる事。

外

篇

沼隈郡之一

一、惣而法事の勤方随分不實無之様に可致執行、名利のために教化を企、不淨説法の咎を招へからず。古來より掟のごとく、公儀の御政道并領主の制禁を守り、國恩を辨知様に教化致へし。且又教意に不違様に、本山にて可致修學旨提有之所に、近年其儀を不守、みだりに抄物を管見し、教意にそむき、自他をあやまる事歎かしく候。自今相改、本山講談所におゐて力を尽し可致修學事。

一、奢を退くるは在家出家一同の事に候得とも、僧ハ他之信施にて相立候得者、彌儉約にしたかふへし。衣鉢疎服を用ひ、惣して無益の費をいとひ、興隆佛法を本とすへき事。

一、靈佛、靈寶、開帳と申事、人をして其勝縁に遇しめんと存るは左も有へし。但し、昔より其寺に有來らざる古器、書畫など他より借集め、眞偽混雜して人を欺き、財施を貪る事、不實の至、此類向後急度可令停止事。

一、宗門之僧俗は在家ひとしき風儀に候得共、随分相愼放逸をいましめ、沙門に不似合業一切いたすへからず。たとひ俗輩誘引たりとも、漁獵の遊ひにまはるへからざる事。

一、強縁又は内縁に取入、本山寺法のみたるををかへり見す、筋目なき願ひを致事先年申渡候。向後違背の輩は重罰を加ふへし。且又數ヶ寺申合強所(訴か)いたす事、公儀御大法勿論之事。

一、檀家より頼來、寺より齋非時出す時、僧は亭主の様になり、遊興の席のごとく、もてなすよし、本意を失ひ候、且方法儀にうごき輩は、孝養、報恩之儀を演聞しめ、法事之實儀有之様に可相務候。膳部は一汁三菜、至て重き法事は五菜たるへし、酒は二三献にて相止可申事。

一、宗門の安心に祕蜜(密か)いたす事、曾て以て無之候處、他の見分を憚り、ひそかに法儀を談し、人を惑すやから有之由、以之外の僻事なり。若左様の輩於有之者、其法類より急度逐吟味、正路に相改候様にいたすへき事。

一、他國へ立越致説法、財施を貪候事古來より堅制するといへども、今以端々有之由不届之至候。急度可令停止。但し末寺廻りハ格別之事故、本寺又は觸頭へ相届け差圖を請へき事。

一、何事によらず、和順にして諍論なき様にいたすへし。就中公邊へ訴無之様に可相嗜事。但有來の敷地、山林他より掠候を或は理不尽難題申懸候時は格別之事、然時は穩便に取扱、人の痛無之様に可致事。

一、兼而申渡候通、改派之者有之節は御大法有之候得共、其品ふとゞきに候者何方迄も可逐糺明、一寺一庵の離れ背を憤而の事にあらず、御政道にも無障、寺法も相立候様にこのことに候へは、觸頭或は上寺、近隣の僧徒、随分委細に可致吟味事。

右之條々急度可相守、若違犯之輩於有之者、逐糺明、越度可被 仰付者也。

享保七年寅九月

横田内膳
池永外記

延享二年乙丑五月十三日千代丸十歳にて得度、号祐海、上京同廿五日、五ヶ國住持相續の御禮相濟、七月朔日歸國、本行寺添狀

一書令申候、先以 御門跡様御機嫌能成爲成御座候間、各々可爲大慶候。然者山南光照寺新發知千世丸、今度得度首尾能成、御免并住持相續御禮相濟歸國之事故。就夫各々如前來之光照寺へ勤方彌無相違急度相守、勿論幼年之事故間、末寺、與力、門葉別而心副、増々光照寺相續候様銘々相勵馳走可有之候。將亦如有來諸事仍願上京砌、光照寺添翰取願可出候。万端古來之通違乱有之間敷候。不宣。

林鐘八日

備後國光照寺下

末山
門葉

本行寺

一筆致啓達候。先以 御門跡様益御機嫌能成爲成御座候間可爲御大慶候。然者從古來各御本山へ不限申物官位等惣而之儀願有之砌、光照寺殿迄被相達、添狀持參候事、彌如前々光照寺殿へ被相届、書狀持參可有候。其節光照寺殿本行寺殿へ可被相達候。若自今以後異反之族於有之者、御本山ニ而御取上無之、越度可被 仰付候條、可被得其意候。恐惶謹言。

六月廿三日

備後國光照寺殿下

内陣衆中

上田主殿判
下間兵部卿法橋判
下間宮内卿法橋判
下間少進法印判

一筆致啓達候。秋冷之節各様彌御堅固可被成御勤役、珍重之御事御座候。然者其御領内沼隈郡山南光照寺祐海儀、當夏令上京候砌、住持相續被申付候。未幼年御座候間被添御心可被下候。右御案内旁如此御座候。恐惶謹言。

九月朔日

(前六月廿三日の狀には法橋とあり何れが是か)

上 田 主 殿 判
下間 兵部 卿 法橋 判
下間 宮内 卿 法眼 判
下間 少 進 法印 判

森 嶋 伊 丹 様
小 高 彌 左 衛 門 様
河 田 豊 治 様

光照寺御堂勤番之次第

正月	上十日	備後福山	光善寺	中十日	同	所	最善寺	下十日	同	山南村	南光坊	
二月	上十日	同	北山村	正泉寺	中十日	同	法成寺村	西蓮寺	下十日	同	服部本郷	福泉寺
三月	上十日	同	近田村	正光寺	中十日	同	大矢村	光德寺	下十日	同	李村	正善寺
四月	上十日	同	同惠蘇郡庄原正光寺	正光寺	中十日	同	高村	西念寺	下十日	同	川北村	光圓寺
五月	上十日	同	和具村	正泉寺	中十日	同	高野山	圓照寺	下十日	同		金秀寺
六月、七月	同	三次	照林坊	照林坊	中十日	同	福山	法真寺	下十日	同	近田村	法泉寺
八月	上十日	同	山手村	照圓寺	中十日	同	服部	圓福寺	下十日	同		長福寺
九月	上十日	同	御調郡市村照源寺	照源寺	中十日	同						

十月	上十日	備中吉井	光榮寺	中十日	同		光傳寺	下十日	同		善教寺
十一月	上十日	備後常村	光明寺	中十日	同	金丸村	西福寺	下十日	同		光秀寺
十二月	上十日	同	山南村	寶福寺	中十日	同	善德寺	下十日	同		淨泉寺
閏月	新庄東藏坊	中津原正善寺	下山南西光寺	藤江正藏坊	内常石高泉寺	草深南泉坊	田嶋善正寺	下山南光源寺			
	柳津淨泉寺	藤江福正坊	同寶光寺	同江大東坊	同法藏坊						

御堂 拾貳間四面 内陣のから紙四季の花鳥、極彩色、當寺十六世祐海の筆なり。祐海ハ幼稚にして両親を失し孤なりけれども、天然聰明にして學才他に勝れ、文筆畫圖に妙を得たり、惜哉。

鐘銘

備後國、沼隈(隈)郡之内、山南、金明山、光照寺、常住物也、願主祐善、殊者當國守護羽柴左衛門太夫正則公、並御代官間嶋美作守、御子孫繁昌、武運長久富貴爲也、然而諸人爲ニ化度、諸國中民相勸、一紙半錢受助成、漸究竟畢者也。于時慶長十八稔 九月十七日 大工 當國三原住 藤原朝臣 吉井彦右衛門尉信正 (花印) 同 彦五郎 信吉 (花印)

諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅爲樂

- 光照寺下寺六坊あり。
- 傾光山 光照寺末寺南光坊 寶石山 福山最善寺末寺寶福寺
- 白雲山 同 光林寺 正光山 同 善德寺
- 一、淨土眞宗 寶石山 無上院 西福寺 以前光照寺の末寺之處、公事有て東本願寺派になる。
- 開基眞佛 明光上人隨身六坊之内也。十四代明空、元祿十三年鑄鐘、無銘。
- 一、四ッ堂五ヶ所

寛文十三次 春二月甲寅日

現住 圓行院日壽置之
橘朝臣丹下喜右衛門實往

治工 當國御調郡海裏村 鞆浦 守賢院日護銘焉
備之後沼隈(隈)郡山南村 法星山本光教寺常住
大檀那 田中七郎右衛門 門田六郎右衛門

淨土真宗 明石山 寶光寺 京都本行寺末寺

開基(原本何の記入も無い) 本堂(同じく原本に何の記入もない)

惟夫忍 開悟聞聲爲最、不依於此有成焉者鮮也、音聲之中莫先於鐘、々也過去之製而助機應之一大器哉、故現在滅後演法則莫不
鳴鐘告四方矣、今茲春予諗諸檀度曰、願新於鐘者尙矣、時云至矣、汝等圖焉、相和曰何難之有、曰呼善矣汝等之言焉也、成允成
功可無日矣、夫豈惟怪哉、願晚成乎實助機應之一大器哉、於是乎忻々助我、則雇治工、開鑪鑪于此山之背、四月七日功成之、銘曰。

惟茲穠稚 佛之所傳 形莫三界 聲震大千 非金鼓夢 覺長夜眠 劔輪頓碎 縹緲忽鐫 和潮喚暮 含霜吼天 寺開嘉會
人植勝緣 聖代應律 禾黍滿田 石峰月上 鴻韻轉團

寛延二 四月廿日

治工 尾道 石井藤原重數

當山十八世 釋月燈竺狀敬識

當村 佐藤彌三兵衛好通

外常石村 曾我八郎右衛門 當村 山路傳吉
柳津村 安井傳右衛門 外常石村 渡邊治右衛門

右五人初撞擊之

正海 (以上は鐘銘であらうが原本に其事が記してない、又正海とは何か)

淨土真宗 北寶山 光源寺 寶光寺末寺

同 北光山 西光寺 寶光寺末寺

同 正光寺

古城貳ヶ所 岩淵 工藤和泉守

郷ノ城 田中伊賀守 同 壹岐守 同 河内守

備陽六郡志『外篇』

(校訂者曰ふ、上記中『外篇』は原本に無いので
あるが著者手記の表紙題目に依り之を加へる)

沼隈(隈)郡之二

草 深 村 初丁
能 登 原 村 廿二

草深村

神社拾壹社
 生土八幡 本社三間 濱床半間 廻廊貳間 前殿五間半 石鳥居 神輿藏三間
 末社三社有

社僧 今津村藥師寺
 禰宜 外常石宮 太郎兵衛
 神主 太郎兵衛

津大明神 津之宮共云、地主の神なり。

岡崎の宮 岡崎悪四郎か靈を祭、子孫當村に多し、藤の丸の内に二引を紋とす。

有安の宮 子孫山南村に多し。

宮守の居宅 貳間半

鐘銘

備之後州、沼隅(隈)郡、艸深村、有臺險山、又山頂有臺神社矣、于然鄉人傳之、此山此社者、往昔流于潮、從渤海來焉、留於此地也、故從古直呼名寄之宮矣、正神跡者、木像之彌陀如來也、即是本迹一意嚴然者也、吁奇哉妙哉、果衆人悉蒙於加也、貴賤等分重功、老少舉分嘆德、神力之譽至也、粵一日神子集會神前、而發一願、又誓若此願望成則鑄臺梵鐘、爲當社之莊矣、乃所願滿足也、茲以河野通則人、爲本願主、新而獲銅鉄之資、遂鐘成、掛維於神樓矣、于然此黃鐘、正德年中、不圖乃破壞、然而已來經三十餘年、于茲在淨說通世者、鐘聲之永悲、勸進有緣之縑素、得少財之資助、託治工而重而爲之、華鐘、而補先功之蹤跡矣、大凡閻浮之生者、六根之中者、其根利也、是故覺王六塵說法、偏多以聲塵也、冀者觸此鐘聲、輩者、耳根悉圓通焉、聾病亦頓發焉、抑魔民驚怖、諸佛歡喜、方洪鐘之功難載而尽、此、仰願使諸神冥加、得中國豐民安現世受樂益矣、余幸爲神子之端、故謹以作銘曰。

新成大器 掛捧靈神 便震臺杵 普施衆珍 上響四禪 下徹三輪 山川動搖 魔群退頻 穀肥潤舍 家富潤身 不平蹄止

長安里民

維時享保十四童集巳酉歲四月大吉辰

遺蓮社分譽比丘 謹誌
 本願主 下山南村菅野藥師堂 清譽淨說
 惣氏子 寄進

往古は當村も山南村の内にて、當社八幡宮も下山南菅野といふ所に在けるを、此山に移し奉りて寄之宮八幡宮と号す。故に八月十五日、山南より祭り、同廿五日當村の祭りなり。もと津宮大明神、此山の地主にておわしけれども今にては八幡の末社と成たまひて、知る人も稀なり。

引島

家集 立波の、引嶋に住、海人たにも、又たひらかに、有ける物を。俊頼』堀川 引嶋の、あみのうけ繩、波間より、からてふさすと、ゆふして、かく。 同

宗祇名所方角抄に、口無泊、國分明ならず。風早浦共云、引



(圖の近附其等幡八宮寄、泊無口の筆自者著)

治工 同州御調郡海裏村住 丹下利右衛門福敬

鳴、是等在所分明ならず。風早は伊與に有、引嶋といへるは此寄宮の山なるへし。如何となれば、此山田嶋の際に有けるを、津大明神此所へ引寄せたまひけるか、山の後、揉ちきれて此沖に残る、是をもみの小しまと名付、是則、引嶋と名付る據なり。福嶋正則公、領地の節迄は、此所海にて有けるか、勝成公、新涯を築せられて、田畑の正中に成侍り。今圖(一九五頁寫真版)する所を以て、敷名より能登原の間、當村新涯の堤出來さる以前、下山南迄、入海なりし以前、無口泊といひたる事を可考。鞆、郡山、引嶋、口無泊、いづれもつゝきたる海邊にて、俊頼朝臣眺望し給ひて、羈旅の哥を詠し給ふ名所と見へたり。或曰、深津郡手城と引野の間に、加嶋と云山有、是を引嶋と云と、據とする所もなく、語傳もなし、其上此邊の海上より深津郡は見へさる所なり。

山神貳社 奥 阿引 太神三社 中大神 木の下 上大神 阿引 下大神 奥 無社 貴布禰 奥 無社 金剛童子 奥 荒神貳社 木の端 かと

一、寺壹ヶ所 淨土眞宗 北峯山 南泉坊 光照寺末寺
開山 了性 本堂 五間四面

鐘銘

備之後州、沼隅(隈)郡、山南之庄、艸深、北峯山、南泉坊者、龍谷末流、淨業之精舎也、其地最平、後扣響鑿、法性之雲聳、恣法雨下潤、枯稿之衆生、二空月彰光兮、普照長夜之迷闇、前有流水、衆生灑心垢、顯發心之色焉、雖莊嚴堂殿佛具備、未成洪鐘焉、十方檀信鳩財、遂成其功矣、銘曰。

梟氏功作 蒲牢響傳 華鐘新鑄 虞講堂前 動三千界 振九五天 開曉蒙益 長夜攪眠 下徹八獄 上道四禪 閻浮至體 祖風遠扇 功德無尽 利生聯綿 緇素康樂 國家福田

了性

開基 備州沼隅(隈)郡草深邑 北峯山南泉坊現住 甫閑 本願主 淵 龍 治工 同州御調郡海裏村 丹下利右衛門福敬

享保十四天三月吉日

網引觀音堂 能登原 寶大寺持 村中支配
林崎觀音堂 山南 悟眞寺持 村中支配

辻堂貳ヶ所 奥 あみた堂 土居 地藏堂

右之外

藥師堂 かの荒神と一所に有。庵有、此庵にて村中祈禱百萬遍などを修行す。

地藏堂 林崎に有。弁天 磯新涯に有。
當村の名主宇三郎は河野の末葉なり、家系其外傳來の書類寫し侍り。

孝靈天皇

伊豫皇子

今岡皇子ト云 靈宮トモ又親王宮氏号

伊豫國伊與郡神崎鎮坐アリ、異國ノ戎ヲ押シメンカ爲此地ニ下ス、伊ヲ與ニ今岡皇子ト勅アリシヨリ伊與國ト号ス、海童ノ女和氣姫ヲ女トシテ三子ヲ生、姫耻テ三子ヲ流、一男伊豆國大ナル宅ニ止リ育ル、二男吉備ノ山木ニ止リ、宅三舍アル所ニテ育ル、三男ハ此國三津郡ニ止リ玉フ

一 男 伊豆國ニ流至ル、大宅、庵原祖、從一位諸山積大明神

二 男 三宅、兒嶋祖、吉備ノ山ニ流至

三 男 小千御子ト号 與州和介ノ三津ニ流至、同大濱ニ住ス、越智親王ト号ス、越智ノ祖

天狹貫

天狹介

栗 麻 隱(陰)德太平記ニ栗戸三並 ト一人ノ名ニシテ有之 三 並

熊 武

隱(陰)德太平記、熊武伊但守 ト一人ノ名ニシテ有

伊但馬 同書伊但守

喜多守

高 繩 高 箕 勝 海

久米丸

百里

百 男

益 躬

異朝ヨリ鉄人來テ日本ヲ奪ントス、益躬ニ勅ソ討シム、益躬カレテ何フニ惣身鉄ニ少シモ皮肌ナシ、益躬思ラク、何處ニカ皮肌ナカラント、則僞テ降シ共帝都ヲ責ヘシ、我道ヲ知レリト、先道ニ進ミ播攝ノ邊ニ至ル、益躬鉄人ニ云テ曰、勝景眺望スヘシト、鉄人馬上ニ足ヲ横フ、足心ニ眼アリテ肉身也、益躬是ヲ射ル、果矢徹即死スト云々 與州益躬ヲ祭テ、嶋邊大明神ト号

武男 諸飽 萬躬

守興 伊興大領

天智天皇御宇、異朝ヨリ日本ヲ侵サントス、守興ニ勅メ伐シム、守興異國ニ渡ル、此時マテ日本木器ヲ以テ食スルヲ不知、土器ヲ用、守興土器ヲ若干船ニ積テ渡ル、對陣久々ニシテ、土器尽破失、韓人以磁器飲食ス、守興異賊ノ磁器ヲ製スルモノヲ捕テ是ヲ習フ、異賊ヲ平均ノ歸朝シ、茶碗ヲ製ノ獻ス、是ヨリ本朝茶碗ニテ飲食ス、木器ハ此後ニ始レリ、本朝ヤキモノ、始ハ守興也

玉興

玉興ハ伊興高繩ニ住ス、玉興在京ノ時、役小角隱岐國ヘ流サル、玉興モ小角カ徒也ト、玉興甚々陳謝スレモ不免、罪人トナリテ在京不充(免カ)ノ國ニ歸ル、難波浦ニ至テ舟ヲ借ト云尼、罪人ナルヲ知リ後難テ恐テ舟ヲ借スモノナシ、時ニ外國ノ舟アリ、漸是ニ借シテ、兄ハ不肯テ拒テ不借、其弟ニ借、弟曰、旅人甚窮セリ、豈是ヲ休セサランヤト、則令乘テ吉備ノ國ニ至、時ニ風波強ノ舟甚危シ、船中ニ水ナクノ渴ニ及、玉興祈誓ノ潮ヲ飲ニ、清冷タル水也、船中ノ者大ニ喜テ飲ミ、各渴ヲ免ル、其所ヲ即備中水嶋ト号、風靜リ波穩ニナリテ、玉興問曰、汝等何國ヨリ來ルト、我兄弟越人也、父ヲ不知ノ母ニ問、母ノ曰、父ハ大日本伊興大領守興ト云リ、汝等宜ク航メ父ヲ可尋ト、因テコ、ニ來ルト、玉興太々驚キ且悦テ曰、汝等ハ我弟也、今ヨリ兄ヲ玉男、弟ヲ玉澄ト名付ヘシト、幸ニ我嗣子ナシ、即玉澄ヲ嫡子トスヘシ、玉男ニハ新居郡ヲ可與、宜ク住居スヘシト、玉男船ヲ不借ヲ憎、遠ク置之、玉男悔且恨ニ(ミカ)テ、當國ノ國司橋長者清正ニ乞テ性(姓)ヲ橋ト改ム

玉澄 字麻大領 河野祖

玉澄姓ヲ越知ト改ム、本越人ナルカ故也、水上ニ可住、故ニ水ヲ予カリトスヘシトテ、即四字ヲ合メ、氏ヲ河野ト改

玉男 新居殿

益男 實勝 深躬 桑村 息村 樹下押領使 息利 大井御館 息方

好方 越知郡押領使 好峯 野間押領使 安國 風早押領使 安躬 喜多郡使 元興 温泉郡使 元家 桑權介

家時 和氣大夫 爲世 浮穴御館 四郎 實ハ六十八代帝一乘(條カ)院ノ御子也、代々無官、五位タルヘシト宣下アリ

爲時 浮穴四良大夫 時高 同新太夫 爲綱 風早大領 伊興權介 親孝 北條大夫 氏長者 親經 親太夫、氏長者

爲賴 別宮中大夫 爲宗 宗綱 寺町判官

爲忠 宗吉

爲永 盛宗

爲成 康孝

親清 河野冠者、伊興權介 實伊興守賴義四男也、親經カ娘ヲ以テ嫁ス 通清 河野新太夫 伊興權介 盛宗 北條四郎大夫

通信 河野四良 北條時政 通有 俊得能冠者 通忠 八良 通貞 對馬三郎

通孝 實通清四男也 通政 河野太良 通種 四郎左工門

通員 通末 同八良 通員 五郎

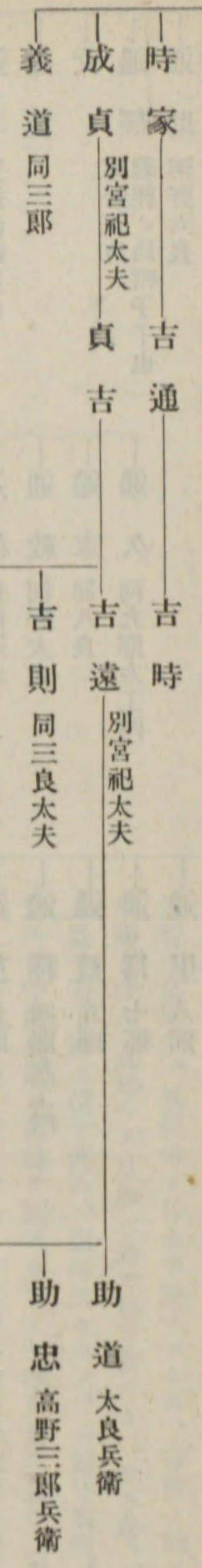
通經 河野五良 義經ノ烏帽子子也 通久 同九郎左工門

通助 河野六良 通里 八郎

通吉 小太良 新居橋四良、高井新三良、浮穴大夫 通治 九郎左工門

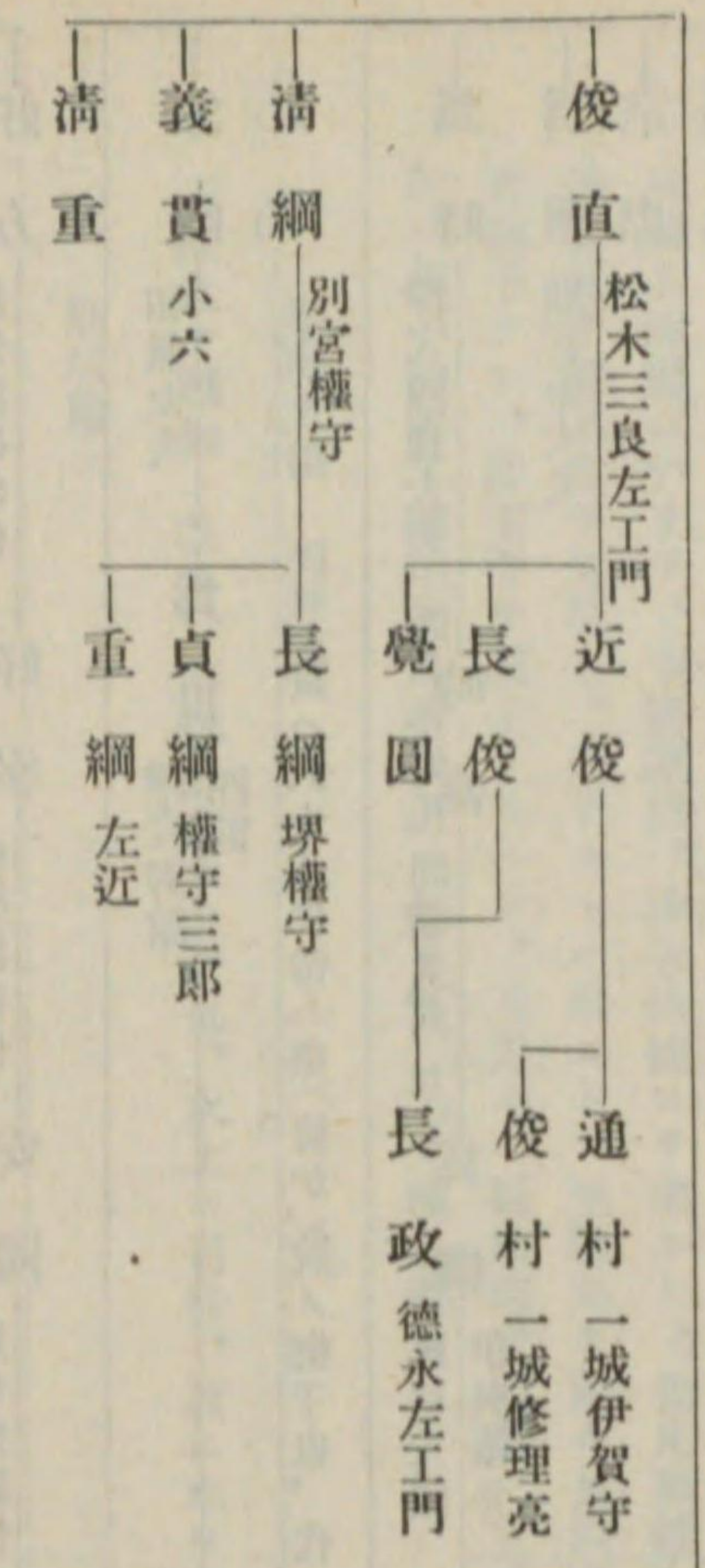
外篇 沼隈郡之二

浮穴四郎爲世二男別宮中太夫爲賴 時國

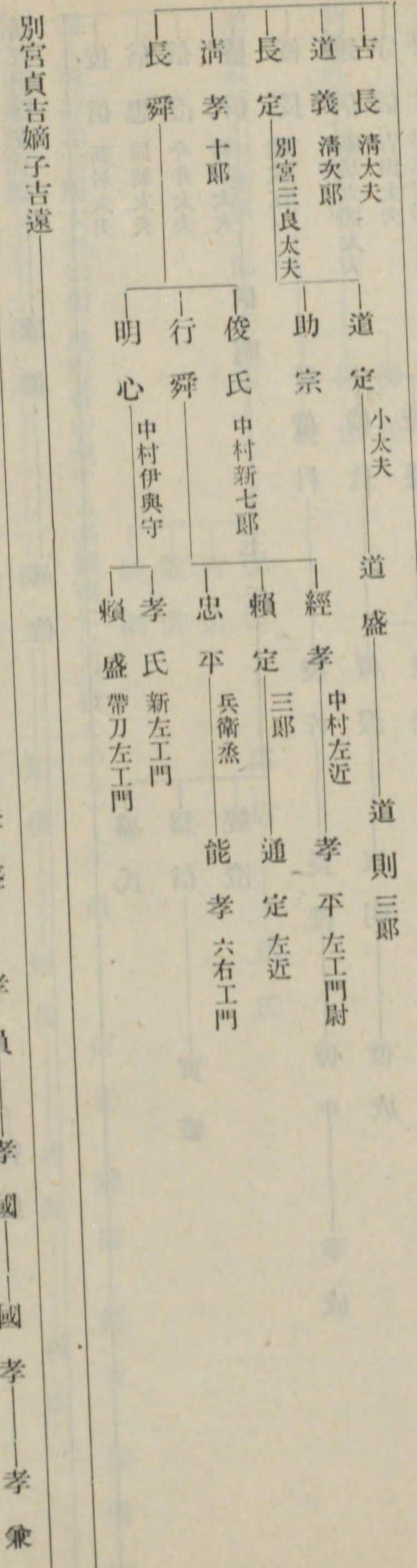
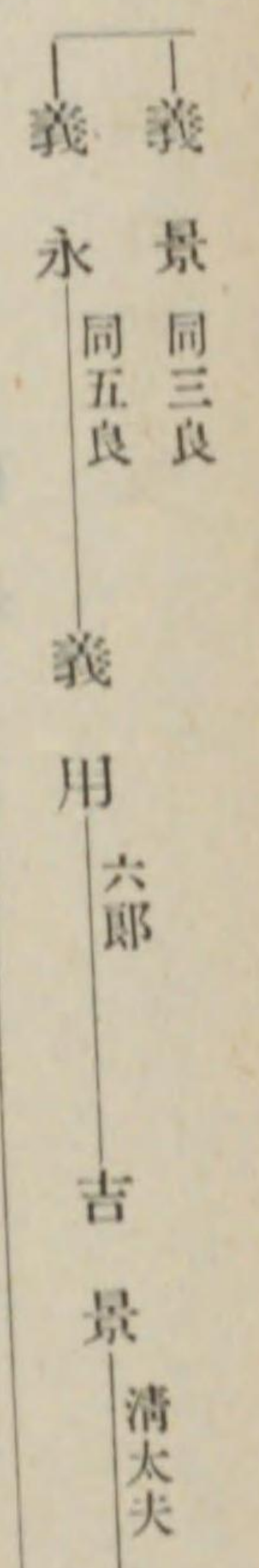


別宮祀太夫貞吉二男

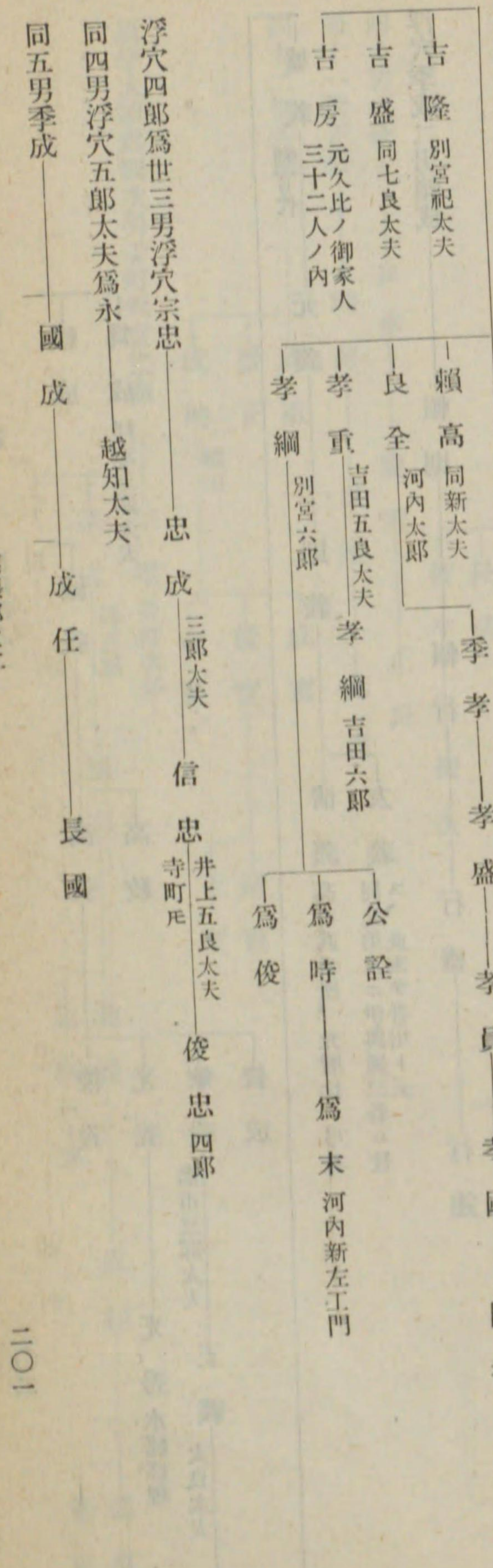
同三郎太夫吉則 忠義 別宮新太夫 俊忠 資俊 廣俊



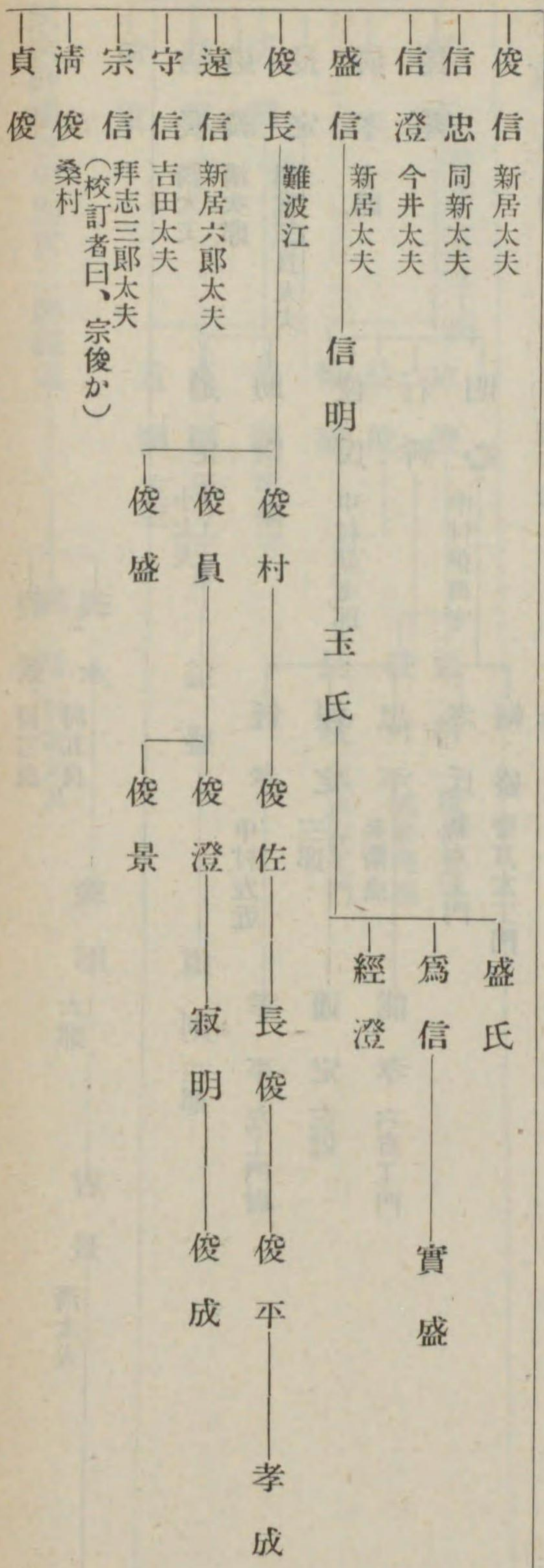
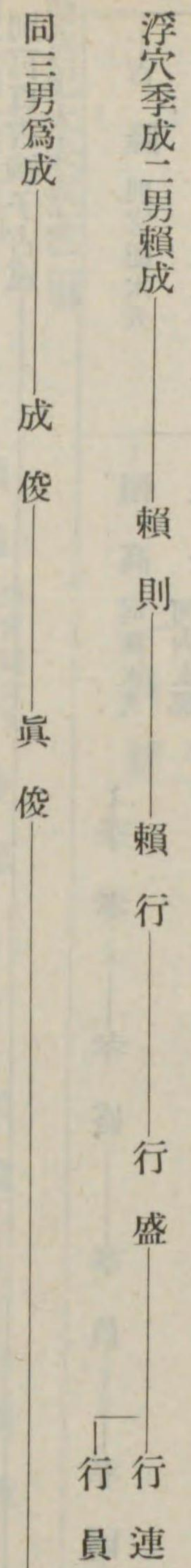
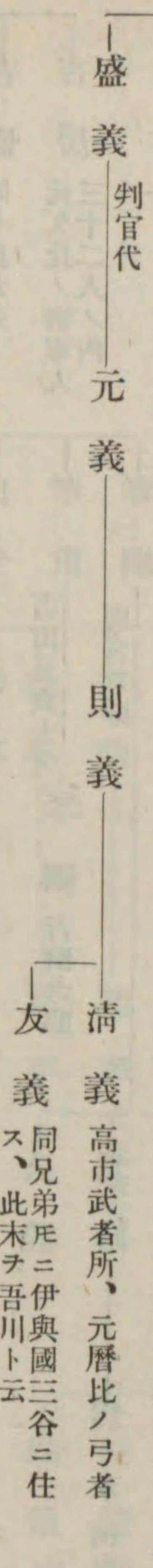
別宮時國三男別宮三郎義道 義時 別宮太良



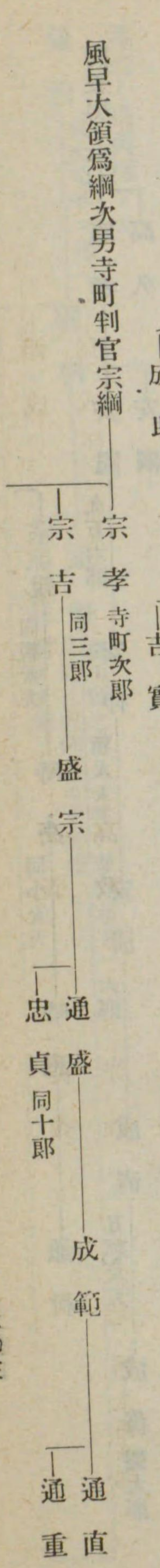
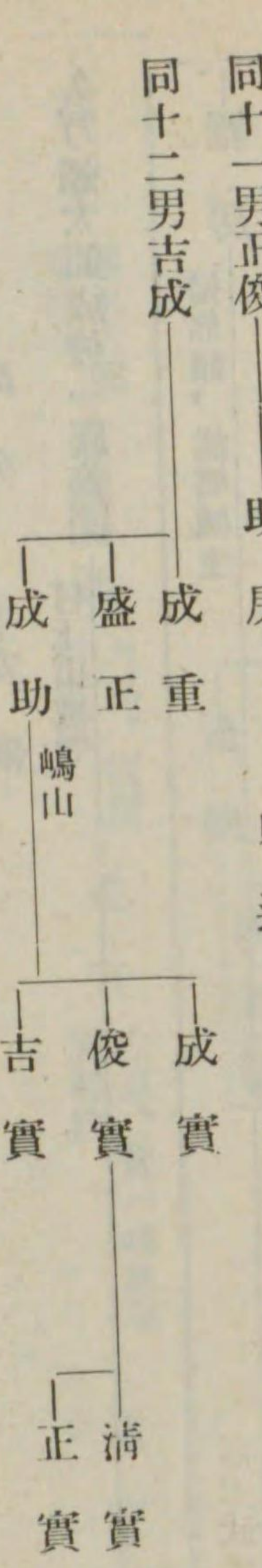
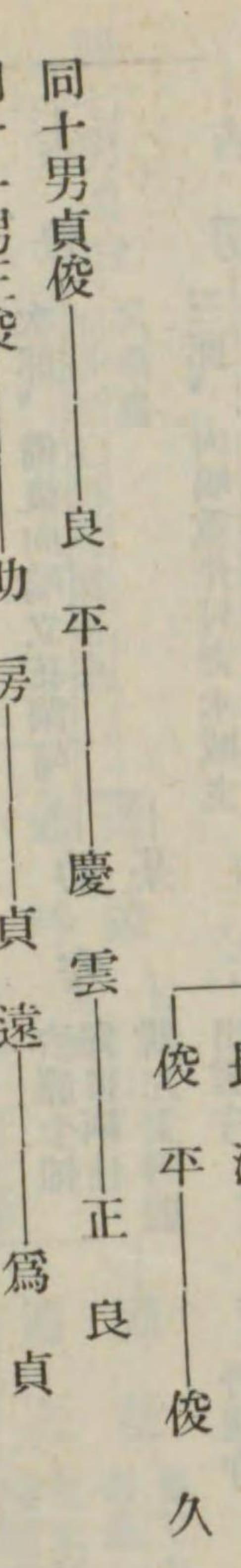
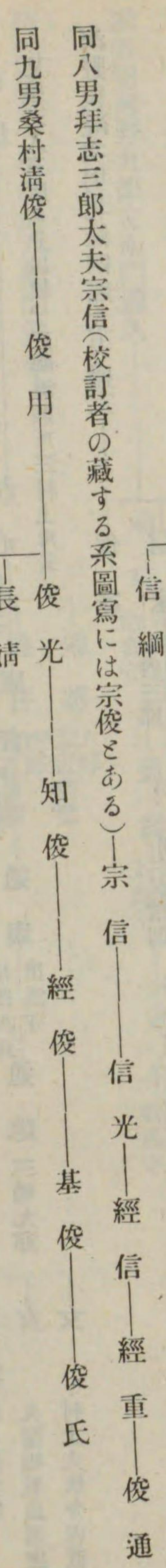
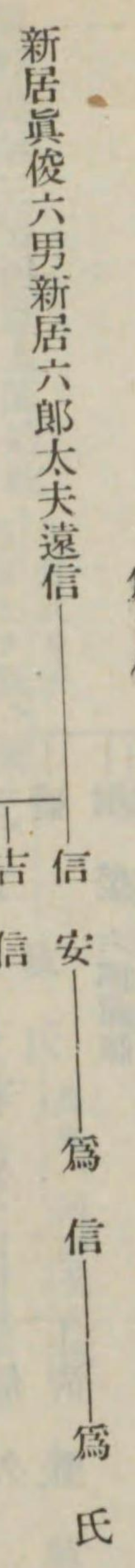
別宮貞吉嫡子吉遠



外篇 沼隈郡之二

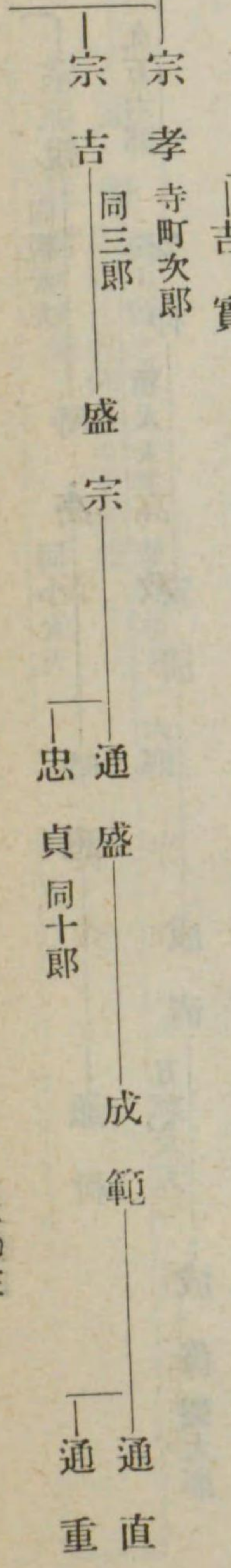


正俊
吉成
某



外篇 沼隈郡之二

風早大領爲綱次男寺町判官宗綱



同五男 康孝 安國 久万六郎 安仲 新大夫 安清 六郎 成清 五郎大夫 成俊彌太郎

高久 安綱 村上山城守

久万彌太郎成俊一族義顯

雅房 掃部頭、能鳴城主

吉豐 次郎、備後向嶋立花閑崎

助安 治部少輔 備後頼住 新左工門尉

吉房 三郎、因嶋重井村青木城主

吉元 出雲守 康吉 丹後守 通康 五良四良 出雲守 通總 三嶋九郎

兄弟三人三所三分居故、三嶋海賊三村上庄云

河野親經次男北條四郎太夫盛宗

保家 大内三郎 宗則 又信則 俊宗 又俊資

信家 宗久 信久 清増

盛宗 福角左工門五郎

資方 盛久 盛喜 盛道 盛秀 盛行

増榮 六郎禪師

吉繁 紀兵衛主尉

吉智 修理亮 武志城主

吉久 留嶋五良通康妻

女 村上大炊介吉直妻

河野通信次男得能冠者通俊

通純 又太郎 通孝 又太郎 通景 通宗 越後守 通勝 但馬守

通秀 太郎

通村 彌太郎 通繩 又太郎 備後守

又信綱、陰德太平記同 信通 彌三郎

通方 通成 通永 應永比 通豊

通康 通定 右馬助

河野通信三男河野太郎通政 北面武者所 皇孫女ヲ賜、妻トス

政氏 長丸、河野又太郎 通廣 別府七郎 通秀 知眞房 一遍上人ト云

同五男河野九郎左衛門通久 通時 同四郎 伯耆守 通繼 同藏人 上野介 通有 同六郎 對馬守

河野通有三男四郎左衛門通種 通將 六郎 左近將監 通任 四郎 彈正少弼

同七男通治 又通盛 九郎左工門入道善惠 通遠 七郎、壹岐守 通能 龜王丸、九郎、通久 河野四郎 林松院 通宣 刑部丞 天徳寺

通尤 彈正大弼 龍穩寺 晴通 六郎、益慶 稻葉祖 通宣 左京、實ハ晴通弟 通直 四郎 某 太郎 實ハ藝州穴戸氏ノ子ナリ

通治ノ系兩様アリ 貞治元年ニ死 通朝 通堯 細川頼之常久ト戰テ康暦元十一 月五日吉岡山ニテ討死 通昌 刑ア太輔

長重 長國 長信 長政 長秀 長澄 長義

消息の寫

猶々是の人によく國のやうおしへさせ給候へ

去年の近江の合戦に、折ふし御さい京候てせんにあわせ給り候そ、返々本意候。又いつ比上洛候へきやらん、ひんき候は、うけ給候へ。くにへ人を下し候、あんないしらす候、人ひとりつけてやらせ給候へ。御渡し候へは心やすく候。式部太夫は東國へ下して候也。なにかなく、くつわやしり少々給候へ。よろつ後々申上候。恐々謹言。

正月十一日

河野冠者殿

爲 義

さいこくには、それをほかしたしき人も候はすい、此春申如く、ひとへにたのみ入まいらせ候。淡路掃部冠者には、さためて物語候つらん、心やすく候。こなた様は、みな思様にしたゝめて候。ちかきほどに、思ひたつかと、又心やすく候はん、したしき人、ひとり給候へ、くはしきむね、申たき事候也。そなたの一もんたちは、なにとかならん、おほつかなく候。扱いろくの物を給り候、返々御心さしよろこひ入候。恐々謹言。

治承三年十月三日

河野四郎殿

頼 朝

伊與國御本領并家人等御進發不可有相違候也。遠國之間年々上下向其煩候歟。然者子息右近親一人可給候、且委旨申含實平候畢。恐々謹言。

文治元年三月二日

河野四郎殿

頼 朝

八郎殿隨兵之事、依谷殿仰、去八月勤仕候畢、會平里見冠者年増下年相置候、返々悦入候。兼又伊與國守護并新居西條兩庄之事、先度親忠下向候時書進宛書候、定下着候歟、諸事期御參候。恐々謹言。

霜月十日

河野 殿

左近衛中將

廢帝御幸事御座河内國東條三間凶徒等可蜂起之由有其間、早引卒(率)一族并伊與國地頭御所へ不日馳向可致軍忠之狀如件。

建武三年十二月廿日

河野對馬入道殿

尊 氏 (花押)

へつして、ちんせいせいひつの義なく候は、みなみかた、おいはらひ候て、やかて、ちんせいへ、はつかうし候へく候。もしこの事いつわりにて候は、伊勢太神宮、八幡、北野の御はつを、尊氏かふり候へく候。

九州蜂起之事、直冬稱御意、相語士卒候由、其間候間、爲誅伐已所下着兵庫也。早相催一族、不日可馳參備後之狀、如件。

觀應元年十一月八日

河野對馬入道殿

尊 氏

ちんせいほうきによつて、はつかうする處也。すでに備前國みつしまて、つきて候。いそぎく一族をもよをして、まいられ候へく候。猶々こくしてまいられ候へく候。

十一月十八日

河野對馬入道殿

尊 氏

高倉禪門、北國へ下向云々、仍所遣使者也。隨其左右、重可被仰、早相催一族并國人等、致用心、可抽忠節之狀、如件。

觀應二年八月六日

河野對馬入道殿

尊 氏 (花押)

もごよりのみ入て候へは、高倉殿、北國におちられて候程に、京都用心のさいちうにて候。かつうは國をしゆこし、かつうはせいをもよをして、いそぎ上洛候へく候。猶々その方の事は、たのみ入て候。忠をいたされ候へく候。恐々謹言。

八月十日

河野津しま入道殿

た か 氏

注進狀披見候事。就南方凶徒退治事、差遣孫子壹岐彦六郎候條、殊以神妙候。彌可致忠節候狀如件。

義 詮

延文五年四月廿八日

河野對馬入道殿

細川右京大夫、雖有御免、伊與國守護職事、成下安塔上者、當國惣而不可相□之由、所仰含也。早可令存知之狀如件。

康曆二年十二月廿九日

河野 龜王丸 殿

義 滿

自先祖代々相傳之分、并家之重器等、一點不殘、所令讓與也。早可存知之狀如件。

應永元年十一月十三日

刑部太輔兼伊與守越智通義 判

六 郎 殿

右之數通有之。

宇三郎先祖、豫章記といふものを記し置たり。少々振萃し侍り。

伊豫預 伊與 畧義ナカラ

伊與 心カナヘリ

伊與國三嶋大明神は、面足惶根尊也。玉興、三嶋の社を造營有。文武帝勅して、謚日本惣鎮守正一位三嶋大神矣。後世佐理の筆跡、日本惣鎮守大山積大明神と有。

和銅五年玉澄、三嶋大明神を越智郡日吉の郷に勧請し、大山積別宮大明神と号す。

人皇四十九代光仁帝の御宇、寶龜十年、三社造營有。遷宮の日、蓬萊、方丈、瀛州の三嶋現し、日輪天仙にかゝやき、知の字ニ日ノ字ヲ加へよと、託宣有故、越智と書なり。

頼朝、由井か濱御酒宴の座、諸士の争ひあらんとて折敷に一二三の次第を書被下、通信三番目に被仰付故、當家の紋とすると。

先祖三並、新羅退治の時迄、暮の紋洲濱なり、他家にもスアマの紋有て紛しければ、三並の船には角違ひに拵て舳に立置けるに、海に移りて三文字に見へける故、三ノ字にすると。又縮三文字は波に汰れたる形なり。

養和元年、平家の太勢、伊與國へ寄來りけるか、通清三度の合戦勝利たる間、平家一万余騎を卒(率)か而七ヶ國を催し來り、温泉

郡にて合戦す。通清利を不得、高繩の城に籠る處に、備後國奴か入道西寂等を相語て責けるに、城中に返忠のもの有て、かたきを引入ければ、通清、通孝、通員、中川衆十六人討死す。此時中川一族皆亡けるに、藤澤道場に生阿彌陀佛といふ時宗一人有けるを呼下し、還俗せしめ通信と号し、北條時政の掣となる。頼朝の姪也。通信童名若松丸と云。國府に若松寺を立、本尊馬沙門、通信等身の像を安置し、いまに有之。

一遍上人は別府七郎通廣の次男なり、智真坊と云。始は天台宗なりしか、十八歳にて西山善惠上人の會下に至り淨土宗を試、建治

年中、後宇多院の御宇、熊野證誠殿に參詣し、直に權現の正躰を拜し奉り、神勅を蒙り諸國を遊行すと。

安藝國沼田之城主、沼田の次郎は通信の小舅なり。能登守教經大軍を卒(率)して被攻、通信合力して戦といへとも終に被責落。剩、

沼田次郎深手を負て引事あたわす、通信大の鐵武者を肩に引かけ、一里餘退き安々と船に乗、豫州に渡る。自是沼田豫州に住す」

出雲坊宗賢は、通信若年之比、江州西坂本にて捨子を拾ひ、葛籠の蓋に入て錦につみ、上に平之字を書たり。いか様故あるものならんと抱て歸、生長するに隨て容儀もよく、勢力餘に超たり、法師になして出雲坊宗賢と名付く。通信は親を奴可入道に打せ、

口惜思ひ、宗賢も鬱念をふくみて月日を送る。或時、西寂輓にて遊君を伴ひ、船遊參して居たる處へ、通信、宗賢、漁者の形となり大なる鮑を、西寂か船に送る。西寂太悦び、兩人を船に招、數盃をかたふく、時に兩人親の敵をは如此するものと、早速に西

寂を生取、高繩に歸り、通親か墓の前を引渡す。西寂、通親か塚上に尿しけると。出雲か子孫を桑原氏と号す。

康曆元年、河野通堯、吉岡山にて討死す。舍弟刑部大夫通昌、周防竈戸の關に在陣す。將軍か備後國の住人、宮下野守兼信入道を御

使にて、通昌を被召、通昌、兼信同船にて播州室に至り、大に煩ひ、既に末期に至、兼信に遺言しけるは、通堯か両子有、彼等に

遺跡無相違被下置度由、申達して死す。

安國寺惠瓊は、俗姓藝州沼田郡金山城主、武田刑部少輔信重か末子、武若丸、出家而頓藏主と云て、東福寺の西堂也。才覺優長に

して毛利輝元招て藝州廣嶋安國寺に住せしめ、軍書を講せさせ、所々軍場へ同道有。輝元厚く恩賜せらる。大閤、備中にて信長の

不幸をき、毛利と和儀(議)の刻、御使を勤しより秀吉公に近幸而恩賜有て都合六万石を領す。慶長五年、石田三成に組し、九月十五

日石田敗軍す。惠瓊を輝元、江州八幡迄同道せらる。安國寺望て鞍馬月清院は拙僧取立程の者にい間、くらまへ退申度候。尤根來

普門院とて、鉄炮の上手なるを付て鞍馬へ被送けれども、月清院不被頼故、京都六條一向宗の端坊に隠れ居けるを、月清院見と

ゞけて、井伊兵部太輔直政迄注進しければ、則生捕らる。

安國寺は、藝州廣嶋國泰寺の舊号なり、以前臨濟宗なりけるか、曹洞宗になりて寺号を改む。石屋の末流梅叟住持せらる。其後弓

庵の別れ快庵派の嫩桂住せられ、是を開山とす。隆景は積(癪)か持にて平生麥飯を食し、一生不犯なる故、嗣子なく、秀吉公政所の兄、木之下肥後守家定の子を養子とし、筑前立花の城に居せしめ、筑前中納言秀秋といふ。隆景、天正十八年、備後三原の城を築、十九年二月二日移徙、文録(祿)か年中朝鮮の軍事を勤め、慶長二年六十三歳にて卒去也。秀秋、慶長五年、關ヶ原一乱之節、江戸方に内通有、其恩賞に浮田秀家の舊領、備前美作を賜、國替し、慶長七年十月、秀秋卒去せられて家絶す。福嶋正則は、尾州清洲の城主也。慶長五年、關原の大功故、毛利舊領の内、藝備二か國を給り、廣島に居城す。子息備後守正元は大酒なる故、若死せらる。

右の外は振萃するに違あらす。

能 登 原 村

寺四ヶ所

臨濟宗

海潮山

盤臺寺

備後州、阿伏兔、海潮山、磐(盤)臺(臺)禪寺、緣記(起)

鞆津在備之福山城南三里、西海聚泊之一巨港也、相傳神功皇后西征凱旋、棄鞆於此浦、故名云本朝古稱鞆爲射者之具勝蹟名區居多矣、不詳于此、又西南一里許、曰阿部戸、嶙峋砢砢、懸崖峭壁、上有觀音閣、安阿那婆妻吉低輪像、土人云、江浦南浦鞆津漁夫有夢事、詣紀州熊野三山祠、會有土木之事、勤給其役三閱月而還、一日薄暮出漁、覺網底稍重、水上閃々、光射舟中、舉而視焉則觀自在石像宛如也、長二尺、腰一圍、匪尋常一二人之力所能擡起也、普告諸漁、胥共感嘆奉持、而崇置於阿部戸厓上、架樹掩篷、暫障風日、其夜復夢告曰、汝德厚信和、遠登三山、力役自勞是以神明納焉、故授汝靈物、以巨證前禱、自今汝家、宜号三山矣、依之世々稱三山某次郎右衛門雖未審其年紀、豈天正初間事歟、又像有一螺殼、々々藏古泉三十餘、見存之者只三錢也已、化錢和同開珍政和通寶、顧唐文宗蛤殼裏之像、亦可併按也、側有寶大寺、僧建智、聽漁之言、拜趨作禮日拈香花乃興營構之志焉、時之州牧毛利輝元、創立一字、且寄灯火之料、至于今之太守水野家、崇其故址、拓治磴磴、僧房鐘樓相繼建置、具有別紀在焉、一登斯閣也、萬峯林立、爭獻秀爽、烟海渺然、天水相接、豫讚之域在指顧中、蓋万里雲景也、伏瞰下方、剛風捲衣、怒潮噴崖、怪石僂垂神悸股慄、抑金陵觀音嶺之所謂帆檣在扉履

問者、是今日之同談也、寺在半腹、古樹葱蔚、空翠拂人、江山林野、層見疊出、蜃氣竜光隱顯明滅、夫烟中之漁歌、島外之征帆、雪朝月夕、雨奇晴好、殊狀異態、弗可殫述、韓客題詠、騷人篇什、散在口碑、眞卓偉奇絕之觀也、杳然隔塵寰、頓離却氣習、此迺南方無垢之世界乎非乎、古曰信觀音者、不必補陀、信補陀者不必海矣、由是階之、于熊野山、于布丹岸、蛤裏與網裏措而不論焉、神明之應、妙智之力、唯在其人之信與不信、而苟使念彼之徒若三山氏之信、則應力之過臻、猶我網中物也必矣、熊野也、補陀也、不俟他須、而況於親信、此所出于熊野神授之普陀落迦山大士者乎、適與寺僧語、因叙其說、以終記之言云。

備陽後學儒子 中嶋道允記

盤臺禪寺、重鑄銅鐘銘

夫修多羅曰、此方眞教鉢清淨在音聞、凡器之有聲也、莫大於鐘矣、而所以警昏听昭法度、祛障蔽也、加旃吒王息銀輪於苦海、先主宥湯鑊於幽途、典籍之所載、冥顯之益略而不書也、粵古備後州、沼隈(隈)郡、阿伏兔、海潮山、盤臺禪寺者、觀音大士示現之地也、巍然紺殿、在海岸孤絕處、蓋寺者、創建天正間、而振興於万治末、時主僧名用泉、号水月、唯以興復爲已役、聞舊有鐘、苾芻關之所鑄也、年祀遼邈、而復毀壞矣、泉公再募緣、鑄鐘架小樓懸之、越七十餘年、鐘又毀焉、今住山惠洪前薰席安山之上足、而亦爲予法姪也、志欲不弘先人之業、重鑄鉅鐘、以仍于舊貫焉、至衣資不給、自携化疏奔市井、會有讚陽人修浮業長順者、推洪禪之願、而力相其事、可謂非衣之檀越、夫豈偶然哉、不日鐘成焉、洪禪遠寄書來徵銘辭、予謂必也因聲而發覺、因覺以入道、庶幾無負斯鐘之建也與、迺爲之銘曰。

維天號令 雷以爲先 法社制度 鐘以爲先 非言非默 播揚梵詮 瞻彼盤臺 白華新鮮 大士收爰 赴感曰趨 先之有鐘
多更星躔 非正追蠡 而亦閃穿 誰其尸之 住山洪禪 日居月諸 衆力所加 遂潰完全 考之擊之 厥聲鈞然 以息輪苦
以警長眠 良哉洪禪 志願綿延 劫石可銷 我鐘永堅 我勒茲銘 永與鐘傳
享保十七年童次壬子十月 備前州岡山鄉三友禪寺退衲 節峯叟勒之
化主 現住當山第七世惠洪 助化 讚州鷓足津行者長順

時太守阿部伊勢守子孫繁榮祈處

備之後州、沼隈郡、阿伏兔、海潮山、盤臺禪寺、円通閣上梁記

夫以、前十州太守輝元公、歸崇此大士也深矣、以故權輿寶樓於元龜中也、爾來前作州刺史水野勝種公、暨當時勢州太守阿部正契公、

於于寬文中與享保、元修之補之也、雖然棟梁闕世、而今將傾頹焉、於茲當君永帶靈山之附屬、而欲再興焉、乃命同郡鞆縣令、俾令營建事、因抽丹悃不懈、監郢工日淺功已成矣、加旃修補階廊及鐘樓等、以潤色其舊觀也、可謂再支佛日之傾頹、嗚呼盛哉、仰冀天下鎮衛國家繁榮、而放勳與盤臺永不朽矣、至祝至禱。

時元文三歲龍輯戊午夏五月吉日

鞆縣令 加藤忠保
現住 比丘慧洪謹誌
匠師 齋藤佐右衛門

江神祠宇、列桂於殿、植蘭于宮、山岡峯巒之間、分列、江渚にのぞめる藤王の高閣にも劣るまじき絶景なり。文人騷客の著述枚舉する事不能。漸、其一二を擧ぐ。大士閣、往古は岬岨たる岩頭、地骨を捧たる如くにて、方丈より羊腸を攀て登りけるか、寛文七年丁未八月、水野民部勝重公、琢立たる切岩を以て石壘とし、方丈より閣上まで廻廊を建續られ、無類の装(壯か)觀なり。大風地震といへとも少も突損する事なし、金輪際より生したる岩頭なりといへり、左もあらんかし。朝鮮の三使來朝(スルカ)ハ、則、餉米、干菓子、紙墨(墨)等の物を獻する事、毎例なり。岸下小舟に棹さして、往來の舟より觀音の散錢を乞、若過て海底に落す時は、尺く觀音閣の海岸に流寄、蠣殻のこく岩に付て有之、誠に奇妙と可言。往反通行の船客、西國九州二嶋の順禮、四國邊路、參宮道者、十六部は勿論、忠海、御手洗、輛の遊女船、惣娥、海蜻蛉など云者、此樓上に登りて遊戯し、己か名を書、年号月日或は詩歌、發句、狂哥など、板扉、壁柱に書らしたる中に、哥にも誹(俳か)諧にもあらて、當意即妙の樂書有。如何なる漂輕なるものか書けん。あふと、は、そらことよ、ねふとなるへし、うみもあり、はしりもすれば、おしもする。

此邊の話(語か)に、虫齒、癩などの欣(煖か)痛をはしるといふ。

阿伏兔記

寛永八年、歲在辛未正月末、西出藝州、東將赴備之前州岡山郷、浮船於春水、遊目於四方、滄海漫々、洪波茫々、悠々然以派流、飄々乎以乘風、縱一葦之所如感多景之無窮矣、時行三十里計、而繫船於阿伏兔之濱、夫阿伏兔者、觀音薩埵靈蹤、而其境太奇異也、地勢兀出、檐牙高啄、白雲之橫廊掛簾幕也、紅霞之出海流丹雘也、寔有千万之氣象、不亦樂乎、於是復舞棹於心之所欲而盤桓、徑路曲々維石巖々、四方人稀、而有幽鳥語喃々、山間花紅、江上柳翠、兩影相映、而如丹青自然彩出、可謂清絶也矣、予乘此逸興而或倚篷窓寄傲、或舉酒盃謳歌、雖清興無尽、奈遊程有限何、不如且退去矣、戲於如是遊觀、又何時乎思茲有于茲、仍作小詩一篇、

以咲美之。

阿伏兔靈蹤堪賞

樹林花發自無埃

山長海潤堂前景

水綠沙明岸畔隈

地勢築作百千丈

檐牙高啄一樓臺

白雲深處普門境

阿伏兔賦

藝之廓禪者、將赴于備前州、路經阿伏兔之絶境、停棹江濤遊、目當臨流覽句、登高作賦、既而退步反登舟、來于此寓焉、乃謂余曰、汝嘗禮阿伏兔觀音薩埵乎、曰未、曰居、吾語汝、夫百花開土濁世教主、苦海津梁、頽波砥柱、願輪常轉遐方、慈雲廣覆刹土、其神用也、分身千百億、其妙智円通二十五、應現無時無處不普、故施化若域國垂跡阿伏兔此地也、蒼溟渺而前流、青山兀而後挂、舊苔封盤石、烟蘿掛枯樹、幾代幾年、無今無古、實歷劫不思議者乎、斷崖石壁、謂之補陀岩乎、巍々上凌雲霧、峻宇高堂、謂之普門境乎、困々下臨水府、欄前月照、照破無明痴暗、峯頂雲開、開示上天直路、風吹巖花、妙香薰于晨、潮觸岸沙、梵音唱于暮、海波之漫々、準擬弘誓之深、崖溜之涓々、蕩徐(除か)煩惱之汚、滿目之好景、尽是清淨觀也、遊此者、自忘諸有苦、豈夫不娛哉、予聞之、忘形骸以神遊於心目之間、如宛然觀之、于時語既終、樂也足矣、謂禪者、興將尽、請息遊以下江浦、禪者曰、是汝之慮也、爰爲迂哉、予於是乎、恍如一夢之寤。

右に記す所の縁起は、水野勝俊公の儒臣中嶋道允に被仰付、御寄進有。添狀爰に記。

阿部戸觀世音記一軸被 仰付被遣之間尤入念可被相傳候恐々謹言
十二月十八日

- 上田四郎左衛門 正房 (花押)
- 小場兵左衛門 利長 (花押)
- 中山外記 重直 (花押)
- 上田勘解由 (花押)
- 中山將監 虎 (花押)
- 水野玄蕃 直次 (花押)

盤 臺 寺

福嶋正則公寄附狀 箱之上書

外 篇

沼隈郡之二

羽柴左工門太輔殿御判物

如此書付有

以上

備後之國阿部戶觀音坊へ扶持方參人出し候間今月朔日毎年月ぎりニ可被相渡候以上

元和四年三月廿六日

大崎 立 蕃 頭 殿

宰

相 (花押)

當寺創造之大檀那

天樹院殿十州太守前奥州雲嵩宗瑞大居士

毛利中納言輝元

當寺開山覺叟建智首坐禪師

觀音堂 壹間半四面四方、高欄有。惣瓦葺、鏽を揚ク。

額鍋嶋紀伊守元茂公御寄進

磐 臺 寺 (篆書)

此額破損に及は、後世まで御修覆可有との裏書有。

觀音堂高欄の金寶珠に、寛文三年水野民部と書付有之、其以前は自然石の巖なりけるか、勝種公御家督以後、石壘を築上、觀音堂、鐘樓、客殿迄、廻廊を被建續。

客殿 三間梁 六間 正龔公の御代御建立有。

額 海潮山 筆者不知、藝州寄進す。

寶曆四年冬、觀音堂の高欄、庫裏、石壘、駒寄等御修覆有て、某校訂者曰ふ、本書著者の自稱奉行として數日逗留し侍けるに、

同月廿七日青木主税 攝州麻田 公の家臣森本光謹と云參詣而、某か先君青木内膳正見曲十二燈の臺を寄進し侍る事有、今以有之哉と

相尋、持僧則件の臺を持出云々之趣を伸ければ、光謹叮嚀之段挨拶し、暫く休息し一盞を傾け、觀音堂の柱及床上一一筆を書して去。

飛樓高架聳中天 碧水青山出自然 海内風光都在此 神仙鏡裏好神仙。

右登盤臺寺即興

攝州麻田 東陽艸

唐森本光謹之韻

不識神仙是酒仙。

宮原直俣稿

眺望高臺萬里天 丹青難寫此巍然 一盞喫去普門境

自是風光不塵世 逢君此地問登仙。

右奉次 宮原君盤臺作 席上一贈 臙 寔艸

臨濟宗 吉祥山 寶大寺

本尊 觀音 開山 覺叟建智首座

鐘銘

大凡漁巨海以魚筮、將三軍以旌旗、匡叢林以鐘鼓、惟鐘夫其權輿遠哉、經云干闥土妙莊嚴王增加長者、蒙佛勅鑄鐘也、爾來遞代轉傳而掛在叢林、使合山衆、或朝參暮請、或捧鉢上堂、其任用最爲不輕也、茲備之後州路沼隈(隈)郡能登原縣、吉祥山寶大寺、經來禪屈(窟か)也、昔年陶鑄一鐘、勘定法令天旋地轉、而終爲甕噀之器焉、現任祖閑再鼓橐籥欲振起先師已墜之舊規、搜攪後昆長夜之困睡且掃退群魔、補弼王基、因挖布納請銘、蓋銘者名其器以警人之辭也、恐機才不當其任矣、雖然不忍固辭、吹古硯投老筆云、銘曰。

渾鑪打鑄 一鐘功成 抱虛有口 應物即鳴 聲豈來耳 耳非往聲 斜陽感動 味日夢驚 僧舍綱紀 佛場瓊營 群魔膽落

家國太平

花園一枝萬國列 布納 拜識

元祿八乙亥七月廿日

求願 能登原村寶大寺現任 祖閑

大工 備中小田郡矢掛住 高艸氏石見入道七代孫 同名清助盛家作

丁初 門田助十郎 北村吉右衛門 橋本與三右衛門

備之州、能登原村、吉祥山、寶大寺、重建鐘樓上梁之銘並序

同郡輻佛日山主病杜多貞普明誌

百丈大智禪師自作宗門之清規、而殿堂樓廡登瓊瑣具度規獲大備、惟備之陽有寺、曰寶大、山号吉祥、雪江之分派乎、聖澤真源、天正之間、創基於覺叟建智、爾來寬文四年水月用泉主席、就其遺址、爬梳補苴、而一新復鑄鉅鐘、以宣其教、久之消鑠漸蓋矣、元祿

七年住山祖閑、重謀更作化諸檀信範金爲鐘、又恐風雨之辟緇構樓蓄之規制登飾視舊有加意、有檀信門田氏某者、靈力而扶其役也居多、經治于十二年九月十八日、訖功于明年三月十八日、凡造鑄鐘之與樓成計曆七白告成之日於同郡輛正法寺之機佑和尚、爲落慶導師、修円通懺摩會、贊贊幽明、使來謁銘、因紀時日云、銘曰。

無畏無暮兮爾孔揚代億劫兮爾賀堅剛孰職之辜有樓弛張

元祿十三庚辰春三月十八日

化主 現住比丘 安山祖閑

大工 住吉吉兵衛吉次 門田助十郎

臨濟宗 醫王山 福泉寺 本尊 藥師 開山 明信用公首座

法華寺 相寶山 輒津妙蓮寺末寺 開山 大善院日瑞上人

村老曰、往古當村も古志三郎左衛門領地なり。當村の郷士久留嶋の郷士と鬭争に及びて、久留嶋の郷士六人を打殺す。仍而久留嶋のものとも、野嶋、因ノ嶋の海賊共を語らひ、當村におしよせ、焼打にして當寺の財寶を奪取しと、縁起に記せりと、かたりけるゆへ、當寺へ詣して縁起を一覽致度段望み侍れば、當時無人にて住し侍るゆへに、賊難火災のほと心もとなく、左様のものをも輛津の本寺へ預置侍る、取寄せて見せ可申と有けれども、滞留も一兩日に侍るまゝ、重而一覽可仕といひければ、又々當寺へ詣給んも計かたしとて、略縁起を書して被送。

抑相寶山正瑞寺は、往昔人皇九十一代、伏見院御宇、正應二年、大善院日瑞聖人開基として、大檀那當國新庄の城主、古志三郎左工門尉、源何某、法名相寶院正瑞大居士建立せし、七堂伽藍の靈場なり。其ころ近國に徘徊せし盜賊の大將、壘屋何某、野嶋、久留嶋、因ノ嶋の惡黨共をかたらひ、當寺の重寶什物等を奪取ん事を謀る。既に是かために堂塔一宇も残らず焼失せり、されども四天王、鬼子母神の尊像は日像菩薩の開眼たるによつて、無恙わたらせ給ふ。時は人皇百三代、後花園院の皇子、日應大僧正、文明十五年に再建し給ふ、是中興の祖なり。此時迄正光寺といひしを、正光の正の字、日瑞の瑞を取合て初而正瑞とあらたむ。其後僧正の嫡弟淨藏坊日澄律師に付属したまひ、洛の本山妙蓮寺に入らる。後花園院の震筆等有しを、僧正隨身したまひしより、本山の重寶となりぬ。今菊桐の五條の袈裟、一衣、當山に残れり。加程の靈場の草深き此里にかくれ侍るは、寔に木村か玉、土中の金ともいふへし。寺領、山林等の記録は本山に納藏せしなり。

神社

神主 福田 市左衛門

生土八幡 貳間 前殿 貳間 石鳥居 享保九年ニ建

鳥居の前に松ノ大木一株有。

毘沙門 壹間半 前殿 壹間 立河内濱邊にあり。

山神貳社 小社なり、貳社共に本郷奥にあり。

河内森大明神 小社なり。

龍王 田濱に有 今宮 天王 寶大寺脇 黄幡 輒地 荒神貳社 壹社寶大寺に有 壹社八幡の鳥居の脇に有、前殿 貳間

右六社いづれも小社なり。

四ツ堂三ヶ所 阿彌陀堂 八幡の下(にを脱せるか)有けるか、いつの比にや崩てなし 地藏堂 觀音堂 大畑

古城一ヶ所 濱邊の山に有、城主不知、平家の城共いひ、又、能登殿屋敷共云。鎌倉實記を考るに、重盛、惟盛、教經、船軍を修

練し給ひたる時の館の跡にや。山上に井有。

さくらの濱 大櫻小さくらとて二ヶ所有。

備陽六郡志『外篇』

(校訂者曰ふ、上記中『外篇』は原本に無いので、あるが著者手記の表紙題目に依り之を加へる)

沼隅(隈)郡之三

地頭分村	一丁
藤江村	二丁
蕪(藁)江村	三丁
上山田村	四丁
中山田村	九丁
下山田村	十一
松永村	十三
本郷村	十六

地頭分村

寺貳ヶ所(原本一ヶ所のみ掲げてある)

真言宗 轉輪山 無量壽院

本堂(原本何の記入も無い)

福成寺

鐘銘

備之後州、沼隅(隈)郡、長和村、福成寺、鐘、知識文

夫滄海者鱗甲所潜、泰岳者翔蹄所集、則知智者分塵所浴、靈鐘者苦類所息、然則洪鐘隆鼓焉、非但蓋吒王望、劍兼變蘇、灰河之難獄、故經曰、一打鐘聲、當願衆生、脫三界苦、得見菩提。

戊子時寛文八年
申十一月如意日

鑄師 丹下喜左衛門
願主 三谷氏 華慶淨讚信士
現住 權大僧都 舜意
大阿闍梨法印權大僧都宥仙兼上人

古城壹ヶ所 城主三谿豊前守

藤江村

寺貳ヶ所

淨土真宗

金寶山

正藏坊

開基

明光上人隨身六房内 佛性

本堂

五間四面

安貞三丑年創立

同宗

光明山

福照坊

開基

明光上人隨身六房内 了法

本堂右同斷

右同年創立

藁江村

寺四ヶ寺

外篇

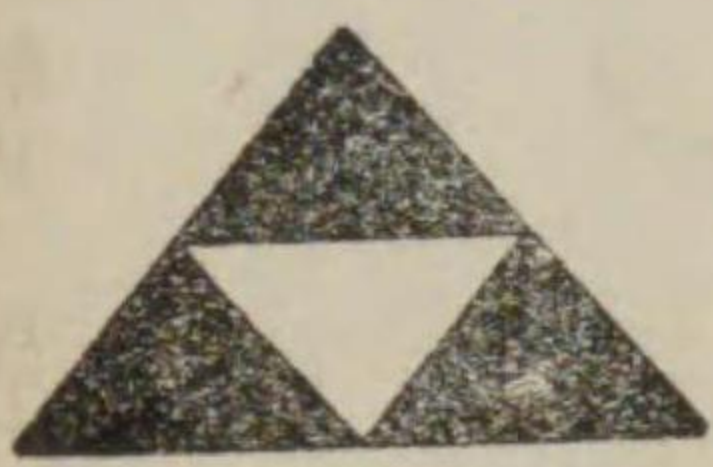
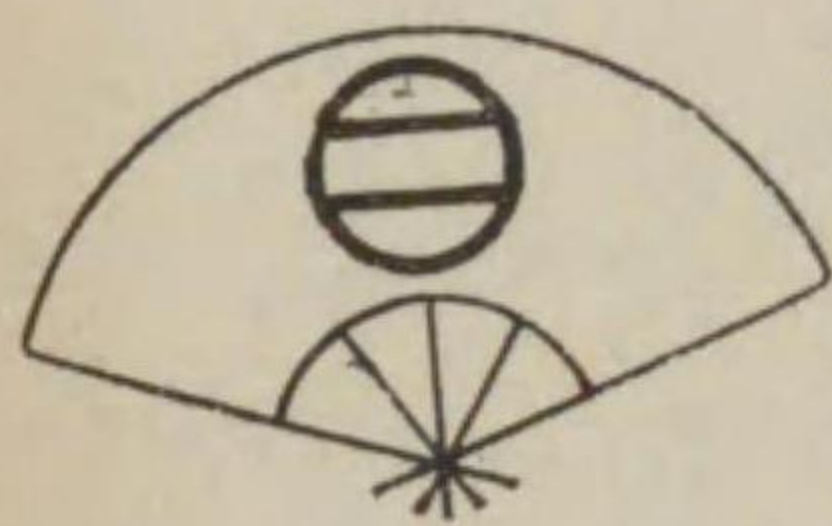
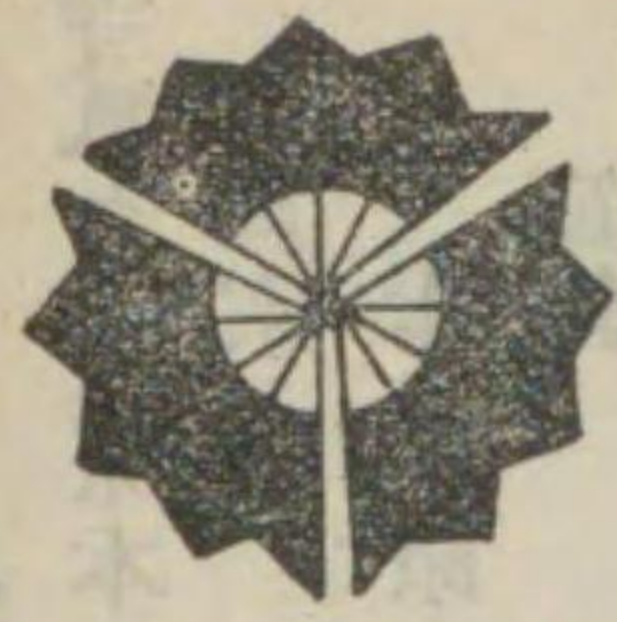
沼隈郡之三

禪宗 山手村三寶寺末寺 高德山 廣福寺 開山 通天梵達和尚
 當寺ハもと臨濟宗にて頼安國寺の末寺なり。久敷廢寺となりける處に、慶安之比、梵達再建せられけるより、曹洞宗の寺となれり。
 万治元年三月十九日、梵達遷化より元文の比迄、監主持にて有し所に、俊谷和尚、山手村三寶寺ヲ移住し、本堂を再建し落成し終
 て私に退院せらる。方々尋求けれども其住所しれず。則俊谷を第二世とす。俊谷は曹洞宗近來の活師にて嘶傳の事多し。
 淨土眞宗 最明坊 開基 明光上人隨身六坊之内 正明 安貞三丑之年創立
 同宗 月光山 法藏坊 開基 明光上人隨身六坊之内 重圓 右同年創立
 同宗 大東坊 開基 明光上人隨身六坊之内 西圓 右同年創立

上山田村

中山田八幡を當村の生土として、神田除地六畝拾貳歩有。
 一、神社三拾五ヶ所

天神 龜か迫大明神 北浦天神 太歲神貳社 住吉大明神 貴布禰大明神 牧宮 榮神貳社 竹宮三社
 妙見貳社 津嶋 權現貳社 良 龍王 若宮 牧見 青神 天神 西林 岩崎 牛神 山神
 荒神五社 市場の荒神、楓の太木を御神躰として祭る。近比迄根本二股にわかれて潜れけるか、木太肥りて潜る事ならざるなり。
 右五ヶ所有といへども當村一等に法花示なる故、神社を再興する事もなきによりて神木森林等に神名有て社は崩れ失たる所多し。
 法華宗 光照山 定親院 常國寺 開山 日親上人
 本堂六間 本堂ヨリ祖師堂迄ノ廊下七間 祖師堂四間
 祖師堂の内に渡邊氏の像六軀有、各俗体にて上下を著す。世名、法名ともに何れといふ事をしらす。左之通の紋を付たり。



渡邊越中守高 越前福井之産、幼少而父死シ伯父ニ養育セラレ、伯父苦心アリ。高、伯父ヲ討テ本國ヲ退去シ當國ニ來リ、草戸村ニ住ス。法号大樹院空山。
 同 信濃守、兼。法号、正樹院宗慶。 同 信濃守、家。法号、寶嚴院蓮心。
 右三代草戸村ニ住ス。

渡邊越中守、兼。毛利元就、命兼曰、當國三太守 宮、三好、ノ内一人ヲ討取ニ於テハ忠賞ヲ行ルヘシト云々。因テ宮近門民部左衛門藤原信元ヲ討取、其勳賞トシテ山田三ヶ村ヲ賜リ、初テ一乘山 今ノ七面ニ城ヲ築テ住居ス。兼、十六歳ノ時、在京ノ御、親師ノ説法ヲ聽聞ノ妙法受持ノ行者トナル。親師、重テ中國弘通ノ時、謹テ當所ニ請シ奉リ、開山トノ以テ建立。當寺(時か)、村中ノ寺社ヲ改テ 山中山大富寺、双樹山香林寺、悉屬當寺、末寺末社トシ、又領内ノ男女ヲ勸誡シテ悉、受法セシメ、皆、爲日那。又、開山親師ノ御影ハ越中守渴仰ノ餘リ、佛工ニ命ノ尊容ヲ拜寫シ、令彫刻之、永ク供養ヲ設ケ、師ニ其趣ヲ啓達シ開眼ヲ懇望ス、師其志ヲ感シ玉ヒテ、老後自落ノ齒二枚ヲ首中ニ作り込サセ、自ラ開眼シ玉フ所ノ影像也。兼、老後剃髮ノ日觀ト号ス。天文十五年十一月八日卒ス、法号日瑞。
 同 信濃守 永祿五年卒、法号大岳院日立。
 同 出雲守、房。 天正十六年卒、法号靈巖院日盛。存生ノ時蓮瑞ト号ス。
 同 源三、高。 蓮端カ嫡子也。毛利、浮田、兒嶋合戦ノ時討死ス。高カ子幼故、叔父元養育之。當邑上原ト云所ニ住セシム。
 福嶋正則、當國ヲ拜領ノ後、野々濱ニ移住シ農人ト成。依之一家ノ參會ヲ憚、又遠所ナル故、福山妙政寺ノ日那トナル。
 渡邊民部少輔、元。蓮瑞カ次男也。高、討死後、家嫡トス、剃髮ノ蓮秀ト号ス。天正十九年四月七日卒、慶祐院日道。
 同 四郎左衛門、景。越中守兼ヨリ五代、一乘山ニ城居ス。慶長六年、毛利輝元、組石田三成、因テ防長ニヶ國ヲ賜リ、備後、安藝ヲ福嶋正則ニ賜ル。依之、景、退當所、暫ク美濃ニ住ス、男子四人、各、水野勝成公ニ事フ。景、剃髮シテ朴安ト号ス。美濃ヨリ藝州ニ趣ノ御、頼津ニ於テ勝成公ニ謁ス、勝成公ノ命ニ因テ福山ニ住居ス。
 嫡男勘左衛門。 次男四郎右衛門。 三男日保上人。 四男源太夫。 五男源右衛門。
 右各水野家ニ事。日保、當寺ニ住職ス。慶長六年以後、久ク廢ノ山緒、什物等悉紛失ス。
 右祖師堂の内、過去帳の裏に記し有之。

鼓樓一間 鐘堂(間數記入なし) 鐘再興 延享三年四月廿一日

阿部伊勢守正夔公御代御出役

當寺社御奉行 森嶋伊丹中州

郡御代官 河村藤右衛門元矩

桑田次郎三郎 柳井治兵衛

備之後州、沼隈郡、上山田村

廣昌山常國寺十七世 常眞院日逢識

大工 同國、御調郡、宇津戸村住 丹下兵三郎政廣

銘作 福山住 南波久左衛門毎近

塔中六坊

山本坊 開基 常藏院日應 竹之坊 全 玉藏院日演 松之坊 全 常隆院日養 中之坊 全 正善院日實

岸之坊 全 常住院日正 谷之坊 全 通天院日感

常國寺の山下の逕五六丁ほど行て、西北の山間へ登る、夫より次第に登りて山頭の平なる芝原有、此所を塔中といふ、三昧なり。七五三を引たる古き五輪(輪か)有、小早川隆景の石塔なり。塔中の山下に人家貳拾軒計有、此所の氏神として八月朔日祭之。此邊にては、たか神又はたかけと稱す。享保九年、渡邊氏の人有り、石燈籠を立。是より壹丁計、北へ行は山南、松永の追わけの傍に有。

中山田村

神社拾壹ヶ所

王子權現 社(貳軒(間か)三軒(間か))

八幡 社(三間四間)

上山田、中山田、両村の土生なり。八月十三日と十四日迄祭禮有。

神主 加兵衛
社僧 法縁寺
神主 又次郎
禰宜 甚
社僧 常國寺

荒神五社 權現 天神 山神 良大明神

四つ堂三ヶ所 觀音堂(三間四間)

寺壹ヶ所 法華宗 上山田常國寺末寺 四大山 法縁寺

山田と當村の境に左常國寺、右山南道と云、題目の石塔有。此邊を軍原といふ。路の邊りに人家の數の内に首塚といふ塚有。少計松林有、其内に四角なる土手のかたち残り、是を人升といふ。それより少計行て重友の墓有、姓名不相知。此所、何比の古戰場にや、古籍にも記したるものなし。但、山南敵動に付後卷の事、義隆より高須右馬助への消息、長州、萩の家中、高須市之進方に有之由、其寫し下岩成久五郎方に有之。此邊之合戰の事、陰德太平記にも見へす、三山南、三山田の内、古城或は古き墓多し。城主、姓名ともに口碑にも傳たるものなし。

下山田村

神社拾五ヶ所

二宮 坂ねの上

生土八幡

良大明神 高下

王子權現 徳永

天照大神

太神宮

黄幡 牛神 榮神 荒神三社(なる高田)

十一面觀音金持寺 金玉山金持寺の寺跡なり。觀音は運慶の作なり。後の山際に、宮近門民部左工門信元の石塔有。信元は渡邊越中守にうたれたる事、常國寺の所に記す。然共居城しれず、當村の内、高谷といふ所に城地あり、是則、信元の城ならんかといふものあり、委知たる人なし。

千手觀音 高下

社僧 常國寺
社主 吉左工門
社僧 常國寺
右 同
社僧 常國寺
右 同

四つ堂六ヶ所 桑かいちの薬師 沖の地藏 なる 時見堂の観音 石坂の地藏 むかい

松 永 村

當村は新涯地なり、水野公の勸者、本庄蓮生といふもの奉行にて、寛文九年築之。東西拾五丁、南北拾丁にて、塩濱四拾八濱とす。壹濱の畝八反より壹丁五反迄なり、八反より少き濱なし。水野家の御代、塩濱運上銀上納の所故、無高なりけるか、元祿十二年檢地以來、三百八拾(原本八拾の二字抹消せしが如く見ゆ)石六斗七升四合と高極り侍り。鹽濱の委細、別記有之。

一、神社三ヶ所

釵大明神 社貳間四面

舞殿 石鳥井

石橋

神主 (原本何の記入もない)

禰宜 (同前)

社僧 (同前)

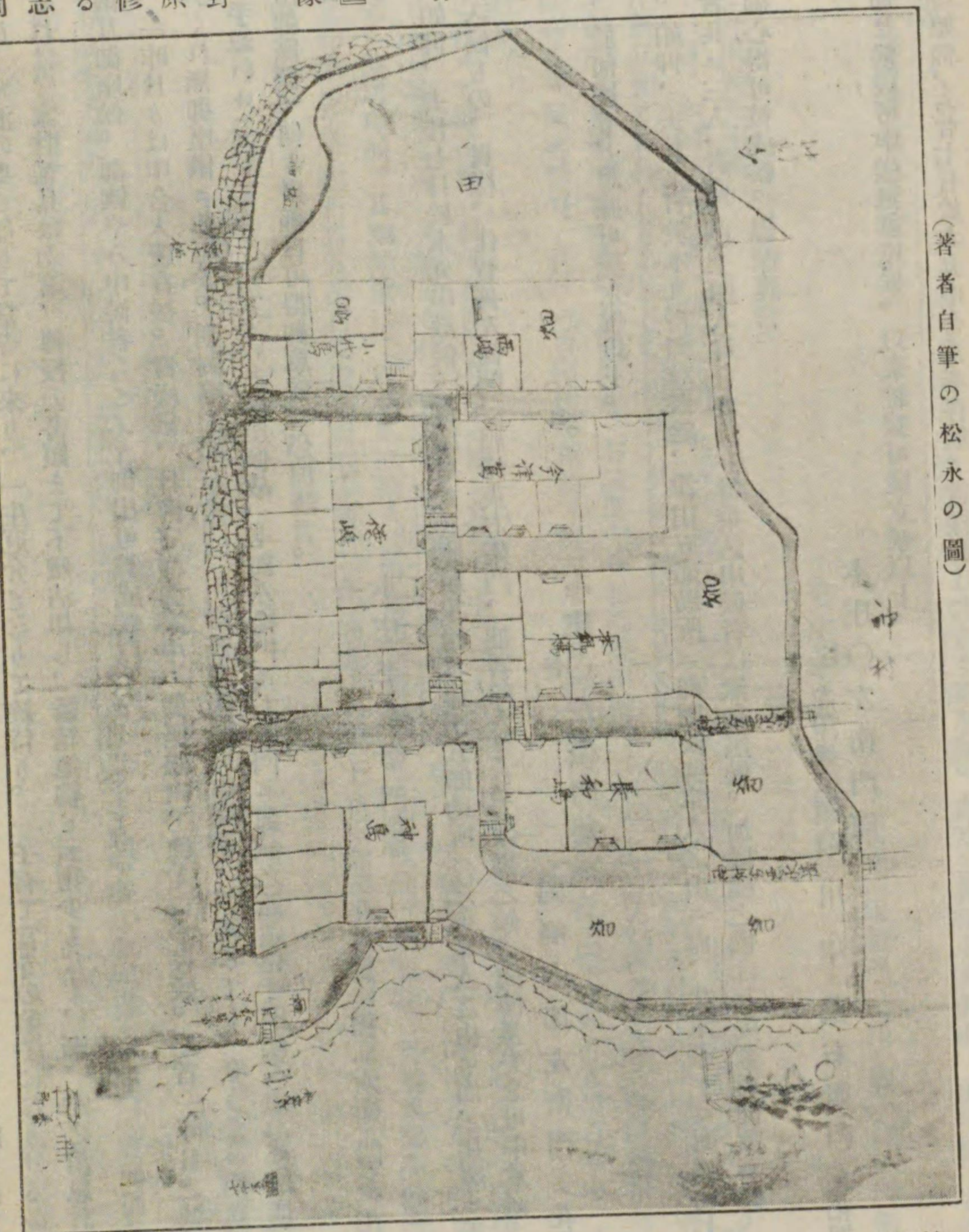
木庄憐情、不動明王を二躰自ら彫刻して、一躰は今津村、釵の眞躰とし、一躰は當社の眞躰とす。當濱成就の初、高札場の上の山に社を立、氏神としけるか、段々町並立續、以前之惡水溝を掘ひろめ入川とし、船出入の自由をなし、惡水の石樋入用なくなりて、其自然石、入川の中に有を幸として、石垣を取、地形を築、宮地とし、寶殿を建立し、山上より勸頂(請か)して、八月廿八日を祭禮の日と定む。

稻荷 胡

壹ヶ所寺(寺壹ヶ所の誤りか) 臨濟宗 吸江山 承天寺 開山 萬國烈大和尚

當寺は福山中ノ町の上、ふくろ町の角、士家の内に有て、いつれの時代開基したるといふこともしらす、何宗ともしれざる敗寺なりし。憐情、當濱を成就而、萬國和尚を開山として此所に移し、松永一ヶ村の内に住するものは何宗によらす當寺の宗門とす。萬國の師、封山和尚は、輛津安國寺より出て、福山永雲寺に住す。萬國、素性もよく、學才秀たる故、甚心に稱ひて永雲寺を定山和尚に譲りて、當寺にて遷化せらる。萬國の(原本一字缺ぐ)生原勸彌左衛門、輛奉行となりて、萬國を安國寺に轉移す。仍之、輛六ヶ寺と公事になりて、終に萬國を追院す。其後當寺も監主持になりて、七十年及び、定たる住持もなかりし。尤、萬國轉移の、ち、福山弘宗寺雪傳、総州公の御代、公廳に訴へて末寺とせらる。

(著者自筆の松永の圖)



本庄氏三人の墓有。加風院殿憐情露見(校訂者曰、露石の誤である)居士 延寶四年二月十五日 本庄全左衛門 一笑軒德雲如乾居士 延寶六年十一月廿七日 憐情弟 本庄十郎兵衛 風歌藪(叢である) 夢隨幻居士 享保十四年四月四日 憐情息 本庄木工 有。 憐情は、もと水野家の士にて、嶋原歸陣之後、武者修行に出、千石給る所あらは事んと志ける所に、備前岡か)給り、憐情は隱居にて勸者と名付被指置。大石内藏助か父頼母は憐情か軍法の弟子也、内藏助本望を達したるは憐情か傳授故

なり。奎は親と違ひ、天性愚鈍にして親の藝術をも學(ば)を脱する(か)す、其上身持放埒にて、若時、七月躍に出て、福山新町にて喧嘩し、知行被召放、窄浪の身となりて當寺に來り、一生厄介となりて終侍り。一子有て當寺の弟子になりけるか若年にて死す。其外子もなかりければ、家財雜具は勿論、傳授の書類まで不殘活却し、憐情遺物と云物少もなく、漸、左之消息計、殘侍る。

尙々草臥申儀互御座候。御旗やみ申候者ちとく御出可被成候以上

御狀奉存候。一昨日は申合大慶存候。貴様儀、日向守様御家中ニ御座候由、御尤に奉存候。然者一昨日之城乗之儀、貴様我ら兩四人之事かくれ無御座儀ニ御座候。則岡嶋七郎左衛門、川岸茂右衛門ニ申聞候。何時にても、せうこニ相立可申由御座候。我等儀、昨日右手おいて、こふかないニ御座候故、七郎左衛門茂右衛門ニ御狀之通遣見せ申候へは、其段は何時にても、せうこニ立可申由御座候。何も掛御目可得御意候。恐惶謹言。

二月廿九日

本庄奎左衛門様

佳賀孫左衛門(花押)

御狀拜見申候。如仰、去廿七日於本丸申談候。貴殿事、兵庫頭家頼、津田五郎助所へ之御窄人之由ニ而、兵庫ニ手へ御つき候。本丸へ一番ニ乗込候もの、貴様、佳賀孫左衛門、川岸茂右衛門、拙者四人ならては無之候。向後無失念可申承候。恐惶謹言。

二月廿九日

本庄○左衛門様

岡嶋七郎左衛門(花押)

尙以右之仕合、於何國も、證據可罷立候以上。

貴札添致拜見候。如仰、去廿七日於本丸得御意候處、津田五郎助所ニ御座候御窄人之由ニ而、兵庫頭手ニ而岡嶋七郎左衛門、佳賀孫左衛門、拙者共ニ三人、貴様、已上四人ならては一番乗込申候者は無御座候。加様儀之儀は互失念有間敷事候。於何國も可得御意候。左様ニ御心得可被成候。恐惶謹言。

二月廿九日

本庄○左衛門様
寺澤兵庫頭内 川岸茂右衛門(花押)

尙々御手前御加せ候段可申様無御座候。以來證據可罷立候以上。

貴札添致拜見候。如仰、去廿七日於本丸申合奉存候。貴様御はたらき奉感候。此方之儀も兵庫頭内ニ而は、岡嶋七郎左衛門、河

岸茂右衛門、拙者三人ならては一番ニ乗込申候者は無御座候。左様之儀、慥、無失念御覺可被成候。於何國も可得御意候間、其御心得可被成候。恐惶謹言。

二月廿九日

本庄奎左衛門様

寺澤兵庫頭内 佳賀孫左衛門

備前岡山にて差出候先祖書

一、私祖父、泉小三藏、本國伊勢之者ニ而御座候。佐々陸奥守所ニ罷在、方々之取合之刻、首尾好御座候由にて、則陸奥守の名字をくれ、本庄與兵衛と申候。知行七千石取申候。其後、越中末森とやらんの合戦之節討死仕申由承申候。私耽とは覺不申候。一、私親本庄半左衛門、本國尾張之者にて御座候。右陸奥守身躰相果申候付、窄人仕、方々奉公仕由ニ御座候得共、然とは存知不申候。其後は病者ニ罷成候故、在所ニ居住仕罷在候。後、水野日向守所へ召出し無役、知行貳百五拾石取申、曹請奉行仕罷在候得共病死仕候。

一、私本國尾張之者にて御座候。親半左衛門存生之節、立身をも仕度存罷出、方々かせき申折節九州有馬村へ罷越、寺澤兵庫頭殿御手に付、廿七日城乗之節、先懸をも仕、則兵庫頭殿御内、岡嶋七郎左衛門、佳賀孫左衛門、川岸茂右衛門と申もの兩三人之證據共、慥ニ持居申候。其刻早放にて百姓貳三拾人打申通慥ニ證據人とも御座候。其以後、丹羽式部少輔所より呼候付罷越當分窄人分之約束にて、知行百五拾石無役ニ而取申罷有(在)候處、寛永十六年御家へ被爲召出、貳拾人扶持、御切米三百石被下、御奉公申上候以上。

寛永廿一年霜月十二日

年三十八 本庄奎左衛門重尙

(校訂者曰、重尙は子である、重政であらう)

本庄奎左衛門儀御暇被遺候。右よりの申分、奉公之望ニ無之、くふうの道ひろめ申度との申様ニ候間、定而御奉公は仕間敷と被思召候由候。此旨可被仰渡候以上。

十月五日

池 伊賀守
池 佐渡守

若 監物 様

未得御意候へとも一筆令啓上候。然者貴様御工夫之諸道具以下之儀、内匠頭稽古被仕度旨、安藤與三郎を以被申入候處に、早速御同心、別而満足被申候。私方が能々御禮申入候様ニと被申候故、如此御座候。猶期後音之時候。恐惶謹言。

二月十五日

大石 頼母 助 良守 (花押)

本庄 左衛門 様

安藤與三郎罷歸候付、去廿一日御細筆之貴札拜見、忝存候。先以貴様御事御無事之由珍重存候。當地別條無御座、内匠頭無異罷在候。然者内匠頭方へ珍敷三尺繩壹筋被遣候、別而重寶之儀忝之由被申事に候。則以書狀御禮被申入候。隨而内匠頭方へ、内々頼入被申候軍用道具一色ツも小形謎被成可被下旨具申聞候得、別而大慶之由、拙者共方方へ、委細御禮申入候得と被申候。就夫かため案文被下候、得其意、則御案紙之通、拙者共兩人誓紙相した、め此度進之候。並左様之道具預り申候奉行之誓紙之儀被仰下候得共、右之道具、拙者とも兩人之内ニ預り置申候間、左様御心得可被下候。軍書之儀、永々敷儀にて候故、いまた出來不仕候旨、得其意候。普請記謎を此度被下度、被思召候得共、新太郎様を堅被仰付置候故、追而可被下旨、一々御狀之通承届候。次、安藤與三郎儀、其許に御留置被成度候得共、一圓御手透無之故、先々御返し被成旨、御尤存候。惣陣小屋、惣川越、玉藥箱、船軍、船拵之内、有増一色ツ之理分、與三郎に口上にて被仰聞旨、忝次第存候。新太郎様茂近日御歸城被爲成御座候得は、追付御手前御用埒明可申候條、當秋中ニハ與風此地へ可預御尋い旨、得其意、忝存候。猶期後音之時候。恐惶謹言。

五月廿四日

大石 頼母 助 良守 (花押)
大石 源五 左衛門 (花押)

本庄 左衛門 様

態一筆令啓上候。先以改年之御慶珍重申納候。然者去年者當地へ御見廻、被入御念候段、具ニ内匠頭方へ申遣候。誠遠路御尋別而満足被致候。私方が相心得御禮申入候様ニと被申越候。當年者江戸表へ御下りも候は、被掛御目度被存候。自然同様ニ茂思召候は、御に可被仰聞候。去年は始而得御意、大慶仕候。併早々之仕合于今御殘多存候。其以後以書狀得御意候儀も無之、背本意候。猶期後音之時候。恐惶謹言。

正月十日

大石 源五 左衛門

本庄 左衛門 様

御飛札致拜見候。如仰采女正家督已後、初而被致入部悅申事御座候。其表彌御無事御座候旨珍重存候。隨而串柿二抱、被掛御意、毎々御懇志之段別而忝致賞味候。拙者儀も無事相務申候。被入御念御紙面之趣令承知、忝存候。猶期後音之時候。恐惶謹言。

正月八日

本庄 左衛門 様

尙々思召寄過當不淺候、久々不申承御床布存候。

御飛札、殊、串柿一箱三抱被送下、誠遠方被入御心、別而過分存候。先以彌御無事之由珍重存候。其後者何方ニ御住居候茂不存候故、是以書狀も不申通、御無沙汰、背本意存候。此方別條無之、拙者儀無異有之候。如來意某娘淺野内匠殿養女ニ被成、家來大石内藏助世倅方へ御申付被下候。程近之儀ニ候得者、當地に有之同前ニ存、一入大慶之段、可有御察候。猶期後音之時可申遣候。恐惶謹言。

三月十八日

本庄 左衛門 様

池田 出羽 守 爲成 (花押)

爲御見舞、飛脚、殊、鮎之鮎一桶、饋給候。寔切々遠路之所、御心入之段別而過分之至候。則令賞味候。如來意我等儀。參勤可申旨、頃、奉書到來ニ付、來月四日五日時分、當地出船申事に候。猶從江戸可申遣候。恐々謹言。

五月廿八日

本庄 左衛門 殿

淺内 匠頭 長直 (花押)

内匠頭方へ御飛脚被遣い付而預貴札拜見忝存候。隨而内匠頭所へ鮎之鮎一桶被遣候、別而致満足、則以書狀御禮被申入候。如仰、來月四五日之比、當地出船被申事候。然故此元取紛候儀後察可被下候。將亦其許御無事之由珍重存候。猶期後音之時候。恐惶謹言。

正月廿八日

本庄 左衛門 様

大石 頼母 助

眞如坊 山南光照寺の支配にて、末寺末庵といふにも非ず、光照寺の他屋と當村差出帳に有之、畢竟町家の出店と同し。住僧飛椽になりても當村開基よりの定法なれば、承天寺の宗判を請るなり。小川玄長か墓有。

視肝院小川玄長法眼

小川先生、諱頼秋、次字玄長、号一齋翁、備後人也、其爲人也、明哲通玄、温恭敦行、仁篤慈惠、器量弘大、乃以醫療爲業、是蓋有得于范文正公之言乎、醫業既成、官至法眼、而上以療公侯之疾、下以救貧賤之厄、起癘愈痼、不可勝數、時人以爲扁鵲公無以加之、而乞命者門前爲市、人不得顧、車不得旋、良古今之盛事也、享年七十有三、寬延二年四月癸未、遭疾而終、即葬於松永濱焉、凡我四方同好之人、哀悼哭泣、置身無地、乃相與以爲、先生既沒、德音猶存者、千歲之不朽也、於是樹碑表墓、俾芳烈顯於無窮、乃作銘曰。

於是先生 寔有懿德 仁經義緯 慈惠正直 醫業既成 高名西國 營室重仞 榮華無極 抱寶懷珍 慈黃泉匿 哲人其萎 來者何則

門人 有木元善頓首再拜敬撰

玄長は昔田郡府中市の産にて、小川三郎右衛門弟にて、某(本書著者の自稱)妻の伯父なり。當村に小川玄庵法橋といふもの、元來由緒有て玄長を養子として醫業を繼せたるなり。松林庵 元祿の初の比、當村升屋傳助といふもの、姉、後生一遍に傾て此庵を結び、念佛しけるか、次第に繁榮し侍り。山南悟眞寺の支配なり。

本 郷 村

古城壹ヶ所 城主 古志清左衛門 寺四ヶ所

法華宗 鷲峯山 妙皇寺 開山 日理上人

當寺蓮師の像は(原本四字缺)作にて、甚奇特の靈像なり。

鐘樓門有。鐘之銘

鐘再興之意趣者、享保二年比、先住日惠代、成就仕所、及破損、衆人思難堪之、然所信力之男女、題目致修行、欲成就之、甚幸

之、企万人講、以此助力鑄、直備宗祖日蓮大士四百五十遠忌謝德一分、兼又爲自他平等利益、思成就之時、二尺一寸之鐘、二尺三寸鑄、直已成就者也。

享保十六年辛亥三月廿八日

- 京都妙蓮寺末流 備後國沼隈(限)郡本郷村 鷲峯山妙皇寺十九世安立院日貞代
- 治工 同國深津郡手城村 渡邊幸右衛門信
- 本願主 福山實相寺 一乘院日傳上人
- 當寺十八世 信行院日惠上人
- 當村庄屋 神村 石井宇兵衛邑次
- 組頭 佐藤八右衛門 同 石井小左衛門

法華宗 眞淨山 大法寺 開山 本法院日便上人

當寺は往古よりの貧地にて、已に斷絶に及ぶ處、寛文二年(一本十二年)八月、本照院日通修理を加へ再興せらる。仍而日通を中興開山とす。

禪宗 南溟山 昌源寺 開山 通天梵達和尚

當邑の城主、古志氏の廟所にて、古志清左衛門位牌有。捐館 瓊樹院殿玉安元玖大居士 文祿元年八月廿五日 居士は小早川隆景の旗下なりけるか、讒者ありて三原の城へ召寄、毒害せらる。子族をも殺害すへきこの事にて、清左工門急症にて相果、則葬送しける間、はやく墓參すへしと被申越、子族家臣集て評議しけるは、是實事にて有へからず、實の急症ならは看病に早速可參と可有に、葬送も濟たり墓參せよとの事、穩便の儀に有へからず。家臣井上大炊を初、各三原へ罷越實否を見と、け潔打死可致と一決す。嫡子某十五歳なりけるが、各志尤なれとも、然るへからず。此城中の士卒三原の城内へ切こみたればとて、はな／＼しき働もなく大勢に取籠られ、各志尤なれとも、然るへからず。左あらは家督相續の貴命有なん。又殺害せらるゝこともし。所詮、某、權平計召連墓參すへし、時宜に仍て讒者の行跡相知へし。左あらは家督相續の貴命有なん。又殺害せらるゝことも某壹人の事なり、某害せらるゝと聞へなは、各志尤を堅固にして舍弟を守立、家名斷絶せざる様にすへしといひて、僕權平はかり召連、三原に至る。三原城内にては、此度之儀、古志か家臣等推量せすと云事あるまし。然らば本郷に楯籠るか又は井上を始、家

來共嫡子を俱して來るへし、一人も残さず可討取と相待處、一僕計にて來りければ、侍壹人案内に被附、墓所に至り焼香しける後より、彼侍、刀をするりと抜ける所を、權平すかさず足を取て引伏ければ、主人拔打に首打落し墓へ手向、敵の骸に跨、某か孝養是迄なり、此上之事いかにおもふとも叶まし、是にて心能切腹すへし、介錯せよ。扱又汝常々の操にては迷塗(途)の供せんとおもふ覽、必無用なり。本郷へ歸り、城を開退き母きみ舍弟を介保し、何方にも立しのひ、時節を待て父上の過なき旨を申ひらき、ふたゝひ家を可興。隆景一日讒譎を信したまふとも、父上の別心なき忠節をは、よも捨玉はし、右之趣大炊介其外の者共に能々申傳ふへし。扱又汝は隨分命ながらへ、父上、某か菩提を懇に吊得させよと、心靜に遺言して切腹す。權平本郷へ歸り、遺言之通、具に申達し、剃髮して主人の菩提を吊ける。扱又舍弟何某、程なく歸參にて、其子孫于今、毛利家に事へ旅行の節は神村の街道にて下馬し、當城を禮し通行せらるゝとかや。權平法師、道心堅固ニ行濟、當寺に住し、河原にて高サ貳尺餘、横壹尺餘の圓く平めなる石を取來り石塔とし、玉安元玖、文祿元年八月廿五日と彫付、當寺の門外、法界地藏の左の方に有之。夫より以後、當寺衰微に及ひけれ共、古志代々の位牌残有ける所に、勝成公の御代より漸、寺の形にはなりけれとも、極りたる住持もなく、看坊にて暮行けるか、近きころ氣の韃なる僧看坊しけるか、施主もなき位牌を立置ても詮なき事なりとて、ことごとく打割て薪とし、本尊の釋迦、大權達もすゝけたりとて、川へ持行あらいけるほとに、彩色はけ、御首御手など落、佛の形とも知れざる所に、延享、寶曆の比の住持天柱和尚、件の古佛を再興し、法器佛具等を調集、採薪汲水はいふに不及、自ら牛を飼、馬を牧し耕耘て往昔の万分の一に復せられ侍り。當村の庄屋儀兵衛といふもの代々コシ、殿屋敷に住し當邑の者也、古志殿ヲ、アヤマリテ、コシン殿ト云フ件の石塔の事を語り傳へ、新に位牌を寄進し侍る。陰德太平記に、尼子方に古志因幡守重清といふ有、毛利方に古志清左工門といふ有、定而一族なるへし。高須村太田の城主は古志三郎左工門といひしと。三士の家系不相知。むかし當寺に過去帳記録なども有たるならんに、代々の位牌さへ烏有となりぬる事、可歎可惜。

浄土真宗

湯女山

東藏坊

寺下貳ヶ寺

見中寺 光讚寺

古志清左工門駒繫の松有。

鐘銘

當山者曩日智品之開基也、自其以降、及於鸞師法流、扇於眞宗雄風矣、殿於有精舍、而未有鳧鐘、非欠哉、粵偏勸巨越、新鑄一器、法具正備、殷々錚々鳴是遠姚其體最堅、其用最博、宸巨益於十界、摹神響於一會、使幽巖開驚臨情肅於謂無虛感靈覺鏗鉉之德矣哉、爲銘曰。

蘭若早建

花鯨新成

永震梵響

普潤蒼生

驚識浪動

覺妄雲晴

佛天擁護

國邑繁榮

七世

順和 誌

本郷村

石井庄右衛門重直

大工

備陽沼隅(隈)郡本郷村

湯女山東藏坊

今津村

平柳(櫛か)小左衛門清光

同村

太田伊兵衛信久

藤原朝臣高艸惣左衛門尉盛久 作

元祿二己巳拜仲春下浣

一、清水山清光寺の廢跡觀音堂有、昌源寺之支配なり。

備陽六郡志「外篇」

(校訂者曰ふ、上記中「外篇」は原本に無いのであるが著者手記の表紙題目に依り之を加へる)

沼隈郡之四

神	赤	早	山
村	坂	戸	北
一丁	村	村	村
	十四	十八	十九

神村

神村、柳津、松永三ヶ村之生土
 八幡宮 本社三間貳尺 拜殿五間
 石燈籠 享保十年立
 石鳥居 御供殿三間半 御輿藏九尺

神主 石井房右衛門
 禰宜 神野大和守
 同 家護屋筑前守
 社僧 藥師寺

二宮 若宮 龍王 阿彌陀堂

備後州、沼隈(隈)郡、神村、八幡宮前、梵鐘銘
 村氏鑄梵鐘 掛著八幡宮 魚龍善萌發 人天罪報融 神威永世耀 佛光法界隆 穀熟一旬雨 花開五日風 知婆婆救體
 正在音聞中

于時享保十五庚戌載七月吉日

悉曇 備後州尾道摩尼山西國寺 三十世主 普照 誌

同國沼隈(隈)郡今津村藥師寺 法印 觀實
 本願主 小林佐兵衛
 神主 石井茂一郎重次
 庄屋 同姓宇兵衛邑次
 檀主 石井一家十人
 當 村
 今津村 彌助 與
 同 爲安 與

寺岡能登守但方

内海銀二百五十目

庚戌春寄進

外篇 沼隈郡之四

柳津村 松永村

鹽濱惣氏子中

同國御調郡宇津戸村 金次丹下三郎兵衛

今伊勢神明宮

内宮 三間貳尺

拜殿 貳間貳尺

古城壹ヶ所 野氣沼掃部頭

當城に石見寺居すと、此事不審いふかし。輒に石井といふ所有、石見守居住の所なりと。

觀音堂 貳間

鐘

備後州、沼隈(隈)郡、鏡山、今伊勢宮、鐘銘并序

夫鐘者能清心正物、而銷罪生福之器也、雄大光亮、以警晨昏、以時聚散、撞之則破煩惱之眠、聞之者脫業障之縛、若吃王振、

苦於釵輪之下、李主取樂於縲械之中、其德深抄難可思議焉、是故四王造之於祇垣、迦葉搥之於蘇迷、雲門六時之響、寒山半夜之聲、

支竺之載記不可勝而言也、豈非以其聲清而其功妙乎哉、備後州、鏡山、今伊勢宮之神主、與諸檀信勳力、新鑄洪鐘、蓋

爲神明威光倍增也、且參詣之貴賤者、爲銷罪生福同證菩提之証也、器成新銘于予、因爲之詞曰。

備陽之郡 名曰沼隈(隈) 神明選是 兩社並靈 脩竹沈森 中有一堂 控流帶林

幽寂無比 老梅古松 艸秀苗穗 天龍呵護 吉祥茲萃 善哉神主 檀信同志

乘緣勵志 創此法器 萬鈞于成 九乳以備 梵釋嚴容 蛟龍怒視 制度之妙

詢盡巧緻 發鯨一鏗 喞々四暨 花外春深 霜前秋季 三界九居 愕魂破睡

四海八埏 同澤共利

本願主神主 寺岡能登守末次 同六右衛門末久 同德兵衛光次 同善兵衛福次 同久右衛門末重

元祿十三年庚辰三月下浣

今津村藥師寺 阿闍梨觀實 謹書

今伊勢神明注緣起

應永三十三丙午年二月三日

神明致參詣懇志大夫末次

抑參籠意趣者、一七夜滿曉于夢想、汝依有深厚、在其告、汝下向之時、鳥居右趾方長五寸計青目成有石、其懷給而本國歸、是

崇神明、仍之泉州境水庄下、致晝夜信力、雖而依薄其信仰哉、此在所不相應哉、其奇特少、同應永三十五戊申年正月二日、有

夢想、自是西國、予可爲供奉、依之攝津國、播磨、備前、備中過迄無其注、備後國沼隈(隈)郡神村庄、末吉之鏡山、云有在所、致

彼所一夜逗留、次日下覽思慮、于更一足不得下、扨者此在所、神明之御意叶歟、思彼在所夢想、石安置申、去程貴賤上下人震爲

群集、是偏彼在所神明相應地哉、彼鏡山、東西南北、野氣沼掃部守被寄進也、彼神明新成事無極也、彌崇事無限也、應永三十五戊

申年二月三日外宮作、正長二巳酉年四月日內宮經宮作、如斯。

重云 彼見鏡山景、後嶺山岷々、而松風琴聲、前海水滿々、而無斷船筏、云景與名云、誠神明相應地也、故神明者、豊原垂跡國土守

御神、誓契本地、云大慈大悲之十一面、又者金剛胎藏兩部也、本地垂跡共慈悲深重御方便極也、誰人間而不崇此神哉、佐者對德所

信力成也、偏運歩可致歸依渴仰。

願主 平朝臣大夫末次

奉再興條上尊天照太神御社一宮

文安二年乙丑二月十六日時正丙巳

在所神村庄末吉鏡山龍庭方

願主 杉原平朝臣政光

奉御遷今伊勢天照太神宮

于時文安二年乙丑八月六日戌剋

當社願主 平末次 嫡子 平政行 二男 平光次

當神主信秀、社頭再建之旨、爲末代注緣起。

外 篇 沼隈郡之四

二三九

文明九年丙申八月十三日巳剋、不慮町飛火掛神前、社頭須臾燒失、然間信秀之驚歎如山岳、貴賤之悲愁似雲霞矣、仍神主抽無二之丹志、不惜己身珍財、不日經營、而雖務御社再興、烏兔馳走而過三ヶ年、展遷宮之祭筵而已、是偏爲天下安穩萬民快樂焉。

奉再造、鏡山、今神明御社一字。

文明十一年戊戌十一月日御遷宮十六日卯剋 導師、尾道西國寺久坊、權大僧都法印賴成。御法施埋趣三味一座。湯立御神樂一夜、并猿樂一日、彌石大夫。

神主、藤原佐佐木中村六郎左衛門尉信秀 續神主信秀嫡子光秀

奉替替、鏡山今神明御社一棟。

明應七曆戊午霜月日御遷宮、同十六日午剋。

導師、尾道西國寺久坊、後住權少僧都榮秀。御法施埋趣三味一座。湯立御神樂一夜、并猿樂一日、山南桑田衆手能仕。

神主藤原佐佐木中村石見守信秀 續神立(主か) 光秀

奉上替替、今神明御社一字。

永正十五戊寅歲十一月十六日未剋遷宮。導師、尾道西國寺久坊賴成法印并法善院權少僧都有心。法施埋趣三味一座。湯立并御神樂。

神主、藤原佐々木石見守光秀 續神主、秀

右一軸、因神主寺岡能登守但方之懇、染禿毫、文中錯置儘多烏焉之差、不暇縷舉、因舊貫一字不施改竄、聊史閑文意也。

享保十年乙巳冬十月 近衛關白信尹公御免筆

和久半左衛門孫弟 大野李謹書

内宮の社の上に杉七本有、太閤秀吉公、九州下御向の時、此所にて餅菓子を取給ひて、みすき世すきと被仰、指置たまひけるか、根付て大本となりけるなり。

石花表 延寶八庚申八月

神明宮休殿 社壹尺五寸 社四面

石橋 今伊勢神主 寺岡能登守 同 同久左衛門 禰宜 神野大和守 同 家護屋筑前守

今伊勢宮最初御鎮座の所なり、文明九年炎上以後今の社地へ移し奉る。今の社地は觀音の山なりとぞ。

神主 寺岡六左衛門綱次 石工 福山橋本嘉兵衛

禰宜 神野大和守 同 家護屋筑前守

神主 寺岡久左衛門

禰宜 神野大和守

神主 石井久七

禰宜 家護屋筑前守

神主 石井宇一郎

禰宜 石井兩入

天神 社壹間五尺 社四面

嚴嶋大明神 社壹間半 社貳間

若宮七社 山神三社 大神六社 大明神 大明神

堅石大明神 大將軍 大歲神三社 猿神 大乘權現 榮之神 祇園 聖之宮 心吉之宮三社 祝神貳社

無袖神 弁天貳社 亥神 貴布禰大明神 牛神 黃幡五社 金神貳社 荒神拾八社

觀音堂三ヶ所 地藏堂貳ヶ所 大日堂 大師堂 阿彌陀堂 毘沙門堂 四つ堂五ヶ所

池八拾四ヶ所 明見池 才峠與右衛門池 才峠池 勿尾池 万福寺池 いやか坂池 摺鉢池 小福池 池か坂

孫右衛門池 池か坂下池 池か坂半兵衛池 相撲坂孫左衛門池 八良右衛門池 彌兵衛池 生田池 前のき池

前のき半兵衛池 梅木谷池 若宮原池 大谷池 大谷跡池 濱池と云 大谷青木池 大谷和田池 瓶割池 清水六

大坪七右衛門池 廣坪池 木棧子池 鷲尾池 笹か丸猫尾池 吉郎兵衛池 三六池 山神谷下池 山神谷中池 東谷鮒

郎兵衛池 水か坂池 串谷上池 樓閣池 玉池 玉池下池 東谷新池 東谷古兵衛池 東谷大池 東谷鮒

山神谷上池 惣田平與吉池 惣田平吉兵衛池 東谷新池 安兵衛池 大向安右工門池 柳迫吉郎兵衛池

池 同鮒池上池 堂道中池 堂道久兵衛池 山中大池 され池吉郎兵衛池 され池上池 柳津村之内 入江奥番田新池 惣池内番

堂道彌兵衛池 惣池 番田奥池 番田新池 坂田池 草苺小池 草苺大池 菜神石井新池 千年半四郎池 深峠久

田新池 深峠池 蓮池久七池 南谷久七池 いの木堂池 與三兵衛池 峠新池 寺坂喜兵衛池 まかりめ新池

七池 奥田六助池 久七南か谷池 山中小谷池

寺壹ヶ所 淨土眞宗 松慶山(原本慶の右側に徑) 來福寺

赤坂村

外篇 沼隈郡之四

九州街道東南の方、万治、寛文の比迄大池にて有けるか、とかく土手かたまりかたく、水たもたさりければ、終には潰れて田畠となり侍り。當時山北村ノ池下、加屋村ノ水越ハ上手樋の跡なり。水越の山、往還に向ひたる方に、古き石塔有。將軍義昭公の石塔也。此事不審。深津村の後得録に記ことくなれば、尊骸をこの所に葬奉りたるにては有へからず。恩顧の士有て石塔を立置たるにや。或人曰、北條時盛の石塔なりと、いかなる據有にや、博覽の士に問へし。

街道の山際、田の中に光明眞言を彫付たる大石あり。福山濱の町、木屋孫右衛門と云者施主にて供養しけることなり。池貳拾三ヶ所

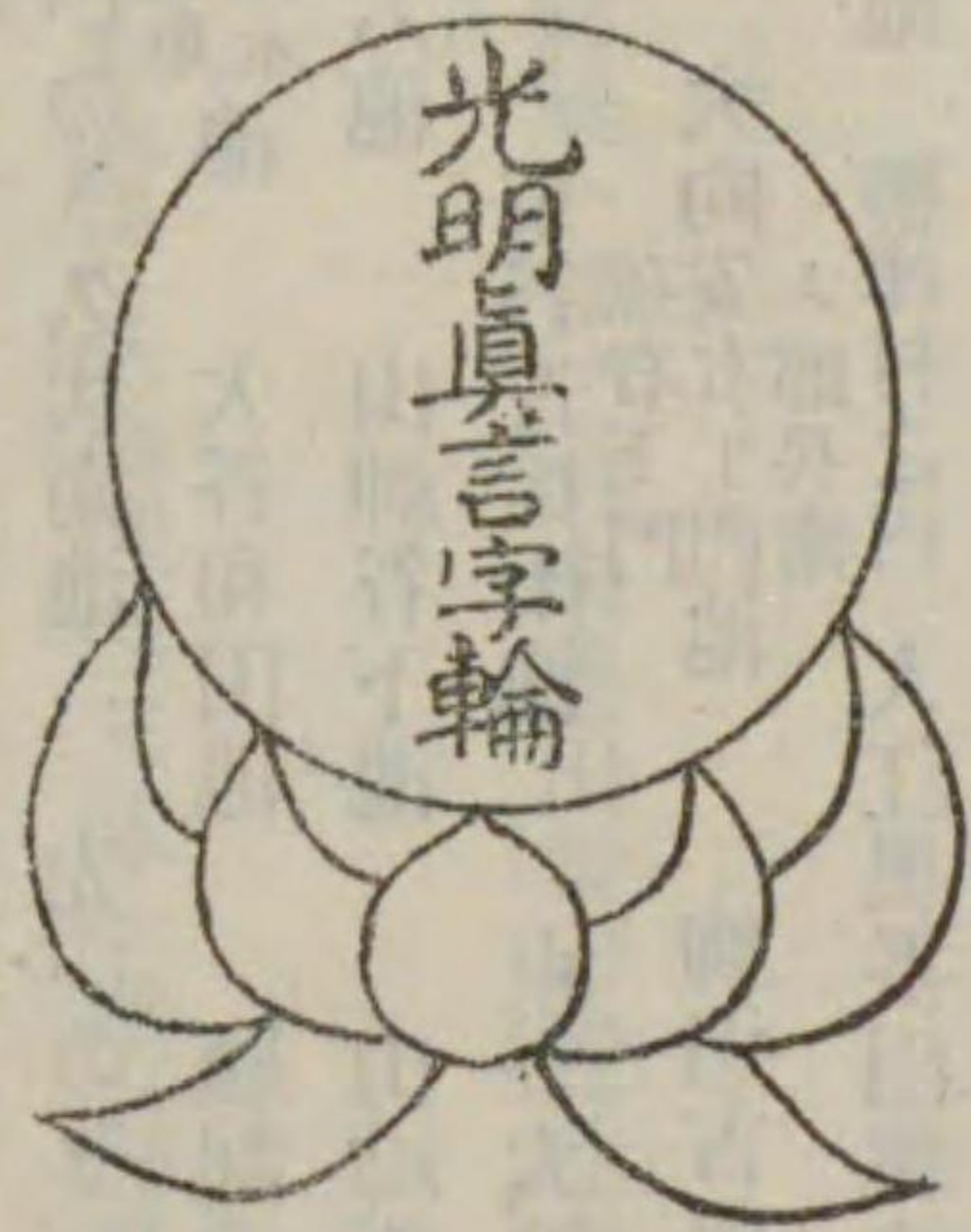
長者か原大池

承平、天慶の比、新庄太郎といへる長者、此所に住し、其むすめ后妃に備りたる事、輦津福禪寺の縁起に委し。長者の屋敷跡、大池より三丁程山奥に有。新庄太郎を祀りて長者か原大明神といへる社有けるか、此所の山公事有て、福田村分になりて後、件の社も断絶し侍り。長者のすくも塚と云山有。此邊野山芝原にて通路もなき處なりけるか、天和二年此池成就のち、下見儀左衛門と云者、浦崎村より來りて開發し、今にては人家數多有。新庄太郎か事、輦の後得録に委し。

長者か原小池 五ヶ所 苦木わら池 壹ヶ所 かや平池 四ヶ所
小原池 三ヶ所 金掘谷池 五ヶ所 あふみ谷池 貳ヶ所 出郷池 貳ヶ所

一、寺壹ヶ所 淨土眞宗 鈴明山 淨泉坊
一、堂拾壹ヶ所

藥師堂壹ヶ所 石のもこ 四つ堂四ヶ所 あふみ谷三ヶ所 観音堂三ヶ所 専藏坊 西福寺 釋迦堂一ヶ所 せうふ谷



開眼東洛泉湧寺末葉龍孤比丘勤行之
三界万靈有無兩緣法界平等利益敬白
于時貞享乙丑天三月吉辰日福山常法義龍阿闍梨建之

地藏堂二ヶ所 小原

一、神社三拾四ヶ所

中郷 八幡宮 本社三間梁

前殿貳間 御供所 石鳥居

若宮壹社 八幡の社地有。

神主 半兵衛 吉兵衛

禰宜 家護屋對馬守

下郷 古宮大明神 本社九尺

石花表 四面

鈴谷 阿毘大明神 同 九尺

石花表 四面

丸山、鈴谷など長者か原への

道筋なり。福嶋正則の郷士、猪

の川源次といふもの、此邊を

新發し田地にしけることなり。

近江谷 行田大明神 同 九尺

小社貳拾九社 四尺

天神 明見 大將軍

山神三社 鍛冶神貳社

四之御前 七社大明神 疫神 十二神 黄幡貳社 大歳貳社 地神 賽神

犬神三社 荒神八社



(圖の近附其等石掛腰者長、池原者長の筆自者著)

外篇 沼隈郡之四

早戸村

福嶋引渡帳には隼人むらと有。

良大明神 舞殿 神輿藏 石鳥井 享保九年に立

一、淨土眞宗 東溟山 西明寺

山北村

昔は左福村と書けるか、いつの比よりか、山北と改侍り。

一、淨土宗 極樂寺 開山(原本何の記入もない)

鐘銘并序

夫鐘推聲鐘也者、奉請於三寶會集於大眾、光闡道教演暢妙法之遠職也、所謂如來之信鼓者也、備後州、沼隈郡、山北邑、極樂寺者、開祖文宗上人之所創、而城外之一精舍也、而無鐘、非閔乎、住持誠譽、勵志募之四方、茲有歲焉、古曰凡事(原本一字缺)有不爲爲之不能不措也、實乎哉、是歲之春、乃集其喜捨財、計之工、遂以鐘成矣、於是乎諸銘于余、曰何憂無銘乎、然湯盤周鼎之銘也、傳之于万世、日明其德、今也法王之精勤、檀度之喜捨、以成大事、則不可不銘而傳也、矧戒勗乎晨昏覺寤乎長夜之眠、則厥功德灼之于永世、其亦何有乎、銘曰。

於戲大器 不憂晚成 檀度喜捨 咆吼鏗々 鯨鐘造興 咆吼鏗々 日夕聿戒 長夢惟驚 羅漢擊發 闍王苦輕 道場集衆

斯法用鳴 山南山北 克覺迷情 人天益利 兼幽冥宏

明和二年乙酉之夏四月

備後國沼隈(隈)郡山北村極樂寺 證蓮社誠譽肅白

福山府定福寺德雲眠龍代之識

生土愛宕山大權現 本社三間

荒神 村神

一、淨土新(眞)宗 光滿寺

獄門場 愛宕の脇より早戸へ越所に芝原あり、是を獄門場といふ。福嶋以前より當村に足立庄兵衛とて、福優なるもの有。其弟九郎兵衛、力量人に勝れ、角力を好、醉狂し、親兄を手こめにし、自他の百姓共を打擲し、人を殺害する事、度々に及ければ、止事

を不得して訴たり。勝成公被聞召、左様の溢もの捨置へからず、其村において獄門に掛へし、去なから心をあらたむれば却而柔和になるものなり、左あらは助置て角力に可召遣、能々申聞ヨ、納得せざるにおひては刑罰に行へしと被仰付。捕手の者多ク被遣けれども、輒、捕事不能。漸に召捕、御意之趣申渡しけれハ□て九郎兵衛ほこのものなれども、命か惜さに今にては猫の様になりたりと噂せられん事、何ほどか口惜かるへし。前々より我かまをせよ、角力取に召遣んこの事ならば難有と御請可申上、今より心を改よ、命を助け、めし遣んこの事、片腹いたき事也。所詮はやく刎首られよといひければ、是非なく此所へ梟首せられしとなり。

備陽六郡志「外篇」

(校訂者曰ふ、上記中「外篇」は原本に無いのであるが、前後を推定して之れを加へる)

分郡之一

川口	多治	野上	中津	上岩	下岩	水呑	箕	田尻	田	横	百	原	平	走
村	米	村	原	成	成	村	島	村	島	島	島	村	村	島
一丁ナ	同ウ	二	三	五	六	十七	十七	卅一	卅五	卅七	卅八	卅九ヲ	同ウ	卅七ウ

備陽六郡志

宮原直御

分郡

川口村

貞享年中、水野家の臣、上田立番所^{ヤツ}築の新涯地故、十万石の高の外にて、玄番家來篠川新七と云者を代官に差置ける。仍之元祿檢地之節、多治米、川口共に檢地御除被下度由願ければとも不相叶、御高の内に成侍る。

多治米、川口は年頭、八朔の御禮銀、水野の御代より享和九年迄差上不申候處、同十年御願申上、両村共に差上侍る。

宮壹ヶ所 生土田中八幡 松平忠雅公の御家來、山伏、地福院屋敷に春日大明神を勸請し有けるか、寶永八年、桑名へ御所替之節地福院より春日の寶殿、前殿、花表共に申請、當社を造立しけるこそ。

荒神壹社 八幡の社地に有

多治米村

寺壹ヶ所 眞言宗 西光山 常福寺 草戸明王院末寺なり。

野上村

寺壹ヶ所 淨土眞宗 寶立山(原本右側に明光山と朱書してある) 福生院 正福寺

阿彌陀堂 以前は四つ堂にて有ける所、寶永の初に雲雅といへるもの本堂、地藏堂を建立し、明王院の末庵となれり。

庚申堂 正徳元年卯八月、江戸白金町小櫻屋傳六といふもの、回國して安兵衛と云者之所に一宿し、山王の繪像をあたへけるを庚申と誤りけるにや。安兵衛死後に弟彌四郎、養母ともに信迎(仰か)しけるか、所々より願を頼みけるほどに、正襲公の御聽に達し御參詣有、御筆の繪馬を被掛、戸帳等を被下、延享三年寅冬、正襲公大坂御城代之節、庚申の像を被爲書、同卯正月、新に一字を御建立有、天王寺免許狀を被爲取、彌四郎に被下。庚申堂の額、高見澤左助手跡なり。

荒神壹社 山田渡の土手に有。

松か端地藏堂 正徳の比、櫻井傳内と云者建之。
 松か端の津留を、船入口の津留といふ。宗休公の御代より延寶、天和の比まで、組屋敷の後の所、御船を被入置たる座床なりし故、今以船入口の津留といふ。此所の邊、獵師村なり。當城成就の砌、下魚の店、三島屋安右衛門といふもの、豫州三島より獵師共を呼よせ此所に居住仕せ度願ければ、則願之通被仰付、萬事安右衛門支配可仕との御事にて、今以宗門安右衛門方に付侍り。夫故此所を三島小屋共、三島屋小屋ともいふ。
 五本松 松か端土手の松共大目付持にて郡方の支配にあらず。五本松、水呑の渡り口に有、いかなる松にや知たるものなし。

中 津 原 村

神社五ヶ所
 生土八幡壹社 羽賀に有。本社壹間半 前殿九尺
 同 同 壹社 小山共云 後平に有。本社壹間半 前殿五間半
 荒神三社 後平 羽賀 畑
 外ニ龍王壹社 小山八幡の社地に有。
 辻堂三ヶ所 小山 地藏 羽賀、象ヶ鼻 同 かしまや、三光寺共同
 外 藥師 羽賀の山に有。
 寺壹ヶ所 淨土眞宗 三光山 正善寺 山南光照寺の末寺なり。鐘有。(校訂者曰ふ、左記のもの鐘銘であらう)
 三光山、号 正善寺名 西北峯 巒級 瑯 東南屋列 村落從横 廻籠 流水
 塵垢宜清 近樓雅興 心月還明 借治工手 鑄出華鯨 令檀起力 福利群萌
 法音鎮起 煩惱眠驚 上契佛理 下應衆情 從是啓運 嘉會繁榮
 現住 三光山中津院正善寺教雲 洛下靈光寺不二謹誌

横尾鶴か橋 半分は中津原村、半分は千田村の支配なり。西の橋つめに傍示杭あり。石州道、上方道、九州道の頭なれば三ツ頭と云茶屋有。又、羽賀崎に貳拾軒計茶屋有、正徳の比始る。當村地合宜敷、豊饒の所なりしか、大川筋理りて年々川欠、砂入等の水損有故、不如意の所とはなりぬ。羽賀崎の茶屋の後通を乗越堤と云て砂土手有、水出の節は切放さ、れば民家を押流故、態と切放。
 横尾大土手の下を平右衛門淵と云、魚多有故、運上を出し川札を取て漁をするなり。元祿、寶永の比にや、平右衛門と云者此淵に身を投しより淵の名とせり。
 鏡か池 横尾町家の後に有。鏡を投渡すに向に至らずして池の中へ落とすかや。
 牧山 東西六丁 草山八丁面ほど。
 三光寺 大日堂 喜十郎と云もの、屋敷に有。此所に、むかしより大日松と云ひ周圍壹丈餘の松有。喜十郎此所に屋敷をもとめ、地を引ならしければ、土中より石佛の大日二体を掘出し、則、堂を建て安置す。三光寺の渡りに近き所なり。往古此所に三光寺と云寺有けるにや、此邊のホノケを三光寺と云なり。正善寺も此所に有故、三光山といふなるへし。
 牧かばな 觀音堂 九尺四面、瓦葺の堂なり。
 右大日堂、觀音堂共に除地有。
 牧かばな 百姓の小林に平松と云松有。山主柚人を儲てきらせけるに、血夥敷出、柚人忽死しけるとなり。廻り六尺計にして、根は貳本にて、末一ツになりたる松なり。



上 岩 成 村

辻堂貳ヶ所 地藏堂壹ヶ所、土手に有。
 阿彌陀堂壹ヶ所、加茂川尻の渡揚りに有、光臺寺と云額をかけたなり、惠玉比丘の手跡なり。往古餘ほどの寺なりしか共、毛利の後より段々零落に及び、宗休公御入國の砌まで、本堂、門などは有しか、江良村、廣徳院へ引取て、本尊の阿彌陀計、四つ堂に残。七本松と云て、根は壹本にて七本に分れたる大木有けるか、水野の御代に大風にて倒れぬ。享保年中當村の庄屋徳八と云者、件の四つ堂を九尺四面の柿葺に造建し侍るなり。
 神社八ヶ所 當村の生土は森脇村の八幡にて、神田は當村にあり。

今宮大明神 疫癘流行の節は紙にて舟を作り、紙糰をのせ、神前にて加持し、かも川へ流し侍る。是則はらへ草のかたち、邊鄙の所に残りたるも殊勝にこそ。

吳竹集に、はらへ草とは、御祝する時、はらへすつる人形のことなり、菰草と書。歌にはかたしるゝと讀めり。
見し人の、形代ならば、身にそへて、戀しき時の、撫物にせん。

連哥 宮川に、よるや山田の、はらへ草。 宗祠。

天神 龍王 菜神 荒神三社

しやうと山 西は下加茂、北は八間屋、東南は上岩成村、三ヶ村へ跨たる少(小か)き山なり。

毛利之家臣、石崎小三郎義清と云もの、慶長の比迄當村に在住す。

下 岩 成 村

津田左源太檢地の節、當村の庄屋過言の事有て、檢地の役人、憤を舍居たる所に、當村の醫師田中玄琢といふもの、一類、甲田嘉兵衛といへるもの、娘、姉妹ともに水野公の御城女中なりしか、落去の砌ゆへ、玄琢方に寄宿し、檢地を見物に出けるを、檢地の役人遠掛に見付、遊女ともを呼置、役人を誑かさんとすること奇怪なれ、隨分繩を詰、斗代をも上へしと云合、檢地しけるゆへ、他村より地も狭、村柄よりは斗代も高し、其上、山藪もなき悪キ村也。隣村ゆへに上岩成村も繩詰りたるこそ。

神社拾貳ヶ所 生土、上岩成と申し。
深草大明神 金神 良 鬼門 荒神二社

右之外小社四ヶ所有。

四つ堂三ヶ所 藥師堂 馬場に有。 地藏堂壹ヶ所 同所に有けるか、近きころ倒れて藥師堂に安置す。 地藏堂壹ヶ所

下條に有。

寺壹ヶ所 淨土眞宗 平田山 清流院 光圓寺

當村の名主久五郎は、高須村十兵衛か一類にて、名字を杉原と号す。高須藤右衛門と云者、先祖の由緒を申立、長州萩に事へ、貳百七拾石給領す。傳來の書類、藤右工門方に有之。則、藤右工門自筆にて寫し與へたる、鎌倉執權家の節よりの書類、五拾五通、秀吉公朝鮮攻之節の船印に、大明人の添書、并に高須元忠よりの家系など、見せ侍るまゝ記畢。伊佐、高須、杉原と名乗侍れども、

姓不相知由。宇多源氏に伊佐七郎左工門尉行綱と云ものあり、其末葉なるへし。行綱、武家評林の系圖に有之。

陸奥國所知長世保内荒野、爲地頭沙汰早令開發、可爲名田之狀、依鎌倉殿仰、執達如件。 時政之事 散 位 官

承元三年三月廿九日

伊佐大進殿

陸奥國遠田郡地頭職事

右以山鹿三郎遠綱下行沙汰之狀下知如件。

承元四年正月廿日

實朝の事 右 大臣 源 判

陸奥國長世保内外地頭知行、村々開發荒可爲得分寄事、於左右不可令荒廢本田之狀、依 鎌倉殿仰、執達如件。 時政之事 散 位 官

建久二年十二月三日

伊佐大進殿

陸奥國長世保木間塚村地頭職事

右以山鹿三郎遠綱、可爲彼職之狀、依仰下如件。

承久二年六月十六日

義時事 右 京 權 太 夫 平 判

陸奥國長世保荒野開發新田事

可爲地頭得分之由、故右大臣家御時、承元建曆之比、兩度被成御教書事、其後於關東御分時之事者、非沙汰之限、至今者木間塚内三分一方禮田事停止別府之違乱、任先例可爲地頭分也。但寄事於左右不可荒本田之狀、依 鎌倉殿仰、執達如件。
嘉祿二年十二月八日

泰時事 武 藏 守
時氏事 相 摸 守

山鹿三郎殿

將軍家政所下 備後國高洲庄任人補任地頭職事

山鹿遠忠

右以長世保之内木間塚村相傳之除舍弟五郎分之外、守先例可須知之狀、所仰如件以下

延應元年九月廿六日

案主 左近將專老野
知家事 彈正忠清原

令左衛門少尉藤原

經時事 別當修理權大夫平朝臣

泰時事 前武藏守平朝臣

備後國高洲庄地頭職事

山鹿遠忠、以長世保木間塚村相傳之間除舍弟五郎分之外、任先例可須知之由、可被成下、關東仍下文也、早任狀可被施行狀、如件。

延應元年十月十六日

經時事 越 後 守
時賴事 相 摸 守

備後國高諸社地頭職、山鹿孫三郎事、任去年二月廿五日被下文可被沙汰候。三吉又五郎秀盛之狀、依仰執達如件。

十月三日

岩松禪師御房

就山南敵動之儀、使者并書狀令悅喜候。彼方後卷之事、方々相談候間、不日可出張候、可有各馳走之由承候、祝着候。山中治部少輔、今日可罷出候由申付候。吳々被入御懇、承候段々喜悅々々。委細猶使者申候。恐惶謹言。

八月晦日

高須右馬助殿

義 隆

就山南表之儀、山中所へ懇書披見候。被入出候時日可被申候。喜入候。然間、彼後卷之事方々調候、從馬山爲先勢、昨日、眞田備中守其外各罷出候、相殘者共、明日建可罷出候由候。月内私者三吉舍弟平二郎、從吉舍越中守昨夕至赤屋出張之由申候。今日御調木栗邊迄可有陣候哉、諸口調候間、今太山へも今朝人遣候。明日宮、上月、身可被出事肝要之通申遣候。定不可有別義候哉。其表之儀、每事御馳走、可爲喜悅候。沼田、竹原、警固可罷上之由相定候。將又此間從要害教須出候、□又籠候。爰元之趣具申遣候。恐惶謹言。

九月七日

高須右馬助殿

義 隆

雖未申通候、一筆令啓候。仍今度東口動候付而、豐通へ御注進狀披見申候。連々對山新御粉骨之段承及候。只今御存分之趣、誠御憑敷存候。御國之儀可致馳走候間、可被御心安候。内談申義いて、于今豐通致抑留候。委細從新左可被申候間、不能紙面候。於向後ハ細々申承度候。御同心可爲祝着候。恐々謹言。

八月七日

高須右馬助殿

興 元

加冠 元

天文十三年六月七日

杉原少輔七郎殿

隆 元 (花押)

任 駿河守

天文廿年正月八日

高須中務太夫殿

隆 元 判

於神領大野之内百貫文地爲屋敷分先祖事、爲給地進之置候、全可有知行候。猶源左工門、雅樂允、與十郎可申候。仍一行如件。

弘治四年卯月廿八日

高洲少輔七郎殿

隆元

二五四

任 彦右衛門尉

永祿八年二月廿一日

杉原少輔七郎殿

輝元 (花押)

今度伯州御出陣、數日御滯留候て、殊ニ御武略無申計候、無御別條御歸陣之由本望存候。委、左衛門太夫可申候間、不能詳候。恐々謹言。

四月十一日

杉原高須殿

元就

受領 河内守

天正十貳二月廿六日

高須彦右工門尉殿

輝元

去々年、高麗渡海之節、其方事自分之船、堅固令用意、抽自餘渡候事、誠心懸尤神妙候。仍五千石之地宛行候、呈其賞計候。猶佐與可申聞候也。

文祿三二月廿三日

高須宗左工門尉殿

輝元

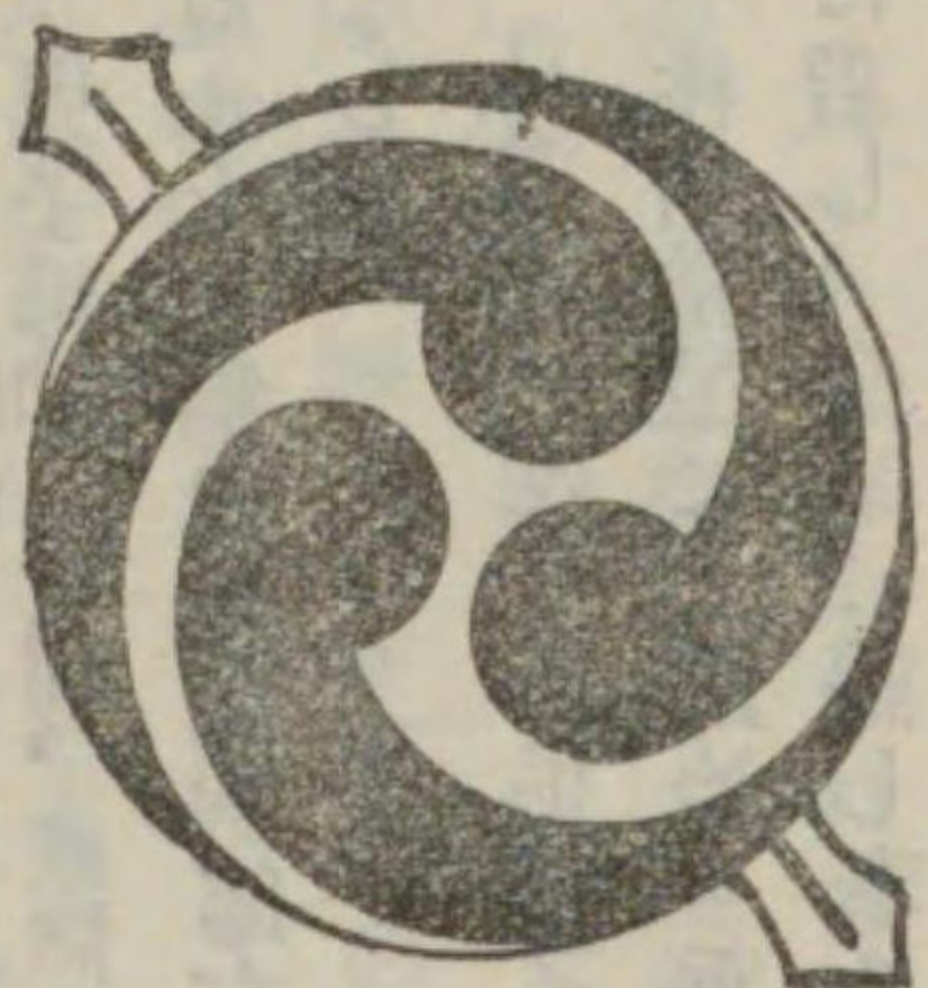
受領 筑後守

慶長七年正月一日

高須宗左工門尉殿

輝元

朝鮮渡海之節船印



大明國泉州府
晉江縣有商船隻候
來年六月到此港口看旗
号比對一同齊
知鉦人王祿 □
來買賣余事無紀
船主 蔡福 □
萬曆十二年十月吉日書
立字人李進 □

毛利輝元臣 前彦右衛門 筑後守元士 前宗左衛門 彦右衛門元忠 備後高須二住

高麗陣働有、長州萩二住居

彦兵衛

庄次郎

十右衛門

茂右衛門

彦四郎

久五郎

下岩成村庄屋

四郎兵衛

彦兵衛

藤右衛門

實ハ十兵衛兄也、長州萩ニ事ヘ二百七十石ヲ領

彦右衛門

四郎兵衛

十兵衛

高須村庄屋、零落ノ萩ヘ行

庄右衛門

七左衛門

原村庄屋

此邊貞助氏のもの多し。其本家貞助(原本約四字缺)といふもの、水野家に事へ侍り。遺緒書左に記す。

建武年中、平氏三好五郎忠直弟、六郎忠廣ト云者有。其先葛原親王四代之後胤、國香十三代ノ末葉タリ。孤ト成、年久阿房國三好郡ニ塾居ス。兄弟平日蜜(密)談シケルハ、我々弓矢ノ家ヨリ生レ、此儘老テ武ヲ失シ事口惜。然共流浪ノ身、無是非取捨テ戰

場ニ可出便ナカリシ處ニ、足利尊氏將軍、都ヲ敗軍ノ九州へ御下向シタマウ。其比將軍御側近キ武士ニ所縁有、是ヲ幸ニ思ヒ、早ク上京シ、兄弟愚意ノ趣ヲ言上ス。將軍、彼カ志ノ切ナル事ヲ御感有テ、則、御身近ク奉仕、益粉骨ヲ尽、忠義ヲ勵ム。兄五郎忠直、九州ニ供奉シ、菊池カ爲ニ討死ス。尊氏、猛勢ヲ以、勝利ヲ得玉ヒテ後、兄弟ノ戰功ヲ思召、第六郎忠廣ニ、阿波國ニテ五百貫ヲ被宛行ケル。忠廣拜領之御下文別紙アリ三好和泉守ト改。忠吉、忠政、忠明、忠重迄、五代相續シ、家人忿動邪意有、家滅亡ス。忠重ニ男子一人有、貞次郎ト云、幼雉(稚か)ニテ流浪セリ。母之養育ヲ以、成長ノ砌、母方ノ一族毛利元就公ノ家人タルヲ幸ニ、彼ヲ頼、元就公ノ家人ト成、三好筑後守家廣ト改。藝州江田ノ戰場ニ於テ討死ス。家廣子左馬丞家定、所存有テ、天文年中ニ元就公ノ家ヲ出、窄人シ、備後國沼隈郡山手ノ城主、杉原播磨守匡信ニ由緒有テ、暫、匡信館ニ居。家定、他に秀シ事ヲ急。匡信云、毛利家ニ對シ早速ノ他出如何也、時節到來ヲ待玉ヘトノ懇意ニ任セ、匡信ノ介抱ニテ城下ノ近郷、岩成ニ住宅シ、緒縁有テ家名を貞助ト改ム。

水 呑 村

寺三ヶ所

一、法華宗 京都妙顯寺末寺 妙顯寺 開基 日像菩薩

本堂 五間

額 妙顯寺 日等筆

三拾番神

寶殿三間、貳間

千体佛 貳間

鼓樓門 壹間

七面

拜殿壹間、貳間

鬼子母神 貳間、貳間半

大黒

鐘 當寺十八世本迹院日意代、寛永十二年、妹尾次郎右衛門鑄之、福山鑄屋。其後貳拾貳世、律師通眞院日開代、次郎右工門か曾孫其兵衛、貞享五年鑄直す。銘なし。

客殿 八間 二王門 貳拾六世、日意代、延享四年建之。

當寺は延文元丙午年草創なりと。往古當邑に刀鍛冶一乘と号して兄弟のもの有、法華を信じ像師を恭敬して終に落髮し、妙姓、本姓とあらため、月々京都妙顯寺に詣し、像師に講し奉る事年有。或時曼多羅を頂戴して戻りけるか、程ちかく備中迄もどり、用事有て件の曼多羅を木の枝にかけ置、用儀と、のへて歸宅しけるか、まんだらを木のえたにかけ置たる事をおもひ出し、大に驚き、斯、大切の物を忘れ置候事のあさましさよ、彼所に行て見はや、それとも最早人の有と成なんことのかなしさよと、すくに草鞋をもぬ

かすして、もとの道すから行て見ければ、恙なく木のゑたに掛けて有。悦に不堪、是法華經中一切の善神の守護、且は佛陀の冥慮に叶ひ、人の有とならずして、ふたゝひ我らか手に入給ふ事の有難さよ、かゝる奇特なる事を師に知せ奉らては、三寶の冥罰を蒙りなんとて、夫より又都に登り、云々の事を申ければ、像師志の深重なる事を甚感稱有、彼曼多羅に又々判を書加へて給りければ、兄弟悦事かきりなし。是そ二ツ御判の曼多羅とて、無隠重寶也。師のたまひけるは、汝等遙の歩をはこふこと、末法の信者如斯は又有へからず、老脚何を勞するに堪んや、是よりかへりなは一寺を建立し、具足山、妙顯寺と名付、即我を開基とし、晨昏に此像師を開山とし、一廬を結び、一心に法華を誦しけるか、弟の本性は別に庵をむすひ、法華讀誦の際には後の山より瀧を取、庭前に泉水清らかにして石を築、花木を植、草花をあつめて樂としけるか、兄の妙姓、一寺を草創しける事を羨て、野上の邑の洲崎に一室を構て、意雲山、妙法寺と号し、兄弟ともに道心堅固にして、寂莫(寞か)無人聲の扉をこら、一心不乱に一生怠慢なく、大乘妙典を誦して、妙姓貞治六年三月十二日、本性同年四月八日に寂しぬ。右像師の示誨し給ふに因て、開山日像菩薩、二世大覺大僧正、三世妙姓、四世本姓と傳りて、其後法華の道者住しけるか、大閑秀吉公朝鮮征伐の爲、九州へ御下向有、御歸陣の節、箕嶋沖を御通船被成けるか、はるかに當寺を御覽有、あれはいつくそと御尋有ければ、備後國、水呑むら、具足山、妙顯寺と申、法華寺にて候と申上る。其後於京都、本寺妙顯寺を召呼れ、本寺末寺、寺号山号を同する事、甚以然るへからず、はやく寺号山号共可被取返と被仰ければ、早速に寺号山号ともに被取上、水呑の法華寺とこそ申ける。古來兩度の炎上にて、二ツ御判のまんだらを初め、重寶什物焼失して、天文、天正の比の住侶重兼系、本寺の貴首授與の曼多羅一幅、漸に残れり。十八世本迹院日意、寺号を被取上たる事を悲、重兼授與之曼多羅に、妙顯寺重兼とあるを據とし、愁訴して終に寺号を取戻し、本願主一乗か法名を以て妙姓山とあらため、法華榮昌の靈地となせり。其後福山道三妙法寺を、いまの地に移して再建し、正保四年遷化せらる。即向寺の中興開山なり。手城村清水宗古俗名(此間約六七字缺けて居る)と云もの大信者なりけるか、蓮祖并像師の曼多羅を納藏し侍る。塔中 不變院 卓肇坊 玉雲坊

右三ヶ坊と云、日意上人建之。

法華宗 安立山 善住寺 開山 妙顯寺 世大智坊重兼

此重兼は行學兼備したる大徳なりしとぞ。寶曆四年十一月、當村さすら新田の樋、上家修覆の節、逗留の餘暇、妙顯寺に詣て、不變院に至り、來曆(歴)を尋侍れば、縁起

書類等も侍らす、唯口碑に傳へたる事のみにて侍るとかたられ候事、又は村老の物語を記し侍るなり。
同宗 清光山 重顯寺 開山 戒善院日行上人
過去帳の裏書

當寺ハ戒善院日行、依于像并(菩薩の畧字以下同じ)之御教化、改宗スルモノナリ。當國宗流ノ始也。別ニ記畢。
開基日像大并 康平元年十一月十三日。

戒善院日行上人 貞和二年十一月廿四日

當村妙顯寺十八世、日意代マテ法事會合ノ節ハ當寺上坐ナリ。日意、學德有之故、當寺日泉了簡ニテ、弟子惠性ヲ名代ニ出シ、日意ニ始經ヲ讓ル也。妙顯寺帥創以前ハ、當村ニ當寺一寺也。當寺ハ惣ノ當國立宗ノ始ナリ。本山ヨリノ曼多羅二年号有之。
田尻顯應寺、元祿三年、當寺ト妙顯寺ト帥創ノ年号ヲ書付、公義并ニ京都妙顯寺ヘ差上ヒ書付ハ、妙顯寺日閏、京都妙顯寺日耀上人ノ時、當所妙顯寺住持、當寺ノ來歷(歴)取次差上ル。當寺ノ住持淺學故、何事モ妙顯寺差圖ヲ請ヒナリ。寛文九年、直未ノ手形、當寺ヨリ顯應寺ヘ遺スト云々。内證當村妙顯寺日閏ト顯應寺通融ノ、直未ニ取次也、不埒ト云々。
享保三年マテ、顯應寺ト當寺無別條、十月會式施我(餓)鬼ニモ當寺ヘ出仕ナリ。同四年七月、施我鬼ヨリ弟子ヲ差越、同五年京宿坊大泉坊下リハ時、不淨心ヲ以テ當寺ヲ惡口スル故、宿坊顯應寺ト内語ノ由不遂出仕。
右之外支配之神社之事を記、是は此次にくはし。

神社

加茂明神

天神

八王子大權現

祭八月廿八日

寶永三年以前、倉田半右衛門家敷内に有之、荒神をあかめ、毎歲重顯寺祭禮をつとめきたれり。或年、妙顯寺勤けるか、物怪出來しけるゆへ、早々重顯寺を招き祭を致しければ、忽物怪もやみぬ。それより以後、重顯寺を社僧とす。寶永三年、三分坂の脇へ移す。

疫神

祭九月廿八日

健部大明神

祭八月十七日

寶殿一間四面 前殿三間

鰯口 寶永四年八月朔、湊屋佐右工門寄進。
竹かはななに有。前殿の棟札に、貞享元年建之、備後國沼隈郡宮崎村と有。古來此所ハ田尻迄の間を宮崎一村としけるにや、今以此邊の農夫は宮崎といふ。畢竟松かはなに對して竹かはなといふにや。

生土八幡

祭八月十五日

寶殿二間四面 前殿五間

寛文八年建之。

石花表、近頃倒れ、木ノ鳥居なり。

高壹丈五尺五寸、栗ノ木壹本にて建之。

武宮大明神

祭八月十三日

寶殿二間半 前殿三間

松室大明神

祭八月十一日

寶殿一間半 前殿三間

妙顯寺と善住寺の間なり。

四之御前

祭(原本記入缺)

小社 前殿九尺四面、濱に有。

明見貳社

内、壹社濱に有

寶殿一間半 前殿二間

壹社小水呑に有。

山神

祭八月十二日

寶殿一間半 前殿三間

濱に有。周圍壹丈三尺五寸の松有、其根社地を潜廻りて自ら封疆を作りたるかことし。

荒神 壹社小社也、そねに有。

松尾大明神 祭八月十二日

寶殿一間半 前殿二間

濱に有。

護法權現

外 篇 分郡之一

二五九

神主 七 右 衛 門
社僧 右 同 斷

神主 與 顯 寺
社僧 妙 顯 寺

神主 市 左 工 門
社僧 重 顯 寺

神主 八 郎 左 工 門
社僧 妙 顯 寺

社僧 善 住 寺

社僧 妙 顯 寺

社僧 (原本記入缺)

神主 惣 右 工 門

社僧 妙 顯 寺

社僧 重 顯 寺

社僧 右 同 斷

祭九月八日 竹かはななに有。山岸に石を築く、無社。

古木大明神

祭九月十三日

山神

祭九月九日

元文元年三月廿五日之夜、太鼓勘兵衛といふものゝ夢に、髪は禿にして一足の鬼形来て三度喚て曰、我をはやく可祭と。同廿九日之夜、又以前之鬼形来て、何とて我を不祭と、早可祭、勸請をば重顯寺日明にたのめと呼て奥山へ走行。此時日明上人、白夜（白衣か）に紫の袈裟をかけて居たまへると見て夢覺侍り。仍而日明を導師として山田山に勸請す。其後、山の役人、小林加七と云者、公用の薪を切せけるか、既に此社の木をもさらんとしける時、久太郎と云者、是は山神の神木にて候と申ければ、さらさりけるとなり。

輓津の風俗（校訂者いふ、輓津と同じ風俗といふ意か）にて、何ほと輕賤なるものも屋号をなのらさるはなし。

寶山 小水呑に有。巖に巖峨々として風景よき山なり。此所より長和村、志た原へ越道有、荒尾谷と云。

鬼かまな板 荒尾谷に有。某（著者の自稱）壯年之比、不寐の症をうれへて、晝夜眠らざる事五ヶ年に及へり。後は氣短羸瘦し、闇中に臥て鬱々として獨言をいふこと客に對するかことし。母弟怪て夜更是を窺に、人有て來るにあらず。驚て灸治湯藥を用るといへども更に功驗なし。某おもへらく、是氣少鬱憂、胸にふさかり、怒氣強而心火盛なるか故なり、然は針湯の可及にあらず、慰心勞し身せんにはしかしと。夫より日々、深津、手城に杖を曳、草戸、萱野に登、風雲の思ひをなせり。或時不斗して此所に來りて見るに、假山を築たるか如にして澗水漉々たり、風景詠に不飽。其麓の賤家に六十有餘の夫婦之者（山番）あり、葺若くゆらせ、四方の物語して歸りけるか、それより日々遊遊して不至といふことなし。秋になりては彼老夫と伴ひて寶山、志た原に行て月を詠、鹿猪の求食を追なとして氣を養、心を放にして終に疾疴を治したり。老夫か壁に一章を書して曰。

夏日遊荒尾谷作并序

沼隈（隈）郡水呑邑者、去於 福城二許里、後有 大山嵯峨、前臨 江濱渺茫、有 一深谷、号 荒尾谷、此谷也、田間、畔道縱横、而一帶細流涓々矣、民家八字許、澗道數十步、而有 怪石、石面以 庖刀 似刻之、俗号 鬼カ俎、又經 松徑、有 三角石、其形如 礪、澗流浚激、故曰 鏗響焉、蓋有 一老夫、採薪汲水之間、曳杖與予迪遊于岩陰、而作 爾汝忘年思、無旬日不到也、恰比 靈運去 屐齒 陶潛眠 石上 樂矣、因綴一律、述蟻蟻才云爾。

谿邊道滑一條通。

莽鬱山間雨後濃。

怪石巖々兮鬼俎。

激流湍々兮鏗響。

洗臨水欣洗腸胃。

李曙薩娛健醉容。

日薄西崗哺色靜。

松杉聳影起涼風。

本性か瀧 前に云本性か庵の跡なり、瀧はなし。

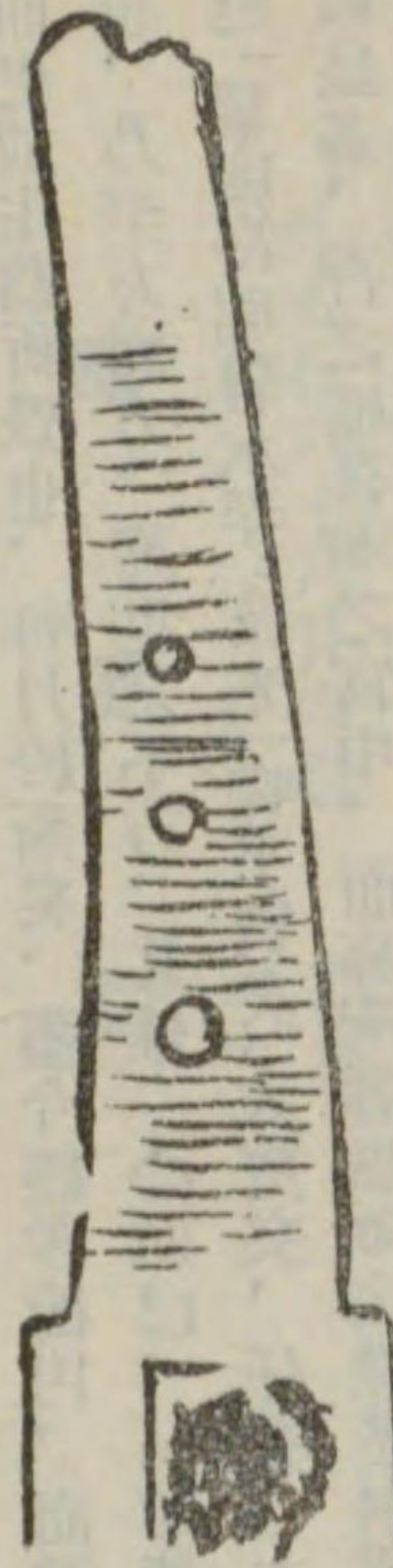
加治屋敷 松尾明神の前に有。屋敷ノ中央と覺しき所に石を居置たり、輓の跡なりと。一乗屋敷共いふ。

備後國吉田郡物之系圖

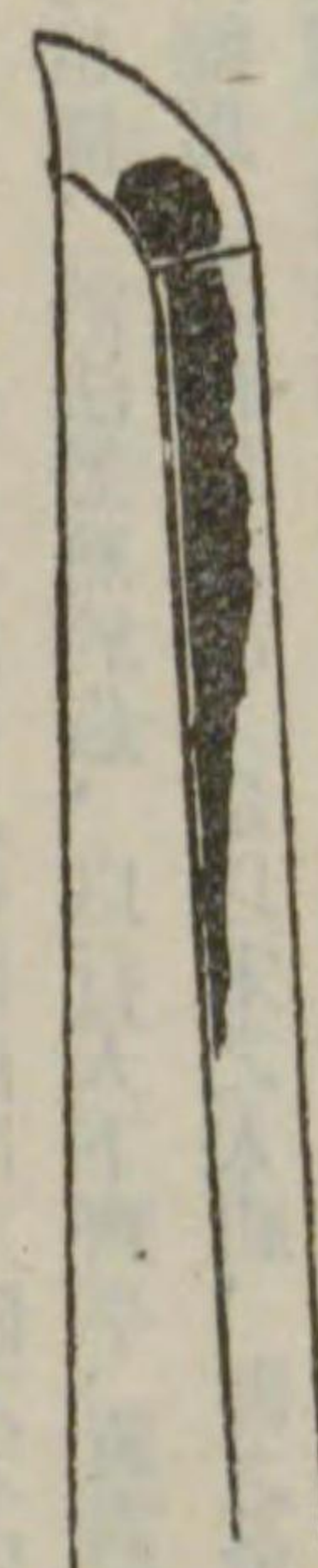
助 國 能間國分寺左京佐 兼 行 正和、康永ノ比 行 吉 秀 次 一 乘 重利、剃髮ノ一乗ト云 三原氏兄弟ナリト云リ

右のこころ吉田郡ものといへは能間といふ所、吉田郡の内には有にや、古は此邊も吉田郡の内也しにや。一乗か作の刀、當村名主倉田佐太郎か家に持傳へたり。

長貳尺五寸物打に疵有



如此横鑑にて無名なり



箕 島 又箕の島

水呑村高の内なり。水野家の時、嶋屋宗古と云者、寺崎といふ所に塩濱をしたりけるか、當時は田畑となり侍る。往古はここの外茂りたる山にて、楠の大木、其外用木を被立置けるか、水野家落去之節、屋吹傳右工門、三河屋勘藏などといふもの切あらし沽却しける科に因て、兩人共に被召捕、勘藏は牢死し、傳右工門は死罪に被行けるとかや。

神主 加茂大明神 楠大明神共云

荒神 山神

女夫岩 西の海濱に有。享保の比、輓福善（禪）寺此所に新涯を被築けるか、成就せず。泉龍寺（禪）翁和尚を御歸依にて、毎夜御前に

潜岩 東の海邊に有。此所の上に釋迦の石佛有、故に釋迦かはなといふ。水野勝貞公、

被召、御物語被申上けるか、或夏干魃にて郷中雲しければ、勝貞仰られけるは、斯干魃に及へり、禪にも雪の法あらは行玉へと有ければ、鷲翁承て罷歸、曉天より此所の岸下に結跏趺座して居られけるか、潮段々満來り己に肩をこし唇に及ひける時、黑雲忽起り、霹靂甚敷して暴雨國中を潤せり。自是猶々御歸依不淺、鷲翁遷化のち、太白和尚、大檀那中山將監、同兵右衛門など、講を結び、此石佛を造立し、正、五、九月、盤若(般若)を轉讀せられし所なり。今に至て泉龍寺の支配所なり。石佛の臺座に書して曰。

蓑島(金剛山)

有客問曰、近呼山金剛奈、予答、醉嘗修之以永報四恩、恒薦三有、汝登而始可得、客竟將予而往、嘆曰於乎興矣々々、良不愧其名也、乃倚石表、其詞曰、予辭除武城、寓泊中海、積而有日矣、竊視郷俗之風、馳名驟利、而綿荆棘之林有召甘空、以漂混茫之泥扶籬摸壁、從冥入冥、豈其獲不嘆息乎、今也寬文戊申之春、令四眾結金剛般若會於日之十五、磬頌誦和以爲解說、板整齊會、而更放生恭祈豐也、每月於斯矣、蓋今經者德円、而神功、方以直則無事、弗成神則無理弗通、其通也乃至円而三除之不円其成也、乃至方面方、萬世之方、其惟一心而已、一切諸佛聖教咸出於此、而化十方世間、治法悉熟於茲、以行天下齊平、黃雲映山色、黎庶符瑞碧水弄波光、嗟乎寶矣、大寶矣、任矣、大任矣、世間出世不可思議功德焉、能在加之哉、是以宋之太祖、書之金字以福皇基、吾之延喜奉之宮中、而募聖壽慈命之談感雨華於巖壑、聖妻之造獲生天於丘墟、唐宋儒老逮捕魚以忘筌、明倭君臣祓除螟而疎禊天神冥護四句半偈之持誦鬼獸希望一識三世之良緣不可世弗修、不可人弗信矣、故東渡以來年代甚遠、泱々而沸泮著世之視聽矣、仰願今依構會修功諸天龍神禎持吾國菩薩羅漢祥護悠久風雨順時寒暑處序武義粵肅陳文制仍優洽泰嗜之平嘉唱之節朝野永幸三寶緇素鎮浴一恩也、於乎風華半日之席、雲月一夜之窓、猶來趣輔似之熏種也、何況回向般若大會、以均禎其聽也、電轉星流鳥飛兔走、竟期月終焉、最後各請捨財摸像、充尺未來之依怙予肯而容之、聿使工以彫石、徐閱年而像成、乃能仁大聖之應軀也、恨工味相好、而刻齷諸根、雖然失在巧式更須得賴信敬奈假論其長短也、予回而於郷方、在嶋兀東海、俗呼曰蓑嶋、其既久矣、未獲佛名之載、豈忍鱗毛之孤乎、終乞地別牧以安像、岷嶺尋之頃四大辨之翼奉矣、嶼茹頓延王之始軌港旅船像面之常加亦匪夙植乎、顯望像光永射無方聖化恒被有爲三除處位四序聯環且令見聞之、徒以獲究竟常樂醉之四恩之報、三有之誓、終以足於此、傳聆奉瑞德以祈海內之禱祚、感五色之祥禽、宋之眞宗也、慶繡像而齊天下之緇僧、得聖代之白雉吾孝德也、二域之二明東昭佛燈、暗世以來鎮折衷之綿々至今雖在間排而乃不遂矣、華夷咸王封生民輝朝臣、奚違國令虛其粟乎、苟以味劣而致廢荒、不啻滯累其躬於曠劫、所以虧耗至治於聖朝也、請在後賢莫弄前巧、根之森之感彼號山金剛命院般若奏曲於洛之北、鳴風於關之東、燭挑尽始鼓動窮終貯舉

景於望中賦招隱於格外日新之興觀天人之際聞望之吟尚雲霞之表文彌黃面之眩曜行伴青眸之無遺、豈其勿萬歲之稱乎、嗟乎復來其惟竺仙乎、竟篆之以鐫之於石云爾、銘曰。

四面僉鏡 一山殊妍 粹靈洞徹 常住幽玄 迹讓生滅 德冠塵詮 呈示相好 親奉純專 夜途尙燭 霧海橫船 朝野榮辱 現當慈賢 持犯明昧 已未歷然 放生含養 施食人天 誓成伴侶 共輔法筵 定遺空谷 禪囑水烟 經行坐臥 受用諷宣 晨夕如在 寸陰莫捐 惠日鎮照 皇風永扇 太白叟克醉肅籤

扶桑已西春

此島、源平合戰の節、能登守教經の陣所なりといひ傳ふ。

水呑村高七百八拾六石七斗八升

内

貳拾三石壹升四合 箕島分

外貳石六斗八升壹合 新發

田尻村

神社八ヶ所

生土八幡 社三間 舞殿五間半 石鳥居 元祿十六年 神輿藏 御供殿

禰宜 (原本名を缺ぐ)

供僧 圓 明 寺

風呂大明神 權現 明見貳社 山神 夷 良 天神 天徳寺内

地藏堂貳ヶ所 天徳寺の支配。

寺三ヶ所

一、禪宗 養雲山 天徳寺 鞆津安國寺の末寺

開山、法燈祖傳和尚 法燈國師の弟子なり、保延六年に遷化すと、此事いふかし。保延は七十五代崇徳院の御宇なり、法燈國師は九十一代伏見院の御宇、永仁六年九拾歳にて遷化す、然れば八十二代後鳥院(後鳥羽院か)の御宇建久六年の生れなり。保延と建久の間さへ六十年違へり。

觀音堂 貳間四面 本尊樂師 鎮守 天神

眞言宗 正道山 圓明寺 草戸明王院の末寺

開山不知 本尊聖德太子の御作、正觀音なり。

法華宗 小松山 顯應寺 京都妙顯寺の末寺 開山日像上人 像師當國の弘通最初の寺也。

水呑村重顯寺同時代の建立にて、誠に兩寺一寺なりけるか、いつれの住侶の代にや、像師の曼多羅を重顯寺へ借置けるか、時代隔りて自ら重顯寺の什寶とはなりたる也。延享の比、本寺の役僧大泉坊、法用にて當國へ下り由緒第一の寺なれば、當寺に旅宿す。幸の時節なり、件の曼多羅を可取戻と、檀家打寄、當寺の重寶像并(菩薩)のまんだら何れの世にや、のみ村、重顯寺へ借置、今にては彼寺の什物と罷成、當寺にては日健上人などの曼多羅を持傳へたる計にて候、此度當國へ御下向こそ幸の時節にて候へは、彼まんだらを、當寺へ御取戻とし被下度と、一等に達しければ、大泉坊聞て、なるほど尤の事に候得共、日像の書給ひたるも、日健の書玉ひたるも同じまんだらにて侍れば、日像の書玉ひたるまんだらを取返すにも不及、一心に念したまは、日健の書玉ひたるも同じまんだらにて侍れば、日像の書玉ひたるも、日健の書玉ひたるも一心に念しぬれば同事といふ事は御坊のたまはすとも知れたる事也。但し日像と日健とは人の違ひたる事を御邊は知玉はぬか、御坊の器量にては、とても取返し給ふ事は成まし、あたら詞を費し侍る。御邊の様成、埒道の明さる御坊の永居したまふは無益の事なり、一刻もはやく返らしめと、疊を扣立て罵ければ、大泉坊返答もなかりしと也。

鎮守 威徳大明神 福山濱、大木屋の番人、田中繼右衛門と云者の世倅、團平と云者、吉田助右衛門(原本二字缺)方に勤居けり。寛延三年午六月六日の夜、神島町を通りけるか小雨降て暗かりけるに、穢多助九郎、町廻にて磔と行あたる。何者なれば狼藉なりと咎ければ、夜廻りの三八にて候か、何れの御方候哉、暗て見へ不申と答。眼見へすは夜廻りを止よといひければ、つかくといふ下へより。成程止可申候、其段何方へ御達し可申哉と募けるゆへ。團平たまらず、推參なる奴かな、堪忍なりかたしと切付る。助九郎、棒を以て渡し合、受つ流つ戦けるか、助九郎數か所手を負、西尾屋喜右衛門といへる紺屋の前にて、袈裟がけに切こまれ、尻居二ごとと坐す。團平仕おふせたりと踏込て、止をさゝんとする所を、助九郎、脇指を抜、團平が脇腹をえくりけれ共、助九郎深手なれば腕弱りて心に任せず。團平少も疼ます、けさに切たる疵に足をふみ込、難なくとめをさす。しはらく切合ける故、息切、町屋の戸を叩、水を乞けれ共、いつれの家にも恐れて戸を不開ければ、風呂屋の水道に至り水一口呑、息を繼、刀を洗ひ、漸、助右衛門屋敷へ歸りけるか、早速親繼右衛門方へ被差戻。其後彼は評議有て室(密か)に剃髪させよとの事なりけるゆへ、檀那寺妙政

寺へ行て頼ければ、恐てうけがはず。無是非光政寺へたのみければ、出家の事なり、何を後難の恐れ可有とて、則剃髪させ、了意と名付、穢多共宿意之程を公儀にも被思召、禁足致させ置へきよし、光政寺へ被仰付。扱、了意、疵も漸愈けれとも五、躰痛、口嚙て物言事不能、三年之間、彼是醫療の驗もなきゆへ、光政寺不便におもはれ、ゆりをすへ祈禱せられければ、助九郎か妻子、葦山の稻荷に祈て、狐を戻たりと口走ける故、一社を建立し、神に可祭と詫ければ、漸々に納受有、威徳大明神と崇、當寺の鎮守とす。助九郎か位牌有、戒名法縁と号す。了意、一端は平愈と見へけるか、次第二口嚙、食事する事ならずして、寶曆五年亥八月八日に死す。扱又威徳大明神は、當寺へ勸請しける砌より靈驗日々にあたらなりとて、諸方祈誓願掛影敷、十二三なる女の童の不淨なきを、ゆりに居、祈けるか、段々繁昌而、件の女の童、十七八になりけれ共、神慮に叶ひたりとて、今以ゆりに居、油ざりたる若僧共、丹精を抽て祈る有様、淨藏貴所の効驗も及ましとすさまし。

辻堂貳ヶ所 天徳寺の支配
屏風か嶽 濱邊に有。
八幡鳥居の脇、西の方四方に土手を築たる池の如き入江有、宗休公の御代、貳拾壹端五拾挺立の御召舟を造せられ、大轉輪丸と号し、大八幡、小八幡といひて拾貳端四拾六挺立の船貳艘にて引せらる。其比鎮西にての大船なり。箕嶋より福山の川口へ漕入られさるゆへ、此所に被入置たる御座床なり。仍て所俗田尻丸と云、大坂にては備後の阿房丸といひし。是秦の阿房宮と云心にや。元祿十年の春より夏に至りて、毎夜夜ふけて白装束したる女、此土手の上を啼あるさける。福山にても御座床より舟入迄の土手を、なきあるさけるか、其秋八月、勝種御逝去有、翌年五月、勝峯公御逝去にて、此御船もとかれ侍り、其舳、尾道和泉屋と云者買取、賀島といふ所に有之。

田 島

神社拾壹ヶ所 貳間 舞殿 石鳥居
生土八幡 四面
祭禮(原本記入なし) 鳥羽院に 嚴嶋へ御幸之時、此所へ御船を被寄けるによりて王浦とも云こかや。扱此宮に御座有て、所のものを被召、島の名は何と申そ、此社はいかなる神を祭たること勅諭有ければ、此島は藤多き島故藤島と申候、此社は、うふすなにて

候得共、いかなる神を勧請し侍るやらん不奉存と申上ければ、然らば神跡を得させんとの御事にて、勅製の幣三本を下給り、八幡宮と崇、以來は田島と可唱との勅定なりと申傳へ侍り。

天神 要害 王太子 内浦 夷二社濱 天王 南の下 荒神 明見 山神二社 地神二社
生土 町方 山王權現 社壹間半 拜殿五間 石鳥居 元祿年中ニ立 (神主か) 久 太 夫
寺五ヶ所

眞言宗 寶蓮山 地方如意輪寺 奥之坊 尾道西國寺の末寺なり、本尊如意輪觀音。

唐筆の涅槃像有、朝鮮軍の時、釜山浦の寺へ乱入し分捕し來り、當寺に納けるとぞ。鐘、元祿十四年極月鑄、無銘。

同 佛徳山 同 常樂院 本尊十一面觀音

同 海龍山 同 光音寺 本尊大日 觀音堂貳間 三十三躰の觀音を安す。

同 青龍山又瑠璃寶山共有 同 醫王寺 本尊藥師

右四ヶ寺共に尾道西國寺の末寺なり。此外に眞福寺と云庵地、町分に有、奥之坊の預りなり。

淨土眞宗 田島山 大浦 善正寺 京都本行寺末寺

大閣秀吉公、朝鮮征討(伐か又は討か)の時、當寺に御腰を被掛、御自筆にて田島山と山号を被下ける寺なり。しかれ共昔よりの貧

地ニ而、貞享、元祿の比、甚困窮し、其時の住侶、雜具等迄引集、讃州鶴足津本正寺へ退院す。夫々程經て、享保、元文の比にや、

泉州善教寺、西國へ下られる時、當寺へ詣られ、大閣御自筆の山号の事を被尋ければ、云々の由を答ふ。善教寺き、給て、是他に持傳て益なきものなり、則善正寺へ被指辰可然と一輪を認與られければ、善正寺不斜悦て、鶴足津に行て本正寺へ案内しけるか、折節湯治の留守にて、善教寺一輪之趣を云置て戻りぬ。其後本正寺が何時にても可差辰段、申越けるとぞ。

阿彌陀堂壹間半 南浦ニ有。地藏堂壹間半 善正寺の脇ニ有。

釋迦堂二間 大浦に有、常樂院の支配也。往古此所に寺有、近き比迄、門の柱など有しとなり。

虚空藏堂 光音寺の山上に有、奥之坊の支配なり。

田島、横島、百島の内にては、田島第一廣き島也。西北の方を町方、地方と分て、町方は濱邊に町並立繼賈客の船をつなき商賈を専とし、地方は東南の山際にて、夫は五島、平戸の鯨船に行、女は耕作を營み世渡愈らざる故にや、家居も賑々敷、豊饒なる事、地續の所には勝れり。大浦といへる所は北之海邊にて、地方、町方より離て人家も數少く、人物甚劣れり。惣而此島には

田はなくて畑作計なり。

矢筈島 北浦にて能登原の向なり。能登守教經の矢竹とて筈竹茂りたる山なり。

箱崎 阿伏兔の觀音堂の向なり。かなを石といへる大石あり。

横 島

神社五ヶ所 生土八幡 社壹間半 拜殿五間

辨天 二間半 要害に有。塩釜大明神 小社なり 濱邊に有

寺壹ヶ所 眞言宗 聖龍山 多門院 西音寺 尾道西國寺の末寺

當木島 野山、草山なり。

荒神 八幡の境内ニ有。當木嶋大明神小社なり、南浦之方

走 島

神社三ヶ所 生土八幡 貳手先、柿葺 舞殿 石鳥井

荒神 明神 外ニ夷の社、濱邊に有。

庵壹ヶ所有、眞藏院と云、年貢地也。鞆地藏院支配なり。

庄屋太才治 村上義清の末孫也。水野日向守勝成公、當島を給。正倫公由緒を被聞召、帶刀を御免有。委細後得録に有。

禰宜 田島下 司 造 酒

神主 兵 太 夫

禰宜 善 太 夫

百 島

神社四ヶ所

荒神 地神 天神 地神 一社

生土八幡 貳間 四面

外 篇 分郡之一

禰宜 神 太 夫

良 壹間 前殿九尺 南の濱邊に有。
 四面 軍大明神 小社 北浦の山上ニ有。百合若大臣、蒙古の討手にむかひ給ひし時、此所にて血祭をし給ひて、其靈を祭り置給ひし
 となり。
 太閤の切下岩といへる大石有。
 寺壹ヶ所 曹洞宗 萬林山 西林寺
 藥師堂九尺 西林寺ニ有。 觀音堂八尺 西浦ニ有。 大師堂九尺 畑ニ有。
 古城壹ヶ所 城主 村上喜兵衛高吉

原 村

神社六ヶ所 祇園 渡守 八幡 荒神 稻荷
 右五ヶ所、輶の所に委。

山神 小社にて灘の上の山に有。
 住吉 住吉を本社とす。前殿二間、四間半。山田坂の東なり。

寺拾九ヶ所

安國寺 禪照寺 正法寺 勝音寺 慈徳院 小松寺 靜觀寺 本願寺 善行寺 増福寺 地福院 王泉寺(玉泉寺ならん)
 寶嚴寺 常喜院 福禪寺 普門寺 顯政寺 妙蓮寺 法泉寺 以上輶の所に委。
 火屋壹ヶ所 灘に有。 地藏堂同所に有、阿彌陀寺の支配也。

平 村

神社三ヶ所

生土淀姫大明神 輶の所に委。 荒神 小社 前殿六間半
 山神 山上に茂りたる松有、其もとに有。

寺七ヶ所

阿彌陀寺 源正寺 圓福寺 地藏院 明圓寺 南禪坊 醫王寺 以上輶の所に委。
 火屋壹ヶ所 濱邊に有。
 武倍山 平村と能登原の間の山なりといへども、慥ならず。

六家集

家 隆 吹からにむへやまかせも、しほるなり、今はあらしの、袖をうらみて。 衣笠大納言

新六帖

秋ふかみ、むへ山ひとの、あさころも、うちたゆむへき、かせの音かは。
 南の海邊に狐崎と云有、赤滑ら石なり。以前は輶の方より見れば其能見へけるか、
 寶曆の比、啄(啄か)折て氣を付されは知れかたし。

往古は原村、輶町、平村、共に一圓に輶といひけるか、正則公領地之節、大崎玄番
 百五拾三石三斗七升八合は後地村、三百拾石八斗壹升五合は輶町と被分。宗休公御
 拜領之後、檢地有て、三百五拾貳石八斗四升八合後地村、貳百拾壹石六斗六升九合
 輶町と被極。元祿備前檢地之後より貳百七拾石壹升七合原村、貳百八拾七斗八升五合
 輶町、貳百貳拾壹石五斗九升壹合平村と相分る。然れども水帳には平村、原村と不
 分、古來之通、後地村と有之。

平、原ともに、夫は漁獵を家業とし、女は鹽のこときものに魚を入、載(いた)き
 て輶の町近き村里へ行、賈て渡世とす。里俗の語に、平家、西海へ没落之時、平氏歴々の妻子など、輶の西に落とまり、漁師と
 なり、其末葉とも住するゆへ、タイラをヒラと訓して所の名とす。平家滅亡之後、源氏の士たるものは、夫々勸賞に預り、名もな
 き維兵は輶の東に住しけるゆへ、源氏の三水片を畧して原村と名付。仍而平村の女の、魚を買には、魚カヤランかと呼。是曆(歴)
 々の妻女の詞残りたるなり。原村の女は、魚カワセラレンかといふ。もといやしき物のいひなれたる詞なりと。此邊の詞に、鹹を
 よごろ、鯛の白子をひりこ、丁魚をかべり、干鯛の悪きをごんからといふ。此外いやしきことは逐一記しかたし。
 平村高貳百貳拾壹石五斗九升壹合



内貳石四斗五升八合 仙醉島分
玉鳥 すかる島 兩島共に御林なり。

玉鳥 すかる島 兩島共に御林なり。仙醉島分
内貳石四斗五升八合 仙醉島分
玉鳥 すかる島 兩島共に御林なり。



備陽六郡(志)「外篇」

(校訂者曰ふ、上記中(志)は原本の脱字であらう、又「外篇」は無いのであるが、著者手記の表紙題目により之れを加へる)

分郡之二

津	之	郷	村	一	丁
佐	波	村	十三		
神	嶋	村	十四		
草	戸	村	十五		
山	手	村	廿一		
本	庄	村	廿六		
木	庄	村	卅一		
郷	分	村	卅三		
森	脇	村	卅五		
叢(敷)	路	村	卅八		

津之郷村

當村の庄屋五郎右衛門は、横山備中守か末孫にて、尼子、毛利以前より此所小堀トに住するよし。大なる屋敷にはあらねど、四邊に堀を構へ、古木枝幹、竹藪茂り合て、古き住家と見へたり。宗休公初て御入國の砌、曾祖父五郎右衛門、御目鏡を以て庄屋に被仰付、舍弟惣右衛門横山喜藤太曾祖父にて、横山紋、貳百石給り、御家人被召出。仍之代々の傳書其外持傳たる物とも惣右衛門方へ遣し、古き書狀等、纒、所持し侍ると見せけるまゝ寫置侍る。

御音問披閱候。如仰長松殿、此表長々御逗留之儀候。每事取乱令無音候。然者爲易垣内立番允方被差越候由候條於下著者長松殿事差返可申候。爲土(土の下に産を脱するか)御樽肴送給候、御懇之儀畏悦之至候。猶重而可申述候。恐々謹言。

卯月廿一日

横山備中守殿

元

春(花押)

尚々一角祝著候。神邊へ細々可云送候。

此表無相替事候可心安候。雲州衆福屋端城河登へ相勤候間、元春熊谷同前ニ爲後卷打廻候處不待付、仍之津迄引退彼表ニ見へ雖逗留候手負死人依有數多、重而之行不及了簡其沙汰、小笠原之儀茂一姿可有候間歸陣之時可申。四郎兵衛一兩日中可歸候。淨光言傳之由可被申候。普請搦日夜言付候。元就元春小早川切々申談候間可心安候。恐々謹言。

七月廿六日

横山備前入道

盛

重(花押)

尚々各しんろう之山可被申候。替之儀近日可申付候。

其面雜説之儀ニ付而被申越候折紙披見候。西口其面両口共、日限まで相定、從高尾被申越候儀、然者暖取之趣、しかと被申度事に候。旁まては口上にて被申候哉又大ふうの取きたを被申越候や、明日中ニ無不慮候は、彌被相尋候様彌可申越候。今明日中ニ不慮候は、其面之儀も此面之儀も不及了簡儀候。たごへ無雜談候共、由斷有間布候、定可爲分別候間不能申候。何茂其面之衆中半惡候間族之儀相はて間敷候。雖然爰元之儀も、聊非油斷候。方々立火共見へ候哉、無正儀事も猶追々可被申越候。河岡へ自富田一人罷出候哉、是は斗増搦置候由肝要候。其面一人罷出候者之事、彌相きわめられへ候。富田より罷出候者之事は可討果

由本陣より被申越候間、左様ニ計次にて談合肝要候。恐々謹言。

三月十二日

横山九郎左衛門殿

盛

重判

谷本新藏人丞殿

尚々幸奎殿小二郎殿菊肥へ此書狀何も可被相届候。

其表之儀諸事被申越候、委細得其心候。粟根罷歸候ても具申候。兵部少輔殿小二郎殿半之儀經悟院豊信間之儀先無事ニ分別候間本望候。元就へ追々申付候間、彌無不慮儀氣遣肝要候。家親事茂至入野ニ出張にて候彼方行之事共候や、立聞可被申越候。豊後藝州和談之儀、御門跡至廿日市被成御下向、豊後へ松之坊被差下、御取操候、大友同心候て和談相調之由、隆元も急度至本陣被打上由候。其表行之儀共菊肥内談候て油斷有間敷候。因州之屋形武田取相之由候。是又立聞之趣可被申越候。何茂聽而粟根其元へ可遣候間其時委敷可申遣候。各番衆へも辛勞之由可被申候。謹言。

三月八日

横山九郎左衛門殿

盛

重判

谷本新藏人丞殿

御懇蒙仰本望候。爰元之儀不可有疎意候間可心安候。猶期來音候。恐々謹言。

五月

治部 元

長(花押)

横山備中守殿

御宿所

音問披見候。此表之儀無異儀候間可心安候。兵部卿爰元被差越候則令對面候。如前々不可有餘儀候間可心安候。渡邊出雲守事、從本陣上候て上口爲夫罷上候由候か、然者笠岡番計とも推量候趣聞合、追々可被申越候。親父へも別紙可申候得共、無別條候間相心得可被申候、尚此方へ申候。恐々謹言。

五月廿七日

横山九郎左衛門殿

盛

重判

歲暮之御祝儀重疊目出(度を脱せるか)候。仍一種進入申候。雖過分之至候。御吉事候は、來春者頓可申入候。恐々謹言。
十二月廿八日 景 勝 (花押)

備前入道今程失禮氣之由無心元候。能々可被加養生事肝要候。此由備前入道へも可被相心得候。爰元彌無異儀候間可心安候。謹言。
後十二月十九日 盛 重 判

折紙披見候。新庄へ人質被差遣候衆之儀、如書中貴所などの事は二番之儀候。一番衆之事は不及出陣之由申遣候。二番衆之儀は早々此表可被罷出候。先無珍敷儀候者聽而可差返候間急度參著肝要候。一兩日中ニ至作州出張候間、不可有緩(怠)候。恐々謹言。
六月廿八日 景 盛 (花押)

尙々息九郎左衛門を被差出候而可然候。

爲祝儀二十疋送給候、祝著之至候。自是も三十疋進候。猶重疊可申入候。恐々謹言。

正月七日

横山 備中 守 殿 進候

元

盛 (花押)

御折紙致披見候。未申承候處趣被仰越候、則降景申聞候。御太刀代百疋御懇之由被申候。吾等まで三十疋被進候條御懇意之至候。相應之御用蒙仰不可存疎意候。精可申候得共、河野殿今朝被歸國、元就降景事も中嶋邊迄永中被爲逗留萬端取作候條可心安候。恐々謹言

五月

横山 備中 守 殿

井上右衛門 春所 (花押)

懇々折紙、殊爰元一入見事之一種數無相違到來、祝著候。代々其表在陣之事候。自是社可申入候處却而懇切之儀候。何も自是可申述候間不能詳候。謹言

三月四日

横山 備中 守 殿

元

盛 判

尙々每事被御心付御懇之段難申盡候。

未宗にも一入被御心付御たのもしき候由、我等相心得候て可申之由、返々々も之儀無正儀候條外實無油(斷)候。何も可申(か)しく。

態預御音狀拜見候從未宗御音信共候哉、内々御懇之由被申事候実豊清被申談候迂於有御入魂之段御憑敷存候。將又彌八郎殿御母儀御遠行之段不申入候、必々可得御意所存候。次ニ古志家來立神二郎右衛門、花安新藏、夜前罷過候趣、爲如何候哉、每事族儀候條不及是非候。何茂被御心付候者可畏入候。毎々無音申御心中口惜候。猶自是可申入候。恐々謹言。

拾月廿日

横山 九左衛門 殿 參る 御返

景勝 (花押)

御狀到來披見候。如承候景盛依一途旁進退之儀至吉田奉行衆申遣候。彌此方不可有疎意候條可御心安候。仍太刀代百疋送給祝著候。猶期後音。恐々謹言

八月廿三日

横山 備中 守 殿

左衛門 景

折々肝要に候 口上候其元之趣珍敷事共候は、可承候へとも御心を付候て可被申候。九郎二郎へも、よろしく可被申候(か)しく、先日茂被申候定而可爲到來候。自然泉去に長々這留申候は、彼表へも被差越候之様ニ憑申候。菟角神邊歸申候は、是非共可被作候は、爰元にて十郎二郎懇之儀い。何事も用共いは、可被申い。恐々謹言。

九月三日

横山 九郎 左衛門 殿

元

盛 判

御折紙到來、得其心の、景盛近年之不儀不及是非次第の。就夫家來衆被相談、伯州之儀一途被申付儀。自然支い者、輝元可爲出張い。至神邊國司右京亮、兒玉小次郎、兼重彌三郎、其外自吉田被差上い横備事、從去々心底之通對御方被申越段、馳走之筋目い間、對吉田衆折紙遺い。諸地下不可有相違段外郡衆へも被送案内い條、可被成其御心得事肝要い。恐々謹言。

八月四日

高 三 左 御 景 判
左衛門佐 隆

横山備中守事、元盛被相果い刻ヨリ筋目無忘却内儀被申越、吉田に馳走之仁い。何等被仰合彼地下中狼籍等無之様、堅固之御裁判可爲肝要い。恐々謹言。

八月四日

左衛門佐 隆 景 判

國 司 右 京 亮 殿
兒 玉 小 次 郎 殿
兼 重 彌 三 郎 殿

自横備對御方重而書狀之趣蒙仰い、具承知い。彼内證之段重疊如申い。聊不可有疎意い。當時於吉田調之趣等委細此者可申い。被得其心の様ニ可被仰達事肝要い。恐々謹言。

十二月一日

高 三 左 景 判
左 衛 隆

(脇書あるも字體不明)

神社三拾三ヶ所

三嶋大明神 月光寺の山に有、神躰大通智勝佛にや、寶珠を持玉へる佛躰也。左は毘沙門、右は中華の衣冠にて笏を持たる像なり。社内に相生の松あり。

三嶋大明神 下三嶋と云山に有、將軍義昭を祀れり。神躰は則義昭黒將束立烏帽子并御臺所の像なり。元文の比迄、上三嶋とて、西の方の山上に御臺所の社有けるか、祭も同日なる故、一社に勸請しけるなり。

荒神七社 願成寺谷 吉祥寺谷 田邊寺 満願寺 下三嶋 上三嶋 夕藏

山神 願成寺谷 龍王 吉祥寺谷 妙見 上三嶋
貴布禰大明神 庄屋五郎右衛門後敷之内に有、横山備中守勸請之由。

鎮神 夕藏 黄幡 澤田谷 此外小社廿ヶ所所有。

寺貳ヶ所 真言宗 如意山 阿彌陀院 田邊寺

草戸明王院の末寺なり、開山不知。秀吉公爲朝鮮征伐、九州御下向の時、義昭公、當寺にて御對顔有、御餞として太刀を被進しと云なり。其比まては大地なりしにや、満願寺、願成寺、延命寺、吉祥寺、大満寺など、云て、寺下有しか、いまは名のみ残り。門外に柱穴あきたる大石有、昔の塔の根の礎なりと云。本尊は阿彌陀にて、春日の作の毘沙門有。新庄太郎信仰之毘沙門にて、願成寺に有けるを、ちかき比、當寺に安置す。正契公御參詣有、拜し給ひて、春日の作には不可有、大師の作なりと被 仰しと云。辨天有、當城本丸に安置有しか、水野家落去之節、當寺へ申請侍ると云。

眞言宗 夕藏山 藥師院 月光寺
近き比迄少(小)かき堂なりしか。生所しれざる隠願(通)か者來て、此山に庵を結て住しけるか、學徳有て所の者崇敬し、夕藏坊と稱す。明王院の現住有翁上人、彼か學才ある事を感稱し、力を被添、寺とは成しと云。則明王院の末寺なり。夕暮と書てユウクラと讀けるを、夕藏と書誤れり。しかるを不改して、直に山号に用たるなり。以前は夕くれと申侍りしか、いつとなくゆうくらと申侍ると、野老申侍り。

阿彌陀堂 願成寺谷に有、春日作阿彌陀座像 中新作の毘沙門を安置す。阿彌陀の厨子の内に書付有。

敬白御願信之事

奉造立 田邊寺 右意趣者爲護持佛有雄悉地成就寺家繁昌祈也而已

天正二年霜月吉日謹白

願成寺は、往古赤坂村長者か原の近所に有けるか、いつの比にや、山潰て寺をも打崩し、そのうち再建する事もなくて、此所に本尊の彌陀并毘沙門を取越、一字を建、田邊寺の寺下となりけるか、田邊寺も衰微し、願成寺はおのつから破壊して草堂となりぬ。元祿十三年九月、當村の住人阿部野儀兵衛と云者、堂を再建し侍る。

觀音堂 滿願寺谷に有、古は大地なりけるよし。横山先祖の墓有。本尊は安阿彌の作の正觀音なり。文珠院といふ山伏居住す。
藥師堂 四つ堂なり、廣瀬に有。
池三ヶ所 澤田池 夕藏池 廣瀬池
古城 串山 坂部丹後守

佐波村

神社六ヶ所
生土良大明神
荒神四社 佐波谷 新荒神 勘解由谷 せがい谷
嚴島大明神 兵六山に有
四つ堂三ヶ所 白地藏 城山 せがい谷
藥師堂 古、安養寺とて常念佛なりしゆへ、千日寺といふ。當時明王院の末庵なり。
古城貳ヶ所 名倉雅樂正 應仁之比
佐波越前守景房 同 庄三郎元近

神嶋村

元和の比迄此邊海にて船著の町有、福山の城成就の後、町家を福山に移し、神嶋三町とはなりぬ。城山の下に民家を古神嶋と云。福山安樂寺も此所に有しなり。
古城壹ヶ所 城主 横嶋兵庫
寺壹ヶ所 淨土宗 自空山 法然寺
し所なり。佐波村千日寺と相むかへり。
神社三ヶ所
生土八幡 夷社 八幡の下、往還に有 荒神
右古城山に有。法然上人讚州遠流の時、此所に來り給ひ、草庵を結び暫留り玉ひ

大川を朝川といふ人有、朝川には有へからず。萬葉集、長歌の潦川なるへし。福山の城成就の後、寛文の比迄、品治、芦田に至て此大川筋、潮差のほりけると、しかれば此邊などは入海なるへし。今岡村、長松寺に老嫗あり、生國伊與のものにて、水野公の家臣へ我王君の娘君嫁して來り給ふに隨て來り侍り、今思ひみれば、草戸稻荷の前と覺しき所に船を著、夫より佐波、長和など山際の細道を通り、水越へ廻り、江戸往還へ出て、神邊の御城下に至り侍る。加屋、津之郷、山手などは遠干瀉にて有けるか、いつの間にか、かゝる田畑とは成ぬるやらん、我年も百廿までは覺侍るか、こゝし幾齡に成ぬるやらん、覺侍らすと語りけるか、享保の末に死し侍りぬ。彼かいふ所を以て考れば、万葉に載る所の潦川にかなひ侍る。但、朝川共いふか村之所にす。

草戸村

往昔、蘆田郡、安那郡邊迄海にてありし節、本庄村、青木か端の邊より五本松の前迄の中嶋に、草戸千軒と云町有けるか、水野の家臣上田玄番、江戸の町人に新涯を築せける。水野外記と云ものいひけるは、此川筋に新涯を築ては、本庄村の土手の障と成へしと、かたく留けれとも、止事を不得して新涯を築、江戸新涯と云。其後寛文十三年癸丑洪水の節、下知而、青木かはなの向なる土手を切ければ、忽、水押入、千軒の町家ともに押流しぬ。此時より山下に民家を建並、中嶋には家一軒もなし。垣内など云アサ有、垣内玄番か住所の跡なり。刀鍛治助高住居の跡とて藪有、法華一乗か住居の跡なりといふは非なり、一乗住居は水呑にあり。

神社四ヶ所
八幡 祭禮(原本記入缺) 前殿 (記入缺) 社僧 明 王 院
稻荷 祭禮四月初卯 拜殿 前殿 (何れも記入缺) 右 同 斷

兩社一所に在。寛文十三年洪水の節迄は、社頭の棟の木と中嶋の間纒なる溝にて有けるか、洪水以後次第に川幅廣く成しとなり。當村の生土は八幡にて、稻荷は小社にて、前の中嶋に在けるか、承應元年、水野勝俊公御不例之節、御嫡備前守勝貞公御參詣有、勝俊公御快復におひては、御建立可被成と御祈誓有けれ共、御病氣日々に重り、承應(原本一字缺)年二月廿二日御逝去なり。勝貞公被仰けるは、死は人の常なり、何ぞ誓願をむなく可破との御事にて、八幡の社地に移シ、八幡の社同様に御建立有、自是卯之祭年々に繁榮し、備中、安藝領、四國邊のものまで參詣し侍り。八幡の祭は福山の市中に知たるもの希なり。靈驗あらたなる稻荷のへ、他國よりの參詣絶る事なし。
石花表 寶曆四年建之。佐久間徳兵衛といへる足輕、拾六俵貳人扶持の身上にて厄介もなく、夫婦常産乏しからず暮しけるか、所

持の銀子百貫目に充しめたまへ、石の鳥井を寄進し奉覽と祈誓しけるか、念願満足しけるにや、水吞村寶山にて石をきらせ造立す。
四月六日卯成故。銘曰。

鎮護伽藍。稻荷祕宮。華表斷石。斯磨斯磨。福資國家。德蓋蒼穹。檀信快樂。功傳無窮。(篆書)

檀信佐久間德兵衛永充 行事小林豊八尙庸 石工奈良本忠右衛門盈春。
寶曆四稔歲次甲戌卯月初吉寺務三剛謹誌。

鐘銘

備之後州、沼隅(隈)郡、艸戸邑、稻荷大明神鐘銘并序

去辛丑秋七月望、水災漂流、山河崩裂、爾來或洪水、或亢旱、累歲未歇、依之百稼不登、萬民豈安乎、是併共業所感而宿弊所致也、慎惟當社之窺本地五大虛空藏、福智能嚴能滿所願之薩埵也、尋垂跡稻荷大明神、和光利物、衣織稼穡之福神也、初當值偶曩祖大師、而誓約不虛、長令鎮座中道山麓、而神威無測、擁護密場、守衛國家矣、粵當邑氏子等、歸敬尤篤、渴仰彌深、振杓募幹緣、勦力摸華鯨矣、恭兮爲神前寶器、肅兮祈攘災獲福矣。銘曰。

備陽艸戸 稻荷神社 和光普輝 靈驗殊奇 自他與善 鐘鑄遺爲 響融有頂 聲連泥梨 常慎說法 法爾祝詞 成就菓穀
風雨順時 家饒國治

享保十一歲柔兆敦將初夏穀日

撞初 氏子中 行事 當村講中

治工 備中小田郡矢掛村住人 高艸定右衛門

別當 明王院阿闍梨權大僧都法印 觀意上人謹書

船町與六と云もの、娘、夷町古道具や源五郎方へ嫁す。明和九年の春、笹屋平藏と云もの、不義有、仍て離別しけるが、此女無據して此鐘撞堂に來りて首を縊死す、それに付、鐘を碎き、鐘撞堂を崩し、土を五尺掘去。首を縊しは二月八日の事也。

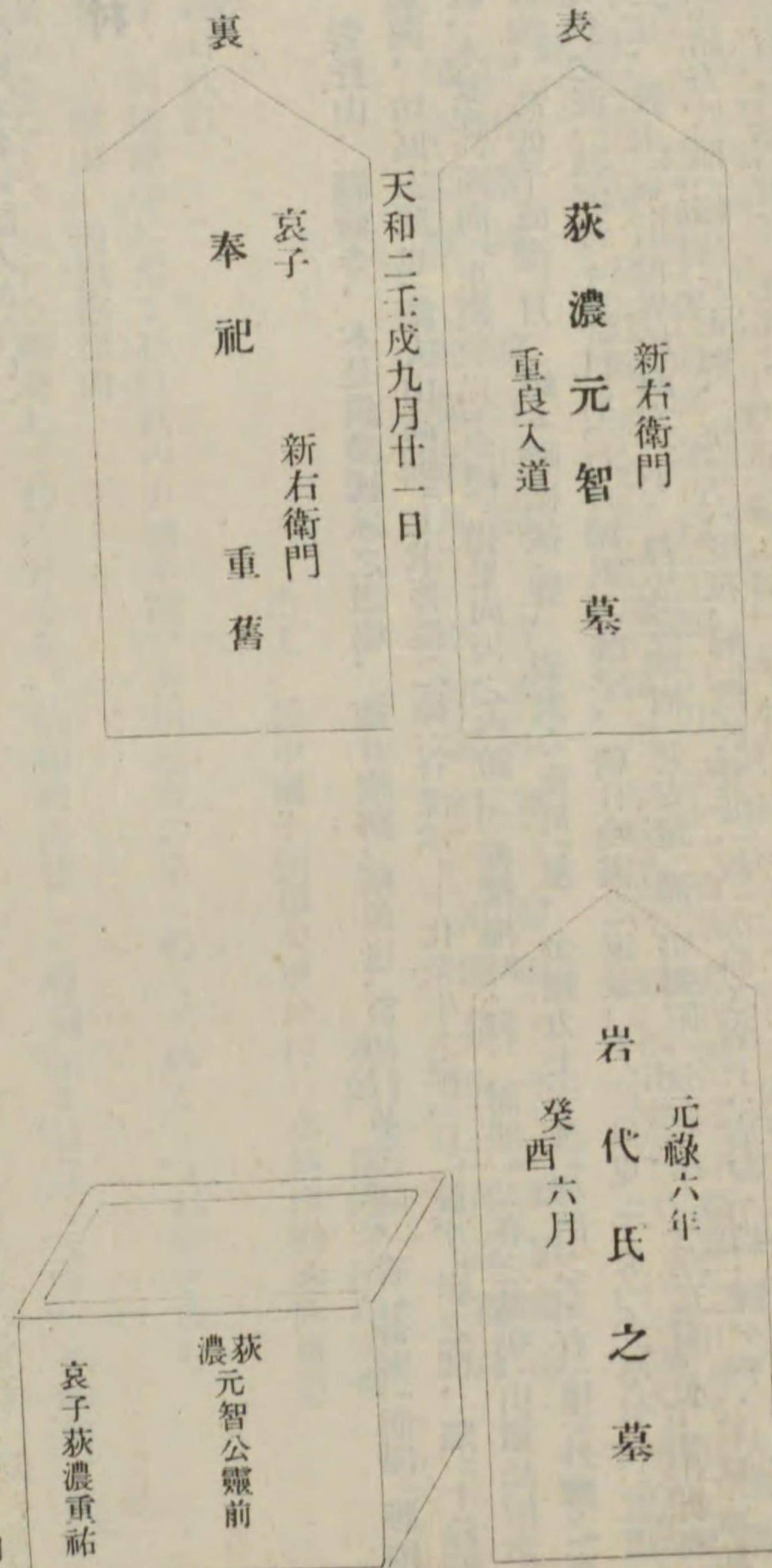
半坂の山上に水野家の侍、萩濃新右衛門墓有。石の駒よせ、石燈籠なども崩れ、手水鉢ハいつのころよりか日光寺の庭へ取越、夫婦の石塔計殘侍り。

此所は水野家の御代、萩野氏か山庄なり。萩野元智、男子貳人有。嫡子新右衛門、次男庄右衛門と号す。庄右衛門幼少より小姓に被召使、生長に隨て殊之外強勢にて我儘募りければ、御暇被下、此所に住居し、人を人ともせさりけるか、學問を好て淺見重次郎門弟となり、朱子學を專とし、餘ほと名高學者なりき。男子壹人、新五郎、娘貳人有。壹人は三原の家中、戸田求女妻、壹人は三

次の家中、松村儀右衛門妻なり。

新五郎は土井甲州公に事へけるか、聊の事有て打果して死す。

庄右衛門は老衰の後此所を沽却し、福山妙法寺沖に暫住しけるか、三次へ行、八十歳余にて卒す。常に眼を疾ける故、自ら目拂翁精義と号す。三次へ出立之時、某(著者の自稱)に近思録一部を被遺置。此近思録は淺見重次郎講席にて、庄右衛門書入をせられ、安田景純と云者、加筆しけるとなり。兄新右衛門は水野公の御代貳百石給り、物頭を相勤む。間部越前守詮房公は、新右衛門か僕の子なり。詮房公御出生之事、福山春賀少(小か)路之所に委。元祿の始、詮房公段々御出世にて、發光並ひたまふ方なし。或時水野勝種公へ被仰けるは、御家來之内、萩野新右衛門義は無事に罷在哉。某、由緒有者に、い間、御目かけられ可被下、久敷對面不仕と有ければ、則、新右衛門を江府へ被召、間部越州云々と宣ひける故召寄けるなり。越州の屋敷へ罷越、今度出府仕たる山可申入と被仰ければ、奉畏いと御請申上、騎馬供廻美々敷出立、詮房公の屋敷へ行ける途中にて、詮房公に行逢ひけれ共、新右衛門は不知して行過る。詮房公目早く見付玉ひ、御駕籠を被立、徒士を以て新右衛門を召ければ、難有旨申上、それより勝種公の御前へ罷出、今日途中にて越州公へ謁し奉りし處、御懇意被仰い。私儀いかなる由緒御座い哉曾て存知不仕い、參上仕い者、由緒之儀可被仰聞にていと申上ければ、何分明日禮に可罷越と被仰。偕、翌朝、越州公の御屋敷へ行ければ、御居間へ可通由被仰出、則、膝行して二間程隔、御目通へ出ければ、彼是御懇意之上、隔心は無用、是へと被仰ければ、平



伏して御顔を不見上。平に是へと頼に被仰ける故、御居間の内へ入、御顔を見上、御挨拶も不申罷立、一散に駈もどり、勝種公の御前へ出、越前公御尋御座いとて出府被仰付、今日彼越前公と申を見申候へは、私召使候僕か悴子にて候。私頭を下るもの天下に御壹人より外無御座候。然に何ぞ彼小世伴か尋申たること、遙々召寄給ふ事、心外千万に奉存候。明日は早々御國へ出立仕いと申切、翌朝、江戸を發足し歸りけることかや。詮房公、新右衛門か舉動をきこしめさうりけるか、又は舊恩を思召忘れ給はさりけるにや、勝岑公御逝去の後、詮房公の御在所へ罷越ひへ、御扶持可被下との事なりけれども、彌、我を立て不行、當國三次へ立去ければ、淺野土佐守長澄公より捨扶持として五人扶持給り、一子多宮貳拾石三人扶持にて被召出、淺野富次郎公御逝去以後、廣嶋へ被召使となり。

當村と佐波村の境に、茶釜共住居する所を城山と云。是、日像上人開基の一乘山法華寺の跡なり。此所の茶釜共、往古より法華宗にて、今は悉、常國寺の檀那なり。渡邊出雲守か城跡と云は謬なり、出雲守か城跡は當村の中ほと鳥越と云所に有。

古城壹ヶ所 鷹ノ取 城主 渡邊(原本名の記入がない)

山 手 村

寺三ヶ所

眞言宗

萱野山

瀧藏寺

鐘銘

備之後州、沼隈(隈)郡、山手村、萱野山、瀧藏寺、本是鎮護國家之道場、觀音應跡、精舎也、當初行基菩薩、看_ニ奇峯_ニ而開_ニ勝地_ニ、創_ニ伽藍_ニ而崇_ニ佛陀_ニ、其時也諸堂繁興、坊區宏麗也、觀夫山高顯_ニ上求菩提之德、谷深示_ニ下化衆生之粧、自_ニ麓至_ニ嶺之間、隔_ニ十餘町_ニ許徑路、即是形_ニ十地波羅蜜之階級、本尊從_ニ西向_ニ東鎮坐、是亦標_ニ從果向因之內證、寺前櫻梅時_ニ發、而催_ニ三春之遊樂、山頭松栢常_ニ榮、而除_ニ九夏之暑氣、滔々大河前流、高低千波濯_ニ月、峨々峻嶺後_ニ聳、表裏万重屏_ニ風、金剛力士守護_ニ樓門之左右、摧_ニ外魔之軍、堅固城郭、卓爾村落之東西、退_ニ夷狄之波、救海漫々_ニ遮、目前、行舟歸帆之眺望、朝日晚霞之遠景、不_ニ往自見_ニ千界、不_ニ勞乍到_ニ雲漢、正是菩薩恒佳(住)か之仙屈(窟)か也、誰求_ニ無垢世界於南方_ニ乎、善哉當尊栖_ニ遲安養_ニ補_ニ如彌陀_ニ、分_ニ孤岸_ニ、月_ニ浮五濁_ニ、水_ニ得_ニ止觀_ニ、翅_ニ翔大千_ニ外、飛_ニ鳴三界_ニ六趣_ニ、愍_ニ念諸方八部_ニ、賴_ニ哉八正_ニ、快_ニ哉六度_ニ、解_ニ纜於愛波_ニ、救_ニ沉淪之溺子_ニ、寔_ニ湯々焉、巍々乎、大悲_ニ願、度_ニ生誓_ニ、獨_ニ在此尊_ニ者歟、雖_ニ然物有_ニ興廢_ニ、世有_ニ盛衰_ニ、中古不幸_ニ、罹_ニ回祿之災_ニ、闔山爲_ニ焦土_ニ矣、于_ニ時尊容忽飛_ニ揚空中_ニ、威然

獨復_ニ本坐_ニ、無_ニ人皆不_ニ作_ニ奇異之思_ニ、故_ニ早再_ニ建_ニ一堂_ニ、安_ニ置尊像_ニ、捧_ニ香花_ニ、致_ニ供養_ニ、儼_ニ然于今_ニ矣、只_ニ恨_ニ未_ニ掛_ニ鴻鐘_ニ、更_ニ無_ニ報_ニ晨昏_ニ、因_ニ是頃年_ニ、當國大守水野日向守勝貞公、勸_ニ庶黎_ニ、請_ニ助成_ニ、遂_ニ乃鑄_ニ花鯨_ニ、以_ニ庄_ニ(莊)か_ニ寶前_ニ、晝夜鳴_ニ之_ニ、不_ニ斷響_ニ之_ニ、使_ニ普驚_ニ覺_ニ群、眠_ニ昇_ニ摩尼殿_ニ、殊_ニ新鑄結緣之儔_ニ、大悲契諾之族、當_ニ釵輪_ニ去_ニ、空脫_ニ惡趣苦縛_ニ、現_ニ厄難悉除_ニ、期_ニ梅花幾春_ニ矣、一日就_ニ予_ニ頼_ニ乞_ニ寫_ニ景福_ニ、以_ニ饋_ニ鐘_ニ、不_ニ得_ニ固辭_ニ、適爲_ニ銘曰。

慥推_ニ新鐘_ニ 功德無邊 豊山霜潔 湘江月圓 音通沙界 響震大千 群類驚夢
衆聖垂_ニ權_ニ 般若標出 曼荼張懸 野促農具 水送客船 朝儀暮悔 書誦夜禪
伽藍永切 國家安全

本願 當住寺法印有辨
治工 備中國小田郡矢掛村住 高艸清助藤原盛重

于時寛文元辛丑稔二月如意珠日欽白

古城壹ヶ所

宗岡伯耆守

同備前守

同播磨守

至

至

至

曹洞宗

大鏡山

三寶寺

開山 夷嶽伯和尚

當寺は法燈國師の開基にて、五山派の寺なり。一たび斷絶して侍りけるを、伯和尚再建して曹洞宗とはなりたり。伯和尚、天正九年十二月に遷化せらる。

杉原氏の菩提所にて、位牌石塔など有も、假名、實名、過去(帳)の字を脱せるか)にも記さ、れは、いつれと云事不知。
自峯幻性童子 劫外 成久居士 月心性中居士 桃翁 虎仙居士 以上過去帳に記有、共、年号も無之、杉原氏と計有之。
岑芳善松居士 杉原左京進 天正八年四月廿六日。 本室理光大姊 天正八年四月廿六日
右左京進夫婦と見へたり、命日同日なれば殃死にて有へきなれども、いかなる所謂とかたり傳もなし。
玉窓妙林大姊 花翁原春居士 元盛 天正十年十月廿六日
盛重寺殿前播州大守大安宗廣大居士
盛重は伯州八橋にて卒去せらる、江良の光徳院に有所の位牌の法名とは違り、いつれか足ならん。

鐘銘

山陽道、備後州、沼隈(隈)郡、山手村、大鏡山、三寶禪寺、粵以無洪鐘、爲虧法器有于茲年矣、物有時節因緣也、人發信心亦然

也、今也地機相應之時哉、是龍集乙未夏五月、日信高橋權左衛門、發起信心、慮鑄華鯨以誥日信中、日心(信か)舉而同信心故、如鐘之響普告詣方、廣應請信力衆流聚似巨海、寶功積如聳九仞山、豈謂大器成勉乎、同福九月中浣、附治工開鑪鑪橫筋速圓成、以掛于當山、永資於於(於字一字は愆か)佛事、往昔竺土須長者、鈞金鐘於祇園精舍、與資聖化異而奚異也、夫爲器也、全軀銅而通身是口也、隨撞擊應洪纖殷々、然而覺長夜之眠、振幽冥之苦、六和警晨夕禪誼四民勵晝夜行業、聲々脫苦、聞々出塵、六道四生偏赴、嗚呼如此爲大功德爲無窮、是時節因緣所應、而信心之所致也、檀信懿哉、鐘聲之惠盍。

檀信抽衷 鐘成願充 金剛開口 雷音震雄 振苦與樂 應繼應洪 號令佛界 驚愕魔宮 吼芦華月 殷楓葉風 了々離垢 醒々發蒙 天長地久 國福檀豐 壽考無尽 三寶紹隆

正徳五乙未年九月如意珠日

現住 默潭誌旃

治工 御調郡宇津郡戸住 橘丹下專右衛門實賀

三寶寺は、街道より一丁ほど西北の方に見ゆる山寺なり。其道の西の方を大閣屋敷と云。朝鮮征伐の節、秀吉公、九州御發向の時、御宿陣之所なり。元和の比迄池鯉鮒宮などの御茶屋のことく、築地有けるか、いッとなく崩て、纔なる草社一字残り、是則豊國大明神なり、九月廿七日を祭の日とし侍る。當時にては豊國といふ事を憚て荒神と稱す。白場と云所あり、御陣之節、米を搗たる所也。其節焼餅を賣老婆あり、御著陣早速、焼餅を獻す、御悦喜不斜して、御自筆に一通を被認、御手目、扇子箱入、封して老婆に給り、是は大切のものなり、必封を切事なかれと被仰。老婆謹て頂戴し、身を不放、末後(期か)に臨て其子に謂て曰、此壹封は太閤公自書して後世迄、封を開事なかれと示して給る所なり、子孫まで能傳よといひて死し侍り。今子孫に傳へて、いかなる物といふ事を不知、定而給地除免の御墨付成へし。元祿檢地の節出したらば、万ニ一も被取上事も有たらんに、誠に證文の出し後れに成侍り。

(校訂者いふ。以下光明山照圓寺の記事は原本では「外篇」分郡二の末、敷路村の終つたところに、白紙一枚を置き、其の次に記してあるのであるが、按ずるに山手村の部に「寺三ヶ所」とありて、たゞ瀧藏寺と三寶寺の二ヶ寺が記されてあるのみで、三ヶ寺は無い。全く山手村に照圓寺を脱したので、此の卷の最後に著者が追記したものであらうとおもはれる。依て原本の末に在りしものを校訂者の意見で茲に轉載することとした)

淨上新(真か)宗 光明山 照圓寺 山南村光照寺の末寺なり。

鐘銘

備後國、沼隈(隈)郡、山手村、光明山、照圓寺、仰吾祖風、以轉法輪也尙矣、曾遊此地、有障連、北烟雲遠平野開、南民家是多、

况東西通驛路、往來人不斷也、是以轉法輪、則聽從雲如集、寔弘教之一靈場哉、默而未罷掛洪鐘以備晨昏、惟夫鐘者、梵區之高標、助機應之大器也、故元(无か)三世轉法輪、皆不鳴鐘而告衆矣、今之住持超倫、欲鑄洪鐘以備晨昏者有年焉、方今明和壬辰春、頻募檀嚙、以四月二日備冶工、開鑪鑪新鐘一時範成矣、乃乞銘於予、予曰、捷乎勳業晨昏撞擊之、自西自東、自南自北、善男善女聞而雲集、宏仰祖風、以轉法輪、實梵區之高標、助機應之大器哉、遂作六韻、應其求云、銘曰。

新鐘鯨鐘 震驚天地 響制魔軍 聲作佛事 破長夜夢 醒無明醉 鬼啓幽愁 人發眞智 禾穗幪々 國家安易 吁善冥郡 永得大利

明和九年壬辰四月廿八日

願主 山南村明石山釋月燈竺猷和南

惣門 徒 中

治工 御調郡宇津戸村 丹下武左衛門

本 庄 村

寺壹ヶ所 眞言宗 眞榮山 圓照寺 本尊樂師 中興開山宥海法印

客殿(原本何の記入もない)

當寺は往古より山田村にありけるか、常國寺日保、水野家の崇敬によりて光林寺を始、いつれも改宗させ常國寺の寺下とす、仍而圓照寺も改宗して寺下となるへしと、時に現住宥海忿逆して不肯。しからは他に移るへしと頻に被責、是非なく當村の中嶋に移住す。寛文十三年、洪水にて寺を押し流し、宥海、漸、命を助りたる計にて、過去帳、什物ともに悉流失す。故に宥海以前の住持、其外の傳記の事相しれず。

鐘銘

備後深津郡本庄村眞榮山圓照寺鐘銘
爰寂爰虛 法性發訝 以動以震 功庸紛拏 非寂非動 薰發道芽 波若玄微
維德蔑加 圓照之寺 光音易涯 平安沙門八十翁道空謹銘

于時延享二年次乙丑三月六日

當寺第五世沙門澄寂兼上人
治工 當國深津郡手城村 渡邊幸右衛門信
彫字 保井彦六武明

辻堂四ヶ所

地藏堂一ヶ所 下井手樋脇 觀音堂一ヶ所 池道 地藏堂一ヶ所 新屋敷

藥師堂一ヶ所 池の縁に有、青木かはなともいふ。草戸明王院中興開山有仙法印住居せられし庵の跡なり。勝成公、元和五年、和州郡山より御所替にて神邊へ御入城有。然とも廓内狭く殊に北追手にて御心になはす、仍而御領分中の古城地を順見し玉へとも宜敷地なし。爰に野上、本庄、木庄、三吉、吉津五ヶ村の境に常興寺山といへる有、窮竟の地にて、南の方を福山と云なれば吉祥の地是に過（すか）と、遊獵なから此所まで御順見有。時しも霜月の末にて、さむかりければ、此庵へ立入玉ひけるに、老僧一人、小麥餅を焼て居たり、殊之外寒く空腹にもなり侍る、其餅一ツ給れと仰ければ、こし（れか）めせとて盆に載てまいらせ、我も喰て火にあたり居ける所へ、御供の人々來りければ、此僧大に驚轉し、いかなる御方ニ而御座（は）哉、無禮之段眞平御免といひければ、某は日向守なり、和僧何宗にて、名は何といふと問玉へは、有仙と申、眞言の僧にていと答ふ。方々城地を見立、漸に能地を得たり、地蔵をして給なんやと有ければ、夫こそ眞言家にて（の）仕事にて御座（は）へは、御意之趣奉畏いと御請申上る。勝成公御悅喜にて地祭を被仰付、則御祈願所の住職に可被成と約束したまひしとなり。御城成就のち御城下、神嶋に明王院を御造立あり、有仙を被指置、御祈願所に被仰付。夫より後、明曆三年に此藥師堂は建待ると、水野家の宰人、富田志計物語なり。此堂の傍に周廻貳丈の大木有、常盤木有、葉は楊梅のごとくに花さく事なし、其枝を折て嗅に、甚香しく肉桂なごのこし、其名の（を）か知る人なし、四時ともに枝葉青々たるゆへに青木と云。仍而此邊を青木か端といふ。

尾の道往還土手の外を礫場といふ、宗休公御代の斬罪場なり。當時も此所より西之方、青木かはなの北へ少々よりて前地と云所にて斬罪を行ふなり。礫、獄門なごかりたる事はなし。右の御代、茶毘所も此邊なりしか、西風の時は御城内へ匂ふ故、三吉村へ被替。土手の内を樋の口といふ、穢多村なり。むかし此所に樋有、夫故、樋の口といふ、其の樋は寛文十三丑年洪水にて潰れたるよしいひ傳ふ。左にはあらず、此穢多とも、當むら宮の下鹽田の樋の口に住しける故、樋の口の穢多といふ。當城成就の後、甲崎より城下へ用水をまわす水道の水上に、彼等を置ては不淨なるゆへ、此所へ移さる。昔よりの唱号となりて樋の口の穢多といふと。此所の長を杉原五右衛門、同松若と云。彼等か先祖は海賊にて、九州往來の船を掠め、米穀を奪ひ取り、神邊の城へ入ける故、

盛重、甚、調賣せられ扶持而被置けるか、永祿十二年、盛重九州に赴かれたる留守を伺ひ、藤井皓玄、大江田隼人、八月三日の夜、神邊へおしよせける。此時彼等か先祖大に働、粉骨を盡すといへとも、城中無勢なるゆへ、なんなく城をは乗取らる。二度、盛重歸城のち、彼等か働を感じ祿を増、剩、杉原と名字を給る。紋は代々、丸の内に樋を付侍る。扱又、盛重の墨付を五右衛門か祖父九郎兵衛代迄持傳へ、晝夜首にかけて身をはなさす、九郎兵衛死しける時、件の墨付を棺に入れて葬しとなり。可惜々々。

神社九ヶ所

良大明神 本社 前殿 石鳥井（本社前殿石鳥井とも原本に何の記入もない）

安永二年神輿一躰出來、行幸はしまる。

祭禮（原本何の記入もない） 水道袋樋脇に有。

牛頭天王 東光寺二有

稻荷大明神 宮本

荒神五社 下井手樋脇 新屋敷 中嶋

生土八幡宮 本社 前殿（本社前殿とも原本何の記入もない）

- | | |
|----|--------|
| 神主 | 五郎助 |
| 禰宜 | 池田采女 |
| 禰宜 | 右同 |
| 神主 | 黒瀬與右衛門 |
| 禰宜 | 池田内匠 |
| 社僧 | 圓照寺 |

差出（差出帳のことであらう）之外。歳大三橋脇土手 妙見 大手 地藏 五條往還に有、郡足輕沖惣兵衛建。

折地藏 五條往還の脇に有、此所のホノケを折地藏といふ。石佛の折たる御首を安置す。地藏の御首にはあらず、藥師か阿彌陀の御首成へし。

村内野上境か甲崎迄壹里八丁、長者町境か山手境迄廿五丁程。

木之庄村

神社拾三ヶ所

生土八幡 社貳間四面、濱床 前殿五間 貳間

石鳥井 正徳五年八月ニ立

- | | |
|----|------|
| 神主 | 太兵衛 |
| 禰宜 | 善太 |
| 禰宜 | 吉津中嶋 |
| 禰宜 | 因幡守 |

水野公の家臣、平手與左衛門、椋板の楯を射抜て箕共に當社に奉納す。

荒神五社 三津木 清淨寺谷 下かいち ねきさこ無社、十二神一所ニ有無社 ひし屋

牛頭天王 仁五 若宮 三津木 王子 中間

熊野權現 三津木 棟札有

伏以當社權現創造之迹鴻古遼矣、傳云遷紀伊國熊野權現也、梁上餘元祿辛未歲五月日奉再興之十餘字、而癡(廢か)頽日甚、今茲延享四年、歲次卯卯秋九月、戮力一心、復創土木之功、不日而落成、爰十二月丁卯日、奉遷幸新殿、唯願權現、垂清々之德、而寶祚無窮、國家安泰、民間永無風雨之災、人物交祈、庶富之裕、敬白。

延享四年卯十二月十一日

祠官 中嶋肥後守藤原相光

稻荷貳社 一社 ねきさこ、數計にて無社 一社 三津木 神主久太郎といふもの梓を能しけるか、寶曆六年に死し、女房も其

翌年死して、娘壹人有けるか、乱心し侍り。

牛神 猿神 此二神、ねきさこに有。いづれも數計にて無社。

三津木觀音堂 下加茂空觀音、山手萱野觀音、三津木觀音、一木にて行基の作なり。元祿、寶永の比、福山光善寺の弟子教可といふもの住しけるゆへ教可堂といふ。

ごんをう水 元祿の比、福山洞林寺の支配、以稱庵といひて清淨寺の西脇に道者の庵有、いつの比にか斷絶し侍り。此所に清冷なる井有て、茶湯數奇するものども汲せけるか、欣翁と云者住しけるゆへ、欣翁水とてはやしけるとなり。

樂師堂貳ヶ所 一ヶ所、ひじや 一ヶ所、清淨寺

寺壹ヶ所 曹洞宗 三津木山 翫光寺

行基菩薩開基の所なりけるか斷絶し、名計口碑につたへて殘ける。福山弘宗寺四世、雪傳和尚再興せられけるなり。

郷 分 村

三光寺渡 九州往還の渡なり。水野家の時、藝州の飛脚此所を通りけるか、渡錢を乞ければ五錢あたへて通りぬ。其後此事相聞へて梟首せられけるとかや。古、此所に三光寺といへる寺ありしにや。

古城壹ヶ所 皆知出雲守 狐平と云所に民家四五間有、此所出雲守家老の屋敷跡といひ傳り。

堂四ヶ所 樂師堂 觀音堂 貳ヶ所共に寺谷にあり、山手村三寶寺の支配なり。地藏堂壹ヶ所、往還に有けるか、寛保の比、宇佐八幡へ勅使御下向の節被崩。又壹ヶ所は以前に倒れて在所をも不知。

光音殿の入道首といひて、大なる石地藏の御首、九州往還に有。光音入道此所にて討死し、其墓に居たる地藏の御首なりといひつとふ。瘡、虫齒などいたむもの、願を立れば甚驗有。其子孫毛利家に事て此所通行之節、件の首に向て斯いやしき願をはき、給ふとぞ誠ければ、其後ふつと驗あらさりけるか、此近きころ、瘡、虫齒などは勿論、諸賈の事を祈るに利生有とて、往還の賈人、初穂を奉りて、寛保の初、少(小)かき石の厨子を拵、安置し侍る。光音の末葉、神石郡(校訂者曰、安那郡であらう)山野村にも有と云。陰徳太平記十八日、備後國外郡志川瀧山の城可被攻とて、天文十年(二十年であらう)七月毛利右馬頭元就、同嫡子備中守隆元、吉川治部少輔元春、小早川左衛門佐隆景父子四人、三千八百餘騎、彼表へ打出、同廿三日諸手一時にせめ登る。城主宮入道光音は、聞る大功之者なりければ、從者いづれも勇者共にて、多勢を肩ともせず、僅三百八十騎を東西に分、南北をたすけ、敵勞れは打て出、強ければ引て入、強柔を相兼、奇正時をもつてた、かいける故、毛利方に、坂新五左衛門、遠藤左京亮など手を負、吉川勢に今田上野介經高、吉川左近太夫、(一本此所に平佐右衛門太夫がある)柏村四郎右衛門、十川孫太郎、綿貫又七郎、樋口彦六、相良又五郎、綿貫助次郎、河村與次郎、樋口三郎兵衛、栗屋左京亮、石田新四郎、以上十九人、小早川勢には兼久又六、谷權兵衛を初八人、矢疵鏑疵を蒙りけり。されども諸勢些とも臆せず、手負をふみこへ、(一本乗り越えがある)、おめき叫んで攻けるゆへ、城中流石小勢なれば、諸手一度に勞て、一方破るゝやいなや、四方ともに崩れて落行けるゆへ、光音せん方なく、搦手より、ひそかに落て備中國に暫蟄居して居たりけると云々。此後、光音死生の事不相見、又此所にて軍の有し事を不聞、定而光音由緒のものありて菩提の爲に地藏を立置たるなるへし。

神社

生土八幡

生土比和大明神 石原谷に有

王太子 草木谷瀧の奥に有

天神

さかい谷に有

荒神

草木谷

さかい谷

別當 福山松 山 寺
別當 福山實 相 寺

森 脇 村

卒都婆往還

府中石橋南の方を卒都婆か淵といふ。岩成光臺寺繁昌之節、例年七月此所にて施餓鬼をせられし所なり。下山守

外

篇

分郡之二

比和峠より此所を見れば、淵の中に大なる卒都婆一本見へ侍り、近く來りて見れば見へす。寛文之末、元祿の比にや有けん、當村に太郎兵衛といへる福悠の百姓にて馬を飼けるか、彼か世悴十二三計なるか野飼に出、何とかしけん、頼にそはへて世悴を嚙殺しぬ。太郎兵衛悲いかり、朝より暮まで何遍ともなく、駈を追ひければ、流石肝(野)強なる馬も大に弱りける所を、此淵へはね込ければ、騰事ならずして死す。夫より以後、件の卒都婆見へ侍らすとかや。

生土八幡 本社 壹間半 階濱床 舞殿 貳間

石燈籠貳箇 貞享四丁卯八月建之。

石鳥居 元祿十五辛巳年、森脇邑、上岩成村、下岩成村、氏子建之。

宮なり。

三ヶ村の産神なり。祭禮八月十五日、唯一の禰宜 夏目田 豊 後 守

權現 境内に有。寶永の頃、當村に小兵衛といふものあり、乱心にはあらず、韃なるものなりけるか、八幡の神垣の外に田地有、居室を普請し地形土を此田地より取せけるか、此土中に權現ましますと夢の告有、御正躰は加様の形の石なり、疑へからすといひけれども、常々そゝるなるものいふ事なれば、信にするものもなかりけるか、果していふ處の石有、則託して曰、我土中に埋るゝ事年久し。今より能、祭るへし。當むらに於て火災を可防と有ければ、當社の境内に祠を建て、小兵衛壹人信じけるか、寶永以來、村中に火難なく、適々手あやまち有ても忽に消、或は夢の告有て燒亡に及ふ事なし。仍而一村の者共、日々信心深く、寶曆九年の春、寶殿を建。尤、九月十五日を最初より祭日と定め侍れども、金比羅共あたこともしれず、權現と計、稱し侍る。

荒神二社 大土手 中市

四つ堂貳ヶ所 一本木 田口

寺貳ヶ所

淨土眞宗 万年山 誓蓮寺

山南光照寺の末寺なり公義(儀)差出(帳)を脱せるか)には法藏坊とあり。

同 滿行寺

光照寺の寺下、勸正坊の末寺なり。近邊の諺に、滿行寺の雞、宵の口と云。當寺、古は富體(饒か)なる寺なりけるか、不幸打續、世柄あしく、いつとなく貧地となり侍る。むかし豊なりける時、壹人の娘有、僕と蜜(密か)通す。夜並に下男は繩を綯、下女は糸を取て夜を深しけるに、彼僕、竹笠を鶏の啼の下へ持行、はた(と)叩ければ、女鳥の羽叩と心得て時を作りければ、今宵は

はや一番鳥になりたこと、宵のほどなりけれども仕事をやめ侍り。是より云傳て夜並をはやく仕廻、或は仕事を半に止るものを、滿行寺の鶏、宵の口といふ。夜をこめて鶏の空音と詠したるは、關をゆるさぬ清少納言か、かこちの詞。竹笠をたゞきて宵鳴させしは家僕か手管。貴賤の品はかはりぬれども、孟嘗君か計策、古今都鄙とも、戀路の方便と。拊笑々々。

藪 路 村 八風呂共

入江大藏か屋敷井石塔、本谷と云所に有。右屋敷は組頭宗五郎か屋敷也。近比迄、外撃の跡、四足場など有けるか、今は藪になり侍り。大藏、力ためしの石有といふは虚説也。石塔は屋敷の向なる山に有。正徳の比迄、福山より由緒の人と見へて、毎歳盆には詣て水をも手向けるか、近比は左様の人も侍らす。宗五郎、心有者にて、寶曆のはしめ石灯籠を立て、盆などには燃し侍り。神石郡、父木野にも大藏か墓有。大藏勇力の事、陰徳太平記に有、後得録に委し。樵牧の話に、大藏は七十人の力有、楠の大木を人足百人にて、山手村、俄越を通りけるか、峠迄登りけれども、下り坂になりて道険しく、磯の細道にて、下は數十丈の谷なれば、大勢の人足共おろ(此邊に缺字あるか)ならず、後へもとる事はなをならずして狼狽しける處へ、大藏通りかゝり、見兼て先端を一人に撥上、難なく峠の細道を下りけるか、肋骨盡くはつれて死しけるとかや。俄谷に古き石塔有、是を大藏か石塔といふ人有、左には有へからす。按するに、死したる所にて直に葬事は有まし、宅へ連歸りて養生など加へたる成らん。又父木野は、大藏居城の地なれば、家臣等石塔を建置たる成へし、埋葬の地は此所に決せり。

宮四ヶ所

藪路、坂田、両生土 八幡 本社 壹間 前殿 九尺

神主 太 兵 衛
禰宜 中 嶋 因 幡

天神

當村には、寺院、辻堂も無之。宗五郎發端にて、三間屋の上に庵を建、寶曆九年七月、福山寂圓寺の弟子、智道といふものを住せしむ。

告ぬこのたまひて

ほととぎす、鳴や五月の、山中に、おのか古巢の、名残惜みて。

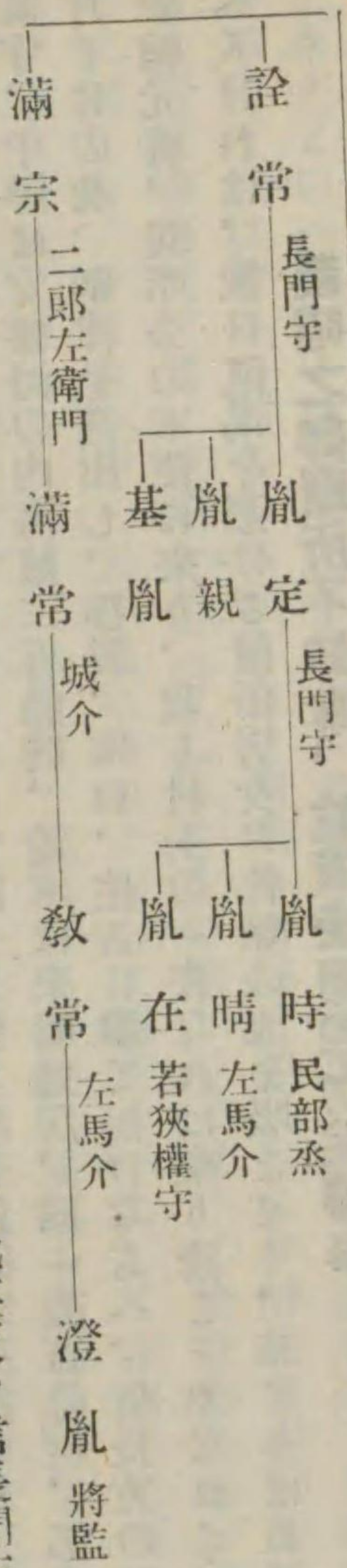
斯て山路を過させ給ひ、近江國甲賀郡に着給ひ、和田和泉守か宅に暫忍ひておはしけるに、三好一族共、御行衛を訊て尋搜事な
ければ、同國矢嶋に移給ふ。三年を送らせ給ひ、爰にて御還俗御座しまし、御名を左馬頭義昭と自官し給。鮫(蛟か)龍か來復の時
を待こく、深く蟠ておはしける。去ほととぎす(足利普譜か)代の郎從忍齋しておはしける由傳き、ふた、ひ天下の主と爲んと馳
集、宗徒の人々には、仁木伊賀守、大館治部大輔、武田大膳太夫、三淵大和守、京極近江守、沼田彌十郎、上野中務太輔、同佐渡
守、和田伊賀守、同雅樂頭、飯河山城守、同肥後守、二階堂駿河守、横嶋孫六郎、曾我兵庫頭、大草治部少輔、野瀬丹波守、飛鳥
井左中將、中坊龍雲院、伊勢守貞孝、御敵追討の計略おこたらず、先當國の守護人佐々木左京大夫義賢入道拔關齋承禎を頼玉ひ、尊
氏より十四代の天下草創したまはんとて、藤高を以て再往頼せたまへとも、國內一和せず。剩、嫡子右衛門督義弼、三好と一味し、
義昭を討奉覽とす。是をき、給ひて若狭の守護武田大膳太夫義統は歴然の御妹婿なれば、一先急難を免給はんとて、八月十五夜の
深更に、矢嶋の郷を忍出、田の浦より船に被召、若狭の小濱に着給ひ、武田か館に移しまいらせ、困遑渴仰他に異なれとも、分國
狭、勢ひ微にして天下草創の御謀更に決せず。又越前の方へ急せ給ひ、九月朔日、國府の龍門寺に着座し給て、長岡兵部、上野佐
渡守を以て朝倉左金吾義景を頼玉へとも、曾而同心せず。却て逆心のはかりことを廻すゆへに、越後の輝虎を頼玉はんか、甲斐の
信玄を頼たまはんか、評議區々にて、義昭朝臣思慮已に盡させたまひて、春日大明神へ御祈誓有。其夜靈夢を蒙玉ふ。自是南方
尾張國、平の清盛か末裔有て、源氏の世を奪はんと憤り、生を流轉する事三百六十餘年也。近頃蟲と生れ、其形馬となりて主を待
馳とす、かれに乗者かならず天下を治んと夢見給ふ。則博士に問玉へは、尾張國織田信長、平氏の末にて天文三年甲午に生れ、
本卦蠱なり、信長を頼せ玉ひて御行跡正敷、馬にのらせ玉は、天下を治給へし。違反ひは、必後災可有と申けるゆへ、永祿十一
年七月廿三日、越前の國府を御立有て三百餘騎を從へ、同廿五日、美濃國立正寺に着たまひ、長岡兵部太輔藤高、上野中務太輔清
住を以て頼被遣ければ、信長早速出仕を遂、いとかい、敷たのまれまいらせらる。同九月、近江の佐々木承禎、同義弼を征伐可
有とて、信長四万餘騎を率し、箕作、和田山の城を責落す。佐々木父子は觀音寺の城に籠けるか、目加田攝津守、伊達出羽守、三
雲新左衛門諫言して開城させければ、佐々木か門葉の城一日に拾八ヶ所落城して、近江一國忽平均す。都には左馬頭義榮を大樹に
備へ給しか、九月十三日、疔疽出來て逝去せらる。信長急は、やむを立、御上洛可有由を達しければ、義昭を初奉り愁眉忽ひらけ、
九月廿一日、美濃國立正寺を御發駕有、廿八日義昭、清水寺に安座し、歸洛仕段奏問有。十月十八日、參議左近衛中將從四位下

征夷大將軍に叙せらる。信長、彌、忠節を盡すといへとも、元龜元年義昭將軍赤情の御思慮を驪し、信長と中絶有。越後へ上野清
信を下され、白井胤定をかたらせ給ふ。胤定謹て將軍非義の御政道故、信長と不和にならせたまふ事を再三清信に諫言す、屈伏す
るといへとも治定之旨なし。

白井家系 千葉之一族

胤宗 白井小太郎 中務少輔 胤友 胤通 五郎兵衛
承久ニ宇治川ヲ渡、大功者也 胤胤 家督ヲ論シ下總ヲ立退

胤秋 七郎 胤經 小太郎 胤榮 判官 道素
是迄四代浪人



信玄、謙信に御内書を被下けれ共、御請をば申て上洛せず。此謀反を信長聞玉ひて大におどろき、君不爲君とも我臣義に背ましと、
悲歎の泪を垂、忠節は不動共、内に、いか様の蜜(密)謀を給けん。

後太平記四十一日、長岡兵部太夫藤高一人、能、天下の興亡を計り、御謀反のこと思召止りたまへかしと諫言しければ、却而甚憎
思召事甚し。元龜二年五月廿五日之夜、義昭公、室町の御所を忍落給ひて、眞木の嶋に打入、東國西國の加勢を待給こそ淺ましけ
れ。信長六万餘騎を卒(率)し、將軍貳千餘騎にて籠給ふ、眞木の嶋に押寄、大手の櫓に火を放せば、黒烟天を燒、鬨の聲、地を振
ふ。將軍心靜に腹を可切と、甲の丸に移給ひて、敷皮敷せ、おし肌ぬかせ給ふ處に、大草治部少輔馳來りて、毛利三家を頼玉へと
諫ければ、槓の嶋を落させたまふ。かゝる處に一向門跡顯如上人、教如上人より船を被差出、是に乗船して備前國牛窓に着給ひけ
るに、南風烈吹て連日蓬(篷)か裡の御泪せきあへす、狂哥一首を詠し海中に抛入、八大龍王に手向給ふ。

言語同斷、船路の旅は、牛窓の、月の夜汐に、袖ぬるゝとは。
八大龍王感應や有けん、順風に成ければ、備後國鞆津に著せたまふ。是より上野中務、柳澤監物、兩使として小早川左衛門佐隆景

を單にたのませ玉へは、隆景不辭、御請被申。翌日、輦津へ馳上り、八木(米)三千石、大鷹十連、駿馬十疋を獻し、禮義甚厚かりしかば、將軍悦びたまひ、急對面御座す。隆景平伏し、涙を催し、扱も世は定なき習とは乍申、昨日腹心合躰の信長は御敵となり、近年尼子氏族を討手に被向、誅伐の御下知を蒙る。毛利、吉川、小早川、今日より御方に頼思召、是迄の御下向、世の轉變、瞬目を廻らさず。去ながら家の面目、且は我家代々當家の優想を蒙りしへは、など忠心を繼し可申哉。少輔太郎いまた若年故、父陸奥守、某に家督を預置し得は、急き吉田へも申聞せ、御安座を定可申と、先輦の津に城をかまへ、將軍を移しまいらせ、吉見大藏太輔、杉次郎左衛門尉五千餘騎にて城の警衛とし、村上彈正景廣、八百餘艘の兵船を浮て、備中加曾岡の關を守らせ、敵の通路を差塞き、上下の船を斬捕、海上を被警。そのほか中國、四國の勢、悉、圍遶渴仰怠らす。將軍今は案(安か)堵の席にそおはしける。かゝりける處に、大坂一向門跡より使僧を以て、信長六方餘騎にて四角八方を打かこみ、海陸の糧道を絶、兵糧已に盡てい間、毛利、小早川へ御下知有て、海上の通路を被開、兵糧御助成被下度と訴來りければ、先陣は三嶋海賊五艘を被差越、搦手は浦兵部丞宗勝、兵船三百餘艘相順、海賊には末長常陸介景盛、同息儀兼左近大夫、白井縫殿丞、南三河守、同一族、田所新右衛門、島越前守、中陣は安藝河の内海賊三百餘艘、遊軍は來嶋通房、同一族百餘艘、都合其勢八千餘騎、兵糧貳万俵、數千艘の船底に積、七月十日の夜、輦津を漕出し、難波、川口、住吉に繼てかけならへ、信長方の軍卒と大にいとみ戦ふ。こゝに備後國の住人有地民部少輔元盛、義昭公の軍使に來り、我も村上の一族なれば來り逢こそ幸なれと、大にはたらしき。毛利方十分に勝て無難に兵糧を城中へ入ければ、數日飢渴を悲ける僧俗男女、乾魚の流を吸ここく、おとりはね西方極樂は備後國こそ悦ける。

義昭之御廟所不知事、並備後國四ヶ院跡事

義昭公の御廟所と云所、當國に四ヶ所有。所謂三原、輦津、深津、此三ヶ所は書籍に載て普く知れる所也。又分郡津之郷村の山奥に義昭の御所の跡并馬場と云所有。秀吉公朝鮮征伐のため九州御下向の節、田邊寺へ出御有、御對顔有しと。津之郷村の産神は義昭公の像を御正躰とし、三嶋大明神と崇祭る。是則此村にて薨し給ひける所に極れりといへり。所々に三嶋大明神といへる有、何茂義昭公を祭りたるなり。右四ヶ所共に御廟所といへとも薨し玉ひたる所不相知。又御廟所といふ所三ヶ所有。沼隈分郡水越に古墳有、是義昭の御墓なりと云傳ふ。或人ノ曰、北條時守、或人ノ墓也。又深津村三嶋山に奉葬たる(り)といへり。又曰、東中條村玄洞山廣山寺に葬奉り、本堂の脇に石學を築て大なる五倫(輪か)二軀、少(小か)き石塔貳つ有、是則義昭公并ニ政所其外家臣の墓なりと。其後加茂の寶幢寺廣山寺ノ末寺也、曇法印に尋侍れば、義昭公の尊骸を廣山寺に納奉りたりといひ傳へ侍れども、此寺尼子、毛利取合の節より斷絶して廣山寺といへる号のみ残りて廢跡と成たり。然るに備後四ヶの院跡とて、中條の廣山寺、上下の佛心院、尾道の西國寺、府中の

榮明寺、寺格高祿料若干有て、當國の眞言地多くは此四ヶ寺の子院なりけるか、いづれも斷絶し侍り。徳川家御一統の後、讃州善通寺の一代、贈僧正有範上人、四ヶの院跡廢たる事を愁ひて當國に來り、右の四ヶ寺を再建し、往古の百一を興復せらる。仍て四ヶ寺共に有範を中興開山とし侍り。四ヶ寺ともに有範以前の記録もなく、開基年代共に不知。廣山寺本堂の脇なる高サ六尺ほどなる五倫(輪か)は有範上人、壹丈計なる五倫(輪か)は廣山寺、西山寺を兼任せられたる法印の墓にて侍り。左右の少(小か)き石塔は誰の墓といふ事を知たる人も侍らす。義昭公御遺物何ニても少侍らは、寺の重寶にて侍らんに、其御廟所は此所なりといふ所もなく、御尊骸納奉りしと云事、漸、語り傳へ侍ることの物語なりし。

千田村千塚之事

沼隈、分、深津郡などの嶋々、海濱の村々に、塚と云物なし。沿くまの内にても海邊を隔たる所には有之。安那、品治、芦田の所々に有之といへども、就中千田村長池の邊より北の山奥に多し。近き比、今岡村池普請に塚の石を取崩侍れば、磁器の類を掘出したる事有。然は往古の栖なる事必定也。和漢事始曰、神代卷に伊弉諾尊伊弉册尊履廬(島か)に降居して八尋の殿を化作、又天柱を化豎と有而已。當に宮室を榮(營か)作するの始と可云歟。又兼良公纂疏曰。大戸道、大苦邊は第五代禰生の神なり、大は尊稱なり、戸は家なり、廿五家を戸と云。道は路也。云心は沼乾沙平にして家有、道有而已。邊は語の助字也、苦は茅を編たるなり、草にて屋を覆事を云。いふこゝろは、屋宅有て苦を以て蓋覆て風雨を防而已。未宮室あらず。

叔父損斬(軒か)翁具原好古曰、周易上古穴居而野處、後世聖人易之以宮室、上棟下宇以待風雨といへり。後世の聖人といへるは、黄帝の時をさせるなるへし。日本にも神代には、みな穴に居て、野に處しならん。天照大神の御時は既に宮室のかまへ有しと見へ侍れど、是はた、尊貴の人の事成へし。神武天皇の詔にも、巢棲穴住習俗惟常となれりとあれば、人皇の始に至ても賤民は、なを穴居せしならん。損斬(軒か)翁曾ておほくの國々を経曆(歴か)せしに、都邑遠き所の山のかたばら、村のほとりに石を三方に疊て穴とし、上には大石をならへて覆ひ、皆兩方に口を開り。其穴の内恰も今の宮室の隔有こごとく、二三處とし、口中奥ありて、君臣父子の居所さならちしるし。加様之所甚多し。河内國生駒か嶽の下服部川の千塚、又大和國邊郡の千塚など皆是なり。一年國君の命によりて筑前國の千村萬洛殘らす經廻せし事侍りしに、國中に此石窟幾千萬といふ數を不知、村によりて十區廿餘區も有之。或は村民堤を築き、水門を開き、又は宅居の用に其石を取用て、こほちたる所多しといへども、猶のこれる所如此。其口陽にむかいたるは寒風を避るの備成へし。是皆古の人、穴居せし時のすみかの跡なり。廣邑に近き所には必なし、石をこほち取しゆへ成へし。こほつには甚人力を用る事なれば、石を取に用なき所は穴居の栖其まゝ、残れるならん。民俗には昔、火の

雨ふりたる時に設しといへども誤なり。又或人曰、是古死人を葬しつか穴なるへしといへり。是又非なり。いつれの石窟にも骸骨なし、何そいにしへ質樸の時かく大に廣して又甚いたつかはしき、いとなみをなして人を可葬哉。若是人のすみかにあらずんば、其用意何の爲にかあ覽。是上古穴居せし時の人のすみかなる事、決而無疑。我國に多を見れば、もろこしにも、この穴居の石窟なるのこれる所多かるへしといへども、其由を記せる文は、いまた見侍らす。我國紀の中にも斯多き石窟の昔の穴居の跡なりしといふことを記せる文のなきは、山野を廣く行廻て、みそなはせし人なかりしにや。あれども上古穴居のすみかなりし心付なきにや。いふかしと云々。和漢事始は貝原好古作也。

大門村上坊文珠之事

本期三文珠は、切戸の文珠、新黒谷の文珠、當寺の文珠なりと、住僧のいへる事いふかし。京羽二重織留に、本朝三文珠は、大和國安倍の文珠、丹後國切戸の文珠、山城國新黒谷三重寶塔の内本尊の文珠なりと有。

三吉村三八與云事

三吉村の穢多を三八といひ習らせる事は、宗休公諸國漂泊し給ふ時、三八といふ僕を被召遣けるか、某出世したるならハ汝を侍に可取立と仰ければ、公出世し給は、穢多頭にしたまへと嘲ける故、御出世の後、穢多頭に給ひたりといひ傳るは符合の説也。宗休公草履取三八といふものを三州菟屋より被召連けるか、強氣勇悍の溢者にて、人を打捕、責さるなむ事を何共おもはず、なきけいたはりといふことを少もしらざるものなりけるか、自ら願て窄預りとなり、郡中の穢多を手下として、刑罰拷問を己か役とす。其比宮内村一宮社御造事にて市野敷立、遊女、芝居甚繁榮しければ、彼三八、新市村の穢多を伴ひ、宮内に至、芝居揚屋は勿論、賣買の見世店にかゝり、理不盡にねたり、己か言儘にせざるものは打擲し、少も腕立するものは打殺し投殺しける故、則召られ、三八は死罪に被行、新市の穢多五人、獄門にかけらる。御家人の内、三八か後役可相務者御説議有けれども曾てなかりければ、神邊の窄人藤井九郎助、同六郎左衛門、同助九郎、備前窄人景山鉄右衛門、同關助被召呼、窄番、穢多頭被仰付。仍而三八と云事、役名惣名となりたるよし、樋の口の穢多五右衛門申侍る。

蓆山和歌三首事

散木集 蓆山、かせはおろせと、ほととぎす、こゑはこもらぬ、ものにそ有ける。

俊頼朝臣

此哥深津郡蓆山の景にかなふ。

常陸

後堀川百首 蓆山、おろすあらしの、はけしきに、柴のどほそも、あけぬころかな。

此哥蓆山の意にかなふ。

六帖 蓆山、嵐のかせの、はやければ、ちるもみち葉を、きぬ人そなき。

此哥御調郡(真蘇郡であらう)の蓆山にかなふ。

(校訂者曰ふ、此の次に原本には吉津敵高差引之事と題する約一枚半の記入あり、其の大部分は抹消してあるので全く意を認めて之れを省く、さした)

大門村上之坊文珠の脇士謬を傳る事

上の坊文珠の脇士を春日八幡也と傳(符か)合の謬を傳ふる事無據にもあらず。山州名跡志曰、黒谷紫雲山金戒光時寺ノ條云。塔三重在勢至堂東上西向、本尊文珠菩薩長二尺作不詳、獅長三新作本尊靈驗古今秀速ニノ世ニ顯正也。初、岡崎村寶幢寺ノ本尊ナリ。舊地惣門ノ外、北方二丁ノ所是也ト云。爾ヲ應仁ノ兵火ニ滅ス。是ヨリ小堂ヲ造テ安シ、所ノ白衣守之。其堂守ヲ與兵衛ト云、依、文珠與兵衛ト云リ。其末胤尙舊地ニ住ス。其后當山今ノ浴室ノ地ニ移ノ、方丈ノ支配トナス。其後洛下住人伊丹氏此塔ヲ立ルニ及テ所移也。本師 脇士左八歳龍女ハカリ立像三尺、右ハ燒失ス。本尊ノ傍、右ニ太刀ヲ帶ノ唐人俗形有。左ニ老人ノ杖衝タル像有。其傍ニ沙門ノ像有、右ノ肩ヲ袒、左手ニ卷ヲ持、右手ノ持物難見分、右共ニ以テ立像也。俗説ニ此像右ハ八幡大神、老人ハ住吉、僧ハ春日明神ト。此義大非也。本義熱心ノ人ハ南都西大寺ノ僧侶ニ尋ヌヘシ、彼寺搆(講堂釋迦佛ノ右脇ニ文珠其(菩薩)ノ像ヲ安ス。則當塔ノ本尊ノ相ニノ、右ノ三像有。彼寺ニテハ説各別ニノ、僧ノ持物モ分明也。案スルニ老人ヲ住吉ト誤ラ以テ餘像自ラ此號ヲナス也ト云々。此謬を傳へて上之坊にも春日、八幡と云。むべなるかな碩學宏才集會の所にてさへ右之通なれば、片田舎にては虚實を正す事ならざる筈の事にや。阿部の文珠、切戸の文珠、黒谷の文珠を本朝三文珠と云事、日本中知るものなし。然るに上之坊、阿部野々文珠を除て我か安置の文珠を三文珠の(とか)稱する事可笑。又同作なれば外ともいひかたしといは、四文珠といはん。能同作を詮議し尋出しなは、五文珠も六文珠も有なん。可笑々々。

備陽六郡志深津郡後得錄

宮原直 御編輯

深津村長尾寺鐘銘

吉備國後州、深津郡、深津村、寶龍山、長尾寺、鐘之銘并序
長尾蜜(密か)寺者、大慈應現之勝區、瑜伽觀行之蜜(密か)寺也、惟闕鯨鐘報昏曉、鑿鑿見有昌閣梨、讚揚福田勸誘皂白、造華鯨一口、功成請銘於予、不得峻拒、迺爲銘曰。
寺名長尾 山稱寶竜 師慧宮興 資主承蹤 有緣勳力 新懸洪鐘 屬獻脫苦 釵輪休鋒 響徹利海 德迨三農 法鐘永穡 偕出塵容

寶曆十三癸未三月廿二日

中道權僧正三剛謹誌
寶龍山長尾寺阿闍梨有昌
治工 同郡手城村 渡邊幸右衛門信 坂田氏西丁茂市
撞初 松岡廣八隱載 清水勘七承貞 石井吉右衛門
建立發起 藤井氏 濱丁序助 本庄村 又右衛門

掛谷氏の事

毛利の魁將杉原盛重、勇猛超越したる士を好て、百姓町人、盜賊、穢多、乞食に至る迄、剛勢猛力なるものを扶持し被置けるゆへ、いつれの戦場にても塵をふり切を得すと云事なし。爰に深津郡之内いつれの村にや有けん、垣屋といふ所に剛強なる若もの有。或夜かれか宅へ盜賊八人押込。彼若者、ふかく寢入て盜の入をも不知伏ける所を、盜賊人、夜著の上より縛んとしけるを、二人を取て膝の下に引敷、又三人組付けるを、二人か髻を兩手に握、頭と頭を打合砕、壹人を搔摑て磔に打ければ、血を吐て死。残る奴原、跡を不見して逃失たり。盛重此事をきたまひて、彼ものを召出し侍に取立、垣屋太郎右衛門と号し、戰場にて度々武功を顯しけり。然處、盛重、八橋にて天正九年卒去せられ、男子貳人あり、兄を元盛、弟を景盛と号す。景盛父の遺物微物微少なるを憤て元盛を誅す。景盛か惡逆露顯し滅亡におよひけるゆへ、太郎右衛門も浪人して當國へ戻り、坪生村に住しけるか、秀吉公朝鮮陣の時、加藤清正の手に屬し朝鮮へ渡りけるか、其内に平治して小西、加藤の兵士在番して守之。太郎右衛門も其人數にて、一年

の在番も盈、歸國も近よりける時、太郎右衛門同斷に合戦の手に不逢者貳拾四輩あり。評議しけるは、各是迄來れども遅して刀に血をぬらすしてかへる事、基本意にあらず。いさ殘黨をさかし出して本國への土産にすへしといひければ、此義可然とて灘道はるかに行けるに、山間に大なる洞有ければ、あやしみて、いつれもぬきつれて入らんとしければ、内より鉄炮を打出しけるゆへ、偕こそこて無二無三に込入、殘黨十七人有けるを、のこらす生捕歸りけるか、一々首を可勿に相決す。其中に十八歳なるものあり。太郎右衛門甚不便におもひ、しきりに一命を乞請、乗船しけるか、身をなけんとする事度々なりければ、舩に縛り付て歸帆しける。太郎右衛門か僕となりて年月を送りけるか、古郷の事をも忘れ、日本の柔和なる事を悦び、名を助七とあらたむ。加藤清正(此邊缺字あらん)し給ひ肥前守忠孝(寫本には忠孝とあるも、原本は肥前守の下盡融して不明)流刑せられ玉ひて、太郎右衛門浪人して坪生村に歸り他につかへん事をもとめず、妻子を設け家來を召抱、農業を專とし、助七にも妻をもたせ、少しの作場をあたへ、主従ともに百姓となりぬ。此時より垣屋を書誤て掛谷とせしとかや。今深津郡に掛谷氏のもの多し、是太郎右衛門か一族なりとかや。太郎右衛門長壽にて死す。嫡子なるものおもひけるは、我父は盛重の召によりて侍となり、度々の高名を稱せられ、清正に事へて朝鮮迄勇名を振ひたり。然るに某、父ほどの器量あらずとも、何そ農民となりて名を埋めんや、小祿なり共事へて名を腐しと、水野家へ勤仕す。さて父。助七は氏を小畑となりの、船手組に有付、百歳ちかく長壽をたもちて死し、大門村、上之坊に葬て石塔今に有之。太郎右衛門は奉公をやめて深津郡へ歸り、ふたゝひ耕作を業とし侍るとかや。當 御代迄、船手組に小畑氏のもの有之、助七か子孫成とそ。右者深津郡大門村、上之坊住持法印之物語、又は村老の話を記し、寶曆七年之春、掛谷權六へ遣し侍る。

郡山稻荷勸請記

備後國郡山者、歌人之所詠題在堀河夫木等、世傳元曆之比、能登守平教經、將赴西海、嘗陟此山、遊黑甜境、蓋以景致清絕也、山在州治之東北一里許、元祿巳卯夏、任官乎此州行部到此山、平衍而風景絕勝、而眼界曠遠、唯有老松二十八株、北方岩山高聳于後、安大士於洞屈(窟か)、南方蒼海杳連乎前、見風帆於日暮、福山城及民屋、神嶋、手城、山田山、皆在一望之中、露田萬頃、阡陌盡野、美稼如雲、南方接海碧、土人請予、此地壤腹而下逼田隴、宜伐松爲薪、闢山爲畜、予聞不肯容焉、且謂今我雖不容焉、將來得無有容焉者乎哉、惜乎古跡陵夷而終爲烏有、而此山當州之良、宜祭靈神之地也、松樹適合乎南臺之將數矣、國人盍祈西周之嘉禾哉、於是營小社於列松之下、祭稻荷明神、永郡山之守護、闔國之民、附以白銀五百目、買田地爲神供料、令大常院監社、授之百籤、以下民間吉凶、且命村尾忠兵衛(福山濱丁)山岡次郎右衛門(同所鍛冶丁)植桃木三十株於山、歲々采其子售之、儲以爲當社修復料、原夫倉稻魂者、播百穀、禳災孽、深憐蒼生、自今以往、憑當社之威靈、年穀豐登、無潦旱之害、民物殷富、有貢獻之隆、

則豈管一州之禧哉、實爲天下禱社、是予所志也、仰冀後來、有繼予志者、社頭繁榮神德益明於是乎。

元祿巳卯仲冬

山本與三左衛門藤原景明

右の一巻理知院方有之。

潜幸行宮之跡の事

岩山と云は、本名原山なり。此所の民家を岩下といふ。昔し長樂寺と云寺あり、斷絶して長樂庵といふ。福山永雲寺の末庵なり。良の祠倉有、毘沙門を神躰とす。岩下民家の氏神なり。右原山の東、つな木の向、市村境、叢内ニ帝屋敷ト云有。是則崇徳院、讚岐より潜幸し給ひし行宮の跡なりとぞ。御手水を召れし清水有、甚清冷にして早魃ほと、洋溢し侍り。夫より一段下りて西の方に、久藏屋敷といふ有。此所にも清水有。是も早魃に乾ことなし。久藏先祖は崇徳院の召連られしものなり、其時の屋敷の賣券今に傳來し侍ると、長樂庵の住僧立立首座といふ人、語られ侍り。立立、享保（原本二字許缺）寂す。其比迄、右賣券所持しけるが、其後久次郎といふものに尋るに、左様の事曾而不存と語りぬ。久藏か子孫、久藏といふもの代々帝屋敷に住しける。とかく貧にて剩、乱心し侍るゆへ、寛保の比、住所を替侍り。帝屋敷には作物をせざるなり。的場といふ所有、是も帝屋敷の近所也。

○淡路廢帝當國へ潜幸有。奈良津村に岩屋山、佛傳寺と云一寺開基し給ひて薬師を本尊とし給ひけるか、尼子の比退轉しけると也。御門の薬師とて市村にあり。座像貳尺計の木佛なり。享保の比にや（原本二字許缺）と云者あり、代々此薬師を信心しけるか、香の火、木佛にうつりて燒ケけるゆへに、（原本二字許缺）倅子、忽、乱氣し口走りければ（原本二字許缺）甚怒りて、糞を荷ひて件の堂に來り、約に糞を没て罵けるは、當むらに人おほしといへとも我らより外、誰有て香花を備ふるものなし、今はからすして如此やける事、佛の上にはあるまじきことと思ひ侍る。我御邊を可燒とおもひて香、燈明を備へたるにはあらず、是信心より備へたる也。時節到來して我身に火の付たる（もを脱せるか）不辨して、我子にたゞりたまふは、佛には有まし。只今狂乱を去しめ玉ふか、若左なくは此糞を天窓より打かけて佛躰を汚すへし。いかにノと責ければ、忽、乱氣去けるとなり。夫より（原本二字許缺）彌、信心をこたらす朝暮香花を備侍り。件の佛像、胸より膝迄燒けて是あり。

市村宿の夷の事

宿といふア、サあり、昔牛馬市立たる所なり。胡の社有て神躰は加羅（伽羅か）にて刻たる壹尺餘の像なりしか、讚岐へ盜れ、其跡に地藏を建置侍り。件の胡、金毘羅の市中に勸請す。是より金毘羅、彌増に繁昌すといへり。胡をぬすまれたる（はの字を脱せるか）元祿の比の事也。

市村海藏庵の事

往古海藏寺といふ寺有。當村の生土八幡は海藏寺の鎮守なりとぞ。則海藏寺の廢跡八幡の境内にありて、礎、今に残れり。水野家繁榮の時、（原本二字許缺）六郎太夫といふ人、福山永雲寺封山和尚を開祖として一廬を建て、海藏庵となづく。是海藏寺の寺号失はさるか爲なり。永雲寺の末庵なり。鎮守良大明神有、九月九日祭之。例年地下のものとも祭燈をたき侍り。永雲寺大英和尚（原本凡そ五字許り缺）遷化せられ、後住楚春首座要用有（原本三字許缺）行れ、留主の内、祭りの日に氏子共、大なる木を切來りて燒ければ、其節の庵主惠曉首座甚怒りて、用木に立置たる木を案内なしに切たる事奇怪なりと、散々罵ければ、氏神の山の木を氏子の切事、何の子細可有、いらさる世話やかれとぞ、いひければ、曉首座、腹にすへかね、いらさる世話とは推參なり、己等か狼藉を働事、是皆庄屋役人共の不穿鑿ゆへなりと、庄屋方へ行云々の事をいひて悪口しければ、御邊は庄屋を務ながら、支配むらの除地をしらの氏神の山にて祭燈木を切事尤なる事也、海藏庵除地と申事は不存といひければ、庄屋水帳を持出、良除地は社地四歩、林八畝拾六歩とさるか、此方に慥なる證文有とて、水野家の時の除地寄附狀を出しければ、庄屋水帳を持出、良除地は社地四歩、林八畝拾六歩と有之、海藏庵除地と申所、市村中に無之、庄や勤るまじき事迄證議し給ふことは、御坊の推參成へし。かさねて加様の雜言はし給ふへからすと打かへされ。扱は此寄附狀を反古にするかせさるか、役所へ達し實否を可正とて、永雲寺へ來り、一宗の僧侶寄會て評議しける所へ、某（著者の自稱）行逢、水帳ニ無之除地の事を、いかに訴たまふとも叶まし、此義は無用にし給へといひければ、曉首座、爰もこの役方にて事不行は本山へ訴へ江戶沙汰に可及と募る。其後某、寺社方の役人今井彌五郎に出會、右の物語しければ、能こそ知せ玉ふものかな、役方へ訴たりとも利にならさる公事也、定て我らに内分を申來るへし、其節我ら、かれこれと挨拶もむつかし、私宅へ來らさるさきに貴殿取計たまはるへしといひける故、永雲寺へ行て雜談の序に、海藏庵の事はいかゞいやといひければ、昨日各寄會ひて評議し侍るか、弘宗寺天倪和尚善惡の事もいひ玉はす、能々思惟し給へと計にて、猫の子を愛し、酒をのみてかへられ侍るとかたりぬ。良の除地と極たる水帳を、今更海藏庵の除地と可被改哉、海藏庵の鎮守と宣へ共、良の地に建たる海藏庵也。海藏寺の八幡といへとも、海藏寺は漸、礎計残たれば、寺号の亡ん事を愁て（原本五六字許缺）一廬を結て海藏庵と名付たるなり。天子將軍の御崇敬の地にも御由緒の有にもあらざれば、御公領の地を替地に可被下事も有まし、又十萬石の御高の内を除地ニ給ん哉、然るに無詮公事を取結び、江戸沙汰に及び、長路の腰纏を費し、心肝をいためしむる事、能々思惟して見たまへ、天倪和尚の宣る事尤なるかなといひければ、各是に同而止ぬ。永雲寺大英和尚は京都堀川古學先生（伊藤源藏東涯、伊藤十藏梅宇ナトノ伯父ナリ）の兄弟にて博覽の學匠なり、然れども天性甚悋嗇なり。元祿檢地之節、除地寄附狀を被出なは可然に悋嗇なるゆへに證文の出し後れになり

侍り。たとへ遅れたり共仕様可有事なるに、寄附帳空敷反古とはなり侍り○大英、容貌さまざまして、耳中より黒鬚生出、むさど聊爾なる事のいはれざる人なり。惠曉首座は、ものいひつかふとなる(文字に誤あるか)もの也しか、或時向和尙、老漢は博徳高才にして自他令名をしたはす(脱字あるか)云ものなし、生達と稱す。慈悲心常にあれども、貧なるものに一衣を與へ玉ふ事もなく、飢たるものに一飯を施し給ふ事なし。下男傭人など朝夕の喫飯も三椀と喫しぬれば其顔を睨給ふ。去ては和尙に似合さる事なりといひければ。曉か事一々然也、我不可なる事を能知れり。しかれども人に施與する事甚きらる也。又我にきかせずして取たるものを詮議したる事もなし。汝もほしき物あらは我にいはすして可取。手自あたふる事はせざるなり。我物をおしむ事、是業障の因果なりといはれける也。和尙、下戸にて茶と餅とを不斷蓄置、朝暮念經の節にもやはり茶をのみ、檀家の齋非時に行ても經を讀みながら茶をのまれける也。三月節句後に某(著者の自稱)永雲寺へ詣ければ、和尙は他行にて圓友藏主、知春首座留主に居たり。能折柄來り玉へり、茶を進可申、眠藏へ來り玉へて眠藏へ行て見れば、菱の餅一ツツ糸をとをし、長押、鴨居に必至と釘を打かけ有。常服の茶は小き張籠、嗜の茶は朝日燒の壺に入て有。友藏主いひけるは、我らは酒を可吞が、釜を常にはなし玉はねは、酒を買事ならずといひながら、箆筒を探ければ錠前おろさすして有之。是は仕合なりとて錢取出し、酒菜調へ、兩僧、某、下男共に非時快した、め、酒吞、菱の餅を焼、茶をのみ、夜に入て遊ひて歸りぬ。和尙翌日歸り玉ひて、常の茶は澤山にあれども能茶は煎するほどなし、買てこよといはれたる計にて、箆筒の錢少なりたりとも、菱の餅を喰たるかともとはれず。是を以て和尙の無我無慾なる事を知へし。

市村天神の事

千田村と當村との境に天神の小社有、八月四日を祭禮とす。或人のいはく、天満宮には有へから大貴尊(大日貴尊か)を祭たる五條の天神なるへし。纔、三尺四方ほどの小社にて、除地は山五丁、神田貳反餘有。元祿中の比迄、山上の烏帽子岩と云所に本社有、餘ほどの社なりけるか、祭の日、喧嘩有て社壇(壇ならん)に血をあへし故、あらたに造營せんとて、今の平地に外遷宮し侍る。此時社人と社僧、祝詞の諍有。因て本社を造營せす、仮殿にて有けるか、造營を企する事なく年月へた、り、小社と成侍る。此神貧なるものを殊之外に憐玉ひて、木の葉をかき薪を樵て山を荒すといへども崇玉ふ事なし。社人村役人などは是を制すれば甚怒玉ひて煩ふ故、制する事ならず。神田の收納も右之通なり。以前早魃には雨乞有し所なりしかとも、左様の事近比(此邊脱字あるか)安永二年の春より秋に至て世上夥しく疫厲(癘か)はやりて人多くし(死)す、仍而當村のものとも當社へ祈誓しければ、一人も煩ふものなし。仍て少(小)かき烏井を建侍る。

備陽六郡志 後得録

品治郡

宮内村吉備津宮

塔の勸進帳、國修行方に持傳へけるか、國修行か家筋斷絶して有木民部か方に預り置し所に、民部か家筋も寛延の末に絶けるゆへ所在不知。神池の脇に塔畑と云所有。此所に五重の石の塔を建て昔の塔にならへけるか、作場の障となるゆへ座直りの葛石の脇へ居て有之。法華八講の縁起、本坊方に有之。弘治二年國修行泰範述作。長和三年甲寅三月八日修行溫日八講會を始、應永廿癸巳年四月八座の勤行をはしむと云云。

寶物

唐銅の鶏 第一の靈寶也と。所謂(いはれ由緒の云ひか)不詳

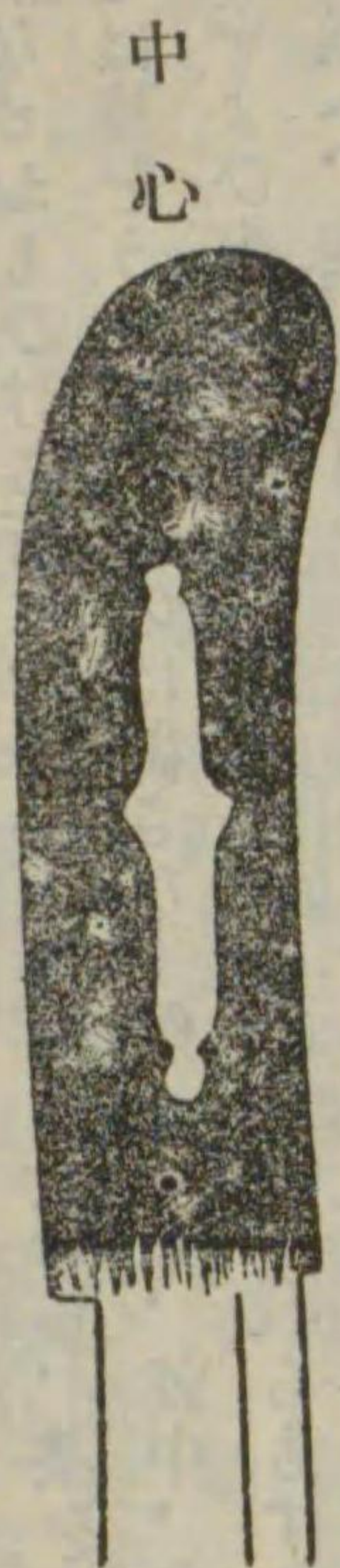
一、太刀一腰 貳尺三寸 青江 朱鞘 佐藤氏ト彫付 一、脇差一腰 壹尺八寸 同作

一、太刀一腰 三尺 中心壹尺二寸 銘 備後國三原住藤原貞正興作、文錄(祿か)二年八月日

一、白鞘脇差一腰 鉄床下

一、吉備津彦命御在世よりの御太刀なりとて四腰有。いづれも貳尺壹寸ほどにて、其節の鞘は朽矢(失か)て白鞘なり。柄鐔中心如

圖。鉏も鉄なり。



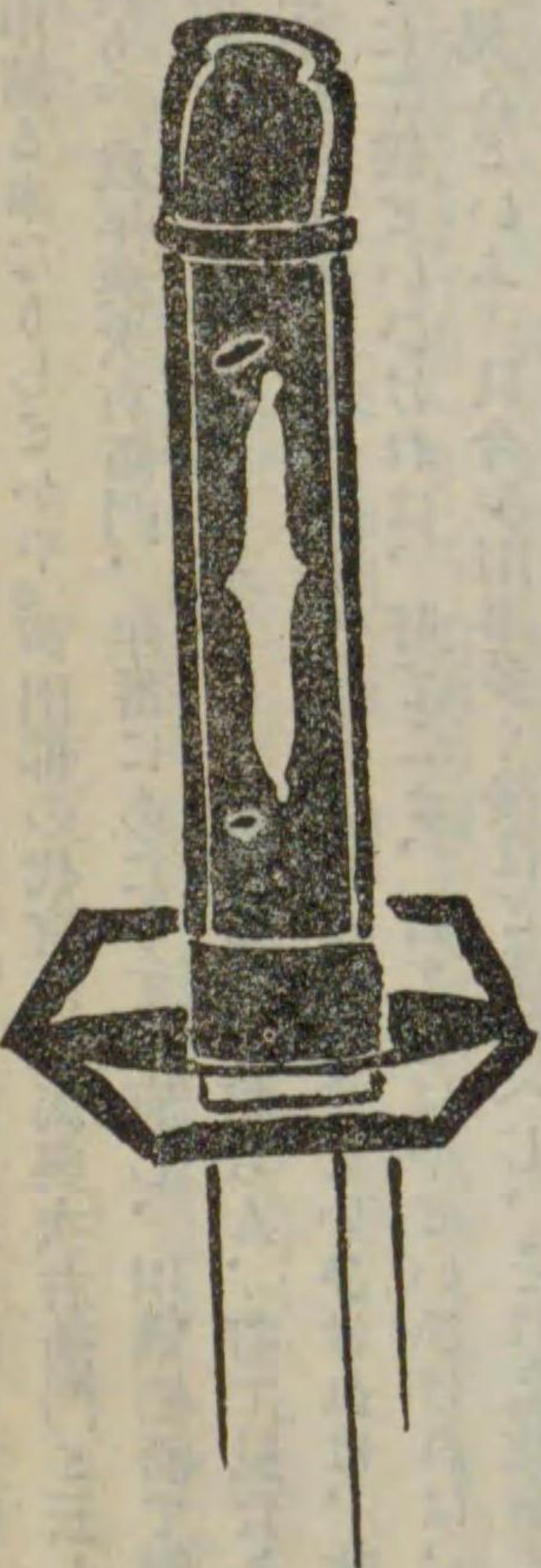
中心



柄

如斯鉄にて拵、中心を差込たるものなり。

後得録 品治郡



碁盤一面並石有 水野家の時一郡々に陣屋有之、代官を指置れ公事出入等を取捌、年貢賦税を沙汰し、皆濟之目録を差出、太守の御裏判を被下。尤御在府之節は右代官替々江戸へ持參し御判を申請る事なりしとかや。芦田郡の代官は有馬與次右衛門と云もの、高木村に居住す。與次右衛門は近國に名を觸たる碁の上手にて侍り。或年與次右衛門、年番にあたりて出府し、用儀相濟て歸郷に赴き、掛川の宿に泊りけるか、床に奇麗なる盤石有。か様なる驛にても碁を打者有にや、いか様なる事を打らん、打て見たきものかなとおもひける所に、十一二計なる女の童、茶を持來れり。當宿にても碁かはやるにや、つよきもの有やといひければ、此宿にては碁をうたさるものは御さなく候へども、就中、童か父は打手にて候といひければ、呼てこよ、打て見はやといひければ、則亭主をよひ來る。御邊も碁をうたるよし、我らもすきなれば打て見んといふ。只今少用事多く後ほど參候へし、それ迄此童と遊はし候へ、迎も御相手には成申ましく、小さかしく候まゝ、御伽に被成候へ、用事さへ仕廻候者追付參候へしとて、勝手へ立ければ、女童偶奇を乞、先になりて打けるに、中々常躰の碁にあらず。與次右衛門工夫をこらし、思案を廻らせども不及所有ける所へ、亭主走來り、いか御さ候やといひながら、眺見て大切に打へし、疎想(鹿相か)すなどいひて立けるか、與次右衛門目算するに八目ほどの負なり、甚辛苦して是我力の及所にあらずと、用事有躰にて縁へ立出、手水をつかひ、吉津宮(吉備津宮の誤なるへし)へ立願しけるは、某、備後の近國へは碁の名を觸侍るに、此少女に負ぬれば碁(某の誤ならん)一身の耻にあらず、一國の耻なり。神力を加られ勝しめ玉は、碁盤を寶前に可納と祈誓して座へ歸て盤面を見るに、不思議に渡の手みへたりければ、其渡を打けるに、童女ハツといひけるとそ。又亭主來て目算して、先程は汝か勝と見へけるに、いかして、かくはなりけるそ問。あの渡を見付玉ひける故、負になり侍ると答ふ。亭主、横手を打て、此渡は並々の碁にては見へさる渡也、貴客の碁は尋常の御事には侍らす、早用事を仕廻、御相手に罷出可申といふ間に、夕飯を持出ける。扱した、め仕廻ければ亭主罷出、碁盤を取直しけれ共、娘さへあの通なれば亭主には迎も叶ましと思ひ、殊之外くたひれぬれば打ましといひてやみぬ。歸郷して早々此碁盤を奉納しけるとなり。

宮内片精進の事

當社神職之内拾壹人僧形にてつとむるもの有之。是は往古八講會行れし時の社僧何れも清僧成けれども、中比衰廢して既に使儀におよひければ、是非なく魚物を斷、妻帯になりて渡世しけり。其子孫故、片精進と号して、妻帯にならざる内は魚肉を食し、妻を具すれば魚肉を斷、剃髮にて淨衣を著し神前を務る事也。就中少將房、中將房、正仁房、此三房は宮司幣取といひて内陣に相詣、各寶物等を預る役なり。正仁房は三人の中にも上座にて、實は正二位坊なれども、何の世よりか、正仁房と誤れり。

正仁坊社職被取上事

府中市阿賀屋市兵衛、味噌屋甚七方々一宮社造營遷宮之節、銀子借用之處、打續年柄惡敷返濟難成に付其替りとして毎年大祈禱致執行可遣段對談相濟、年々相務申候。然處、寶曆五年戊辰正月祈禱之節、神前魚物備有之、神宮寺見付候而、是は何方より賦候哉、清淨之神前ニ何とて加様之汚物を備候哉、早速取捨可申由被申候へは、是は味噌屋、阿賀や商家を千艘三十枚つ、備候事、此度計之儀にては無御座と申候に付、万事別當之可請差圖處、我儘なる由申募、公邊に及び、兒玉内記か實父、戸手村天王の社人孫三郎、禁獄被仰付。正仁房義は別當同意に可相心得候處、却而社人と一致に成、水野家よりの令法を背候段言語道斷之事に候由、仍而社職被召放候。當社之神職兒嶋内記を始、いつれも自官にて、小田主殿、小高佐渡、黒瀬越後、此三人は吉田官にて三太夫と号し、神樂、湯立等を務る役人也。例年十月十七日湯立之節、懸鯛、掛鳥を備へ務來り候處、毎々はともかくも、今年魚鳥備へ候儀不罷成由、神宮寺被申付。古來より何れの神社にても魚鳥相備、湯立相勤申候。尤當社例歲魚鳥備來候事に御座候。古田へさこへ古幾年以來ともしれず當 御代迄干香を獻し來りたる事共、藝州公當 御代御參詣有て干香を獻られ、御供御頂戴之節之儀共を申披かんとしけれども、權威を以て是非を分たす理下盡に押付られ、自官の社人は勿論、吉田官の神職に至る迄一言の理を咄事あたはす、白淨衣を著し廻村を務たる片精進の社職共に黒衣をあたへ、向來淨衣を著すまじき由云付られ、九僧は勿論怒眉を擧、悲歎の涙にむせばすといふ事なし。宗休公御再興有てより以來、十月の祭禮には、安藝、周防、長門、出雲、伯耆、備前、備中、四國路よりの參詣群をなし、芝居、遊女等入込、京都、大坂の賈人見世店を飭りて夥敷市を立しか共、戌の年以後、何となく物淋、剩、祭禮毎に不圖障起り喧嘩鬪諍出來て衰微に及事、神慮穩かならざる故成へし。就中寶曆八寅年十二月廿七日、神池の小家より出火し風もなきに鳥居より南、壹軒も残らず焼失す。始、早速隣村より駆付なは打消へきに、明神の鐘を撞けれども少も響かず、常々は山を隔て、府中、高木、町村邊ま響侍るに、此時新市、安井までもきこへさる事、神明の怒り給へる事疑なし。

古城山の名さたかならず。龜地山、又、龜壽山、又、明神此山より安井のかゝみにむかいたまふゆへ神道山と号といふ説あり。櫻山といふか本説なるへし。櫻山入道、元弘に滅て以後、小野々宮氏居城となり、八代なりと。大旨二百年ほどなるへし。尼子、毛利の時代、宮氏の居城成しとそ。城主宮刑部といふ、何れの時代にや。

足利直冬宮下野入道宮内合戦之事

(校訂者いふ、本項は太平記卷三十八のうち「諸國官方蜂起の事」の條を摘記したものである)

太平記三十八、高師直ガ讒ニ因テ直冬身ノ置所ナキ儘ニ吉野殿ト合躰有リ。康安二年六月、山名伊豆守時氏、五千餘騎ニテ伯耆ヨリ美作ノ院ノ庄ヘ打越、國々ヘ勢ヲ差分ル。先一方ハ時氏子息左衛門佐ヲ大將ニテ二千餘騎、備前、備中ヘ發向ス。一勢ハ備前仁ノ堀ニ陣ヲ取テ敵ヲ待ニ、其國ノ守護ノ勢、松田、河村、福林寺、浦上七良兵衛行景等、皆無勢ナレハ、出合テハ叶ハシトヤ思ヒケン、又讃岐ヨリ細川右馬頭賴之、近日兒嶋ヘ押渡ルト聞ユルヲヤ相待ケン、皆城ニ楯籠テ、未タ且(曾)テ戰ワス。一勢ハ多治米備中守、榑崎ヲ大將ニテ、千餘騎備中ノ新見ヘ打出タルニ、秋庭等多年拵スマシテ、水、兵糧、澤山ナル松山ノ城ヘ、多治米、榑崎ヲ引入シカハ、當國ノ守護越前守師秀、可レ戰様ナクシテ、備前ノ徳倉ノ城ヘ引退刻、郎從赤木父子二人落止テ、思フホト戰テ遂ニ討死シテケリ。仍之敵勝ニ乗テ、國中ヘ乱入テ、勢ヲ差向々々責出ニ、一議ヲモ可レ言様ナケレハ、國人一人モ順付スト云ナシ。

只陶山備前守計、南海ノ端ニ添テ僅ナル城ヲ拵テ、將軍方トテハ殘ケル。備後ヘハ富田判官秀貞ガ子息、彈正少弼直貞八百餘騎、出雲ヨリ直ニ國中ヘ打出タルニ、江田、廣澤、三吉ノ一族馳著ケル間、程ナクニ千餘騎ニ成ニケリ。富田其勢ヲ並テ、宮下野入道カ城ヲ攻ントスル處ニ、石見國ヨリ足利左兵衛直冬、五百騎計ニテ富田ニカヲ合セント、備後ノ宮内ヘ出ラレタリケルカ、禪僧ヲ一人、宮下野入道ノ許ヘ使ニ立テ仰ラレケルハ、天下ノ事時刻到來シテ、諸國ノ武士大略御方ニ志ヲ通スル處ニ、其方ヨリ且(曾)テ承ル旨ナキ間、避テ使者ヲ以申ス也。天下ニ人多シトイヘル、別ノ頼思ヒ奉ル志深シ。今若御味方ニ參ノ、忠ヲ致サレ候ハ、關所分已下ノコニ於テハ、毎事所望ニ可レ隨トソ宣ヒ遣サレケル。宮入道道山、使者ノ僧ヲ呼入テ、點心ヲ調ヘ、禮義(儀)ヲ厚ノ對面アレハ、使者ノ僧今ハ斯ト嬉シク思フ所ニ、彼禪門道山、僧ニ向テ申ケルハ、天下ニ一人モ宮方ト云人ナクナリテ、佐殿モ無憑方成セ玉ヒタラン寸、去迎ハタノムソト承ラハ、若頼レマイラスル事モヤ候ワンスラン。今時近國ノ者モ多ク佐殿ニ參リテ、勢付セ玉フ間、當國ニ陣ヲ召レテ參レト承ランニ於テハ、エコソ參候マシ。惡シ其義ナラハ討テマイラセヨトテ、御勢ヲ向ラレハ、尸ハタトヒ御陣ノ前ニ晒サレ候共、魂ハナヲ將軍方ニ止テ、怒ヲ泉下ニ報センコトハカラヒ候ヘシ。抑加様ノ使ナトニハ、御内外様ヲ不云、可レ然武士ヲ社、立ラレ、コニテ候ニ、僧體ニテ使節ニ立セ給フ條、心得カタクソ候ヘ、文珠ノ佛ノ御使ニテ維摩ノ室ニ入、女孿ノ大般若ヲ渡サントテ、流沙之難ヲ凌シニハ様替テ、是ハ無慚無愧ノ道心(一本には無道心とある)ノ御舉動ニテ候ヘハ、僧聖トハ申マシ。御頭ヲ頓テ路頭ニ掛度候得共(一本トイヘトモとあり)、今度計ハ別儀ヲ以テ免シ申也。向後カ、ル使ヲシテ、生テ歸ヘシトナ覺シシ。御分誠ニ僧ナラハ、カ、ル不思議ノ事ヲハ、ヨモシ玉ワシ、只此城ノ案内見ニ爲ニ、夜打ノ手引シツヘキ人ガ、形ヲ禪僧ニ作立ラレテソ、是ヘハナヲシタルラン。ヤ、若黨凡、此僧ツレテ城ノ有様能々見セテ、木戸ヨリ外ヘ追ヒ出シ奉レトテ、

後ノ障子荒ラカニ引立テ、内ヘ入レハ、使者ノ僧今ヤ失ツル、ト、肝心モ身ニソワテ、這々逃テソ歸ケル。此使歸ラハ、佐殿定テヨセ玉ハンスラン。先スル寸ハ人ヲ制スルニ利有トテ、逆寄ニヨセテ追散セトテ、子息下野次郎氏信ニ、五百餘騎ヲ差添、佐殿ノ陣ヲ取テヲワシマス宮内ヘ押ヨセ、懸立々々責ケルニ、佐殿ノ大勢共立足モナク打負テ、散々ニ皆成ニケレハ、富田モ是ニ力ヲヲトシ、己カ本國ヘソ歸ケル。直冬朝臣、宮入道ト合戰ヲスルコト其數ヲ不知。然凡、直冬一度モ未打勝玉ヒタルコトナケレハ、言甲斐ナシト思フモノヤシタリケン、落書ノ歌ヲカキテ、道ノ岐ニソ立タリケル。

直冬ハ、如何ナル神ノ、罰ニテカ、宮ニハサノミ、怖テ逃ラン。

侍大將ト聞ヘシ森備中守モ、佐殿ヨリ前ニ逃タリト披露アリケレハ、高札ノ奥ニ、
檜ノ葉ノ、ユルキノ森ニ、イル鷲ハ、深山風ニ、音ヲヤ鳴ラン。

戸手村祇園略縁起並早苗松の圖

江熊牛頭天王社並早苗松畧縁起

夫當社は伊弉諾尊第四の王子素戔嗚尊日本記ニ神素戔嗚尊、或ハ速素戔嗚尊、鎮座まします所にして、神代より以來天變地災に移され又一説ニ牛頭天王、或武尊天神ト云々。江熊今ハ品治郡ニ屬ス、又備後風土記を按ずるに、さるの勝境也。爰に當社再興記天文に、備後國深津郡江熊、疫隅ト牛頭天王ト云々土俗昔ヨリ江熊ノ郷ト云又備後風土記を按ずるに、疫隅の國の社は、昔北海の牛頭天王武尊神、南海の神女に通したまふとき、里程數百にして、日西山に薄り、馬つかれ糧たへて羈旅の勞を息はんとおほす。時に彼所に蘇民、巨日の兄弟有。兄は貧にして仁有、弟は富て吝し。天王宿を巨日に乞給ふに、固く拒んて容さす。蘇民驟に出むかへて、我ねかはくは宿を奉らんと、即粟柄を以て茵褥とし、粟飯六月十四日小麦の飯を供を以て饗し奉りければ、天王大に歡喜し給ひぬ。遂に則南海に至りて、頗梨女を娶りたまふ。年を経て八柱子を連誘して、復、彼所に還り給ふ比おひに、其地大疫ありて、悉く皆妖亡に遭。こゝにをいて天王彼恩恵を報せんとおほし給ふて、蘇民の一族をして皆、茅輪を帶しむ。ゆへを以て其災、蘇民の家に及ふ事なし。天王又勅しての玉は、後世疫氣天下に流行せは、我は則蘇民將來の子孫なりと稱して、先のことく茅輪を帶へし、其災必免かれん。我は是、速須佐雄能神延喜式ニ深津郡須佐能表なりとの玉ふ。こゝにおゐる蘇民、彼崇祠を營み、尊敬して厚く是を祭祀す。爾し以以降數千の星霜を経るといへども、猶是常に當社を江熊の天王と崇敬し、國家の鎮護と仰き奉れば、神威日々に増給ひ、駈癘月々に驗有て、郷里澤を蒙るもの也。

寶曆七丁丑歲六月十四日 備後品治郡江熊牛頭天王社別當 早苗山天王寺法印光阿謹志

(寫眞は著者自筆の早苗松の圖)



抑又傳云、此三株の老松は天王の御神力によりて、巨且か早苗田、忽に變して杉松脩竹林となる、故に早苗山と号し、早苗の松と名付く杉樹ヲハ早苗ノ森ト云、又ハ長者ノ神木トモ云フ。又天王封禪をあらはさんとして、三株の松を植置たまふと。其松や神垣の久しき世より今の世に至るまで、老幹鱗皴として蒼竜のごとく、わたかまり。新柯鬱茂して翠蓋に似て、かさなれり。且は又、月の夕部には其影を分、雪のあしたには其色を争ふ。佳景尤いふべからず。此故に社頭に詣するの人、初て見るも常に見るも、曾根、唐崎の老松にもまさりけに覺ゆと、稱歎せすといふ事なし。爰に予、去し寶曆六年夏のころ、早苗のまつを齎持して都に登りけるに、我 神明の加護し給ふにや、不思議の因縁有て三井細門跡の青眸に奉備ければ、御稱美のあまりに、丹青の妙手を以て、三株の圖を摸し賜りしまゝ九條殿下の高覽に備へ奉りしに、則御感斜ならず、いともかしこく御讚詠有て、御筆を染給はる。實是ひとかならぬ雲上の賜なれば、御神徳の日に新に、日々に新ならせ玉はん事、餘に難有思ひ侍りしまゝに梓に□て世に弘るものなり。

御讚詠 御詞書署之

早苗山、いく千代あふく、神垣の、松もめくみの、影にさかへ舞。

早苗山天王寺法印光阿謹志

三會院の事

宮内村中興寺、往古は三會院の末寺なり。仍て寺領の御朱印を預置たりとなり。山州名跡志曰。

三會院在大井川北畔、佛殿南向、額 三會院義滿公本尊彌勒佛 大宮形、堂内敷瓦脇壇 左、安都督親王石塔子二枚入左壇 西向、安後醍醐帝牌、額揭唐後醍醐帝賜開山國師号勅書、應令夢窓國師爲靈龜山臨川寺開山事、

右當寺者、龜山法皇仙居都督大王遺跡也、大王薨逝之後、以遺命爲蘭若、仍加寺領、寄附國師、令擬弘法利生之地、專致國家太平之精祈、兼施大王追福之回向矣、抑此靈場者、帝都之西境也、有便于聰禪那靈知之法語、離宮之東隣也、相應于修普賢發心之行業、宜恢弘臨濟禪師之宗風、令稟承臨川禪寺之法流、以門葉相續至龍華三會而已。

建武二年十月十一日

右額前掲堂内中央七朝 開山影 坐倚子又兩手長三尺余國額國師号勅書七通彫略之 師在世命工所令作以土

國師塔 銘 大元東陵和尚 碑銘 明學士宋景濂

佛壇後安佛國師佛光國師之二影 假山佛殿東國師作處也。斯地後醍醐帝第二御

子太宰師(帥)世良親王別莊也、親王即都督大王也、都督ハ師(帥)ノ唐号ナリ。

風雅集に太宰帥世良親王のひとめぐりに、臨川寺におもひ立とて。 欣子内親王

常ならぬ、浮世の嵯峨の、野邊の露、消にし跡を、尋てを問。

増鏡に云。昭慶門院は、あまたの宮たちの中に、すくれて悲しきものに思ひきこへさせ玉ひしかは、御そうふんなども、いとこちたし。大井川にむかいて、はなれたる院の有をそ奉らせたまふれば、そこにおはしまし、程に、川端殿の女院なと人申侍し。彼所は臨川寺といふ。



備陽六郡志外篇 後得録 安那郡一

(校訂者曰ふ、此の安那郡一は古くから缺本となつてゐるのである。安政二乙卯年江木戩一鰐水一が本書の原本を借覽して序次を立て其目次を作成したとき、後得録八卷の内第三安那郡三合三卷・内一之巻缺と記して居る。今回も之を得ることは不可能であつた。依て止なく缺如するの外はないことを遺憾とする。幸に原本又は寫本にても所藏さるゝ方があれば、他日之れを増補すべく提供されたいことを願つておく)

備陽六郡志外篇 後得録 安那郡二

(校訂者いふ。安那郡一は安政二乙卯年江木戩一繁太郎一が序次を立てし時、既に缺本となつてゐたので、今回も種々苦心したが之を得ることは終に不可能となつた。故に本書の原本安那郡二も、開卷冒頭に『にても地上に求食所を走掛て切るに更に外れし事なし云々』とあり、故に是れはどうしても此の『にても云々』の前文が無くてはならない。又、此の篇は何を掲げたものであらうかと、彼此苦心探究の末、後ちにかゝる事柄より推して、陰徳太平記の摘要であることを知り得たのである。而して此の『にても云々』とある其の前文は『其外何の鳥』とあるべく『にても云々』は即ち之れにつゞくものであると推知したのであつた。其所で陰徳太平記のうちで之れを求むるに、同書卷第四十八の内、『伯州淨滿原合戦之事』の條に於て、『其外何の鳥たりと雖も、地上に求食する所を走り懸つて切けるに、更に外るゝ事なし云々』とある。即ち是れであらうと思ふ。併し本篇は陰徳太平記の謄寫で無く、其の要を取りて別に一文を成したものであるから、字句は多少異なるのである。乃ち本篇に『にても云々』とあるのは、陰徳太平記の夫れに『たりと雖も云々』とあるところに當て嵌まるものと推定されるのである。すでに本篇の出所が判つたとすれば、其の『にても云々』即ち原書一陰徳太平記一の『たりと雖も云々』の前文を掲げておくの必要があることを認め、左に之れを節録して参考に資することとする。按ずるに本篇は神邊城に關するもので杉原の事功を記した續きではあるまいかと思はるゝのである。尙本卷の原本一著者自筆『備陽六郡志外篇、安那郡後得録二』と簽せる表紙に、江木鰐水の自筆と認むる『後得録一之分缺くと相見ひ杉原の事功ヲ記ひ、處前不足ニ相成候』との貼紙あることを茲に追記しておく)

陰徳太記卷第四十八一伯州淨滿原合戦之事一に曰く。『尼子左衛門尉勝久は、味方の城數箇所被ニ攻落のみならず、毛利勢當國に打入て已來、味方處々の合戦に一度も勝利無ししかば、氣を屈し力を落して御坐けり。平野加兵衛久基、此形狀を見て、かくては味方彌々機を失て新山の城にも移る事を得ず逃落なんす、何方へも一働きして、味方に力を添ばやと思ひ、其勢三百餘騎にて、元龜二年辛未二月七日伯耆國尾高の麓なる淨滿原へ夜討をかけ、民村に火を放ち、一揆共難捨て引取らんとする所を、杉原播磨守盛重、尾高の城よりは是を見て、七百許りにて打出で、浸々と取結びて相戦ふ。是を聞く杉原が手の者共、所々より馳來て、前を攻め後を塞て、一人も不殘打取らんと進んだり。平野は父の又右衛門久利、永正七年九月於ニ藝州鏡山麓、初陣に一番鎗を突き、即ち鎗下の功名し、其後數度分捕して晩年作州小田草にて自害したりし大剛の者の嫡子にて、父にも不劣勇猛の兵也ければ、敵の

漸々に相加りて、多勢なるにも些も不臆、四面八方に當り旋電の機を施し、霹靂の手を用けれ共、多寡甚差有ける故、終に戦負て、一方打破り其勢百許り眞丸に成て引退く。粵に杉原が手の者に進孫次郎易季とて名世の早業あり。梁上に巢くふ燕の往來するを抜打に切けるに、毎度其尾サキを切て落しぬ。傍人は是を見て、さしもの孫次郎が、切り外して尾を切る事よと嘲りければ、孫次郎眞中を切らば、無用の殺生ならん事を思て尾を切る也。實に左思は切殺して見せんとて、續けて二ツ三ツ切て落す。其外何の鳥たりと雖も地上に求食する所を走り懸つて切けるに更に外る、事なし。

(校訂者いふ。以下が原本によるも寫本によるも『備陽六郡志後得録安那郡二』の冒頭であつて、陰徳太平記卷第四十八の内、伯州淨滿原合戦之事の條、前に掲げた末文―其外何の鳥―の續きである)

にても、地上に求食所を走掛て切ルに、更に外る、事なし。夫故自慢甚し。朋友に谷本勘ケ由とて、肥滿したるもの有。進、谷本にいひけるは、御邊の豊肥、彌勒佛、布袋の形なれば、事あらん時、達者早業せん事は此孫次郎には及給はしと戲言しければ、谷本聞て、瘦て武勇の功あらは出山の釋迦、十六羅漢などこそ、武篇手柄を顯すへけれ、重て戰場に臨て肥瘦の勝劣は見せ申へしと答けるか、無程此合戦出來ければ、孫次郎一番に打て出、能首二ツ取て來り、谷本か前に擲出し、是見玉へといへは、谷本屹と見、虱頭は何かせん、取ほとならは名有首こそ首ならめと云捨て、唯壹人敵の後を慕ひけるか、平野か百人計にて落行けるか或は返而討死し又は落失て、加兵衛單身に成て落行けるを追欠、平野殿か、返して切死せよと言ければ、平野、石に腰打かけ待居たり。谷本、太刀を振て馳向、火出るほど戦けるか、終に平野を討取、首引さけ孫次郎に尋逢、是見玉へ、一ツも一ツによるそといひければ、孫次郎嗚呼仕たり谷本、他山の石を以て玉を磨と稱美しければ、盛重是をききて、兩人肥瘦に依て勇をあらそふ、短長肥瘦各有體、玉環飛燕誰敢憎と作り。二人か勇に比せんはいかにと大に感し戯けり。吉田肥前守元重、有坂二右衛門も能敵を打取、都て頭七十餘、生取二人と記せり。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第四十八の内、馬田慶篤討死之條中要領を摘録したものである)

鹿助は平野か弔軍せんとて、横道源介、同權允、森脇市正等を催起志、尾高へ働、民家に火を懸る。杉原見るやいなや一千餘騎にて打出、其間數十町を隔て、互に虚實を計て不得懸。盛重は勇猛剛強の兵にてさへあれば、陣中の法令を背たりとも敢て糺す事なかりしにや、高橋右馬允資高といふもの、博塞を好んで亡羊の癖あり。鹿ノ助か手より馬田入道慶篤と云者有、雲伯に双なき大力なりしか、唯一騎馳來り敵陣近、乗寄、備の様物見而歸らんとする所に、資高是を見れば金の鬘(斗)を脱せるか(付)の太刀を佩たり。高名而首を取事は皆人望所なれ共、某、頃日南風不競して太刀、刀迄博奕に打込、木刀に虚袋をかけて帶し侍り。あの敵の太刀、鏡、

某所得すへしとて追行ければ、壇上監物重行、我は馬田か首を可取とて、同續て欠出て、追欠たり。高橋木刀打振て馬田遁すまじきそ、返せといへは、逃るにこそ返すといふこと有、何と云とて、大太刀を振て待掛たり。高橋木刀を以て渡合所を、馬田唯一打にて了と切、高橋手早男にて、背き様につと入、太刀の柄を押へければ、馬田、高橋を取て押伏する處に、壇上馳寄て馬田を二刀さしければ、高橋はねかへして、太刀、刀、鎧等を割取て、又博奕の本手儲たりと、たはふれければ、壇上は能首打たりと氣色ばうてぞ歸りける。山中、立原、口惜おもひて、一千五百騎を二隊に分けて懸れば、杉原、深田を前に當て待かけたり。尼子勢、越煩所を、前原、所原、福田等、散々に突崩す。後陣の横道、押立てかゝり、無難、杉原か勢を突散す。杉原兼て思旨有ければ、小竹一村の陰に扣たりけるか、敵合近く成ければ、散々に射させけるまゝ、引たる勢も取てかへし一所に集り防戦す。勝負未だ見へざる所に、盛重太鼓を打、貝を吹立ければ、草蒲左馬允重政、右之谷陰に伏たる兵三百計、関を作て切て出る。出雲勢是を見て、二手に分て防んとす。盛重再拜を取て眞先に進は、入江大藏、舍弟左衛門尉、佐田彦四郎、我不劣と翔出、敵を打共、首をば不取、追打ければ、出雲勢終に乱て引にけり。盛重も小勢なれば頓て勢を打入ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第四十八の内、羽倉元陰戦死之事の條中要領の摘録である)

秋上伊織助は、所々の城共被攻落、其上平野、馬田も被討ければ、味方彌力を落しぬ。米子の城に福頼治部太輔元秀を追落なは、大山の衆徒數力、事可厚と思惟而、三月十八日に打立んとする所に、伊織助、疝氣甚た起りければ、先延引すへしと云けれ共、斯迄催しける事なればとて、羽倉孫兵衛元陰を物頭として、目加田采女允、同彈右衛門、高尾右馬允に五百餘人、小船に取乗、米子の町へ打入けり。福頼は町を燒せじと防戦しけれども、無二に切て入、所々に火を掛けるほどに、烟に咽て不防得、終に打負、城中へ引て入。羽倉は追亡て數人打取、町屋不殘放火し、勇悦ひ舟に取乗、夜打仕濟したりとて、漕歸りけるか、杉原盛重藝州へ行し留主とさき、杉原か領内神津の民家に火をかくる。然るに盛重、今朝藝州を歸りければ、此烟を見て草蒲、入江、並に吉田肥前守元重の聲、七百計にて打出る。守山勢は所々放火せんとて散乱して在ければ、一戦すへき様なく、羽倉元陰一方打破り、渚の方へ打出けれ共、味方の船は沓の沖に浮みければ、可乗様もなく、遁れぬ所とおもひ、郎等一人脇に立、羽倉孫兵衛元陰、只今最期の軍するを見置て、後代物語にせよとて、小松の陰に二王立につゝ立たり。吉田、入江是を聞て鑓二三拾本にて突かゝる。羽倉、物ともせず岩田藤次郎、別所九郎兵衛、原權六以下數人に手を負せけれども、鑓の柄二ツ三ツに折ければ、三尺餘りの太刀を振て戦けれ共、廿四五本の鑓なれば、終に被突伏。岩田藤次郎膝を被突なから、走掛て首を搔切、鬼神の様に猛威を振ひし羽倉をば、岩田藤次郎打たるそやと、高指舉て歸りける。盛重、羽倉か最期の様をさき、感涙をそなかしける。

(校訂者いふ、以下陰徳太平記卷第四十八の内、秋上父子心替之事の條中摘要)
 出雲國大庭の大宮司秋上三郎左衛門綱平、同嫡子伊織助久家は、無二の尼子方なりけるか、勝久國入之節、本意を達しなは、秋上、山中、兩執事たるへしと約束せられけれども、後は萬事の成敗、鹿ノ助か一胸裡より出て、秋上は餘所になりければ、怨を捨て終に毛利家に一味の盟をなす。毛利家許容有て、平田近所七百貫の地を被_レ宛行_一。伊織助只一人鹿ノ助か宿所へ行、子細有て毛利の令に首を俯候間、一床の風雨に御物語申事も不可_レ有と存、御暇乞に參て候といひければ、鹿ノ助甚悦ひ、終夜酒のみ物語して互に別離の涙をなかし、明日よりは伊織殿を目にかけ可申間、貴邊は此鹿ノ助を可_レ討行を成給へと、手に手を取組、涙に咽てわかれり。吉田八郎左衛門直景は、一生元就に對面すまじきと、神水を呑けるほどの者なりけれども、秋上に一味したりと讒言しければ、勝久甚驚信し、新山にて被_レ誅。中井平藏兵衛久途も逆心有とて新山へ被_レ喚ければ、野心を不可_レ存旨申開、隱岐國へを渡りける。

(校訂者いふ、以下陰徳太平記卷第四十八の内、毛利元就朝臣逝去並鹿ノ助被_レ擒事の條中摘要)
 毛利陸奥守大江元就朝臣、弱疾の兆御座しけるか、元龜二年六月十二日、重らせ給ひ、同十四日七十五歳にて逝去し給ふ。元春愁歎不_レ斜、責ての孝養には一七日の追善に、伯州大山の衆徒、教悟院を可_レ攻破とて、同廿日三澤、三刀屋、南條、杉原彌八郎元盛、宍戸、熊谷、佐波、口羽、以下一万騎を率して大山發向と披露し、山中鹿ノ助か籠たる末石の城へを被_レ押寄。鹿ノ助は坐に油斷而居たる折なれば、防に無_レ便、宍戸、口羽に付て降參す。元春即城を請取、鹿ノ助か首を可_レ刎と宣けれ共、宍戸、口羽頻に命を乞。元春無_レ是非二人へ被_レ預。鹿ノ助は進利男なれば、逃走する事もありとて、周防、徳地に於て一千貫、大山の麓にて一千貫の領地を被_レ與、元春對面有ければ、誠とし貞に禮謝す。

(校訂者いふ、以下陰徳太平記卷第四十八の内、山中鹿ノ助出奔付尼子勝久逃_レ走於隱州之事の條中摘要)
 其後鹿ノ助、宍戸隆家、口羽通良に付て元春へ訟けるは、此度首可_レ被_レ刎處に、却而采地をさへ拜領申事、生々世々の御恩、山海更に難_レ比、責ての報恩には五百人扶持給はり候者、四國に渡り長宗我部か領國を切取、御領國を可_レ成と請けれとも、元春許容し玉はす。然らば千人扶持下し賜は九州大友の地を切從へ候はんと望けれ共、亦不_レ得_レ承諾。扱は深疑玉ふなれ、某降人に成候上は、所々の城共一々明させ可申とて、宍戸、口羽か勢三百餘騎に、鹿ノ助か郎等日野又六と云者を添て、八橋の城へ遣し、城を相渡し候へと云送ければ、福山次郎左衛門茲正、横道權允高宗、是をきとて、愚なる鹿ノ助か云事かな、味方に有し時こそ下知にも隨はめ、命惜さに降人に出、面を晒を耻共不_レ思、何之面目に人之城を渡せとは云覺。敵と成なから舊時の看をなすは何事ぞと返答して、鉄炮を打掛散々に追返す。然共八橋の城難_レ堪、南條入道か扱にて城を渡し、新山へを入にける。其比、杉原盛重所勞にて末石へは出

陣せさりけるか、鹿ノ助か不_レ被_レ刎首とさして、以急使_レ元春へ申けるは、鹿ノ助か降參本心にあらず、命を可_レ繼ためなり。逐電のほと無_レ心元。クズマウ、三柳邊に忍に馴たる者を伏置たる由相達す。然處に鹿ノ助より新山へ飛脚を遣しけるを、盛重か伏の者共擲取、書狀を奪、盛重に告、則元春へ進しければ、盛重か所存と、某符合せりとて、彼書を披見し玉へは、末石の城不意に被_レ取圍、無_レ是非偽て降人に罷出候、何とぞ警固の透間を伺ひ走り振、新山へ可_レ參候。其程は心つよく被_レ思召_レ候而時節を待御座せ、若無_レ勢にて新山の籠城難_レ叶候者、隱岐國へ押渡可_レ給、某も跡より馳參し可_レ申と云たりける。隆家、通良へ此狀を被_レ遣ければ、二人負し魂にや有けん、盛重、鹿ノ助ハ、敵自昔勝れて中惡候へ者、是は如何様、盛重か謀書にて候半と嘲けり。去程に鹿ノ助は人目を偷て振出はやと思ひ、或夜以之外に赤痢を煩候とて廁へ通ふこと、宵方鶏鳴に至て百七八拾度に及へり。番人初は氣を付け共、後は油斷しける程に、廁の桶を遊て美作へを立退ける。宍戸、口羽、首を搔、眉を擡て居たりける。盛重頓て彼飛脚に書狀を添て、宍戸、口羽か陣所へ遣ける。兩人詞もなく面耻しく見へける。元春か彼飛脚をは盛重ともかくも可_レ計と有ければ、刎首ても無_レ證とて、路錢を與へ追捨ける。自_レ夫元春、宍戸隆家、口羽通良、杉原盛重、南條入道、三澤爲清、三刀屋久祐、七千餘騎、新山へ被_レ寄けるか、勝久不_レ及_レ防戰、八月廿五日、簾カ岳へ被_レ落。元春續て押寄給へは、香賀の桂嶋へ、舟に乗て逃られるを、兒玉内藏太夫、軍船數百艘にて追掛ければ、此地にも不堪、隱岐國へを被_レ渡ける。自_レ是雲州敵城一か所もなく、合國無_レ爲に屬しけり。仍而杵築大明神、佐久佐靈社へ神馬を被_レ獻ける。

(校訂者いふ、以下陰徳太平記卷第四十八の内、山中鹿ノ助因州諸所軍之事の條中摘要)山中鹿ノ助幸盛は、元龜三年溢者共を招集、小舟に取乘、丹後を出て、因幡巨野郡岩本へ舟を寄、濫妨し、日比屋と云所に居住し、諸方へ夜打を掛、近郷の領主共、城を不_レ落様にと用心し、敢て刃向者もなし。桐山の古城に修理を加へ居城とし、人衆兵糧澤山に用意し、一城の主となり、海賊一揆の大將なれば、領地もなく、大功を立る事かたし。爰に山名豊國は叛臣武田高信に被_レ迫蟄居せられければ、彼味方になりて逆臣共を追討し、功を立なは大祿を得へし、是立身の端なりと、布施の屋形へ使を立、御家人に被_レ列なは、軍勞を盡し可_レ申由申遣ければ、豊國甚悦、君臣の約をなし、鹿ノ助武威宏大になりて、武田か藩屏の内、法美郡國府の瓶山(一本瓶山)に城を築、楯籠る。高信口惜思ひ、(校訂者いふ、以下陰徳太平記卷第四十八の内、武田高信攻_レ瓶山城一付敗軍之事の條中摘要)八月朔日五百餘騎にて瓶山へ押寄けるか散々打負片息に成て鳥取の城へ逃入。

(校訂者いふ、以下陰徳太平記卷第四十八の内、山中鹿ノ助攻_レ鳥取城一付高信降參之事の條中摘要)豊國破竹の勢に乗て、鹿ノ助を軍師として鳥取を責ければ、高信甚(一本其)勢盡、幼女を人質に出して降參す。此功に因て鹿ノ助を諸臣の上に置、厚祿を與へられけ

るか、斯てはさせる事もあらし、立退はやと思ふ折ふし、立原源太兵衛か方々、上京せよと申来りければ、同年の冬、京都をさして上りけり。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第四十八の内、山中鹿助因州諸所軍之事の條中摘要) 山中鹿助幸盛は、長高、骨荒、眼大に光りて、人を睥睨するに面を向かた、鬚髯胸より手足迄も生たれば、四天に不異して魏の張遼か小兒の啼をやむるの名あり。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第四十九の内、山中幸盛、立原久綱調信長事の條中摘要)

同四十九日。尼子勝久、京都へ被上、山中鹿助幸盛、立原源太兵衛久綱も上洛し、信長上京し給由をき、山中、立原打連、大津へ出向、明智日向守を頼み云々之由案内しければ、頓て對面有。鹿助諸士に一禮し、御前に出、御盃を給り、能男なりと宣て、四十里鹿毛と云駿馬を被下。二番に源太兵衛すらと御前へ出、御盃を給り、退出の時、諸士に一禮して通ければ、立原は男も能か、立振舞も尋常なりと譽玉ひ、貞宗の刀を給りける。兩人申けるは、中國へ御發向被成候者、御先を可仕候間、本國出雲を給り候様にと望ける。信長其旨領許有て、山陰道は明智日向守に先陣を命したり。渠か手に属し忠義を可抽と有ければ、兩人共二日向守に付隨ひ、機嫌に不違様にを行迹ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十の内、吉川元春同元長因州發向之事の條中摘要) 因幡國守護、山名中務太輔豊國も、尼子勝久に志を被通に仍て、天正元癸酉七月、吉川元春雲州富田を打立、伯州八橋へ著陣有ければ、豊國は弱將にて慾深き人なれば、元春の武威に恐れ、頓て降幡を被立。夫より元春父子一万餘騎にて、同國篠尾に屯し、但馬へ發向可有と披露有ければ、山名但馬守入道宗仙、大田垣土佐守輝信、垣尾駿河守豊續、粟坂、田井庄も人質を指出しぬ。豊國は此時幼少の子ニ大田垣勘七と云者を添て被差出ければ、山口、森下、中村、鹽屋子共兄弟を人質に出し、海賊奈佐日本助、佐々木三郎左衛門は、元春の陣に來て降禮を取行。因但兩州、武威に靡き、刃に不血して元春父子の命令に隨ひければ、天正二年正月三日、富田に歸城し玉ひけり。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記、卷第五十一の内、山中鹿助與大坪甚兵衛合戦之事の條中摘要) 同五十一日。尼子左衛門尉源勝久、天正元年十二月、京都をたち但州に下り因州へ入んと欲しければ、元春篠尾に御座ける故、無左右因幡へ入ことを得ず。時に豊國、鹿助に使者を以、某事元春へ相從ひ、人質は出し候得共、勝久に對し弓矢を可爭覺悟候はず、兵糧等之儀は被仰聞次第御馳走可致候也と被言送ければ、勝久大悦喜有、因幡へ入て十日を不過に、敵城十三所陷る。仍之尼子の窄人馳集て、其勢三千に餘ぬ。當國私部の城に、大坪甚兵衛一之、牛尾大藏左衛門を毛利家被籠置けるか、一之、年頭の嘉儀として藝州へ出る由、鹿助傳聞、雁金山に待受、一戦せんと屯しける。一之是を不不知而、旅装にて百人計通りかゝりける所に、鹿助一千餘にて名乗

て出、既に危く見へけるが、鹿助陣、裏崩して敗走す。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、因州私部城合戦之事の條中摘要) 鹿助宿所に歸、今日の軍、仕そんしたる事、當國の兵而已か、杉原盛重嘸嘲んことこそ口惜けれ。私部へ押寄可責落とて、天正二年正月五日、山中、立原、一千餘騎。二陣は武田源三郎五百騎。三番日野五郎三百騎にて私部へ押寄。鹿助下知しければ、甲丸には一本甲丸はとある(牛尾大藏左衛門なるへし、是は計の若者なれば恐るゝにたらず、大坪か家子、姫路玄蕃允三の曲輪に有へし、是ヲ討取事、專一也と、已に門を攻敗んとする所、立蕃打て出ければ、すはやと攻戦ふ。無難立蕃被押立門内に逃入ける所を、鹿助付入にける程に、一二の城戸も責敗らる。牛尾は鬼神をも挫はとの勇者にて、傍を拂て戦ければ、鹿助今日は先、引退て重てこそ攻へけれどとて、武田、日野諸共に靜に引てを歸ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、大坪與武田龜井合戦之事の條中摘要) 同三月十日、武田源三郎、龜井新十郎、鹿野の城を出、近邊の民屋を放火せんとしける所に、大坪甚兵衛に行逢たり。互に名乗かけ戦けるか、武田、龜井終には打負、大坪勝に乗て鹿野の籠迄追詰、龜井か手の者三人、武田か郎等二人討取て、私部の城へを歸ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、鳥取城合戦付山名豊國與勝久二味之事の條中摘要) 九月廿二日、山中、立原、牛尾、森脇、横道、足立、三千五百餘にて毛利入道淨意か籠たる鳥取の城へ押寄攻戦けるか、淨意防戦難叶、城を明渡しければ、勝久頓て入換り給ふ。此勢に因州は忽、靡隨ける。山名中務太輔豊國、使を以て鳥取の城は豊國か端城にて候間、返し給り候得、左候者毛利家一味を翻し、雲龍風虎の約をなし、伯州を可切納、無左に於ては山名但馬守と申合、戈戟を論ひ可申と云送られければ、尼子方評議(一本議)一決而甲の丸を豊國にあたへ、勝久ハ二丸へ含(一本苞)まれば。于時、豊國の家臣、大坪甚兵衛一之、豊國を諫て曰。尼子と合体し、毛利と被背候事、太以不宣。元春父子當國へ發向あらは、因幡一國敗亡仕候なんす、其時は御身の科、遁所なく、自滅し給ふ成へし。早く尼子の約を變し、毛利の命に従ひ給へと、再三諫けれども不被用。大坪は元春の麾下に可属約盟堅固にせしかは、今更非可變。去は主の豊國に弓を可引にあらず、國を去には不如此とて、藝州へ下りける。豊國大にいかり、忠心を勵したる大坪か二人の子、人質として居たりけるを、鳥取の山下に磔にそしたりける。是を見るもの、豊國の所業を彈指せざるはなかりける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、若佐城合戦並諸寄合戦之事の條中摘要) 天正三年二月五日、鹿助鳥取を出て、若佐に押寄、毛利淨意と戦ひ打勝、嘉(一本喜)の関を揚てを歸りける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、山名豊國再與于毛利家付勝久退鳥取城之事の條中摘要) 大坪甚兵衛、藝州へ下り事の様を語ければ、吉川頼て被_レ打出。勝久打出て可_レ戰哉、又可_レ籠城哉と、僉議不_レ決所に、元春、命_レ南條、杉原、責_レ荒神山城、只一時_レ乘崩、城兵山崎十兵衛を討取。山名豊國は毛利と申違ては身を寄る所なしと、森下出羽守、中村對馬守以下の家老を集、又毛利へ降參の義を評義(一本譚)しける。扱こそ大坪甚兵衛、再三諫めしも此事にて候得、はやく元春へ味方可_レ仕由申させ玉へ、乍去無_レ符ては承引有まし、勝久以下當城を追出し、是を符にして毛利家へ成歸らせ給へと諫ければ、承引して對_レ勝久敵の色を被_レ立。勝久、鹿助、山名に被_レ力便_レける事の無念さよとは、いかりけれども、無_レ爲方、龜井新十郎、山名藤四郎、横道源助(一本源介)同權允、森脇市正、牛尾大炊助、進左吉兵衛、一千五百餘騎、私部城へ楯籠。勝久、鹿助、源太兵衛、神西、加藤は若佐の鬼か城にぞ被_レ籠ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、牛尾、山中合戦之事の條中摘要) 豊國元春へ發_レ使者曰。勝久と一旦和睦仕事、忠義を亡却仕たるにあらず、素望建_レ其功、勝久、鹿助を追立候、然共敵は五千、某か勢は二丁にて候間、終には鳥取の城、勝久に被_レ陷候へし、此時御加勢被_レ下候へかしと有ければ、元春、牛尾大藏左衛門に二百餘騎を添て被_レ差越。牛尾、鳥取の山下なる民家をかりて居たる所に、鹿助、天正三年五月七日の夜、五百餘人にて夜打をかけけるか、利もなくて引にける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、私部籠合戦之事の條中摘要) 尼子勝久、因州を切隨へ近日伯州へ可_レ打入と聞へければ、吉川駿河守元春、同治部少輔元長、小早川左衛門佐隆景、熊谷伊豆守信直、嫡子兵庫助隆直、天野紀伊守隆重、山内新左衛門尉隆通、杉原播磨守盛重、南條伯耆守入道宗勝、同嫡子伯耆守元續、次男小鴨官兵衛元清、益田越中守藤包、嫡子右衛門尉元祥、佐波越後守秀貴、三澤三郎左衛門爲清、嫡子攝津守爲虎、三刀屋彈正左衛門久祐、羽根彈正少弼、実道五郎兵衛正義、香川左衛門尉光景、飯田七郎右衛門、廣田、櫻井、福田、牛尾、吉田、周布、都治、久利、岡本、山田、以下二万七千餘騎、隆景の隨兵には三吉式部少輔、同新兵衛、同三郎左衛門、久代修理亮、高野山入道久意、嫡子五郎兵衛、木梨治部太輔元經、平賀太郎左衛門隆祐、小笠原少輔七郎、同彌正少弼、有地美作守、同右近、古志清左衛門、三村紀伊守、伊勢、細川、石川、以下二万餘騎、伯州矢走に著ければ、豊國、大藏左衛門に向て、私部邊へ一働して、毛利家の待設せんとて、山名、牛尾一千五百餘にて、私部の山下へ押寄、在家を放火し、柵を切破る。城中より進左吉兵衛を先として一千人計、鉄炮提出て散々に打かけける。山名が郎等鹽屋、佐々木、山口、毛利、栗坂、田井、先に進、矢軍しける所に、城兵横合に懸り突崩しけるほどに、牛尾、山名、被_レ突立。牛尾大藏左衛門、同源次郎、已に可_レ被_レ打處に、金尾藤藏(一本藤三)といふもの助來て、危命を助りける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、私部城降參付香川森脇連歌并今田經忠大弓之事の條中摘要) 毛利の兩將、九月二日、鳥取の麓に著陣有しかは、山名豊國二千餘騎にて出迎、千谷川に方舟を懸、諸軍を勞し、翌三日私部城へ被_レ押寄。或夜牛尾大炊助三百餘人切て出る。吉川又次郎經言后号侍從廣家十五歳にて初陣成けるか、自鎧を取、勇進て懸り給へは、從兵先に立て戰けるほどに、一支もさへす颯と引。杉原、南條是を見て、風生鳳子と甚感稱す。比しも長月半の事なれば、天高く氣清、蕭寥蕭殺として四方山の紅葉、眼を悦しむ。時に森脇市正久仍、楯の面に顯出、御陣へ物申さんと呼びければ、すハ降參を乞ならめと、何事にて候そと答。四方の風景の面白さに、愚なる御笑種を一句仕候間、先、弓、鉄炮を御止候而、御聞可_レ被_レ下哉といひければ、寄手の面々、弓、鉄炮止申候間、疾々御口號承度候とて、鳴を靜て聞_レ之。久仍

山ははや、かつ色見する、時雨かな。
發句の様、優長にして、殊に城中勝利の心を含たりければ、寄手に脇を付るものもなく、坐に時移りければ、元春、香川兵部太輔を召、此脇早く作れと仰ければ、畏候とて、その詞の下より、春繼

秋のあらしに、落る朝露。

夫より第三、第四と互に更々、表八句を終たりける。主客一場の感情を發するのみか、永年の風流を傳る事、誠にやさしき事共也。横道權允高宗、楯の表に出て詞戰しける所に、寄手の陣より今田中務少輔經忠、四五人か力なる大弓に、三尺餘の大矢取添、如何に横道殿、某か弓勢のほど被_レ試候へ、矢坪を承候者小兵なり共仕てこそ見候半と云ければ、曾て不_レ存寄_レ御事い。無_レ詮所にて敵の矢請候程なる虚者にては候はずと答。今田聞て是は案外なる御事哉、左宣は臆病之至かと存候。佐藤次信(一本嗣信)は能登殿の大矢を請たりしは、古來虚者と唱へ候哉、其矢を請たればこそ大剛の名をば末世に傳へ候へといふ。されは其次信と權允一般の看を成給こそ今田殿共不_レ覺候へ。嗣信が教經の矢をうけしは主君の命に代たれば、弓矢取身の庶幾所にて候。左あらん時にて候者、此權允も幾筋をも受候へし。今何の子細もなく、御邊の弓勢試ん爲に、ニツなき命を的に掛候事は、甚愚痴の至也。あら思不_レ寄哉とて楯の中へそ入にける。今田大に腹を立、矢取て打番ひ、小臂の廻る程引包、絃音高く切て放つ、横道か楯蒔たる木を寸と射徹し、鏃白三寸計射出したり。其時權允、楯の外に立出、夥しの弓勢や、我等か不_レ受は理也、危命拾て候とていひければ、敵も味方も道理也と、一度に咄とを笑ける。其後城中以之外に弱り、杉原を頼み一命を被_レ助候者城を渡し可_レ申と頼に侘けるによりて、其旨に任せ、諸士の命を被_レ助けり。森脇市正、横道源介、同權允、牛尾大炊助等、一騎當千の兵なり。味方に降りなは本國出雲におるて采地を可_レ與と有ければ、彼等も尼子の弓矢是迄とや思ひけん、又は本國を離索せんことも名残おしくや有けん、降人となり杉原に

寄居しけるか、後は何れも吉川元長に塞仕しけるこかや。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十一の内、若佐鬼之城落去之事の條中摘要) 尼子勝久は若佐鬼が城に被籠けるか、鹿助を召て、私部の城を明渡のみか、宗徒の兵降参する上は籠城成かたし。但馬へ引去、京都へや上ると僉議有ける所に、杉原盛重、香川兵部太輔、小坂越中守、草苺三郎左衛門、同太郎左衛門四千餘騎にて押寄ル。鹿助我杉原に對して當城を落る事(一本落ん事)口惜といへども、長居して十重廿重に取卷れなは徒に虜と成へし、いざ、せたまへとて、勝久に供奉し、夜に紛れ但馬を差て逃上る。同國宮吉には田公新右衛門、同新助(一本新介)楯籠けるか、杉原、香川、小坂押寄ければ、取物も不取敢落行ける。因幡一國の敵悉ク退散しければ、兩將同月廿五日、雲州平田へ打入給ひ、隆景は先達而藝州へ歸り玉ふ。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十四の内、尼子勝久入上月城事の條中摘要) 同五十四日。尼子勝久、再び追隨する所の山中、立原以下の者共、京都に集り、本國歸入の策を議論し、近年は明知か麾下に在しか共、此回は羽柴秀吉の幕下に付て、先、作州を切取、夫々本國へ入覽とす。播州、上月の城には宇喜田直家より、眞壁彦九郎を籠置たれば、先是を可攻とて、勝久二千騎にて押寄んとす。眞壁は臆病第一の者なれば、此風説を聞かばやく、取物も不取敢、城を明て逃走しける間、勝久不費矢鋒、上月の城へ入たまひける。彦九郎が弟次郎四郎、大剛の者にて、此事口惜思ひ、直家へ訴ければ、兄か耻を浼はんと思入たること、心肝に硃と覺たり。奈様にも手痛合戦すへきなりとて、撰兵三千を被差副。次郎四郎、不耐悦、妻子眷属に暇乞し、日蓮の流題目を書て笠符に付、三千餘騎にて上月の城を去事、六十餘丁此方に一夜陣を張。鹿助是を聞て八百餘人を勝て相符相詞を定め、加藤彦四郎に三百騎、神西三郎左衛門に五百騎付て、天正六年正月、未春立と云名のみにて、吹風も返返り、消ル間降繼夜の雪、整々として墮指裂膚、士卒身を縮て伏居ける所に、おもひも不寄夜半計に押寄、時を咄と作りければ驚駭逃散ける。去共次郎四郎此も不騒、床凡に腰打掛、靜り返り居ける所に誰とは不知素肌なる歩武者壹人、只一打と馳かゝる。次郎四郎屹と見て、艶き者の志かなと、眞向二ツに切割たり。安達治兵衛透間もなく切て掛り、次郎四郎が両膝を難倒し、頸搔切、治兵衛が弟慶松にそあたへける。直家不安心、近日上月へ可押寄と被擬ける。尼子方のものとも、待請て一戦せんと勇けれども、兵糧乏しかりければ、勝久、攝州へこそ被引ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十四の内、羽柴秀吉陥上月城付勝久再入上月城事の條中摘要) 勝久、上月の城を去しかば、直家より上月十郎、矢嶋某を被差籠。羽柴秀吉斯とさ給ひ、三万(一本二万)餘騎にておしよせ、十重廿重に被取巻ければ、城兵爲方なく、上月、矢嶋を打て出し可中間、一命を助たまへと歎けれども、無領許、悉、搦取、張付にかけ、籠籠をさせ、上総

躍をさせんとて、一度に火を被付けるほどに、叫喚、大叫喚の罪人もかくやと、見るに心暗胸塞り、哀なりける事共也。夫々して此所を張付谷とぞ號しける。斯て勝久、此城には誰をか可被籠と有ける所に、山中鹿、助楯籠らんと云ければ、立原源太兵衛無用といひけれども、山中雲州へ入の利を談しければ、評議一決而再、上月へ入城せられける。其人々は勝久を大將として尼子助四郎氏久、日野五郎、侍大將は山中鹿助、立原源太兵衛その外、福屋彦太郎、龜井新十郎、吉田三郎左衛門、河副右京亮、同三郎左衛門、同次郎左衛門、米原助四郎、目黒助次郎、月坂助太郎、平野源介、屋脊右兵衛尉、津森宗兵衛、卯山彌太郎、三吉五郎左衛門、小林甚助、神西三郎左衛門、熊谷新右衛門、大塚彌三郎、日野又五郎、田原右衛門尉、大野平兵衛、福山彌次郎、同内藏允、青砥助次郎、中井與次郎、片桐治部丞、渡邊内藏助、江見平内、加藤彦四郎、妹尾十兵衛、池田繼殿允、本田平十郎、野津次郎四郎、江見九郎太郎、同源内左衛門、加藤新右衛門、安達治兵衛、同慶松、目加田采女允、同彈右衛門、寺本市允、法城寺理庵、(一本理安)進藤勘助、秋里目、進左吉兵衛、馬田長左衛門、山佐民部太輔、古志九郎次郎、高橋佐渡守、相從二千三百餘騎、上月城に楯籠、作州を切取、自夫雲州へ入んと擬す。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十五の内、丹波但馬國人請元春出馬並隆景欲攻上月城僉議事の條中摘要) 同五十五日。丹波國住人、赤井刑部少輔辛家、荻野悪右衛門直正、石川彌七郎繁俊、宇野六彌太、波多野伯耆守、其外一味同心の國人共、吉川元春へ使者を馳て、當國へ御出張被成候者、京都へ押寄、信長を可退治之由、申送る處に、宇喜田直家より尼子勝久、上月の城に楯籠候也、御馬を被出候者、某先陣仕、數代の御敵尼子の遺棄を斷滅し候へしと有ければ、隆景は丹波へ出張有へしとの事なりけれども、元春、先、上月を攻落し、累年の驍敵を可亡と評議一決す。直家は尼子退治の爲に毛利を僞引出し、方便て元春、隆景を討取、是を信長への忠節に可成との隠謀成けるとかや。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十五の内、元春隆景被圍上月城付秀吉後詰之事の條中摘要) 元春、元長、上月可被出張返答有しかば、輝元、隆景、藝州吉田並に沼田の城を被發、天正六年三月十二日との約、輝元譜代隨逐の人々、穗田伊與守元清、天野六郎左衛門元政、宍戸安藝守隆家、嫡子備前守元好、國侍には三吉式部太輔隆慶、同新兵衛政慶、高野山五郎兵衛、久代新十郎、楯崎彈正忠元兼、平賀太郎左衛門元祐、同木工頭、三村紀伊守、清水長左衛門長治、草刈太郎左衛門景繼、小笠原少輔七郎、上原右衛門太夫元祐、田治部藏人、比幡六郎兵衛、伊勢、細川の一族、大石、志賀、杉次郎左衛門貫並、仁保右衛門太夫隆康、三浦、吉田、朝倉、毛利家旗本に福原、桂、坂、渡邊、國司、粟屋、赤川。小早川旗本に、木梨、掠梨、包久、小泉、磯兼、井上、南など二万八千騎也。舟手は兒玉内藏允元助、粟屋内藏允元宣、野嶋大和守武滿、同掃部助、同三郎兵衛景親、村上八郎左衛門景慶

(一本景廣)、同越後守、浦兵部丞宗勝。大船七百艘、播磨湯、室、那波、坂越邊に係て海上を警固せり。元春隨從の將士には、嫡子治部少輔元長、二男左近允元氏、三男民部太輔經言、毛利七郎兵衛元康、毛利少輔十郎元秋。國人には山内新左衛門隆直、同刑部少輔、益田右衛門佐元祥、羽根兵庫助、佐波越後守、同又左衛門、都野彌次郎經良、三澤三郎左衛門爲清、同攝津守爲虎、宍道五郎兵衛、田賀喜三郎元忠、天野紀伊守隆重、同民部太輔元珍、三刀屋彈正左衛門久祐、古志因幡守重信、湯佐渡守家綱、杉原播磨守盛重、嫡子彌八郎元盛、次男又次郎景盛、出羽少輔次郎元祐、赤穴右京亮幸清、有地左近、同左京亮、南條伯耆守元續、小鴨左衛門進元清、山田出雲守重直、小森和泉守、湯原彈正忠元綱、吉田肥前守、日野左近、福賴治部太輔元秀、同藤兵衛、周布左近太夫元城、祖式式部少輔元勝、久利三河守盛勝、都治、岡本、小東、田利、小曳、吉川旗本には宮庄、今田、吉川、香川、桂、小坂、伊志、筏、粟屋、森脇、境、山形(一本山縣)、二万三千餘騎、雲州富田月山を打立、作州高田に著陣し、隆景と打連、上月へ出張し玉へは、輝元は備中松山に被_レ扣。直家は所存有て病氣と稱して、家子長船紀伊守、岡越前守、戸川肥後守秀安、明石飛騨守景親、宇喜田七郎兵衛忠家、同信濃守、岡剛助(一本剛介)沼本新右衛門、高取備中守、花房志摩守、同助兵衛直次、中村三郎左衛門、足達太郎左衛門、伊賀左衛門進、富山半右衛門、市五郎兵衛、菅田五郎太郎、延原内藏允、宇喜田河内守、小笠原孫次郎入道信明、檜原監物、江原兵庫、一万五千騎、都合六万六千騎、上月の城を稻麻竹葦のごとく取圍、関を作る事三ヶ度なれば、上は非想、下黄泉に徹しぬへく覺へける。羽柴秀吉、後詰をせらるゝ事候へし、堅固に被_レ構候へど、元春が隆景へ被_レ云送_レける處に、長船紀伊守、岡越前守、隆景の本陣に候しけるか、秀吉出張は有間敷候間、強、堅固になくとも苦は候ましと申ければ、隆景是に同し、其旨承候とは有なから、陣外の用意はなかりけり。元春日、信長か多士の中より撰出し、中國の先陣とし播州を全賜て其威光初日の東嶺に輾り、鴻水の堤坡を費如し。然るに我國内にて家城十里の外を不出所を敵に圍せ、後詰せざる事可_レ有。今見よ後詰遠に非しと宣し所に、秀吉、荒木攝津守村重、四万餘騎、四月晦日、上月の後詰として高倉山に屯を張、隆景の陣の廻り嚴敷構ると騷動す。内外往來の守衛として、新見左衛門(一本左衛門尉)森脇相摸守、檜崎正(一本彈正忠)を被_レ置ける。秀吉、今度、中國勢と初度の會戦なれば、如何にもして一鹽付まほしく、祈禱などし給ひけるか、五月十八日、京都里村紹巴法眼の亭にして、連歌の張行有。發句は聖護院宮なり。

常盤木も、かついろみする、若葉かな。
夕かけふかき、夏やまの露。
代句 秀 道 澄
吉 巴 紹

百韻成就し、腰紙に御酒を添て、高倉山の陣へ進獻す。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十五の内、高倉山忍討並上月後詰勢馳加事の條中摘要) 杉原盛重、敵陣を見渡し、忍の者共を近付、汝等かゝる時節、忍打させん爲にこそ、比來藏を穿、屏を切、盜賊するをも見遁し、きゝ遁したれ、いかにもして秀吉の陣に忍入、用心のほどをも試よかしと有ければ、徳岡久兵衛、佐田彦四郎、舍弟甚五郎、同小鼠、別所三次兵衛、舍弟雅樂允、安原神次郎、菊池肥前守を始、廿四人(一本二十餘人)敵陣へ忍入、一番に徳岡久兵衛、篝火焼て眠居けるもの、首、中に打落す。其隙に残る者共、手毎に頸を引提て出けるか、雅樂允は、刀の寸延、殊に鐔大にして挂ければ、敵を取て押へ、打共々々、首不_レ打。陣中には忍討の入たるを知て、京勢、得武具取合せ替けるをきゝて、廿餘人之者共、向の尾崎へ引取。爰にて聞は、雅樂允を首打太刀音しければ、彦四郎如何に別所、鐔か支て、きれぬと覺ゆるぞ、中に提て、きれと云ければ、實もどおもひ、首引舉て一打に打切て、杉原播磨守盛重が郎等、別所雅樂允當陣の真中にて、忍打に敵打て候なり、畿内、美濃、近江の弱敵など、一般に思給は、不覺し可_レ給とぞ、大音揚て討_レ討りける。其男不_レ遁とて、追欠けれども、暗さはくらし、所は不案内なり、皆手を空してぞ打入ける。此忍打に懲て高倉山の陣には捨箒、本箒焼續、白中の如くなりけれども、盛重が手のものども、猶も度々忍打、夜込などしけるに、さしもの京勢、安き心はなかりけり。去程に、信長、近日、上月へ出張し、吉川、小早川を可_レ討取_レ各馳下り、秀吉に力を可_レ戮と有ければ、惟任日向守、筒井順慶、武藤彌兵衛、瀧川將監、四月廿八日著陣(一本四月廿八日九日の間に打立て、五月初旬に上月へ著陣とある)せしかは、高倉山の勢八万餘騎に成ぬ。相續て北畠中將信雄、神戸三七、織田上野介、永岡兵部太輔、蜂屋兵庫、氏家左京亮、伊賀伊賀守、稻葉伊與守、佐久間右衛門尉、五月中旬には後詰の勢十萬騎に過たり。然共、元春、元長、隆景、此も不_レ疼、只はやく城を攻落し、信長を待請、一戦を可_レ勵とぞ被_レ勇ける。中將信雄、惟住五郎左衛門は信長出張の注進次第、上月へ可_レ下とて、攝州に被_レ扣。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十五の内、元長夜合戦僉議之事の條中摘要) 元長、敵陣を見渡し、十萬の餘と覺たり、此上に信長出張あらは由々敷大事なり。白晝の合戦は勝利危候間、夜合戦を掛て可_レ切崩と元春へ被_レ申ければ、尤可_レ然、隆置(一本隆景)へも被_レ申候得との事にて、隆景へ演説有ける處に、安國寺不可_レ然由申に因て被_レ延引。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十五の内、上月城兵盜臺無鉄炮一付寺本勝重弓精之事の條中摘要) 五月十四日、杉原盛重か仕寄より、臺無の大鉄炮を城の櫓へ放ければ、忍、隅の柱を打碎、吉田三郎左衛門にて微塵に成て失にけり。城中是に恐怖して踞居す。鹿、助下知して曰。杉原か臺無を以て、水の手を打取而已か、今又、隅の櫓を打破ぬ、忍に馴たるもの渠か陣へ忍入、彼大

筒を刳落し、谷底に數十人待受、落ると齊く城中へ取入へし。取得なは敵陣へ打かけ、先、杉原か陣を可打破、城中運を開事は、此臺無を盗に有。盜得たらん者には振群の賞を可申行と云ければ、進藤勘助一本勘介、力石小六、堀權太夫、伴大助(一本大介)、等數十人忍出、杉原か陣へ入て見るに、仕寄番の者共、夜半計の事なれば、油断之跡に見へける所へ、咄と叫て切てか、れば、番のものとも大に驚、逃散ける。其隙に臺無をば、遙の谷へまくり落す。是をき、て後の陣より、夜打入たりと呼て渡合切結。進藤勘助敵壹人に手を負せ、勘助とは不_レ被_二名乗_一而、震動雷電助と名乗、散々に戦けれども、敵大勢なれば不_レ叶して歸ける。杉原か郎等共、敵を追散してみれば、彼鉄炮なし、こはいかに、敵盜取たりといふ。去共、重きものなれば、自由に取ては歸るまじ、そこらに捨置つらん、尋求よやと、爰彼所、搜しけれども見へさりけり。盛重、是をき、て口惜次第かな、盛重生涯に面目を失ひ、身後の耻辱なり。此鉄炮を不_レ取返は、我此城を枕にして可討死、郎等共も壹人も不_レ殘切死にせよと、跳騰り、忿りけるか、先人に知らせず、僭に尋よやと、忍々に尋けり。爰に今田中務、吉川式部、香川兵部、會合而、扨言茶話して居けるに、森脇石見、井上肥前、同道にて外を通りけるか、あれを可取とは不_レ思寄、何として盜けん、杉原よも盜れては堪まじ、城中取は得たりとも、一時に被_二乘破_一、小利大損すへしと、つぶやきけるをき、て走出、何事ぞとへは、杉原が臺無を城中へ盜取て候と答ふ。是をき、て盜れながら其儘にてやは可置とて、三人の者共、各鎧提、馳行ける所に、三百人計控たり。香川が郎等、三安源允、是は何れの手の衆候やと問ければ、杉原が郎等、壇上監物重行にて候、今宵臺無を城中へ被_レ取て候、是を取返し不_レ申は、當城を乗破るか、又城門を枕として討死仕るか、二ツの中に相極候といふ。兵部太夫、扱夫は敵はやく引取候か、又被_二追拂_一候かとへは、監物、敵をば即時に切立候程に、這々逃入て候と答ふ。然は何方ぞに捨置候へきと、能_レ被_二搜索_一候へ、卒爾の働したまふなど云ける折しも、元長より軍使を以て盛重へ宣けるは、鉄炮を取返事を不_レ得は、其儘城へ被_レ乘候得、後をば元長詰掛可申と有ければ、盛重手を合て悦び、あれ承候へ、御大將より仰の有けるぞや、鉄炮を不_レ得尋ば、一人も生て不_レ可歸と下知しければ、手の者共、切岸へ付て、盛重が一言を待て、一度に乘破んと静り返りて扣たり。吉川が手之者、今田、中務、是迄攻寄たり、我と思んものあらば、出合と呼りければ、黒具足著たる武者一人、櫓へ上り、唯今今田、中務と被_二名乗_一候は、いつかたに渡り候や、斯申某は、寺本市允勝重と申ものにて候、一矢請て御覽候へといひも不_レ敢切て放、其矢不_レ誤二宮奎助春實が鎧もたせたる力者の肩より背へ射徹しける。寺本、只今の矢は手答して覺候、今一矢仕候はんとて、又矢取て打番ひ射けるに、杉原か手の者、具足著る間の無りけるにや、腰白の帷子著たりけるか、白き所をや期けん、臍の下を後へ、究と射抜けり。杉原か響吉田肥前守、切岸に付は、彌八郎元盛、又次郎景盛、相續て既に可_二乘破_一に決定しける處に、敵、臺無に綱を付、忍やかに城中へ引上るとて、櫓楯に係て引煩ひたる所を、三宅源允(一本

源助)屹と見付て、爰に臺無あり、已等一人も遁すまじきと切てか。此を聞て鉄炮を打捨て、切岸を這上り、城中へこそ逃入りけり。盛重、臺無を取返し、會稽の耻を雪、今宵の命も活たりとぞ見へにける。斯て彼臺なし匣三尺餘の木カの槽にかゝりけるを、臺尻筒口に繩を付、一方を杉原か家人、入江大藏、同弟左衛門進、二人して引、又一方をば、今田中務少輔經忠、同弟新見新左衛門春信二人して引たりけるに、何も不_レ劣大力なれば、曳やつと引は、今田か方へより、入江足をふみ張て引は、入江か方へ倚けるを、互に負しと引合たり。香川是をみて唯今敵の突て可出に、無_レ詮角力哉と制しければ、尤も同しなから、互引合けるほどに、件の切槽、究と扱、遙の谷へそ落たりける。土は活と裂、臺無をば谷底へそ落しける。其後、此臺無を杉原か陣へ引上るとしけるに、筒口の方をば侍六人にて擔けるに、臺尻の方は入江大藏唯壹人して、いと輕けに荷ひ上たりける。天晴の大力かなと感稱せざる人はなし。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十五の内、捕_二城中間使_一事の條中摘要) 城中より夜々忍て高倉山へ往來するもの有、元長の近習荒木又左衛門長利、見付て追欠ければ、城中_二鉄炮を打掛_一けれども、少も不_レ疼、大手を播け追回、杉原か陣中へ追込、鬚を捕て引伏、擲取、元長の前に引居、隠持たる文を取て見れば、円角科斗魚龍の文字也。又一通、肌ハに付たる有、取て見れば、今度秀吉之陣通路仕済に於ては、雲州島根一郡可與と書たる勝久の判物也。其名を伊丹孫三郎と云、杉原か陣へ秣を入、又、胡餅油糍なとを買たる者なり。元長左右も盛重計ひ候へと有ければ、引出して首を被_レ刳ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十六の内、上月合戦之事の條中摘要) 同五十六日。高倉山の麓、秀吉方の軍兵、熊見川にて毎朝馬を冷し手水を遣ふ。六月廿八日の朝、宇喜田の先鋒、中村三郎左衛門、小早川勢、井上彌兵衛、喰留んとしけるか、鉄炮にて被_二打立_一、二三人被_二打倒_一、既に危見へければ、南條、小鴨、助來て防戦す。秀吉方の勢共、段々重み戦けるほどに、吉川方難儀に見へければ、盛重か家人、渡邊左近、所原彌六(一本彌太郎)、入江平内、茶道坊主全從庵、助來て鎧を入。所原兵庫助討死す。南條伯耆守か家人、末石彌太郎、手を負て伏居けるを、誰とば不知、若武者一人、敵の弓、鉄炮を雨の如くなるを不_レ屑、走寄、静々と頭を打。其後に眞黒に鎧たる武者、鎧提、二王立に立て、敵か、らは突伏と控たり。聽て首を打濟し打連て歸けり。後にききは福嶋左衛門太夫正則當年十八歳、初高名、後に立しは郎黨星野越後守なりしとや。去程に秀吉方、二万餘人、上月の郷中に打下しければ、南條、杉原、安道、中村、五千の軍勢被_二押立_一。是を見て杉原父子三人、吉田、河口、今田、吉川、香川、山縣、森脇、新見、天野、三澤、三刀屋、古志、益田、佐波等一万計續たり。吉川元長は兼て吉川式部少輔、香川兵部太輔を以て盛重に宣けるは、秀吉後詰として出張なれば、手詰の軍可有。元春、隆景は大將の事なれば、自ら手を下し給ふまじ、元長は大將といふにもあらざ

れは、自ら手を碎、勇の程を京勢に見せ可申、合戦に可成体候者、盛重急一左右可被申、其刻可打出候。萬事は盛重を頼存るなりと有ければ、盛重中國に名有武士共多き其中に、分て某を頼被思召候事、弓矢取ての面目にて候。御本陣へは道遠候へは、注進往返の時刻延可申、足輕迫合有て、鏑に可成摸様に候者、相圖の火ニツ立可申、其時御物具被召て御待候へ、大合戦に可成と存せば、又一ツ立添可申、其時御馬を出させ給へと約束しけるが、盛重頓而相圖の狼煙を立たりければ、吉川治部少輔元長、同左近允元氏、同民部大輔經言、出馬有ければ、杉原、南條、雲伯石の勢一万餘騎、本道筋へ打出る。脇々の小迫合は諸方の國人谷々峰々に分て相戦ふ。秀吉方の先陣、中村孫平次、神子田半左衛門、美藤甚右衛門、大谷刑部、木下備中守、五千計。二陣は黒田官兵衛、同吉兵衛、同兵庫助、蜂須賀彦右衛門、一柳市介、堀尾茂助(一本茂介)、三千騎。其後は信長々の援兵相續て四万餘騎。中國の者共何程の事あらん、手取にせんと進たり。元長下知而曰、畿内の者共は敵の虚を伺ひ、馬を入、蹴崩由。然者味方の足輕共、射拂々々して、敵馬を入んとせば一度に下り敷、膝の上に馬を乗懸る共、一人も不立上、兵馬の足を可難と。矢軍已に始ると齊敷、吉川民部太夫經言と名乗て川を渡し玉へは、元長を始として、杉原、南條おとらしと渡しければ、上方勢被押立て颯と引。黒田、福嶋、蜂須賀、一柳、堀尾、宮部善乗坊、加藤虎助、同左吉、押返、馬を一面に並て攻來る。吉川方雨落と居敷、弓、鉄炮を射懸けるほどに、京勢十四五人被射落、漂所を杉原父子三人、吉川勢二千餘騎、咄と切蒐ければ、又被突立、三四丁計引たりけり。元長軍使を以て長追すなど下知し給へは、士卒又如本歸たり。中國勢、大將の命を守り、一左(一本座)一作、或は左し或は右する形象、自在を得て、畿内の兵とは雲泥の差有て、治衆如治寡なれば、可叶共不見、次第々々引て行は、中國勢靜に兵鼓を打て進み、敵馬を入んとすれば、居敷て射るほどに、高倉山の麓迄廿餘町引たりける。秀吉の本陣其外筒井以下の人々是を見て、あれ助よと打出けるほどに、後陣の大勢に打て進退不自由、去共續味方に力を得て、上方勢、高倉山の山足にて一度に取て返りし、馬を一面に立駢、足輕を先に立、鬨を作て備たり。中國勢も杉原父子三人、吉川勢眞先に進み、波羅々々と下敷、散々に射る程に、京勢有無の大戦可有と見る所に、彼此互に避實擊虚と伺、矢軍足輕迫合計にて、大戦をば慎たり。此時荒木攝津守、上の山より眞逆に横合にかゝりなは、中國勢は可被押立て、毛利家に所存有ければ、遠見して居たりける。又宇喜田直家、秀吉の陣へ切てかゝりなは、如何に剛強第一の秀吉なりとも、忽、敗北たるへきに、信長へ志有ければ、時の勝負を窺て、空嘯て蒐合す。去ほどに、中國勢、高倉山の麓迄逼詰、山上を屹と見上れば、さしも名高、羽柴秀吉、陣々を稠構、惣勢は山半腹迄下降り、權任、惟住、筒井、稻葉、伊賀、蜂屋、一勢々々打出て、勇氣赫然として扣たれば、中國いかに進共、二万の勢にて五万餘の敵を可破とは不見けり。しかれども、中國勢、敵を追事廿餘丁なれば、勝に乗て些も不臆、足輕を先に立、弓、鉄炮にて時を移す。大谷、神

子田、義藤、六七千計押來る。後の方、高倉山へ續ては、何方といふ事を不知、中國勢被押立かと思見る所に、元長、下敷と下知し給へは、眞先に進たる杉原盛重、同元盛、景盛、今田、香川、新見、森脇、其外の勇士、田の時に尻打掛、下敷、前に鉄炮を立、膝の上に鏑横たへて待かけた。敵味方、弓、鉄炮、鬨の聲、山河、大地動搖し夥しかりける所に、秀吉、軍使を馳て早々引取候へ、敵、山下迄押來るといへども、元春、隆景が旗、本陣にあれば、大將の下知なくは當陣へ付入にする事は不能と。元春は野合の戦を好む大將とさき、若、後陣を被詰は、引共被引間敷、はやく輕々と勢を入よと宣ければ、物馴たる上方勢、備を立設け、繰引に一段づゝこそ引にけれ。藝州勢、敵引と見るより心安、鉄炮採居て打ほどに、上方勢手負死人不知數。吉川經言、杉原元盛、景盛など、卒、食留、一人も不殘可討所なれと進み給へは、元長、盛重、窮寇勿迫、歸衆勿追、行きさき狭き所なれば、敵引事を不得、大返に返しなば、忽可所突崩とぞ。追北不過百歩とは不言やと、備を堅め、鉄炮足輕二三百人所々に走り渡り頻に打立。敵も次第に山上へ繰引に引ければ、毛利方も靜に打入、初て逢たる上方勢に、一塩付たりと大に悦ひ勇けり。元長は敵不堪引ける故、大戦の無りける事を殘多ぞ思ひ給ひける。荒木村重、毛利家へ志を通しけるを憎しとおもふものやしたりけん。

荒木弓、播磨の方へ、押寄て、いるもいられず、引もひかれず。
 (校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十六の内、羽柴秀吉退陣事の條中摘要) 信長近々上月へ可有出馬一時節に至て、秀吉以軍使中國勢の陣形堅固而資糧多、何十年を経る共不可屈様躰候、然者今度之御出張、先有御延引可宜候と被申越。信長さしも依倚に思ける尼子を捨て、出陣なかりけるこそ永き弓箭の疵なりけれ。斯て秀吉諸將を集て、毛利の軍の分野をみるに、聞しに増り大將は大機大用を兼備、相從所の勇士猛卒、以死爲榮故、毎度味方失利。かくては當陣不安穩と評論有ける所に、官部善乗坊、進出。合戦座作進退非尋常、此程數ケ度、輕騎を以、挑出し、一戦して強弱賢愚を察せんとするに、却而敵の爲に被欺候。元春、隆景、五材を相兼、上下合躰し、父子君子の兵なれば、幾度戦共、味方可無利。只當陣を引給ひ、重而信長と御出馬有て、敵の根葉を斷玉へかすと申ければ、各此義に同じ、廿九日の拂曉に、高倉山の陣を拂ひ、書寫山迄こそ被引ける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十六の内、上月城没落付勝久自害之事の條中摘要) 去ほどに、勝久を初、上月城中の士卒、羽柴秀吉、荒木村重等、後詰の人々一戦に利を失ひ被敗績ければ、失母嬰兒の悲を抱り。山中鹿助爲方なく、元春、隆景へ使者を馳て、此度籠城仕候事、全勝久、某等か所致にあらず、神西三郎左衛門元通が所爲にて候。然者元通一人切腹させ可申候間、勝久以下一命を被助候へと申越ければ、両將聞給ひ、神西一人に切腹させ、殘黨可助、左有事候得共、羽柴以下の諸將、後詰として對陣せし事、其隱不可有、然るに大將勝久切腹候はでは、都鄙のきこへも如何候。勝久、氏久、神西、加藤、四人切腹可

有之、然者山中、立原以下の人々には不可有異儀と返答有。鹿助再三、勝久無科由を佗けれ共、無領許。鹿助不叶是非、勝久に向ひ涙を流し御命助り給様にと、再三申理候つれ共、兩將且(曾)て無承引候、御運の極る所にて候條、今者御自害可有にて候。某御供可申事、當然の儀に候得共、從前之敵家と申、中にも元春怨讐深く、肺肝に徹い間、偽て降参仕、相見の盃之時走掛、刺違、多年の鬱憤を可散候。不義の降人とな被思召候な、死出三途にて追付可申、其時こそ忠義の無虚偽をば思召知せ給候はめと申ければ、勝久、我法衣を纏ひ、抖擻行脚而可終身を、御邊の芳恩にて當家の大将と稱せられ、數力の軍兵の命を知らる事、一分の光耀なり。今自害に及事、弓箭の身の習なれば、何の恨か可有。増て諸士の命に代るをや、大将たる者の幸なり。御邊元春と刺違ント欲せらるゝこと、忠勇義不二方志なり。去共、知勇超越せる元春なれば、輒は刺違へられまじ、怒なる事仕出して、指頭の嘲を残し給ふな。命を全して時節を窺、長田に御座す隨間を始、尼子龜(一本庶)流のもの、身を憐め跡を暗して在之を尋出し、大将と稱し、再び當家を興復し玉へと宣ひ、其後諸士を集、多年の軍勢を謝し、金銀、太刀、鎧等を取出させ、勝久、今可折、矢盡テ此有様となりたれば、日來の忠志を可報に無力。去共積善の餘慶、天鑑不暗、行末榮耀の春に値るべきぞ、後の信どもし玉へとて、夫々に分ち被與ければ、皆人、袂を絞りける。七月二日、神西三郎左衛門元通、城の尾崎へ出て自裁すと披露しければ、諸軍士群聚して見物す。元通、肩推脱で刀を振ながら、聲美く鐘馗の曲舞の半より楯の花の上なる露よりもと、緩々と諦ひ、哀なりける人界を、今こそ離果にけり(一本けれ)と、末を少、諷替て聲の下より腹十文字に切たりける。翌三日、勝久諸卒に盃給り、書院に疊を重敷、座し玉へば、助四郎氏久、加藤彦四郎政貞、次第々々に列座し。勝久左右を顧て最期の盃給り候はんと、三度傾け、氏久の前に置、太刀をすらくと引振て、我元來、東福寺に在て、佛法商量の道は龜々伺候間、最期の一句を擧せんとて、劍を提起して。寶劍在手、殺活臨時、這箇是殺活自在底、那箇是勝久末后之一句。良久して自代て曰。都來劃斷干差道、南北東西達本郷。といひも不敵、腹十文字に切破、はや首打と宣へば、池田甚三郎久規、太刀振上ると見へし(に)を脱せるか、首は前へぞ落にけり(るか)。氏久、誠、大将の御自害程候とて、續て腹を切、政貞、庭上に跳出自殺す。久規は勝久の死骸の前に跪り、暫待せ玉へとて同じく腹をぞ切たりける。鹿助は涙を押へ、人々の首を敵陣へ送り、見苦物共取認、城中帚除察然にしたりけり。立原源太兵衛久綱は病身なりければ、晩景に潜に下城す。翌四日、各城を出る中にも、日野屋形五郎、十六七歳也けるが、紅の帷、金の日の丸を付、白綾の幟、從兵數百人甲冑を帶し、鎧長刀の鞘を外し、弓鉄炮用心堅固にして出たりけり。其外一勢々々用心に無油斷、四方に眼を配り、すわといは、立所に切死せんとの氣色顯然たり。山中鹿助幸盛は、諸軍勢盡く出て後、手勢六十計引具し、物具を不著、弓を強に入れ、鉄炮に火も不付、我身は越後の帷子の膝を漸過る計なるを著、足半佩、今度勝久より

賜たる荒身國行とて、尼子重代の刀鬘斗付なるを佩、左有ぬ体にて出たりけるを、城の籠、田の中に埒結廻し、假屋を作、鹿助を入置、警固無油斷。其後鹿助、元春父子へ對面に出たりけるが、一間隔て被差置。宮庄次郎三郎、今田中務等、家子數十人列座、酌人は二宮空助、肴役は二宮右京亮、其外奏者等迄太刀を横たへ、鹿助が眼色變ぜば、取て可壓殞魂。さしもの鹿助、助行頓首して退出す。自夫隆景へ謁見し、本の旅宿へ歸けり。斯て鹿助は、輝元より粟屋彦右衛門、山形(一本山縣)三郎兵衛に五百餘騎相副て守護し、備中松山へ可下とて上せられけるに相伴ひ、其身は信長より拜領したる四十里鹿毛に乗て、其勢六十餘人にてぞ下りける。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十六の内、山中鹿助最後之事の條中摘要) 備中甲部川、阿井の渡に著ければ、兼而天野中務少輔元明に、鹿助可打山下知し給ければ、小舟一艘艤して、鹿助が手勢悉渡し、鹿助は後に殘て後藤彦九郎と、柴橋大介と云者二人召具し、岩に腰懸、扇つかひ、祖、汗拭などしける所、天野が家人、河村新左衛門、岸陰より街寄、袈裟掛に丁と切、アツと云て河へ飛下ける所を新左衛門續て飛下、鹿助、河村を取て伏とする所を、福間彦右衛門走掛、鹿助が髪胸で引倒し、終に首をぞ搔たりける。當年三十九歳とかや。大力介は、渡邊又左衛門、轉右衛門尉二人にて討取、彦九郎は鎧を以、散々に撞廻りけるが、是も多勢に被討けり。三上淡路守は、鹿助を討んと落合けるが、首は福間に被取ければ、鹿助が首に掛たる大海の茶入と、國行の刀とを取て、輝元へ獻しければ、刀は被召置、茶入は被返與、河村、福間相高名とぞ宣ける。立原源太兵衛は、藝州迄下けるが、蜂須賀彦右衛門を頼て偶(一本寓)居せり。隱岐法性寺周快は、三十人計にて本國へ志し、作州を通りけるを、香川美作守か家人三宅源四郎に被討けり。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第五十七の内、宇喜田直家反心付申請元春隆景于南方出張之事の條中摘要) 同五十七日。宇喜田直家は、虚偽第一の人なれば、上月へも病氣と稱して舍弟忠家并家子共を差遣し、又上月の後卷に、信長出馬とさして、養子與太郎基家、洲波隼人入道如慶を、播州節摩に御在す中將信忠へ遣し、信長の御味方可仕旨被申越。上月城没落せしかば、直家病氣、漸、平愈仕候とて、上月表へ馳参し、敵城無事故被攻落、其上、秀吉被退散候事、兩將の良智深謀の致す處、勇猛勝給たる故なりと賀詞を伸、馬太刀等を進獻せらる。元春も隆景の陣所にて對面せらる。元春いまだ隆景の陣所へ赴き不給以前、森脇市郎右衛門春方を、杉原盛重へ被遣、今日隆景陣所に於て、直家に對面す。盛重も可令同道一條、元春の陣所に至て被來候へと被宣送。森脇、杉原が陣所へ赴き案内を遂ければ、盛重頓て請し入、春方子細をも不述さき、唯今御使として貴殿御出之事、仔細承る迄もなし。直家返(一本反)逆無隱に仍て、某に討果せとの事に候へし、安き間の事にて候といひければ、春方は是太早計なる

備陽六郡志外篇 後得録 安那郡三

(校訂者いふ。以下は前巻後得録安那郡二の終りに接續すべき字句で、即ち陰德太平記卷第五十七の内、直家属子信長付小西彌九郎之事の條中摘要の續きである。尙原本には素より前掲の標題も記してない、開卷冒頭より『京都の案内知たる者云々』とあることを、茲に附記しておく。)京都の案内知たる者無ては不可叶とて、議擬せられける所に、壽徳が末子、岡山の買(買か)人魚屋彌九郎といふもの、養子(一本養子)の下にこの字がある。成居けるが、養父彌九郎剃髮して、父に代り彌九郎と名乗、利口なるものなりければ、是を直家召連て上洛す。扱又、壽徳は秀吉いまだ猿といひたる時の甲宿にて彌九郎とは竹馬の友也。彌九郎は秀吉所々の軍旅へ被召連けるに、勇万人に超ければ被取立、小西攝津守行家とて、天下五奉行之一人になりぬ。壽徳ハ境の浦に住し、富榮侍りて、今も其支流有。戸川秀安か次男孫六を毛利家へ人質に遣し置けるが、何とぞ取戻度と思案しける折しも、安國寺惠瓊上洛しけるを捕置、此山藝州へ申遣しければ、人質替にすべしとて河邊川(一本河部川)にて引替ける。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十の内、南條元續反逆付山田直重討福山一事の條中摘要)同六十曰。伯州羽衣石山城主南條伯耆守元續、尼子牢人福山次郎左衛門が諫に仍て、毛利の渥恩を忘て返(反)逆し、姫路へ度々飛脚を遣しける所を、杉原盛重が伏兵、彼飛脚一人を捕、又、三澤攝津守がものも一人擄取、元春へ引進せ、彼書狀を披見有けるに、無紛謀反なりければ、元春甚怒給ひ、元續が家臣、伯州久米都堤の城主山田出雲守直重を糺明有。直重、元續が反意且て不存山を申、則彼書狀を被爲見ければ、直重甚驚き、福山次郎左衛門を方便て打、

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十の内、元續欲討直重一事の條中摘要)元續を諫言しけれ共不被用、却而直重を討んと欲す。仍て直重父子十死を出て因州鹿野城へ逃入る。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十一の内、毛利三家作州發向付處々城没落之事の條中摘要)同六十二曰。宇喜田直家、信長に一味せしかは、渠が領國を可被攻とて、天正七年二月初旬、毛利右馬頭輝元、吉川駿河守元春、嫡子治部少輔元長、三男民部太輔經言、小早川左衛門佐隆景、四万騎を率而作州へ發向有。同九日、小寺畑の城に被押寄、十二日降人と成て大寺畑へ入にける。十六日、大寺畑を被取圍。是を見て砥石山の城は不取巻先に明て逃去。江原、篠吹、(一本篠貴)、岩屋の城も明退ければ、宮山の城も被取巻。直家、秀吉へ使を遣し、味方所々の城共を被取攻一候間、後詰を頼存候と、再三被申けれども、秀吉いかなる所存有けん、先此度は出張致間敷候。岡山近成候は、可爲後詰との返答にて、更に同心し玉はず。宮山の城も堪兼て明渡しければ、

毛利家國中の掟を下知し、開陣有。輝元、隆景は南方順見の爲、備中へ打出、所々境目の城共に兵糧を被入置。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十一の内、伯州長郷田合戦事の條中摘要)吉川元春は、伯州八橋を藝州へ被歸ける處に、直家二万騎にて作州へ發向し、荒神山を取誘、祝山、升形を可責由きへければ、元春一万騎を帥て、八月二日作州へ出張し玉へ共、直家、備州へ歸りたりと注進する故、四十曲を引返し、雲州富田へ立寄玉へは、南條兄弟が逆意露顯せしかば、同九日富田を立て羽衣石邊の稻薙せんと發向し玉へは、南條急難を通れんと、津村某兩人を以て、信長へ一味の儀、讒者の所業なる由を陳す。然共其證分明なるゆへ、津村兩人を津波並の瀝に磔にかけらる。斯て元春、八橋に屯を被張を見て、由良の城に在ける一條東市、助清綱、城を捨て、羽衣石へ逃入けり。仍之由良の城へは杉原盛重が、木梨中務太輔を被入置。同十三日、元春、津波並の茶臼山(一本茶磨山)へ被移先陣。杉原盛重、同元盛、同景盛、盛重が奥力宍道五郎兵衛、山田藏人(山田出雲守か)二千五百、長郷田表へ打出、民村を放火し、稻薙難捨けり。南條九郎左衛門信正、二千計にて打出、是を防んとす。元續曰、敵は定て一万四五千、二万も可有。味方は三千四百には不可過、怒なる軍而、敵に利を付んより、城を不被落行して、信長の後詰を待給こそ謀なるへしと云ければ、諸士皆是に同する處に、信正進出。元春なればとて鬼神にても候はじ、先陣は盛重にて候はん、かれ已か勇ニ誇て後陣の續をも不待、川を可渡。然に渡口に馳向ひ、盡、水中へ追込候なん。先陣破なは、猛將の元春も氣後れして、一戦は成まじ。若元春合戦を被逐ば、夫こそ庶幾(一本庶幾)の下にする所があるなれ。十死一生の合戦を可勵。又盛重多勢にて渡口の合戦難叶ば、軽く引舉、山上に屯し、地之利を得て戦はば、勝利を得では候へき。又元春の本陣破事を得じと思はば、杉原が一手を追散し、其儘城中へ引て入、味方に勝を持て籠城せば、敵一戦に負て二の合戦する事不能。齒を切て可在。元春負腹を立て羽衣石へ責かゝらば、散々に射立、漂處を山下へ追崩し、勇將たる元春に一鹽付るものならば、當城に指きす事は候まじと、言語分明、勝敗著顯に伸たりけり。去ども心有老臣などは、元春との一戦は却て計の拙きが故也と、制するもの多かりけれども、九郎左衛門我勇に伐り、臆病思案の方々は兎もあれ、今日の合戦は某に給り候へ、今日元春を追崩か、某か首を元春が實檢に備るか、二ツの中をば出じ。我と思はん人々は、堅固心を顯はせやとて、其座を寸と立て、緋威の鎧に、日輪の前卓物したる盔の緒をしめ、白月毛の馬に駕て、郎等百五十騎計引具し出けるをみて、志有者共、我も我もと付隨ひ、長郷田表へ打て出る。杉原盛重父子、山田信直、宍道正義、長瀬川を隔、弓鉄炮を以て迫合けるが、正義か郎等、寺本市允、眞先に進て散々に射けるゆへ、敵已に引色にみへければ、盛重勢を三隊に分て川を渡す、上の瀬は宍道五郎兵衛、中の瀬は盛重父子、下の瀬は山田藏人、吉田肥前守、川口刑部、打入々々渡しけり。南條勢已に引色に成ければ、九郎左衛門馬を乗廻し、何程之事の可有ぞと(一本や)敵は小勢ぞ、而も後陣は不續ぞ、水底へ追込、

かゝれ、と下知しけれ共、取込られては叶はじと、後をも不見而引去けり。元續、廣瀬若狭守を呼で、九郎左衛門討死のほど無心元。行て制せよと差越けり。若狭守馳向て見れば、快一戦もせず逃走る。若狭守唯一人馬上にて、引味方を制しけれ共、更に不聞入ければ、討死せんとおもひ、廣瀬若狭守と名乗て此も不引居ける所を、吉川勢に大草甚右衛門走掛て、若狭守が高股を切て落す。さしもの若狭守馬上より直逆に落けるが、寐ながら大草が膝の口、したゝかに切ければ、起んとする間に、杉原が家人、安原民部少輔、廣瀬か首を打てけり。南條九郎左衛門は引行勢に引立られ、心ならず引けるが、羽衣石の籠、柵結たる所にて取返し、追來る敵を手に任せて切倒す所に、杉原が郎等、久須摩市之允(一本市允)渡合戦けるが、南條は今日一身の功を思ひ戦ければ、心身疲勞而遂に久須摩に被討けり。吉川勢、小坂次郎兵衛、境七郎右衛門、朝枝新兵衛、三刀屋が郎等、羽倉右吉、杉原が手、菊池肥前守、進孫次郎、佐田彦四郎、同小鼠等。山田が家人、北垣五郎次郎、大谷立番、北垣丹後、山田利兵衛、山崎右馬允、いづれも分捕馬名す、頭百五十餘討取ける。經言の手のもの、軍散して後に來り、殘念がりて羽衣石の固屋を燒拂んとて行ける所に、一條市助が者共打て出けるを、追合追込數人打取。寄手にも井下源七、小谷四郎次郎討死す。爰に菊池肥前守か嫡子左近允、十三歳より分捕高名度々に及けれ共、人更に實とせず。父の取たる首をもらいつらめといひけるを無念におもひ、今日は父に不隨、佐田、小鼠と一所に起けるが、一條新五郎と渡合、散々戦ひ遂に首を取。小鼠甚感稱す。左近允、取たる首を深隠して郎等にもたせ、安原民部か、入江大藏に逢なは可見と思ひ、兩人を尋る所に、兩人打連て丁と行逢たり。安原いかに菊池殿、今日は分捕し給やといへは、入江。父肥前殿とは菟口か別なれば高名はしたまはじ、親の後に付てあるくものは、獨高名はならざるものなりと戯けり。左近き、御邊立の人の取たる首を奪て、我高名顔ニ御感に預たるに慣て、斯云(一本云)の下にニがあるや父に不隨ば高名ハセぬ物かといふ。兩人からりと笑て、然ハ頭を被出よといふ。左近隠しもたせたる首提來り、兩人か前へ投出し、一條新五郎と名乗たるを切伏、首を打たり。證人は佐田、小鼠なり。年來某を嘲玉ふ、今の如く一言咄て見玉へは、二人か眉間シャニツに切割て後こそ、是非の問答をは作べけれど、三尺計の太刀、二三寸抜掛、礮と腕で立たりけれ。兩人、太、感稱し、今迄之戲言は、御邊にかゝる高名をさせん爲の餌なり、偏に赦させ玉へ、天晴の剛勇かなと云ければ、左近是に腹をいて、咄と笑て左右へ別ける。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十一の内、盛重隆重長郷田合戦評論之事の條中摘要) 斯て元春、南條が家人の亭宅、盡、放火し、八橋へ打入玉ひけり。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十二の内、備前國兒島蜂濱合戦之事の條中摘要) 羽柴筑前守秀吉、直家か許へ、兒嶋に一城を被築候へ、然らば淺野彌兵衛に、警固船二百艘相添可差下一と被申越。直家、則、蜂濱に城を築、宇喜多七郎兵衛忠家、直家の養子與太郎基家、戸川肥後守秀安、浮田修理、池田八右衛門、足達(一本足立)太郎右衛門、三千騎を籠置。隆景より蜂濱の押とし、麥飯山に一城を築。穂井田(一本穂田)伊與守元清、有地美作守、古志清左衛門、村上八郎左衛門、植木出雲守、同下總守、同孫左衛門、福井孫六左衛門、津々加賀守を差上、普請經營す。忠家普請を妨んと、日々足輕を出し、かけなやます。次第に備前勢相加り、二千四五百人に成ける間、毛利家よりも二計出で、宮ノ森と云所にて入代々々戦けり。基家味方負色に見へければ、馬引寄、打乗て出けるを、忠家留けれ共不聞、五百騎にて馳向ひ突てかゝる。村上八郎左衛門、舟にて三百人計、魚鱗にかゝり打上り、鎧袈を作て待かけたり。古志清左衛門、名乗掛々々、數人突伏ければ、櫓崎十兵衛續て鎧をぞ入たりける。十兵衛、十余人の力有といひけれども、夫程迄はなくとも、普通の人には超たり。敵五六人撞伏、餘りつよく働、喉乾、息切、敵の引たる跡迄も伏居たり。有地美作守は敵と引組、既に首を切られんとする處に、甥有地次郎左衛門馳寄て、敵を取て引伏、二万(一本二万)刺、首打落し、切先に貫き高く差揚たり。與太郎基家、是を見て、こわ口惜次第かなと、馬上に再拜打振、下知する所に、胸板を鉄炮にて被打振、逆に落たりけり。是を見て敵前後一つになりて逃去ける。其中に乳人の三五兵衛、戸川肥後守討死す。其外討死も多かりける。藝州勢十分に利を得て引返す。基家をは元清の若黨水川と云者打たり共、瀬尾十太郎打たりともいふ。與太郎か小姓蜂屋宗十郎も打死す。其晩景、忠家の基家か死骸を賜り候へ(一本へ)の下にとがある申來則送還す。又或説に、與太郎、馬に被引、不意敵中へ蒐入被討けると。又馬に被引たるは穂田元祐なりともいへり。

(校訂者いふ。陰德太平記卷第六十二の内、蜂濱之城攻事の條中摘要) 同三月、小早川隆景、二万餘騎にて蜂濱の城を被攻。うきた忠家、沼本新右衛門、難儀に及ける所に、直家、秀吉へ後語を被乞ければ、淺野彌兵衛に五千餘騎差添、數百艘にて馳來り、敵の後を取切せ、秀吉も可有出張と披露有ければ、輝元聞給ひて、隆景先陣を拂て歸り、重て可被責由被仰越。仍之、隆景陣を拂て被歸ける所を、沼本新右衛門後を付、討んとする所を、栗屋雅樂頭(一本雅樂允)殿して引けるか取て返し、散々戦、無事に引退けり。隆景、備中の高山に立寄、軍士を加増し、兵糧澤山に込置歸給ひけり。信長が直家へ加勢として、長岡兵部大夫(一本大輔)、惟任日向守を被下處ニ、隆景引去給ふとき、直に高山の城を攻けるが、香川備後守、同宗左衛門、堅固に防禦しける間、更に可落様はなく、其後寄手も歸けり。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十三の内、伯州戸磨利城合戦之事の條摘要) 同六十三日。伯州戸(一本磨)の城には、杉原盛重が驛、河口刑部少輔久氏、百五十騎にて楯籠、天正八年十二月二日、南條元續兄弟、武田源三郎、三千餘騎にて押寄たり。一時に乗破んと混(一本漬)々々櫓の下へ付ければ、矢玉雨のごとく射出しければ、寄手漂所を、百餘人の兵共、驀直に突て出ければ、

寄手一積も不_レ味崩れけり。城兵も小勢なれば、手輕引取ける。寄手付入にせんと取て返しけれ共、さしも名高久氏、大弓取て有ければ、寄手恐怖して岸陰に添て控ける中に中原市太夫、唯壹人、門の前迄追詰、引後たる敵壹人突伏る。久氏はを見て、四人張の大弓に大矢取て番ひ、三條まで射たりけれども、市太夫少も不_レ疼、靜に首を打、高く差上、日來因伯但に大精兵とさしこへし、河口刑部殿の大矢を請ながら、分捕して歸る大剛のもの、武田源三郎が郎等、中原市太夫と名乗言てぞ歸ける。寄手、是に機を得て堀に乗れども、内より強防ぎける上に、雪麩に降ければ、手足も自由ならざれば、重て社とて引にける。市太夫が著したる鎧は、先祖國信五人張の精兵に射させて、ためしけれ共、裏をかゝる南蠻鉄の鎧なりけるが、久氏か矢三條ながら、五分一寸づゝ裏をかゝるてぞ通りける。扱又久氏、夜中の事なれば、皆射外しけるとおもひ、目前の敵十間の中にて三條迄射外したる事、生涯の耻辱なり、重而弓を取上ても無_レ詮とて、切折てぞ捨たりける。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十四の内、山名豊國心替付森下中村背豊國一事の條摘要) 羽柴秀吉、大軍を以て因幡鳥取、山名豊國を可_レ被_レ責とて被_レ打出。先年豊國よりは息女を人質として指出、家臣山口、森下、中村、用瀬、伊田、田井、庄等、何人も人質を遣し置ければ、秀吉へ降参すべきよし、豊國家臣共被_レ請ける。各一同に申様、先年尼子、富田籠城の時より、元就公へ屬し、其後又、勝久、當國へ出張の節は毛利を背ひて勝久に屬し、勝久退治として元春發向の時は、又毛利へ従ひ、今又秀吉へ一味候半との御事、前代未聞の表裏、口惜事に候。面々が人質、身を裂れ骨を被_レ碎候共、君の御爲に子を捨る事、忠臣の常なり、毛利との一味違變有べからずと、忠義を盡して申ければ、秀吉同意の義を被_レ停ける。仍_レ之、山口、森下等か人質として出し置たる子共を、久松の麓に磔にかけらる。是を見て、母、乳人(一本乳母)老人など歎悲する事甚し。山口、森下、其外の勇士、あら何共なや、斯可_レ有事は覺悟の前なり、今更なけくへきにあらすとて、左有らぬ躰にて居たりける。其後、豊國の息女を磔木に上せ、緑の髪を逆に引張、手足を左右に分けて結付、水の如なる鏝を雪の膚に差當、いかに豊國、娘の命も惜く、因幡一國も所望ならば、只今味方に降られよと、三日迄使者を馳て被_レ云送_レければ、豊國、始の程こそ有けれ、愁傷彌増なりければ、山口、森下を始、我身の上引當、此上は可_レ申詞もなく、いか様とも思召に被_レ任候へと、いひければ、豊國御味方に可_レ参問、娘の命、御助被_レ下候へと被_レ云送_レければ、秀吉我計ごとく落たりとて、則人質の命を被_レ助、此で豊國降禮を述て後、因幡一國を可_レ賜とおもひける所に、漸二郡を被_レ與、其餘は秀吉の士卒に配分せられける故、豊國、八月廿一日、播州姫路へ被_レ立越、家臣共は藝州へを赴きける。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十四の内、牛尾春重入鳥取城一事の條中摘要) 同六十四曰。森下出羽入道、中村對馬守、大將を壹人給り候へ、御味方に參し當國を切隨可_レ申と、元春へ申送ければ、牛尾大藏左衛門春重を被_レ差越、久松の城に入、諸寄の城

に磯邊と云者籠居けるを、先可_レ追落とて、森下、中村を先陣とし、一千餘騎にて押寄けるが、春重、膝の節をしたゝか射られ、矢柄ハぬけけれ共、鏃殘て甚痛、存命不定なりければ、雲州牛尾へ歸りける。鳥取久松共に轄(一本管)轄の地なれば、一日も無_レ將ては叶まじとて、市川雅樂頭(一本允)を被_レ差越_レける。斯て秀吉計策を廻し、商船數多、若州を因州へ差下し、五穀類を買求る事其價倍徒せり。森下、中村謀とは夢にもしらず、利慾に耽て、畜(蓄)置たる兵糧を盡く取出し、うりけるこそうたてけれ。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十四の内、吉川經家籠鳥取付秀吉出張事の條中摘要) 森下、中村いかにおもひけむ、御同名の老臣を一人給り、大將と仰き可_レ申と云送りければ、元春より、吉川式部少輔經家を被_レ差越_レければ、杉原盛重、横山彌太郎、南方半助(一本半介)。古志因幡守より同名藏人。宍道五郎兵衛より同名彈正忠。有地右近より叔父有地左京亮を差出し、都合八百餘騎、天正九年二月、鳥取久松の城に入て、市川雅樂允と交代し、藏(藏)稟(一本藏)稟を點檢すれば、兵糧甚乏、城中男女四千人に餘り、養は二三ヶ月にもたらず、剩、信長一万餘騎にて加勢のよし、風説有ければ、元春急ぎ後詰に出張被_レ致、兵糧もはやく被_レ運送候様に、藝州へ注進す。元春甚驚き、急ぎ杉原盛重に下知して、兵糧を被_レ入_レけれ共、男女四千餘の事なれば、中々一月の養にも不_レ足。去は船手より可_レ入とて、大船四艘に八木を積て入としける所に、丹後の警固船居合せ、毛利方散々戦負、兵糧壹粒も入る、事あたはず。七月七日、卯之刻、羽柴筑前守秀吉、六万餘騎を引率し、鳥取、丸山兩城を一つに曲々と取巻、本陣を摩尼帝釋山に居へ、海陸の糧道絶切らる。城兵は只、網裏の魚、檻中の獸に不_レ異秀吉の陣には京都より乱舞の堪能共を呼下し、日夜鼓搥、笛吹、融々陶々として御座す。是軍業を疎にし、歡樂を好むにはあらず、城兵の糧道を絶、其上、機を屈せしめん爲なり。秀吉、日に二度づゝ乗物にて諸陣を被_レ廻。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十四の内、鳥取丸山扱之事付經家已下自裁之事の條中摘要) 城中、彌、五穀の氣絶、勇卒も菜色に變じ、折_レ骸_レ炊ほどになりぬ。秀吉、堀尾茂助(一本茂介)、一柳市介を以て、經家へ被_レ申送_レけるは、森下、中村、塩屋、佐々木、并に海賊の魁首奈佐日本助以上五人之者共被_レ遣候得、諸人之懲に首を刎可_レ申其外は一命を可_レ助と有ければ、經家、彼等を御免被_レ下候へ、某一人切腹可_レ仕と返答有ければ、經家は當城檢使の爲、仮に大將の号を被_レ蒙たる迄に候、重科の族と一般に自殺には不_レ及事なり。右五人の輩、自殺可_レ被_レ申付と、再三被_レ仰聞といへども、士卒の命を落して我命を助る事、將の本意に非、速に自殺可_レ仕候間、檢使を被_レ遣候様に、山縣源右衛門に書狀を認せ、秀吉へ相送る。其狀曰。

今度於_レ因州鳥取京藝弓矢之衢、猛勢引請、代_レ諸卒_レ遂_レ自殺_レ候事、可_レ爲_レ後代之名譽、候。此旨趣於_レ天下_レ御披露所_レ希候。恐惶謹言。

十月廿四日

羽柴 筑前守 殿

吉川式部少輔 經家

三四〇

森下出羽入道、中村對馬守、私宅にて自裁。奈佐日本之助、佐々木三郎左衛門、塩屋周防守、丸山の城にて自害す。經家の檢使として、堀尾、一柳を被差越。經家最後の盃取かはし、辞世の一首。

武士(一本武夫)の、取傳たる、梓弓、かへるやもとの、栖なるらん。

と、腹十文字に搔切、譜代の士、靜間源兵衛介錯したりけるが、切損しければ、馬鹿者、不切はといひける口の下より、二の太刀にて、首は前にぞ落にける。靜間源兵衛、福光小三郎、若鶴甚右衛門、坂田孫次郎、殉死す。經家の首をば、江州安土へ送、信長の實檢に被入。森下、中村が妻子を初、下城の面々、袋川に橋をかけ、左右に檢使數百人立並、通らせ。緒縁の方へを被送ける。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十五の内、於伯州馬野山吉川羽柴對陣事の條中摘要) 同六十五曰。羽柴筑前守秀吉、大軍を以て鳥取の城を攻動す由聞えければ、元春後詰可有と擬せられければ、勢の加るを待て可發足となり、元春は後被發、雲州富田へ著陣有。隆景被申けるは、此節軍勢少、秀吉が猛勢と敵しがたし。勢の加るを待て可發足となり、元春は後陣の勢を非可待とて、被急けるほどに、九月廿日伯州八橋に著給ひ、杉原盛重と軍議有て、安否の一戦と被定所に、盛重風氣に被侵、前後不覺の体なりければ、嫡子彌八郎元盛、二男又次郎景盛、諸軍勢の兵糧柴肴等を奉る。然處鳥取の城、彌及難儀一由告來りければ、八橋を打出し給處に、輝元、隆景より使を馳て、少勢を以て大軍に對陣せられん事、不可然。今暫可被待との事に仍て、其儘八橋に被扣。鳥取落城近々なりと聞へしかば、此上は軍兵の鳩るを待得て何かせんとして、廿五日、馬野山へ陣を被替、翌日大崎へ陣を移したまふ處に、一昨日鳥取、丸山没落し、經家以下遂自害由告來る。又秀吉、南條を可見續たぬ、近日伯州へ打入、八橋の城を陥し、富田迄可攻入一由、御用心候得と告來しかば、此所に待請、一戦を可遂とて、馬野山に陣を被居。秀吉斯とき、玉ひて、同廿七日、羽衣石山續の高山に打上、馬野山を籠に直下、屯を張給ふ。其勢八万又は六万共きこへし。蓋、此馬野山は、左は湖水漫々として、右は磯巖岸なり。前は峻峻もなき平山にて、無構後は橋津川の曲流築回して、地の利甚不。宜。秀吉、山上より彈丸を轉するが如く、真逆におるされなば、いかなる名將の吉川も、生て古郷へと被歸まじ、今夜一夜怖よがし、明なは一字に切てかゝり、高名せんものをと、勇み討らぬはなかりけり。元春は、元長、元氏、經言を相伴ひ、敵陣を見渡し、敵軍六万余とさし、四万余も可有哉、我勢に比せば倍徒幾許ぞや。思ふに秀吉、寡を慢る心有べし、是ぞ敵敗亡の端にて、味方勝利を得る事無疑とて、橋津川の橋を引落し、隱岐隱岐守清家、竹安全九武道が乘來たる數百艘の舟共、悉、陸へ曳上げ、櫓械不

殘撲折せらる。今かゝる惡地を好地となし、將といひ兵といひ、味方必勝現然たりと、勇みすまぬものはなし。三澤三郎左衛門父子、三刀屋彈正左衛門、益田越中守、會合して、味方此小勢にて山上に大軍を引請玉ふ事、甚以浮雲なり、重て隆景と勢を並せて合戦を遂給様に諫言を可納とて本陣へ馳參す。元春、淺黄の袴長く著なし、緩然として對面有。四方山の物語、心靜にし給ひ日も暮ぬ。晚炊出し候へと宣處に、或人三尺計なる鯉を獻し、かば、頓て烹調せしめて、面々にも是を給り、風味稱美して、元春仰けるは、各我等は爐中の柴に酒を暖て、苦寒を不知。秀吉は山頭の風宿、さこそ盛霜積雪、冽氣砒肌骨すらん。敵の艱辛を思へば、味方は甚安樂なりと、打解て御座るゆへ、衆議の諫諍可言出様もなく退出す。熊谷信直の郎等、戸谷志摩守といふ溢者、秀吉の本陣に忍入、陣屋四五軒焼立、熊谷か手のもの戸谷志摩守直忠、秀吉の本陣に火を付歸候也。加程油断し玉ひては、一定不覺を取可給。畿内、美濃、尾張の兵と一般に思ひ給な、敵も敵によるごと、高聲に言て立歸る。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十五の内、秀吉敵城批判並退軍之事の條中摘要) 杉原元盛、横道權允を近付、本陣へ行て、明日迄堪給ふか、様躰を見て來るへしとて差遣す。三刀屋久祐も元盛か如く申合、坂田平藏を差遣しける。兩人様躰を關て馳歸り、主人に告て曰。元春は宿病發たりとて、宵より地爐に柴折燃、昌披、背灸、鼻雷噉々として陣屋の外に響、諸士は小鼓打謠て安氣なる体にて候、油断の体かとおもへは、元長御兄弟更隙なく諸陣を廻らせ給候といふ。元春もかく寛然として御座ながら、陣々へ人を遣し見せらるゝに、立歸て、誰某か固屋は兎有角有と申、中にも杉原兄弟は博奕に心を入、此寒夜に諸祖で兩采一采と打出し、又手を切て撥て小采々々々々氣を張、聲を高して請は、傍より南風不競と叫も有て、共に亡羊をしらす。三刀屋久祐は河井入道と棋を打て指を龜て、十日廿目三十四と目算して應對是非を耳外にき、斧柯の朽を知候はじと申ければ、久祐は武勇の譽有ものなれば左も有なん、杉原兄弟剛柔如何におもひしに、父盛重に能肖たり、熊勇虎威の士やと感稱し給ひける。翌廿八日、秀吉より蜂須賀小六家政を大將にて羽衣石の城へ兵糧をい、を、元春見付玉ひ。井上平右衛門、山縣宗右衛門、今田玄番允春政に、鉄炮數百挺相添て被打掛。千代延與助(一本與介)眞先にすゝみて、武者大將と覺敷者を打落す。初度の合戦に一壘付たりと、勇悦事無限。元長、元氏、經言、打連て出給へは、熊谷信直、同元直、杉原兄弟、二千餘騎にて松崎(一本松之峠)へと進たり。南條、小鴨、羽柴美濃守秀長に向て、元長兄弟と見て候、御勢を下され候へ、一戦とすゝめければ、尤可然とて主客相對しける所に、秀吉より軍使を以て、敵は鳥取の城を落され、無二の合戦と極たる所に、秀吉一心の覺悟を以て一戦と進事、秀吉を輕んするに似たり、早々勢を可被打入と有ければ、則勢を打入たり。秀吉、南條元續を近付、敵陣の間何十町か有、勢は六七千には不可過と思ふはいかにと宣へは、元春我勇に誇り、小勢にて遠路を來るこそ天の與なれ、早切崩され候べし。吉川父子さ

へ亡候者、小早川などは自ら亡候なんす。然らば藝州より雲州迄は、御威光に畏服可仕事、當年來春の間を過候はじと申ければ、秀吉莞爾として、あれなる戸利の城には誰か籠やと有ければ、あれは杉原盛重か聲、河口刑部少輔久氏と申もの百四五十騎にて籠候と申ければ、此多勢に對し、平山の傍、少掘切て柴土手を築、淺なる小城に何の用心もなく、門外へ一人も不出、緩々たるは敵に思ひ侮せ、寄來し其時切て出、無二の合戦を可決との覺悟にてぞ有覺。哀、剛の志やと感し給ふ。又松崎の城には、小森奎之允籠て、箒を不焼、大門をも不鎖、出入之人影もなし、いか様、城を明退たる体に見せ、敵を泛々と堀下に引付幕地に切て出謀なるか、又敵に油斷させ、一夜討すべきと擬する心にや。かゝる城共には此方も亦得其意、容易に人馬を不馳が軍法の一格也。何も大膽不敵の族哉とぞ宣ける。宇津吹、條山の城用心稠敷見へければ、あら誑の者共哉、我士卒を勞せば片時も堪間敷ものをとて、冷笑をそおはしける。其後南條か勸に従ひ、今日明日の間に敵陣を可被切崩と、諸將を召集て軍議有ける所に、蜂須賀彦右衛門進出て、元春父子は當世の大剛將と承候ひしが、かゝる大軍に向て、僅の勢にて少も恐るゝ無氣色、舟を引上、橋を落し、無二の覺悟を顯せり。かく一死賊と成たる敵をば、此方よりも亦剛強を以て相對せん事、却て智計の不不足所なり。碎強以て及則及還折挫、雨滴微弱消簷下石といへり。鳥取、丸山を責取りたまへは、今引取給たりとて、御弓矢の瑕瑾にて候まじと諫ければ、此儀に心服し給ひ、諸所の雪不積先にとて、廿九日、陣を拂ひ、播州姫路迄上り給ふ。元長兄弟、後を可慕と擬せられけれども、元春、深、制止せられ、十一月朔日、吉川父子四人、馬野山を開陣有。輝元、隆景、富田にて待請、共に藝州へ歸給ふ。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十五の内、因州大崎荒神山等落城事の條中摘要) 杉原播摩守盛重、病氣にて有けるが、末期に元盛、景盛を近付。我死後に敵城一二ヶ所可攻落、供佛施僧にも可勝、計策委曲に仰て、十二月廿五日(一本二十三日)死去せらる。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十五の内、因州大崎荒神山等落城事の條中摘要) 吉川元春は、因州鳥取、丸山を被攻落、刺、經家以下自殺しける事、遺恨肺肝に徹しければ、いかにもして因州の敵城一二ヶ所も、せめ取、經家が孝養に報せんとおもはれけれども、臘月大雪ふりて、働不自由、勇氣を押して御座所に、其年も暮て、天正十年に成にけり。正月中旬發向可有とて、同十七日、藝州を立て、二月初旬、伯州八橋に著給へは、杉原兄弟先陣にて因州へ出張有。先、大崎を攻べしとて、杉原兄弟、佐波越後守兼連、富永三郎左衛門保英、周布十兵衛元城、都野駿河守以下四千餘騎にて押寄る。城中には木下民部太輔、山崎、村越、養部、笠塚、八百騎にて立籠る。十四日のあけぼのに、人交もせず千五百人、取手の丸へ乗入んとす。足立治兵衛、安原民部、一度に堀へ乗上るをみて、諸士おとらじと攻入ける。よせ手の惣軍、杉原に出しぬかれけるこそ口おしけれと、諸方をせめのぼりけるほどに、ふ留したまひけり。

(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十六の内、羽柴秀吉備中國發向の條中摘要) 天正十年四月羽柴秀吉備前(備中か)へ發向有。難儀に及由。元春、隆景、後詰として出陣せられ共、秀吉勢強く、其上味方に反逆人有由風聞する故、救事あたはず、被黙止ける。此時、杉原兄弟、山田出雲守重直、小森和泉守高方、河口刑部少輔久氏、福頼刑部少輔元秀、小鴨四郎次郎等、南條が押へ、又因州口の爲所々の城に被殘置。扱又高松へは兄弟部川を堰入けるほどに、五月雨に増る水、漸々に溢登り、城裏の難儀無二計。(校訂者いふ。以下陰德太平記卷第六十六の内、清水宗治自害付秀吉與元春隆景和陸事の條中摘要) 秀吉安國寺を以て、城主清水長左衛門宗治に切腹させられ、毛利家と和講致度由被申越。然共元春、隆景、無承引に仍て、又安國寺を城中へ遣し、宗治被致切腹候へ、左候者城中男女の命を助け、其上、元春、隆景へ和講すべきよし被申送ければ、宗治太悦し、自殺可致由返答す。秀吉爲檢使、堀尾茂助を被差出。城將清水長左衛門宗治并に舍兄月清、隆景よりの檢使末近左衛門。宗治が郎等、難波傳兵衛、白井與三左衛門、草履取七郎次郎、高市允、船に乗出、宗治を始、七郎次郎迄六人の介錯を、市允一人にて致し、六人の首に、銘々札を付、檢使へ渡し、死骸を取納、己も腹掻切て死しける。哀、大剛のものやと、感涙を流さぬものはなし。右之趣、安國寺、秀元春、隆景へかたりければ、兩將を始、兵共鎧の袖をぞ濡しける。宗治自害の上は無是非和睦すべきなりと宣へば、安國寺、秀吉へ申ければ、秀吉、事急なる子細有、早々起請文をとりかはすべしとて、早速起請文を書、血判して安國寺に渡され、兩將へ見せければ、兩將も盟文を安樂(國の誤)寺に被渡。秀吉披見有て、即時に播磨路へと被上けるが、森勘八、同兵吉を使として、兩陣和平の祝儀なりとて、小櫓一、菓子一鉢相副、長陣故、蓄置たるもの盡果て、是計有に任て遣申也とて被送。秀吉我身計に馬廻之者を引具し、潜に引退れし所に、いかざしたりけん、人足小屋に火付けるを、早々打消けれ共、陣中一度に崩立、太刀、刀、馬、物具、打捨て走りける故、郷民共不思德付たり。信長、明知にうたれ玉ふよし、播州阿賀の一向坊守給巴(一本休巴)がもとより兩

將へ申越、其外所々より注進有。元長は敵、急に和平を請事(不審の二字を脱せるか)多端也とおもひ、信長被_レ打たる故なり、いざ秀吉を追掛て可_レ打取と被_レ進けれ共、元春かたく被_レ制ければ、怒を押して止りたまふ。猿掛に輝元滞留したまへは、兩將立寄打連、藝州へ歸りたまふ。抑、秀吉急に和を被_レ請し事は、光秀、信長を弑して即時に飛脚を馳、元春、隆景へ注進し、秀吉を中に取込可_レ打也と申越ける所に、秀吉、天下を指麾し、三韓を切取ほどの前因なれば、彼飛脚、過て秀吉の陣へ來りけるこそ不思議なれ。秀吉何事ぞと問させ給へば、云々の事を申けり。彼飛脚のものをば坪の中にて切て捨、即時に安國寺を呼寄、和平之義を宣ひけるごぞきこへし。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第六十九の内、吉川經言毛利秀包被_レ上_二大坂_一事の條中摘要)同六十九日。羽柴秀吉、惟任、柴田を退治の功成て、武將の上に座し給へば、東西南北の國主郡令、來て奉_レ嘉祝。吉川、小早川も爲_二一禮_一一人つゝ被_レ指上_二よがしと、安國寺に宣けり。元春は隱居有、元長家督を續たまへは、舍弟民部太輔經言に、小坂越中守、二宮全助被_レ副。隆景男子おはせねば、弟藤四郎秀包に、桂民部太輔、浦兵部丞を相添被_レ差上。秀吉公御悦喜不_レ斜、諸大名、悉、迎に可_レ出由被_レ仰付、秀吉御相伴にて御饗應有、兩人へ御太刀其外引出物給り、副使四人にも御馬を被_レ下。霜月に至て經言御暇被_レ下歸國せらる。秀包は大坂_二暫、被_レ致_二逗留_一様に隆景申給、其上男色美しかりければ、秀吉公耽心不_レ淺處、幸之事に被_レ思召_二抑留_一にて、翌年尾州小牧、紀州雜賀合戰に被_レ召具、筑後久留米六万石給り被_レ任_二侍從_一。

(校訂者いふ。以下陰徳太平記卷第六十九の内、杉原景盛討_二兄元盛_一付景盛混滅之事の條中摘要)伯耆國尾高の城主、杉原又次郎景盛、其兄元盛を討て、悪行臭名を千歳に傳ふ。其形勢を尋るに、父播磨守盛重、天正九年臘天廿五日、傷寒にて死去す。元盛家督する事勿論成といへども、遺金汗牛充棟す。いか様、半領は景盛に可_レ與と思つるに、領事甚微少なり。景盛是を恨る事日夜に増長して、終に兄を打て家を奪んと欲する心付にけり。然に同十年、備中國高松攻の比、杉原兄弟は南條其外因州口の押として、八橋、尾高、兩城に在けるが、景盛家人、苜蒲左馬允と心を合せ、元盛に向て、今扶桑州裏強半は、是信長の命令を受たり。越後の上杉、安藝の毛利のみ、猶別に虎威を振ふといへども、高松の陣、敵は多勢にして、しかも信長近日出張と聞時は、元春、隆景、忽、敗績(續ならん)の下に命を被_レ墜、毛利家の混亡此時なるべしと覺候。杉原は重代の家臣に非ず、一旦幕下の禮を取迄の國人なれば、秀吉に属す共、誰嘲の舌を可_レ翻。信を秀吉に通して、當家相續の策を運し、先人血脉の傳を不_レ斷絶、孝を可_レ建と諫ければ、元盛是をきゝて、思の外なることを承る物かな、亡父公は杉原四番の家老たりしに、忠興逝去の後無_レ實子に仍て、相續の人を被_レ撰し時、隆景は當家第一の家臣、杉原左衛門進を以て可_レ相續と宣しか共、元春、兎角、播磨守可_レ宜と宣し故に、亡父相續し

玉ひぬ。去に仍て、先考存生の間、假令八幡の冥爵を可_レ被_レ宣し誓言をば翻し給といへども、元春の御勤當を可_レ受と宣し詞をば、更に再び改給事なかりき。然に我等勇智は先考に劣共、争か父の義をば可_レ不_レ守。今急に望(臨)で志を變せは、弓箭の耻辱耳か、先考尊靈もさこそ口惜も恨敷も可_レ思給。天地覆倒する共、元春の厚恩を忘れ、父の義を背て、敵に降事、不_レ可_レ有。所詮我を打て秀吉へ捧ば、當家繁榮すべく、汝が孝も可_レ立と涙を流シ云けるほどに、兩人興醒て退出す。是全、秀吉に一味すべきにもあらず、元盛、秀吉に組せは、京都勝利の時は本領安堵すべし、若又中國方打勝なば、元盛京方一味候ゆへ、無_レ是非打果し候と、忠節顔に云成て、景盛、杉原の家を相續し、左馬允にも過分の食地を可_レ與との隱謀なり。然に京藝和平せしかは、景盛案に相違而、去は密謀不_レ顯先に元盛を可_レ討と思惟し、左馬允と評定し、元盛二丸へ御出候へ、申合事有と云送ければ、元盛何の心もなく、若黨五六人召具し、二丸へ來る。景盛數奇やへ請し入、密事談合の躰にて、振打に丁と切る。元盛は早業の達者なれば、脇差抜合、散々に切拂。景盛、左馬允被_レ切立、少ひるむ所を元盛大庭へ躍出たり。景盛が郎等共數十人追欠けれ共、皆被_レ切立、此彼所の木隱(陰)か岩隠にぞ偪り居たりける。其際に太刀打かたげ、本丸へ歸ける所に、景盛矢倉へ走上り、元春、元長の上意にて如此舉動なり。元盛一味の輩は子々孫々迄可_レ誅討と叫りければ、元盛、身に科のあらばこそ、元春何に仍て我打とは可_レ宜とて、門を出けるか、初太刀に眉間太多に被_レ切、眼暗、心乱、二丸の門の地復木につまづき、虚伏に岸破と倒れける所を、門番等數多落合て討取けり。是をみて元盛が家人ども、景盛を打と色めく所を、景盛使を遣、元春公の上意を以て討果しぬ、全私の遺恨に非ず、皆々静り候といひけるほどに、扱は無_レ是非とて止りぬ。扱又、元春公の仰なり、元盛か二人の子共不_レ便_二首打_一て出し候へと下知しけれども、さしも重代の主君なれば、何處に刀を可_レ中と、皆心迷ひ涙に暗て在ける所に、景盛頼に責ける間、別所雅樂允、二人の子共を中に提、堀の上にて中切に切てぞ拋出しける。斯て景盛、急使を馳て元春へ申けるは、元盛、羽柴秀吉へ一味候に仍て、無_レ是非討申候、兼て此旨訟申、御檢使を請て後、誅伐可_レ仕事、本義に候得共、已に南條に申合、元續、元清が勢を八橋、尾高へ引入んと仕、事急に迫候故、先討果し候と申ければ、元春、元長、骨肉同胞の中を離て、味方に志を致事忠節之至也と感じ給ひながら、事之様不審なりとて、去年以來委細尋問給ふに、景盛が惡逆一々露顯しける程に、其罪不_レ容誅とは思ひ給しか共、諸方元亂の故、何となく打過給けり。景盛今は仕課たりと思ひ居たりけるか、尾高は大山の麓なれば、兄を殺せし惡業、大山權現井伯耆坊など云天狗、憎とおもひ給けん、元盛を討て後は、城中に反(變)か化のものを得て徘徊し、或時は大の山伏の篠掛に頭巾引かけ、景盛と對座而論議する事有、或時は大の男はたかに成て角力取て、客殿の真中にて上へと轉ひ合、突と笑て消か如に失る事も有。又人ならば五十人百人が聲して小歌うたひ手拍子取、踊ける時も有。其外奇怪成事多かりき。又或夜、景盛夢に、元

盛、鎧一縮而景盛に向ひ、汝因果經を見しやと問、扱は元盛、我を恨るとおもひ、念佛の功德には五逆十惡の罪人をも攝取すべきは、念佛を以て降せんとおもひ、六字を唱れば、元盛からりと笑ひ、惡心を抱きつゝ念佛を申は、砂を煮て飯と成なるへし。諸惡莫作、衆善奉行は七佛の通誡にして、(釋迦の二字を脱するか)四十餘年の説教も、此二句の外に出。千万遍の念佛申共、心頭の黒業を轉ぜずば何の益かあらんと云と見て驚回す。景盛心に深く恐れ、此地は大山に近き故なるへし、所詮佐陀に一城を築て可移居と思ひ、佐陀の明神のおはします松原に經營し、漸成就せしかは、頓て尾高を明て遷りけり。元長、此山間召、扱は景盛、己が罪科通がたく、南條、宮部と一味し、當家へ仇をなさんとの企なるへし。急に不誅は千悔可無益とて、輝元、隆景と詮議し給ひければ、隆景曰、佐陀は東伯者、因幡境にて、敵城と程近し、惡くせば景盛、南條を頼て退へし、大事の場にて候程に、元春は御隠居、元長は年若坐せは、某、年老役に馳向て退治可仕と有ける所に、元長打笑。景盛、南條と一味すとも、推込て討候はんに、何のかたき事の候べき。某、旗下の景盛に候へ共、某、馳向迄も候まじ、家人一人檢使に遣し、北方の國土共催促し、不日に討取可申と宣けり。隆景、是は由々敷大事にて候、景盛も勇は如形畜(善)たり、其上家人共博奕強盜を事として、命をば有物共不思想のみなれば、容易には討得かたく候はん。誰を可被遣や。元長、さん候、香川兵部大夫春繼を可遣候。隆景、春繼は勇智相兼たる者にて、度々有功の者なれば、尤宜く候べし、御行はいかに承度候。元長、されば、討手向ふと風聞せば、景盛、城を去て南條を可頼候間、南條が押として、小土産山(一城)を築候とて、普請の者出せと國人共に觸させ勢を催し、南條が通路を取切て後、佐陀の城を可取巻、敵方後詰の無恐には非ず候へども、南條に於ては一向後詰などの事思も寄候はじ。去々年、家城を捨て京都へ上り候ひしを、秀吉、かれは臆病第一の者なれども、我を偏に頼來るが不便なれば、家城を返し與候へと宣つる故、返し候き。かゝる臆病もの、争か加勢をも出候へき。唯一兩日が間に攻取候ひなんすと有ければ、隆景、實も上策にて候べしと宣ひけり。元長、宿所に歸玉ひ、供に候ひつる春繼を召て憐に宣けるは、彌、景盛可誅に決定しぬ、輝元、隆景へも汝を可遣と申つるぞ、急、伯者へ馳向、景盛を可追討(討か)と下知せらる。春繼、畏て申けるは、御當家は他家に勝れて武譽の者多ク候、何れにても其器に當たる者を可被遣や候半、某、淺智の身を以て、若仕損じ候は、御當家之御耻辱たるへく候と固辞しければ、仕損じては名折也とおもへはこそ汝を可遣とは申なれ。只疾々と宣ける故、春繼此上は辞可申に非ず。乍去今一人被指添候へと申す。誰をか可相添、汝が所好に可任と有ければ、然らば栗屋彦右衛門を可被添哉といひけるまゝ、彦右衛門に下知せらる。彦右衛門就光、畏候とて御前を退出し、頓て春繼にむかひ、稠人の中に我を好み給事、誠に面目之至、此芳志、盡未來際、非可忘、御邊と我謀を合せは、景盛を可討事は囊中の者を可如探とて、兵部が背を撫て、哀、御邊、我に仇有て六十棒を打共頭を不廻と、手を合、悦ければ、兵

部も、御邊志學の年、赤川又五郎を討、翌年於洗合木原兵部を打て以後、數度武勇を著せし事、周人知所也。御邊一人は千万人に不替と思つるゆへ、望申つる也。如承景盛は、吻、猶黃也、何程之事可有、安々と誅し可申と打笑、各々宿所へ歸けり。同七月廿八日、景盛八朔を賀せんがため、淺山與三左衛門を新庄へ下しけるを取て搦め、土藏へ押込、其日香川、栗屋、藝州新庄を發して伯州へ上けり。扱、南條か爲壓、小産山(一本小土産山)に一城を築候、普請の奉行に兩人來て候。景盛も人夫被出候へと觸ければ、景盛是を策とは夢にも不知、某事は佐陀普請の半にて候間、此度は可蒙御免候と返答す。香川、栗屋評定而、吉田肥前守は景盛か姉婿也といへども、實義第一にして忠節を重んずる故、景盛が至惡を憎、不和成と聞、嗚先、彼を語とて呼寄、云々之由叫ければ、景盛が無道を可被誅御謀、尤宜こそ存候へ。某何ぞ無道の縁者に組して、有道の良將に弓を引可申や、御心易候へ。某、謀を以て渠をは易、討果候なんすと申ける。香川、栗屋も吉田が與する上は、彌、景盛をは仕課たりと悦び、頓て福原貞俊、渡邊飛驒守長が許へ斯と告知せ、扱、三澤攝津守爲虎、三刀屋彈正左衛門久佐(一本久祐)、同監物、羽根彈正忠、湯佐渡守、牛尾大藏左衛門、福賴藤兵衛、北谷刑部少輔、小森和泉守、其外毛利七郎左衛門元康、杉森少輔十郎元秋へも、小土産山普請半に至て、若、南條軍士を出す事可有、押の爲に早々被出候へと被觸傳ければ、元秋、元康こそ蜜(密)謀をば被知れ、國人等は偏に普請の役、又は敵方押之爲也とのみ知て出張せり。諸勢、小土産山へ著陣せしかは、香川、栗屋、景盛可被誅と、輝元の仰に因て、元長より爲檢使兩人被指出候、急ぎ佐陀の城取圍被攻破候へと命を傳へ、八月三日、寄手八千餘騎、佐陀の城を取巻けり。杉森元秋、毛利元康は去事有て不和なりければ、今度も見なれば元秋か陣より、鬨頭を可揚と云、元康は軍門に兄の禮なし、吾方揚始へしと争ひ、已に事あらんとする所に、福原、渡邊、是は無益の諍ひかな、元長の御代官なれば春繼か陣よりこそ鬨をば揚始候へけれと云ける故、兄弟の人人も不及否、香川が陣より鬨頭を揚、惣軍鬨を作る事、三々度なれば、城中にも其勢二千騎、時の聲をぞ合せけり。香川、栗屋、景盛が家人の中、宗徒の兵と聞へし者共に、降參するに於ては本領可令安堵と語ひければ、早く領掌して落來るもの、石原助次郎、馬屋原孫兵衛、横道權允、中原彌助、同市太夫、新庄兵庫、丹比七郎兵衛、同弟秋里主水正、内坂織部、大塚内藏允、土肥内藏允、入江左衛門進等也。横道源介久盛は、景盛近年我に情深かりけり、今惡逆に依て籠中の鳥の如に成給とて、最期の暇乞せざらんは、云證なき事也とて、暫跡に止り居けるを、景盛味方、悉、落行中に、源介壹人殘る事、惟に敵に内通して、城に火を可掛ためにこそ有らめとて、有功之者に下知して討せけるを、久盛、剛の武者なれば、無比類働て切死す。斯て春繼は佐陀の城の攻口をば、軍令堅く定て、栗屋を殘し置て、我身は吉田肥前守、牛尾大藏左衛門を相伴ひ、尾高の城を取巻、木梨中務少輔へ使を以云送けるは、景盛、兄元盛を討し隱謀露れ、爲退治元長より某等被遣候。御邊は杉原

普(譜)代の家の子にもあらず、子細有て本國備後を立去、杉原か許に偶(寓)居せられ候へは、今降参之胃を被脱候共、全、年來の武名の瑕瑾にても候まじ、不義の景盛に組し命を被失候はんよりは(よりの)二字は窓か(永年の名折也。只早、城を被渡、有道の將に事て忠を被抽候へと云ければ、木梨此理に服し、同五日城を明て降人に社成にけれ。河口刑部少輔久氏は、景盛が姉婿なりけるが、景盛が邪惡を憎しと思ける折なれば、城中を去て寄手の陣へ加りける間、景盛只惘然として居たりける。左有共、父の子とて勇計は人に越けるほどに、城内を蒐廻り、面々十日かほど持堪よ、南條、宮部、木下など後詰すへき由兼て約しぬ、今かく元長を可被攻事は思設し故、羽柴秀吉の内意を伺しが、秀吉も一旦の和睦し給ふといへども、多年矛盾の遺恨忘れ玉はざれば、事あらば幸にして討て出、伯耆口より可攻入(山蜜(密)に約をかたくせらる。今みよ、秀吉出張あらば、毛利家不經日して滅亡たるべし。然ば我も大身になり、面々にも領地多く取らすべしなど、誠しがほに云なし味方をいさめ、弓、鉄炮、透間なく射出しけるに、三澤が郎等、山崎與次郎被打臥ければ、城兵矢間の板を扣て動きけり。菖蒲左馬允は、五日の日迄は諸手へ回り軍の下知而在けるが、同夜矢窓を游り、何所共なく落にけり。己が恨有に仍て、景盛をすゝめて元盛を打、今其科によりて景盛刑に逢時節に至ては、人より先に逃落ける事よ。惡を同せは死をも亦一途にしてこそ、惡は提婆に等く勇は世人に同かるへきに、奸邪の人に越けるのみか、臆病さへ世に類無りけりと、彈指の憎を不造は無りけり。菖蒲こそ落たれといふを呷や否や、城中の上下、我先にと子を負、親を肩にかけ、足に任て落行けり。あやめが女房は十歳になりける男子を近付、いかに小次郎よ、左馬允殿は主君元盛公に恨有故、景盛公を進て打果し玉ひしかは、三年の内に報來り、景盛かゝる有様に成給ひ、已に御最期今日明日に極りぬ。然に左馬允殿は、惡逆の張本人なれば、此場を通給共、人誰か憐を垂ん、天亦赦可給や。せめて景盛の御最期の供奉し玉は、臆病の耻を子孫に残し玉ふまじきに、落行たまふ恨しきよ。汝幼稚なりといへども、敵も助けし、獄門に晒されんよりは、母が手にかゝり、二世迄親子の契を結んとは不思や。汝も父に似て、耻も人目も思まじきやといへば、小次郎、熟聞て何様にも御計ひにこそ従ひ候らほめと云けるほどに、守刀を扱て二刀刺、推伏るを見て、十二三の娘、こは恐しやと走逃。女房押祖ぎ、念佛申し刀を腹に突立けるを、抱付、刀を奪取、種々養育しければ、いのは悉なかりけり。扱左馬允は南條がもとに寄食しけるが、白癩となりぬ。其後女房尋行、種々耻しめければ、左馬允、實もとや思ひけん、自害して伏ければ、女房も同じ刀に被貫てぞ失にける。斯て佐陀(一本佐田)城中の兵、六日の日夜をかけて悉落ければ、景盛才の勢になり、今夜は必定敵乗入べし、時は寅の刻にてぞ可有、思様に働き快死せんぞとて、終夜酒宴して、明るを待共寄もせず。翌れば七日、香川、栗屋が城中へ使を入、今度當城を取巻候事、景盛逆心の由、巷説有し故にて候、とはいへども、指て分明なる證據も候はず、唯從尾高(佐陀)へ移されたるに因て、南條に一味して、東伯者の境

へ被出たると、諸人の察する迄にて候。たとへは雲伯の國人は、悉、反心を懷共、於景盛者、去事の候べき。御父盛重、杉原の家相續之事、偏に元春の懇志による所なれば、厚恩山海にも比し難、思給候し。然故所々の戰功他に抽候事、三歳の孩兒迄も能存知候。此事に於ては輝元、元長も、御忘却可有哉。御謀反會て無支證一事に候間、先當城を被渡、無科由を所分給はゞ、詎ぞ盛重の忠功に對し、宥恕の御心なかるべき。御身に無錯上は、身命ハ不及申、杉原家相續の儀も異儀有間敷候。徒に無實之疑を不、命を捨、家を失んよりは、退て無科由を顯し、讒言を糺し給へ。若逆意陳するに無詞、風説實に候はゞ、一言の御返答次第、唯今當城を可攻破候。能々御思惟候べしと、理を盡し詞を和て云遣しければ、景盛、暫は閉目而在けるが、良久して、某、尾高より佐田へ出城を築候事は全く野心を存るにあらず、子細を能き、届られ、元長の御前宜被仰斷給候へ、如承亡父盛重偏に元春公の御哀憐に因て、杉原の家督仕て候。左有程に忠戰を抽、身命を抛候事、御領内八州の人、盛重を第一として、繼で二といはれん者、不可有候。然は其子として争か敵に與し、弓を引可申。次に南條に一味の事、猶以虚妄に候。渠と亡父とは從來怨讐深候、南條兄弟、盛重が忠功他に勝れたる事を猜み候のみか、去天正三年正月、かれか父豊後守入道宗勝、吉田、新庄へ年頭之賀儀に罷越、歸路之序、亡父盛重が居城八橋へ立寄候き。盛重響應取刷候へば、宗勝數盃を被傾しが、酒毒に被中候にや、家城羽衣石へ歸て死去候しに、五躰の色變し候つるとて、盛重が毒殺したると申て、彼兄弟、亡父一生は不及申、我々兄弟をも亡さんとのみ存入て有之候。かゝる様躰にて候物を、争か一味同心可仕。此等之事は世以所知に候へば不及申候へ共、迎も身を失ひ家を可亡時節到來にて候者、せめて父の遺誠を不破、元春公、元長公に對し、全、野心を不存事を顯し、其後自害可仕にて候。然者、御兩人を疑申には候はね共、下々と降人にて出候はんも、世人の嘲る處、近くは南條が聞處も餘りに無詮候。人質一人給り候へ、亡父より今某ニ至迄、新庄の御取次は森脇飛驒守殿にて候、其由緒を以て其御子市郎右衛門殿を給り候へ、又香川殿、栗屋殿も、一人つゝ、給り候得。左候者速に當城明渡し可申と返答しける間、則任其旨、森脇市郎右衛門に、香川兵部が三宅源四郎、栗屋が太田(一本大田)大八を相添て、景盛に渡しければ、景盛左有ばとて、晚景に城を渡しけり。此由、新庄へ申送ければ、今田中務少輔經忠、森脇右近太夫長勝、三百計にて馳上、景盛を請取、尾高の町の二階屋に、上下四五人を押込、嚴敷守護し居たりけるが、同五日、景盛、南條と同意の事は實否を糺迄も候はず、正敷、兄元盛を無實の科にて被討果たる一條、其支證明歴たるに依て、輝元、元長、曾て御許容之儀なく候間、即自害候得と云ければ、景盛忠節とおもひ、正き兄を打しをさへ、無實を云付たりなどいふ讒者の舌頭なれば、此上者更に斷可申様なし、自害は思設たり、今更非可驚とて、腹十文字に搔切、からからと笑て、最早、首うてと云や否や、郎等一打に切落す。邁齡三十二歳。子二人有けるをも、同刺殺てけり。郎等の三吉徳右衛門をば、彼朋輩、佐田

彦四郎に課て討せらる。三吉、手早ものにて、板合散々に切立ける所を、香川が郎等、三宅源允、折しも行合馳寄て、無難三吉を討てけり。扱彦四郎をば中原彌助に討せらる。佐田が弟小鼠は是をきよて、東伯者へ逃去けり。盛重さしも忠有し跡なればとて、景盛が弟、少輔五郎に三千貫賜り、父が名字を續せらる。されば世に丹朱少均無にしも非とは乍云、此者父が勇智十が一もなかりけり。景盛か采地伯州に七千貫有けるをば、もとより元長領せられぬ。佐陀の城をば破却して、尾高には軍士を入置、南條が押へてして守護させらる。(校訂者曰。陰徳太平記摘要、是にて終る)

藤井皓玄、大江田隼人神邊の城を乗取し事

陰徳太平記と後太平記と、小同大異なり。後太平記廿八、備後國神邊の城をば、山名宮内少輔氏政、當國の探題職に被補在城すといへども、去天文七年七月、大内兵部卿義隆に被誅、其舊(校訂者所藏本には領)近年杉原播摩守盛重に被宛行ける。然るに彼宮内少輔か郎等、藤井能登入道、大江田隼人助、窄々の身となり、是も久敷、洛陽清水寺の傍に隠れ、恨を天に憤り蟄居せし所に、大江羽林、九國を攻め、大乱に及しかば、尼子孫四郎勝久、其虚に乗て義兵を擧るとき、我も此時一揆を催し、前代の所領を挫んと、急ぎ織田信長へ参し、角と訴ければ、信長悦びて舊義を致のみならず、天下へ對し忠烈の企なり、いそぎ相催すへしと感悦し、馬、鞍、鎧、兵具を給れば、藤井、大江田、龍氣を得、聽て京都を打立、所々に飛檄を達し、前代舊功の兵を催促せし程に、爰彼所より馳集て、貳百餘騎、其外事を招く爲卒八十餘騎同心一味し、瘦たる夫駄に繩手綱を懸たれども、血氣逞事は焚會(攀膺)をも呑、孟賈か力をも強しとせざる兵ども、命を一塵に比し、備後國に馳下り、庄園百姓に驅催しける。土民も流石舊恩をやおもひけん、一万餘人一揆蜂起し、六月十八日、神邊の城に押寄たり。城主杉原播摩守盛重は、筑前國立花に在陣にて、城を相守る者、僅三十餘騎には不遇。むなく城を奪れけると云々。

山名宮内少輔氏政といふもの、陰徳太平記の中に是なし。尤芦田郡本山、八尾の城主なりしとかや。某(著者自稱)か管見の青紙の内に、氏政と云事、後太平記之外不知。又藤井皓玄、京都に蟄居すと、此事不審。後太平記之説は、藤井、大江田は、氏政が郎等にて有けるか、氏政滅亡して、清水の邊、蟄居せしと。左は有へからず。陰徳太平記に、同國の住人、藤井能登入道、大江田隼人、尼子勝久に一味し、備前、美作の勢を語ひて神邊へ押寄しと、此説實なるへし。藤井皓玄が城は大門村、明地山に有。杉原、宮などほどの大身にはあらねども、當國の住人にて有しとなり。氏政の郎等といへるは非なり。神邊を逃去後、二度盛重へ膝を折て詔言し、舊城明地へ歸参し、其後病死す。皓玄は百姓共へ仁恵を施たる人にて有ければ、報恩のために神に祭、明地

大明神と号して一社有。後太平記には永祿八年六月十八日、神邊へ押寄しとあり。陰徳太平記には永祿十二年八月三日夜半に押寄しと、此説實なるへし。樋の口の穢多共、語り傳にも、年は存知不仕候得共、皓玄、神邊へ被押寄候ひしは、八月三日の夜と申傳侍ると語りぬ。左あれば、陰徳太平記の説、實ならん。

今度九州發向之節抽軍忠分取之條誠神妙也仍右狀如件

建武三年四月六日

杉原彦太郎殿

尊 氏 (花押)

尊 氏 (花押)

下

杉原彦太郎信平

可令早領知備後國本郷庄木梨庄地頭職事
右以人爲勳功之賞所宛行也志任先例可沙汰之狀如件

建武三年五月廿日

尊 氏 (花押)

下

杉原彦太郎信平

可令早領知備後國福田庄高洲地頭職事
右以人爲勳功之賞所宛行也守先例可致沙汰之狀如件

觀應二年二月十二日

尊 氏 (花押)

杉原彦次郎爲(不明文字三字か或は二字申かも不明)官途事

隼人 佐

右預御吹舉爲拜任言上如件

觀應二年二月日

へさせ申候。彌兵衛申候は、か様に相煩居申候上、米借仕候而者當秋之程無心元候間、自今以後米給不申由、幸新庄御林之内大束之賃持御座候付、折々庄助、與太郎右之場所へ參、松永迄の賃持仕、夫にて米相調給させ申候。然處、閏四月中旬比、又候賃持ニ參、米相調歸候所、彌兵衛申候は、最早田植前ニ罷成、左様に手間費候而は千萬迷惑に存候間、沸々參不申様にと申候得は、庄助申候は、耕作之儀は晝夜情^精出候得は相調候間、左様に不被存候様にと申候由。然處與八郎近所に居申候喜右衛門と申御百姓、彌兵衛方へ見廻に參候而、右之趣委細喜右衛門ニ彌兵衛咄申候由、喜右衛門方與八郎へ申達候由。早速其祖之釣頭忠右衛門并彌兵衛近所に居申候惣三郎と申御百姓呼寄、委細承合候處、平生共に親之申付に背不申、家内睦敷仕候由申候付、釣頭忠右衛門に庄助召連參候様にと申付、早速庄助、忠右衛門方へ呼寄、右之趣申聞せ候得者、親之儀に御座候付、左様に仕内之儀殊に不如意に御座候故、差而孝行茂得不仕候間參間敷由申候得共、召連參申候。扱庄助へ相尋候へは前書之通賃持十度餘も參、米相調申由申候。右彌兵衛小百姓、殊更與八郎宅を程遠に御座候付、平生之様子耽とは不奉存候得共、睦敷暮候故か、沙汰之無御座者に御座候。第一御年貢之儀隨分大切に仕、古借等茂御座候得共、左様之儀は春方迄相斷置、御年貢之儀は大方年内に相濟せ申候。

右之通年恐口上之趣書付差上申候以上

上有地村庄や

辰六月十八日

與 八 郎
與 三 郎

彌兵衛病中に、與太郎戸手村高垣了安といへる醫者のかたへ藥を取に行ければ、了安様躰をきよて平生座右の春慶塗の箱より藥種取出し調合してあたへけるか、與太郎用有けに見へて暫の間立さらず。何とてはやく歸りてあたへさるやといひければ、涙くみて居ければ、了安思ひけるは、儘盡て父に可與ものなきゆへ斯するやらんと、何を有やととひければ、近比わりなき御事に候へとも、あの結構なる御藥箱の御藥をたまはらは何程か難有候はんといひければ、了安常々短慮のものなりければ、かれか孝心なる事をきゝ及ひければ、餘人ならば屹といひきかせんすれども、汝か事なれば、いかにも望に可任とて、病家へ持せて行、黒塗の藥箱を取出し、調合してあたへければ、おしいたゝきて歸りけると也。了安常の氣質にては、よくも合せ替てあたへたりと、きく人感稱しけるとなり。此外の様々はなしおほけれど爰に略す。

有地村孝子傳

備後州福山管内、芦田郡上有地村、有彌兵衛者、有男二人、長曰庄介、年三十二、次曰與太郎、年二十六、二子平生甚孝父母、唯

命是從、一無違忤、彌兵衛自癸卯臘月臥病在牀、日就衰耗、一步不能致、二子憂之、相謂曰、太人齒超耳順、病且衰頹、然家本貧窶、薄田三石、舉充租稅、更無餘贏可供甘旨、針樂無方藜藿是供、何有補元起痾之理、若進米飯則疾病有少愈乎、因就隣保或親故、借少許米、炊進者數日、彌兵衛謂二子曰、汝等憂吾之衰病、日々假貸、使喫米飯、其志可荷、然半菽之食是農家之常、三時不忘人猶且困、吾痾疾涉年不能把耒耜、徒食米飯、則戚咫尺禍崇不測、且汝等日々假貸之負、何日償之、納租之時處々有不足之憂、欲償其負、則復益進、自今勿再進、二子恐其意不強進、然不借則不能進、借則違親之意、百計無策、偶聞沼隈郡新庄山樵薪、傭人輸松永浦、相與到其許、負薪以其雇直買米及小魚、以進、既數日、彌兵衛熟知其狀、謂二子曰、播厥之始一日已荒、則不能見、翼々之盛、何有方卓之成、汝等日々往松永浦、田事荒廢、贖其本業、自今務暇田畝、勿以爲念也、二子徐答曰、一日之間、朝昏力作、則其功奚輸衆人、雖晝間往松永浦、而何妨之有、彌兵衛不肯聽、二子恐唐突其意、後數日二子復竊輸薪復買米、炊而進、彌兵衛對飯涕泣不能下箸、近隣有喜右衛門者、忽爾偶來見其對飯涕泣、而問其故、彌兵衛答曰、更無他故、二子事吾之篤、不覺淚下、具陳其顛末、喜右衛門亦相與感泣而歸、到庄屋一人掌邑事、名曰庄屋、與八郎家、縷陳其狀、與八郎感其至性、呼彌兵衛、保長同保中之長、今日組合釣頭、忠右衛門、同惣三郎、問曰、頃聞當邑彌兵衛者二子、甚與父母不諧然乎、二人答曰、何人之說、而過聽乎、彌兵衛二子平生至孝、無一言與父母忤、長子有妻、當年產一子、其妻亦執婦道、事舅姑最謹、且彌兵衛臥病涉年、其飲食供奉委曲尽心、一々陳其事、與八郎謂二人曰、嚮彌兵衛近隣人、既來告其狀、然非汝等之言則難認實、故問、向吾說二子與父母不諧者設辭也、汝等之言與向告來者之言、如合符節、嗚呼純孝之人、一鄉無異辭者希有之人也、屈忠右衛門曰、率彌兵衛二子來、面聞其事、且褒稱之也、忠右衛門到彌兵衛之家、謂二子曰、庄屋殿有命、宜共到宅、二子曰、吾儕下流賤農、未嘗至庄屋、將何事見召乎、若知其狀、竊見告、忠右衛門曰、汝等孝父母之事、傳播邑中、想欲褒稱乎、二子曰、子之事父母當然之事、何足被褒稱、大爺善爲辭、忠右衛門諭曰、不至庄屋宅、則或有呵責、二子不得已、與忠右衛門共到、與八郎出見二子、問其孝親之狀、二子一々具陳、且謂曰、家本貧窶、使親不得甘旨之養、一大不孝也、進少許米飯、以養其衰病、何見褒賞之有、其言真率無少辭避、與八郎謂二子曰、汝等一邑之模楷、益勵其行、勿怠勿荒、負薪之父之所戒有理、吾與米少許、以是饋、乃與精米一斗、二子拜謝、齎歸示父母、父母怡悅、舉邑感、頃達于吾侯之聽、召二子賜米數俵、以旌其純孝、賞庄屋與八郎素履篤實與善之厚周給之勤、賜黃金數片云。

時享保九年甲辰秋七月既望

備後福山府記室 伊藏長英重藏市撰

白井の淺井の水の事

(校訂者曰ふ、白井の下に水を脱せしか)

白井の水は高木の有馬堂の東五丁ほどに有。街道の傍に碓の鉢のごとくにして、炎暑にも清冷なる水なり。淺井の水は府中市、光蓮寺(光圓寺)か、光蓮寺の名を知らず)にあり。いつの比の事にや上山村に孝心なるもの有。其母臨終の時、何にても好玉へ調べてまいらせんといひければ、白井の水を没て得させよといひける故、安き事とて没に下りけるか、高木村までは二里の餘も有なん、其内落命のほとはかり難しと思ひて、淺井の水を没て歸りあたへければ、是はうするの水にあらず、あさ井の水なりといひて死にけり。其子涕泣して我今まで父母の命にたかふ事なかりしに、斯命終に及て母の意に違ひけるよと歎しけるとなり。

父尾龍王傳記

人王三代安寧天皇元年、父尾郷有谷、号父母谷、其昔天神一躰下此谷、五色清雲發光、萬民驚集、拜谷爲池、湛青水、上成橋、一女神安然現、村翁拜恭問、何神、對曰、吾是父橋母池龍神、畢入瀧穿、因号父母谷云々。後富士尾、又父尾ト改。
人王四代懿德天皇御宇、月星降此所大樹枝、因号月入森、至于今池橋森共現在矣。
人王十代崇神天皇御宇、四海旱魃、諸民愁甚矣、于昔吉備津彥命、祈請雨於父母谷瀧穿、喜雨滂沱、活枯葉育養萬民。
人王四十六代孝謙天皇御宇、人民不歸王化、令惠美朝獨見雲真人大野朝臣、東人制之、此時村上某者、居丸山、天平勝寶七乙未夏大旱魃、黎民祈雨此瀧穿、瀧穿中有嶽石、龍神化童子現石上、又女神現瀧中、油然雲起潏然降雨、而龍神入瀧穿、女神飛去丸山、影向村上家、村上以珍物美味餽饗之、娘玉豐恭敬奉仕、甚稱神慮、神告玉豐曰、吾是松尾明神也、可與汝于一兒、以往永々子孫聯綿焉、云畢飛去、而玉豐懷胎生一男兒、号松浦、雨木豐社人平、祀玉豐靈、号松浦大明神。
人王五十代桓武天皇、延曆廿一壬午年、一日松浦明神鎮坐之西三川有。夫ヨリ白瀧山マテ百八十間之間、五色之瑞雲纒。因茲國主從五位藏原朝臣園人、始造立社于白瀧山、是迄社無ノ拜瀧穿。此時ニ到マテ龍神ト号シ唯一ノ神也。其後兩部ノ神道トナリテ号八大龍王。

人王六十代醍醐天皇御宇、延長五丁亥三月、國主備後守氏助建立。社家松浦左京大夫道貞。
人王六十四代圓融院、延長天元巳卯九月建立。松浦雨木大夫祐長。
人王六十九代後朱雀院、長久三年八月、國主兼右京大夫從三位藤原朝臣備後守資房建立。松浦右近太夫道次。
人王七十六代近衛院、仁平二壬申二月、國主藤原朝臣備後守實宗建立。社人松浦雨木太夫政道。
政道ノ男松浦藏人正喜、長女子一人有テ男子ナシ。伊勢國住人加藤判官景貞三男行正ヲ聳トシ、承元元年十月九日調來松浦左馬祐

行長ト号ス。

人王八十五代後堀川院、元仁二乙酉年二月、城主土肥次郎實平建立。社人松浦左馬祐行長。
人王八十九代龜山院の御宇、文永年中當所山始り繁榮す。市町 新町 喜三町 田町 吉屋少(小)か路 立少(小)路 横少(小)路 魚賣少(小)路 遠所少(小)路 江屋町 江田筋 胡町 町數十二、家數四千八百軒と云々。
定家卿の舍弟從三位藤原定頼、當國を領したまふ。治安年中なり。定家卿の御哥に

東路の、富士とやいはん、備後なる、富士のをやまの、峯のしら雪。
俗説に昔繁榮の時、富士尾と云。今衰微に及びて藤尾と書と。又いにしへ藤布を多く賣買しけるゆへ藤布尾といふと云々。

人王九十四代花園院、正和五丙辰年三月、城主宮下野守入道道山、宮社建立。社家松浦右近道光。
人王九十九代後光嚴院、貞治四九月、城主宮下野守兼信建立。社家松浦右近道喜。
人王百一代後小松院、應永卅三丙午六月、城主宮若狹守秀景建立。社家松浦右近道廻。
人王百四代後土御門院、延徳二庚戌九月、城主山名宮内少輔氏政建立。社家松浦金右衛門喜長。
人王百九代後水尾院、元和八壬戌二月、城主水野太守源(朝)を脱せるか(臣勝成公御建立。社家松浦金右衛門喜長。
人王百十二代後西院、萬治元戊戌三月、同御世御建立。社家松浦喜治郎道孝。
人王百十五代中御門院、享保六辛丑九月、大守安(阿)部朝臣從四位下侍從正譽公御建立。社家松浦相摸寺道次。
右龍王棟札之寫

布(府)川村石の鳥井付私語の橋碑辯

府川村に石の鳥井之事、町村呬之橋(の)所にも俗説を記し侍る。元文の比大風にて吹倒しけるを、寶曆庚辰年再建し侍る。此鳥井、往後(往古)か有りて、いつれの宮の鳥井と云事をしらす。延享、寛保之比にや、本山村山王の禰宜石岡何某といふ者相達けるは、日吉と御座候者本山村山王の鳥井に相違無御座段相達、其段公廳相濟、本山村山王の鳥井と極り侍る。町村榮明寺之山上に熊野ノ權現の社あり。九月九日を以て祭之。此鳥井より眺に望は眞正面に當り侍る。しかれば此宮の鳥井なるへし。土俗之説ニ、昔、本山村山王の鳥井、大水にて流來りたりと。此説もちいかたし。本山村はこくく山にて、山王の社は余程山上ニあり。いかなる大水にても山王の社前まで満水する事あるへからず。もつとも山家に鳥井ありたるならんか。然共石の鳥井を流す程の水な

らは、鳥井の具不足せすゆふ事あるまし。いつれも同し石の古ひ様なり。扱又鳥井の鏡貳つあり、一ツは切石にて日吉之二字あり、壹ツは自然石にて圖のこく文字の形あり。いつれの宮にても鏡石に神号を彫たるはなし。尤鏡石を直に石の額を仕附たるは間々有之。今爰に彫付たるは鳥井の額失て後、好事の者の仕業ならんか。又自然石を以て鏡石と并置たるも不審也。譯を知りたる者なし。此邊大河にて、榮明寺の前より此鳥井のきはまで百六十間之橋有たるといふ傳ふれば、熊野と權現の鳥井ならんか。又岬の橋、當時石碑を建て能因法師の詠哥を彫付侍り。今現に熊野と權現山上ニましますゆへ、此川の名を音無川と云傳ふ。是又大なるあやまり也。能因法師の哥は此岬の橋を紀州熊野と音無川にかけたらはよからんとの心也。おとなし川に懸たりとゆふ心にはあらず。然は此川をおとなし川とゆふは、あやまり成べし。

本山村

八尾の城 山名宮内少輔理興の古城なり。旗立石と云有、旗を立てる穴有。

山王 寶殿、前殿あり。何れも茅葺也、鳥井なし。

岩屋寺の觀音 山王の宮を五六丁上の山にあり。其禮道並木の松あり、はなはた老木也。町村榮明寺の支配なり。當村は何れも天水所也。然共池七ヶ所あるゆへ曾而旱損とゆふことなし、何れも水掛能き池なり。金丸へ下ル方に火の池とゆふあり、いにしへ岩屋寺繁榮之節に住僧夜の間は何所共なく失る事度々也。是火の池の大蛇の致處なりとする者ありて、人形を拵、其腹の内に鹽精(焔硝か)を入、火をしかけ、夜著打破せ置ける。大蛇誠の人と心得、夜著ともに一口に吞ければ、件の火、鹽精にうつり甚々悶著しのたくり廻り死けるとかや。其跡蛇窟と言て今に草木共ニはへさる所あり。

著者の裔孫宮原國雄氏(陸軍中將)來東の一節

拜啓愈々御健勝御起居之段奉賀候。陳者豫而御盡力相成候備陽六郡志第一卷此程出來之趣にて配布相受難有奉存候。然る處第一卷は殆んど數字のみにて興味少く多少豫約者之期待を裏切りたるものと御氣之毒に感ずる次第に御座候。第二卷以後即外篇並に後得録にて多少其不満を償ひ得れば幸甚と存居候。何れにせよ御盡力に對しては厚く御禮申上候(下略)

四月(昭和三年)二十七日

宮原國雄

得能正通様

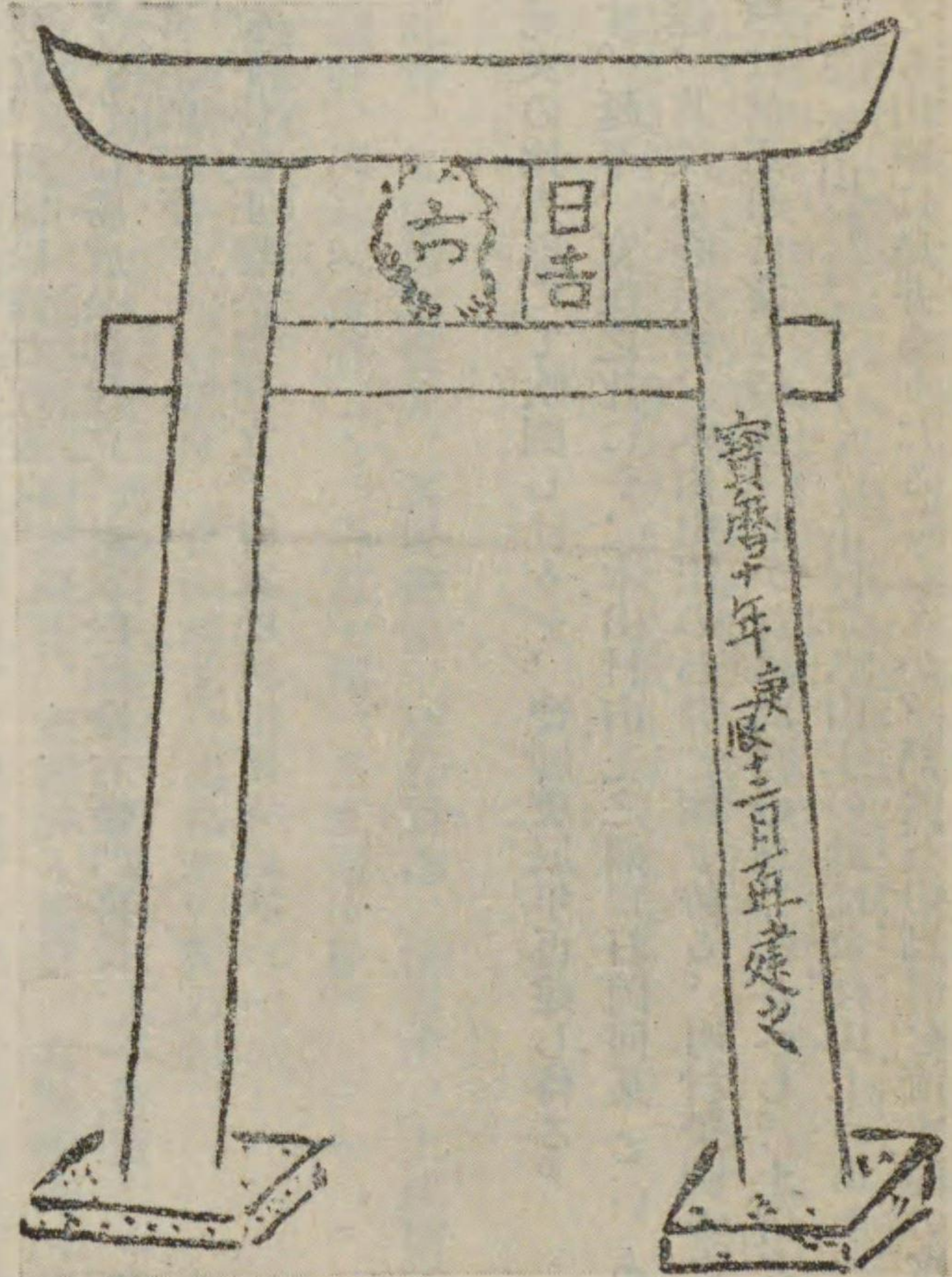
玄洞早田元道氏(史上の吉備著者)の來柬

御校訂之備陽六郡志第壹卷御惠送被下難有拜受仕候。一通り繙閱、先づ第一に學兄御勞苦の大なるに想到し、覺はす潸然涙下るもの有之候。校書の勞苦は古人も既に之をいひ、小生もまた多少の實驗有之。殊に本書の如き、數字の多き分については、一層甚しきは申すまでもなき所に御座候。古人の著書を校訂するは、自分で新に作るよりも苦心する次第は實際其局に當らなければ分り不申候。定めし宮原翁も知己を百年の後に得たるを喜び、地下に莞爾たるべく候。取敢へず御禮まで草々。

五月(昭和三年)十八日

元道

得能學兄侍史



昭和三年九月十五日印刷
昭和三年九月廿五日發行

(備後叢書第二卷)
備陽六郡志 二一

編輯兼 得能正通

廣島縣蘆品郡府中町
大字府中五二五ノ一

印刷者 柳本 吳 策

岡山縣後月郡井原町
一千〇八十七番地

印刷所 柳本印刷所

岡山縣後月郡井原町
一千〇八十七番地

發行所 備後郷土史會

廣島縣福山市三之丸町
振替大阪七四六四一番

備後叢書第一卷(備陽六郡志一) 正誤

篇名	頁	行
目次	五	(下段)一三
内篇	五五	(上段)一八
同	一四七	(下段)一一

誤 觀言
町村
九里

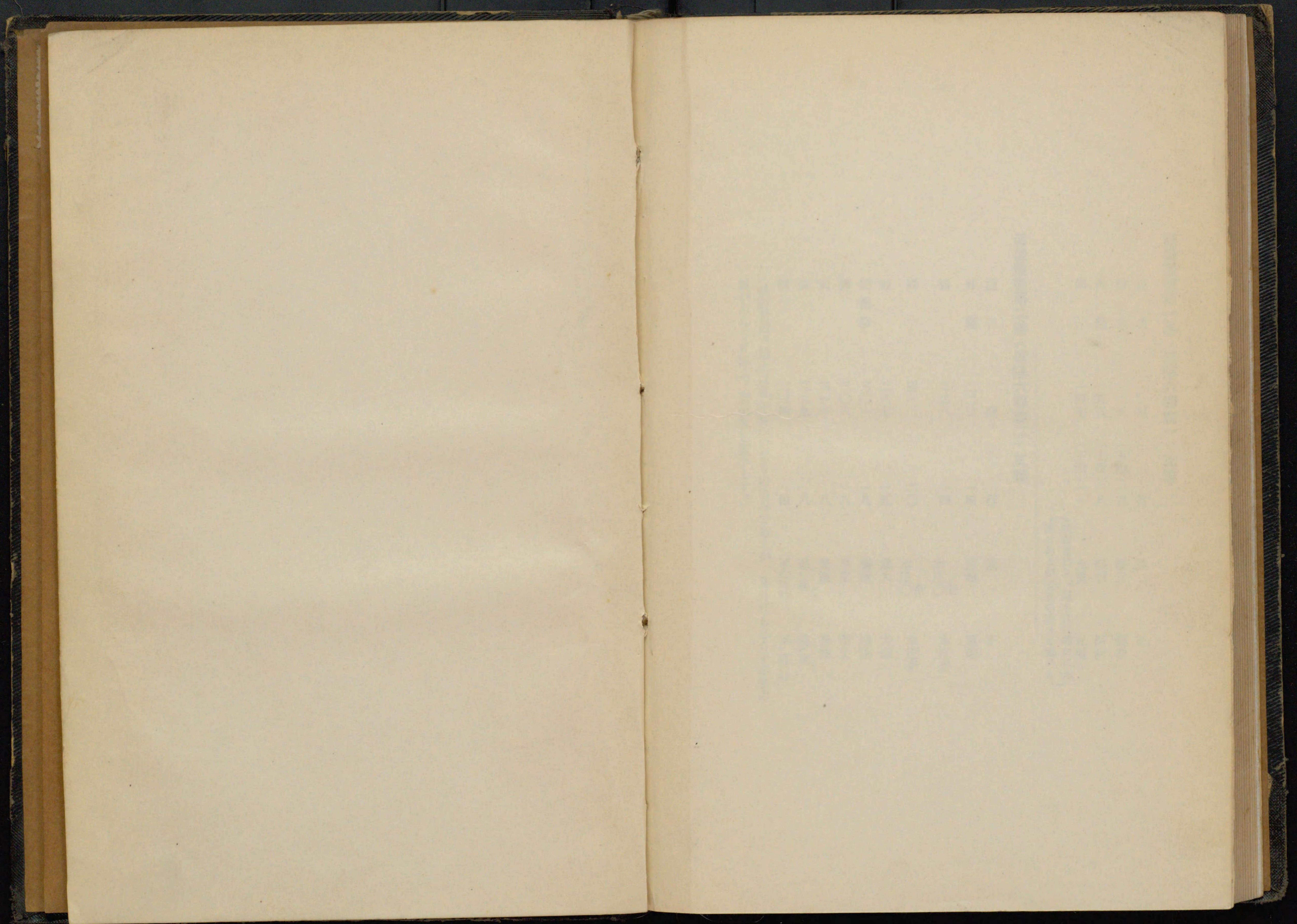
正 觀音
町村
五里

(校訂者曰ふ。原本には確かに九里とあるが五里の誤りと認める)

備後叢書第二卷(備陽六郡志二) 正誤

篇名	頁	行	誤	正
外篇	二二三	一四	蓮端	蓮瑞
同	二二八	一四	本庄〇全	本庄全
同	同	二〇	本庄〇全	本庄全
同	二八七	一五	大歳	大歳
同	三〇一	一九	壤腹	壤腴
後得録	三〇六	一六	享主	亭主
同	三一	八	景瀨	景瀨
同	三二九	八	追レ北 ^{ルラ}	追レ北 ^{ルラ}
同	三三四	四	不レ可叶	不レ可叶

(校訂者曰。以上は私が心づいたもののみであるが、其外にも必らず多数の誤があらうと思ふ。御示教を願ひます。)





577
62

